水中島の真珠
The pearl of
the water island
siamneko

「LSDりぶたん外伝

水中島の真珠」

siamneko

表紙　buffy

目次

第一章　鋼鉄のモンスター　4
第二章　ルビーローズ一味　37
第三章　星の墓場　73
第四章　ハンマー・アクセル　112
第五章　ローズ・ピーク　190
第六章　湖底湖　277
第七章　水中島の真珠　345
第八章　ドラギラ　446
第九章　沈む薔薇　589
あとがき　794

東北地方太平洋沖地震の被害に遭われた方々に、謹んでお見舞い申し上げます。

この作品には、モンスターの襲撃を津波に例えた「モンスター津波」との表現があります。また、「霊力を生成する霊子炉はメルトダウン寸前に追い込まれた」との表現もあります。

どちらも、２００８年に公開した作品ですでに使用している表現であり、このたびの災害に着想を得たわけではありません。あらかじめご了承ください。

２０１１年３月17日

第一章　鋼鉄のモンスター

脚のないテントウムシが沈んでいた。

頭をわずかに下げて、水中を斜めにすべり落ちてゆく。

その後ろをゲンゴロウが追尾していた。見慣れないモンスターを用心深く観察している。

黒いテントウムシだった。

背中には、朱色に染まった大きな丸が二つあった。二紋型（にもんがた）のナミテントウだ。

左右に並んだ赤い丸はなぜだか盛り上がっていた。少しだけ盛り上がって、表面は平らになっている。ふつうのテントウムシとは明らかに形状が異なっていた。背中の斑紋（はんもん）だけではない。細長いはずの触角は板のように平べったくなっているし、なにより、脚がない。

脚の代わりに、六つのスクリューがついていた。

二基ずつ左右対称に並んだ三対（さんつい）のポッド推進器が、六角形に配置されている。

前にスクリュー。後ろにポッド。テントウムシの胸に並んだポッド推進器は、逆向きと思えるような構造をしていた。飛行機のプロペラのように、スクリューが正面を向いて回転している。

そのポッド推進器が向きを変えた。

テントウムシの進路が右にずれて、水中に漂(ただよ)う藻(も)をよけた。

舵(かじ)のいらないスクリューだった。

通常、スクリュープロペラはプロペラ軸で船体に固定されている。スクリューそのものは回転するだけで動かないから、取り付けた舵を動かすことで左右に曲がる仕組みとなっている。

しかし、ポッド推進器に舵は不要だった。スクリューを回転させるためのモーターをポッドに内蔵して、船外に出してある。ポッドの向きを変えればスクリューの向きも変わり、船は左右に曲がってくれる。

舵のある船が一八〇度回頭(かいとう)して反転するには大きな弧(こ)を描く必要があるが、舵のいらないポッド推進器の船なら、その場でくるりとターンできる。

ゲンゴロウはスピードを上げた。

後脚で水を蹴って、テントウムシの左横に躍(おど)り出た。
長い後脚には体毛がびっしりと生えており、オールのように太くなっている。蹴れば、一気に速度が増す。
脚で泳ぐモンスターが、スクリューで泳ぐモンスターの隣に並んだ。
目と目があった。
硬くて透明なサファイアガラスでできたテントウムシの目の中には、生き物が住んでいた。
制帽に腕章。額には星形のタトゥー。深い緑色の瞳がゲンゴロウを見つめている。
ルビーローズだった。
「敵襲！」
潜水艇(せんすいてい)〈紅月丸(あかつきまる)〉のせまい船内に声が響いた。
「うお？　マジかよっ！」
ルビーローズの斜め後ろにはマハラが座っていた。巨漢のため、呪文で体を半分ほどに小さくしている。ルビーローズに背中を見せて、壁の操作パネルに向かっている。
「やっぱ、ソナーは使いもんにならねえ！」
マハラはヘッドホン型のレシーバーをかなぐり捨て

た。
「潜舵上げ、水平潜航へ」
ルビーローズは腕をまっすぐ前に伸ばして指示した。
「潜舵上げるです。水平潜航するです」
操縦席に座るチャパティが操縦桿を起こした。
紅月丸はテントウムシの形をした潜水艇だ。目元から横に張り出した板状の触角は、潜水用の舵になっていた。
その舵が少しばかり上を向いた。水の流れが作用して揚力が生まれ、テントウムシは頭をあげた。やや下向きだった紅月丸の姿勢が水平になった。
チャパティは操縦桿を戻しながら、ちらりと横を見た。
黒いテントウムシの頭部は操縦室になっている。チャパティの座る右目側が操縦席で、ルビーローズのいる左目側が艇長席だ。
アカゲパキケの向こうに、悠然と泳ぐゲンゴロウの姿があった。硬い背中は緑色で、ふちが黄色くなっている。水中に差し込む日光を反射して、巨大な複眼が銀色に輝いている。横から見れば頭の半分ほども厚み

がある大きな目で、紅月丸の中をのぞいている。
「後進全速」
「後進全速するです」
艇長の指示を復唱しながら、チャパティはテレグラフハンドルに手を伸ばした。
テレグラフハンドルはポッド推進器の制御装置だ。艇長席からも操縦席からも操作できるように、両者の中間に設置されている。
左手でハンドルレバーを握ったチャパティは、一番手前まで一気に引いた。横の目盛りが「F」と赤く表示されている。赤いのは前進でないことを意味し、Fの字は「フル」を意味する。フル・アスターンだ。
潜水艇の底にある六基のポッド推進器が後ろを向いた。スクリューがフル回転し、紅月丸に急ブレーキがかかった。
チャパティは操縦桿を両手で握り直して、進路と姿勢の維持に努めた。
隣を泳ぐゲンゴロウは止まらなかった。そのまま前へと進んで、紅月丸を追い越した。
「おう、あいつかよ」

マハラはチャパティの頭越しに外を見た。上半身を大きくひねって、前を向いている。下半身は横向きだ。

チャパティの真後ろにマハラの席はあった。艇長席も操縦席も正面を向いているが、マハラの座る機関制御席は壁に面して横向きとなっていた。座席の位置もテントウムシの頭部ではなく、胸部（きょうぶ）に当たる。

胸部は制御室だった。壁が操作パネルになっており、制御盤（ばん）や計器類が取り付けられていた。バラストタンクの注水や排水を管理する制御盤がある。圧縮空気タンクの圧力計もあれば、バッテリーの電流計もある。バルブがいくつも並んでいる。電池切れとなっても、バルブを操作することでベント弁を閉じ、圧縮空気タンクから送り込んだエアでバラストタンクを排水して、浮上できるようになっている。

「昨日はヤゴで、今日はゲンゴロウかよ。まったく、ついてねえや。おまけにソナーは使いもんにならねえしよ」

「ごめんなさいです」

愚痴（ぐち）るマハラの目の前で、黒い羽根飾りが揺れた。頭に巻いた赤いターバンに羽根飾りを立てているハナ

マキが、頭(こうべ)を垂(た)れたのだった。
「ああん？　なんで、おめえが謝るんでえ？」
「おいらが設計したです」
「なに言ってやがんでえ。そんなら、資材を調達したのは俺様じゃねえかよ。みんなで造った紅月丸だ。おめえひとりが謝るこたねえ」
「マッハの言うとおりですわ」
艇長席のルビーローズがテレグラフハンドルに右手を置いた。
「そもそも計画したのはわたくしでしてよ。モンスターが泳ぐ音を聞き分けようという、わたくしの考えに無理があったのですわ」
ルビーローズはハンドルレバーを半ばまで押し上げた。横の目盛りは「SM」と赤く表示されている。ストップ・モーターだ。機関が停止し、脚のないテントウムシは泳ぐのをやめた。全速で後進したことにより、それまで出ていたスピードがちょうど相殺(そうさい)された瞬間だった。
黒地に赤丸のナミテントウが水中で立ち止まった。
追い越していったゲンゴロウはゆっくりと左に旋回(せんかい)

している。どうやら見逃す気はないようだ。ぐるりと回って戻ってくるコースに乗っている。
「エアカーテンを使いましょう、チャッパ」
「了解したです。エアカーテン始動するです」
「マッハはハイドロハンマーの準備を」
「合点でい」
チャパティはコンソールのスイッチを指先ひとつで入れた。
マハラは壁の操作パネルから回転式のハンドルを引き起こすと、せっせと回し始めた。
テントウムシの体は半球形をしている。羽のあるほうは丸く、脚のあるほうは平らで、玉を割ったような形になっている。
割れた玉のふちから、気泡が出てきた。空気の泡が次々と発生しては浮上してゆく。周囲を気泡のカーテンにさえぎられて、テントウムシの姿が見えなくなった。
姿は見えなくなったが、体の裏側は丸見えだった。腹も胸もスクリューも、エアカーテンで隠されてはいない。

スクリューは五枚羽根だった。回転が止まっているのでよく見える。色は黄銅色。塗装はされていないようで、にぶい輝きを放っていた。

ポッドは筒状で片側を丸めてあった。モーターを内蔵しただけだから、短くて、ずんぐりとしている。色は赤銅色。光沢のない塗装が施されていた。

黄色と赤の組み合わせでも、ポッド推進器は地味な色合いだった。黄銅色も赤銅色もくすんで見えるため、派手さはなく、むしろ枯れた感じがした。紅月丸の船底もポッドと同じ赤銅色に塗られているので、たいして大きくもないポッド推進器が目立つことはなかった。

潜水艇の底で一番目立つのは、水中大砲のハイドロハンマーだった。

紅月丸の船底にはポッド推進器が六角形に配置されている。六基ともテントウムシの胸部に取り付けられており、前半分に集中している。

ハイドロハンマーの砲塔は六角形の中央にあって、ほとんど船体に埋め込まれていた。一部がはみ出しているものの、格納された状態では大砲に見えないし、目立ちもしない。腹部の末端に向かって長く伸びる砲

身も、そこだけへこんだ船体に収まっており、やはり目立たない。

しかし、マハラが制御室のハンドルを回すと、状態が一変した。

船体に格納されていた砲塔が降りてきた。砲塔には縦に大きく割れたところがあって、そこから砲身が突き出していた。割れているのは射角(しゃかく)を調整するためだ。砲塔が左右に回転し、砲身が上下に動くから、目標に狙いをつけられる。

テントウムシの形をした潜水艇の底に、長い砲身が一本だけ後ろ向きに伸びていると、まるで産卵管のようだった。

ハンドルを回すマハラの手が止まった。

壁のランプがひとつ、赤から緑に切り替わった。

ロックさえ外せば、水中大砲はゆっくりと自分の重さで降りてくれる。ハンドルを回して油圧シリンダーで押し出すにしても、力はそんなにいらなかった。逆に、引き上げて格納するのはたいへんで、こちらは電動式になっていた。

マハラは潜望鏡をのぞいた。壁の制御盤にスコープ

がある。両脇には取っ手もついている。右の取っ手は回転式で、回すと潜望鏡の向きが変わる仕組みになっていた。左の取っ手にからくりはなく、リベットを打ってしっかりと固定してあった。

大きな肩に釣り合わない小さな手で、シマオーガが潜望鏡を操作した。

潜望鏡の先端部は砲塔にあった。マハラが潜望鏡の向きを変えようとすると、砲塔そのものが動いた。

砲塔が動けば砲身も動く。ハイドロハンマーの砲塔はまわりをポッド推進器に囲まれているから、砲身が動くとポッドやスクリューを破壊しかねない。もちろん、心配は無用だった。長い砲身が動いてもポッド推進器に当たることのないよう、きちんと設計されていた。

砲身はポッド推進器よりも下にあった。その位置まで水中大砲が降りて初めて、砲塔は回転できる構造になっていた。

「十時の方向ですわ」

ルビーローズがアドバイスした。

操縦室にはサファイアガラスでできた窓がある。紅

月丸を追い越して左に旋回し、戻ってくるゲンゴロウの姿がルビーローズには見えている。
「おう」
制御室で潜望鏡をのぞくマハラは、右の取っ手をひねって十時に合わせた。
船底の単装砲が向きを変えた。
水中大砲ハイドロハンマーが、その筒先に敵潜を捉えた。
「いやがった！」
「まだ撃ってはなりませんよ」
ルビーローズはマハラに釘を刺した。
砲撃をするにしても、タイミングというものがある。それにエアカーテンを使ったのは、敵の目を欺いてやりすごすためだ。できれば戦いたくはない。
紅月丸は潜水艇である。
水中大砲を備えた戦闘艇でもある。
鋼鉄のモンスターだ。
けれども、水棲モンスターを相手に水中戦を挑んだのでは、とても勝ち目はなかった。
「ゲンゴロウは攻撃態勢じゃないです。様子を見てい

るだけです」
　チャパティは操縦桿を固く握りしめていた。平らな潜水艦がぐんぐん接近してくる。
「紅月丸を仲間のモンスターだと思っているうちに、なんとかして逃げるです」
　モンスターはモンスターを襲わない。スズメバチとオニヤンマが出くわしても空中戦は始まらないし、タガメとゲンゴロウがかちあっても水中戦は起こらない。モンスター同士で戦っているところを見た者はいない。
　だが、仲間のモンスターではなく、餌の昆虫だと見なされたなら、話は別だ。モンスターだって生きている。食わねば死んでしまう。泳ぐテントウムシを餌だと判断すれば、ゲンゴロウはするどい顎（あご）でかじりついてくるだろう。中にいるのがリヴリーだとばれたなら、さらに厄介（やっかい）だ。むきになって攻め立ててくるにちがいない。
　チャパティの言うように、事態が悪化する前に逃げ出すのが最善の策だった。とはいえ、いまは逃げるに逃げられない。
　逃げれば、確実に襲われる。

「来ましたわ」
ゲンゴロウは紅月丸に近づくと、直前で止まった。胸と腹を折り曲げ、体全体で水の抵抗を受けて、急ブレーキをかけた。
押された水が見えない波となって、水中の紅月丸を洗った。船体を覆(おお)うエアカーテンが洗い流された。次から次へと発生する気泡はすぐにカーテンを作り直したが、泡の向こうにテントウムシがいることは、もはや隠しようもなかった。
「静かに。刺激しないように」
波に洗われた紅月丸が揺れている。
小声でささやくルビーローズの目の前には、壁が広がっていた。ゲンゴロウの胸だ。薄茶色の体に、焦(こ)げ茶色のラインが幾筋(いくすじ)も引かれている。
なにかの器官なのか、胸の中央には縦に長く、黒いところがあった。いかにも硬そうな感じで、防御のために胸当てでも装着(そうちゃく)しているかに見えた。
胸当てのような器官は後脚の付け根へとつながっていた。水を蹴って推進力を得るために一際(ひときわ)でかくなっている後脚は、体のほぼ中央から伸びていた。

そのでかい脚をわずかに泳がせて、ゲンゴロウはゆっくりと体を沈めた。
上にあった頭部が降りてきた。
顔の色は緑だった。顎のところが黄色くなっている。口元の触角をしきりに動かし、探りを入れている。
水中に差し込む日光を反射して銀色に輝く複眼は、穴でもあいているかのように中央だけが黒い。まるで瞳のようだ。そして、黒い瞳でルビーローズを見下ろしている。
「いつでも撃てるぜ、姐御」
砲手のマハラが艇長のルビーローズに報告した。右手は潜望鏡を操作する取っ手から離れ、砲撃ボタンの安全カバーに添えられている。あとはカバーを起こして、中のボタンを押すだけだ。
ハイドロハンマーで狙われていることをゲンゴロウは知らない。体を折り曲げてくれたおかげで、的は大きい。それに至近距離だ。外しようがない。
「あせらないで」
しかし、劣勢なのはルビーローズ一味だった。
水中でゲンゴロウと戦ったなら、まず負ける。浸水

すれば、紅月丸は沈没する。沈む潜水艇から無事に脱出できたとしても、そこは水の中だ。息もできやしない。呪文を使ってタガメに変身しても無意味。ちょっぴり泳ぎが達者(たっしゃ)になるくらいで、やはり息はできない。

そもそもタガメは水中で呼吸などできない。ゲンゴロウもそうだ。どちらも水面で空気を取り込んでから潜っている。タガメは腹部の末端に呼吸管があり、それをシュノーケルのように使って息をして、獲物を待ち伏せる。ゲンゴロウは硬い羽の下に空気を溜(た)め込み、それをボンベのように使って息をして、獲物を探し回る。

呪文でタガメに変身したくらいで水中を自由に行動できるのなら、潜水艇はいらない。

「息切れを待つです」

チャパティがルビーローズの代わりに説明した。

ゲンゴロウは水中で呼吸ができないのだから、羽の下のボンベが空になれば浮上する。もしかすると、立ちのぼるエアカーテンの気泡を見て、新鮮な空気を吸いたくなるかもしれない。

戦闘回避が第一の目的である以上、なにも先手を取

る必要はなかった。
　様子をうかがっていたゲンゴロウが左の前脚を伸ばした。脚は六本あるはずだが、四本しか見当たらない。水を蹴る太い後脚と、伸ばした前脚の四本だけだ。
「やばいです。このゲンゴロウはオスです」
「ああん？　オスだとなんでやばいんでえ？」
　潜望鏡をのぞいたまま、マハラはチャパティに問い返した。
「いま伸ばしたのは前脚じゃないです。中脚です」
「……」
　マハラは沈黙を返した。船底にある潜望鏡ではそこまで見えない。いま伸ばしたと言われても、なんのことだかわからない。
「それがどうかして？」
　ルビーローズが話を引き継いだ。
「オスの前脚には吸盤（きゅうばん）がついてるです。顔の下にある、お皿みたいな丸いやつが吸盤だと思うです。前脚は折り曲げてたたんであるです」
「やい、お茶っ葉。だから、それがなんでやばいんでえ？」

マハラは潜望鏡から顔を上げると、チャッパと呼ばれるハナマキを当て字でからかった。
「ゲンゴロウが前脚を伸ばしたら、紅月丸は吸盤に捕まるです。ひっついて、もう放してもらえないです。おいらたち、逃げられなくなるです」
「そいつぁ……」
やばいと言いかけたマハラの頭上で悲鳴があがった。
エアカーテンの中に脚を入れたゲンゴロウが、テントウムシの黒い体をなでたのだ。脚の先にある鉤爪が紅月丸の船体を引っ掻いて、金属を削り取るような甲高い音を立てた。水中で、それも潜水艇の中で、聞きたくはない音だった。船体を引き裂かれ、いまにも水が入ってきそうな気がする。
ルビーローズも、チャパティも、天井を見上げて無言だった。
紅月丸が悲しそうに鳴いている。
「だいじょうぶでえ」
マハラが仲間たちを勇気づけた。ぎょろ目で自信満々に天井を見つめている。口元には不敵な笑みも浮かべている。

「鉄のツタをキルリアン精錬(せいれん)した、俺様特製の鋼板だからな」
自慢するだけあって、潜水艇〈紅月丸〉の船体に採用されたマハラ特製の鋼板は、モンスターに引っ掻かれても無傷だった。塗装が剥(は)がれて爪痕(つめあと)が残ったものの、鋼板そのものには筋(すじ)ひとつ入らなかった。
だが、その硬さが災いした。
中脚の鉤爪が引っかからないものだから、ゲンゴロウは折りたたんでいた前脚を伸ばした。脚の先には吸盤がついている。まるで手のひらのようだ。その手でしっかり、沈んだテントウムシを捕まえようとしている。
捕まればおしまい。もう、逃げられない。
「ハイドロハンマー、よろしくて？」
非常事態なのに落ち着き払ったルビーローズの、冷たい声がした。
「おうっ」
マハラは熱く答えると、潜望鏡をのぞき込んだ。
「お撃ちなさい」
「喰らいやがれっ！」

砲撃ボタンの安全カバーを親指で跳ね上げたマハラが、同じ指でボタンを叩いた。

水中大砲が火を噴いた。

いや。噴いたのは火ではなくて、水だった。

ハイドロハンマーは水の大槌だ。ポンプで吸い込んだ水をハイドロ・コンプレッサーで圧縮してある。リリーフ弁を開放すれば、砲口から凄まじい勢いで水が噴き出す。原理は水鉄砲と変わらないが、大仕掛けな分、威力がある。

ただし、モンスターにダメージを与えることはできなかった。むしろ、ダメージを与えないことを目的として、ハイドロハンマーは開発された。

ダメージを与えてしまえば、戦闘が始まる。

水中で水棲モンスターと争えば、敗れる。

だから、モンスターを攻撃したことにならない武装が必要だった。ただの水なら、モンスターも怒りはすまい。ただの水でも、打たれるのは嫌がるにちがいない。まとわりつくモンスターを追い払うことさえできたなら、それでよかった。

水中大砲が水の砲弾を撃ち出すと、反動が紅月丸を

襲った。作用反作用の法則だ。筒先から水が飛び出せば、同じ大きさの力が正反対の方向にも働く。ハイドロハンマーは十時の方向に放たれ、紅月丸は四時の方向へと押し流された。

腹部に強烈な水鉄砲を食らったゲンゴロウは驚いて逃げ出した。後脚で水を蹴り、ロケットのように真上にすっ飛んでいった。しかし、そのまま逃げ去りはしなかった。追撃を恐れでもしたのか、途中で三回も向きを変えてから、紅月丸の右斜め上で静止した。

尻を上げ、頭を下げ、体を斜めに傾けて、ゲンゴロウはまっすぐに紅月丸を見据(みす)えている。

ルビーローズとチャパティは大きな窓から敵の行方を追い、そして互いに顔を見合わせた。ハイドロハンマーは命中した。至近距離で直撃を食らわせた。なのに、逃げずに距離を保って用心を怠(おこた)らないゲンゴロウは、明らかに紅月丸を狙っていた。

「野郎はどこでえ？」

「右上にいるです」

「ちっ」

マハラが舌打ちした。

潜望鏡の視界から敵潜は消え失せた。船底に大砲があるという構造上、頭の上に陣取った敵は狙えなかった。

「ハイドロハンマーはこちらに」

「姐御に任せらぁ」

マハラは水中大砲の制御盤から手を放した。

ハイドロハンマーの操作は操縦室でも可能だった。スコープのない簡易制御盤がコンソールに設置されている。窓のある操縦室では、外の敵をじかに目で見ることが可能だ。攻撃のために潜望鏡をのぞく必要はなかった。

ルビーローズは寝ていたトリガーグリップを起こした。起こした瞬間に安全装置が外れて、ハイドロハンマーはいつでも撃てる状態になった。

グリップを起こすのに連動して砲身も動いた。窓の外を水中大砲の筒先が流れてゆく。

ハイドロハンマーは真正面を向いた。テントウムシの顎(あご)の下から砲身が突き出している。だが、砲身が前を向こうとも、船底の大砲で頭上の敵を撃つことはできなかった。

「ハーネス装着」
ルビーローズは座席からベルトを引き出した。
フルハーネス型の安全ベルトだった。肩ベルトを引っ張り下ろして腰のバックルに固定し、腿(もも)ベルトを引っ張り上げてこれも腰のバックルに固定する。胴体を四隅(よすみ)で動かなくするわけだ。最後に胸ベルトで二本の肩ベルトを連結して、ベルトが肩から外れないようにする。
これで、ルビーローズの体は座席に縛りつけられた。マハラとチャパティも、ハーネスを装着して体を固定した。
「エアカーテン解除。紅月丸、ローリングモードへ移行」
「了解したです。エアカーテンを解除して、ローリングモードに移行するです」
チャパティは片手で流れるように操作した。
エアカーテンのスイッチをオフにし、モード切り替えボタンを押す。気泡のカーテンが消え、テレグラフハンドルがロックされ、操縦桿が効力を失った。
チャパティは左手でダイヤルアクセラレーターをつ

かみ、右手でトリムスティックを握った。
ダイヤルアクセラレーターは、ポッド推進器を制御するための回転盤だった。グリップを握って、左右にひねる構造になっている。右にひねれば船体が右回転し、左にひねればその逆に動く。ひねった分だけ、スクリューの回転速度は増す。
ポッド推進器に舵はいらない。ポッドの向きを変えるだけで、船はその場でくるりとターンできる。つまり、ハイドロハンマーの砲口を真正面に固定していても、紅月丸そのものが砲塔のように回転すれば問題ないわけだ。
一方、トリムスティックは、トリムタンクの注排水を制御する装置だった。スティックを握って前後にスライドさせる構造になっている。手前に引けばテントウムシが顔を上げ、奥に押し込めばうつむく。
紅月丸は潜水艇だ。潜ったり浮かんだりするための装備として、複数のタンクを持っている。トリムタンクはそのひとつで、船体の釣り合いを取るために前部と後部に設けられている。片方を排水すると、そちらは軽くなって浮く。つまり、船体を傾けてしまえば、

船底の大砲で頭上の敵を撃つことだってできるわけだ。
「アップトリムでライトターンするです」
チャパティは右手でスティックを引き、左手でダイヤルをひねった。
黒いテントウムシが顔を上げながら、右回転を始めた。すると、斜めになった体は左肩上がりの状態で均衡を保ち、右肩を後ろに引くようにして回転を始めた。
スクリューの向きとは関係なく回っている。
頭を上げようとする浮力と、上がった頭を右回転で沈めようとする推進力は、ほぼ等しかった。ただし、互いに引っ張り合う二つの力は微妙に方向がずれていた。浮力は真上に働くが、スクリューの生み出す推進力は傾いた船体に合わせて斜め下に働く。その結果、二つの力が合わさって、合力が生まれる。
左肩上がりで船体が傾いた状態のまま、紅月丸は独楽のように回り始めた。
縦にも横にも傾いて斜め向きとなった射線は、すぐに敵潜と交錯した。
無用の長物と化していた船底の大砲が息を吹き返した。

「撃ちますわよ！」
仲間のふたりに衝撃に備えるようながして、ルビーローズは引き金をしぼった。
ハイドロハンマーが水の砲弾を撃ち出し、反動で鋼鉄のモンスターが沈む。
水中で水の砲弾は見えない。またしても直撃を食らったゲンゴロウは、大あわてであたりを泳ぎ回った。パニックでも起こしたかのように見えたが、そうではなかった。逃げる気配は微塵（みじん）も感じさせずに、ゲンゴロウは二度三度と向きを変え、今度はテントウムシの後方斜め上に陣取った。
紅月丸の操縦を担当するチャパティは、サファイアガラスの窓越しに、目視（もくし）で敵モンスターの行方を追った。ゲンゴロウの泳ぐ速さや急な方向転換にも沈着に対処して、止まった位置にぴたりと水中大砲を向けた。
「撃ちますわ！」
ルビーローズはすかさず砲撃した。畳（たた）みかけるように攻撃を加えてゲンゴロウを辟易（へきえき）させ、退却にまで追い込むのが狙いだった。
三度目の直撃を食らったゲンゴロウは逆落（さかお）としに沈

降した。今度は逃げる先に真下を選んで、紅月丸よりも深く潜った。
チャパティはトリムスティックを押し込んだ。アップトリムからダウントリムに切り替わり、顔を上げていたテントウムシが視線を落とす。
「……く」
ルビーローズがかすかにうめいた。
船体が上向きのときは座席が体重を支えてくれるが、下向きになるとハーネスが体重を支えることになる。ベルトが体に食い込んで痛かった。
とはいえ、マハラよりは楽だった。マハラの座る機関制御席は横向きになっている。紅月丸が上を向こうが下を向こうが、マハラを支えるのは常にハーネスだ。だが、すぐに軽口をたたくマハラの口から、うめき声が漏れることはなかった。
「撃ちます！」
斜め下の敵潜に向かってルビーローズは砲撃した。
反動が紅月丸を突き上げ、ハーネスがさらにきつく体に食い込んだ。
「……！」

ルビーローズは歯を食いしばった。今度はもう、声を漏らさなかった。それに、食い込むベルトを気にする余裕はなかった。

ゲンゴロウがハイドロハンマーをかわしたのだった。

四発目は当たらなかった。砲口が向いた瞬間、ゲンゴロウはその場を逃れた。どうやら、水中大砲の筒先が向けば、そこから水の固まりが飛び出してくると学習したらしい。

学習の成果を確認するかのように、ゲンゴロウは緩急をつけて泳いだ。ハイドロハンマーがよそを向いている間は漂うようにゆっくりと泳ぎ、照準が合えば一瞬で加速して逃げた。

深く沈んで左へと回り込む水棲モンスターを、鋼鉄のモンスターは左回転で追った。船体は右肩下がりの状態で、左に回っている。

「撃ちます！　撃ちます！　……撃つ！」

ルビーローズは三連射した。全部、外れた。引き金をしぼったときには、ゲンゴロウはもういない。当たるわけがなかった。

最後の一発は逃げる先を予測して撃った。ゲンゴロ

ウの泳ぐパターンに合わせて、チャパティが一手先を読んで紅月丸を操った。阿吽(あうん)の呼吸で、ルビーローズはその一手先を狙い撃った。しかし、命中はしなかった。ゲンゴロウはさらに加速して、二手先をいった。

加速したゲンゴロウに負けじと、チャパティはもう一段、ダイヤルアクセラレーターをひねった。半開きのまぶたで眠たそうにしている割に、強気の操縦だった。

スクリューの回転速度が跳ね上がった。

「飛ばしすぎじゃねえのか！」

チャパティの後ろでマハラが怒鳴った。ぎょろ目はせわしなく動いて計器類を監視している。

「！」

ルビーローズの視界を気泡の帯が横切った。

キャビテーションだ。スクリューが高速で回転すると気泡が生じる。速すぎる回転のせいで、スクリュー先端の圧力が水の蒸気圧よりも下がり、水中に蒸気が生まれて泡となる。

ルビーローズの目の前で、小さな泡がいくつもはじけた。泡の中に閉じ込められていた音が解放され、サ

ファイアガラスの窓をふるわせた。スクリューのうなる音がルビーローズの耳に届いた。
「チャッパ……！」
危険を感じたルビーローズが注意しようとしたが、すでに手遅れだった。
スクリューが高速で回転すればキャビテーションは起こるもの。多少の不都合はあっても、即命取りとなるわけではない。だが、キャビテーションを起こすほどの高速回転は、いまの紅月丸には命取りだった。
黒いテントウムシはうつむいている。後部トリムタンクの浮力と、左回転するスクリューの推進力とが綱引きをしている。真上に働く力と斜め下に働く力が合力を生み、紅月丸は右肩下がりで傾いた状態のまま、その場でくるくると回っている。
これまで絶妙なバランスを保っていたわけだが、チャパティの強気の操縦でそれが崩(くず)れた。スクリューの推進力が浮力に勝り、軽いはずの船体後部を沈めにかかった。
後部が下がれば前部は上がる。軽い後部が下となり、重い前部が上となるのは好ましくなかった。転覆(てんぷく)の恐

れも出てくる。
「やばいですっ」
チャパティはあわてた。
ダイヤルアクセラレーターを逆にひねった。出すぎたスピードを殺し、回転を止めようとした。トリムスティックは引いた。回転して上になる前部トリムタンクは軽くしようと排水し、下になる後部トリムタンクは重くしようと注水した。
とっさの判断だったが、裏目に出た。
上がり始めた前部は軽くなって、さらに浮き上がった。下がり始めた後部は重くなって、よけいに沈み込んだ。せめて回転する速度が変わらなければ、そのまま回り続けたかもしれない。しかし、チャパティはブレーキをかけてしまった。回転速度は弱まり、軽い前部を沈める力はもうなかった。
前部は浮きすぎた。後部は沈みすぎた。
重心が狂った。
「おい……？」
マハラのいる制御室が急に明るくなった。水中に差し込む日光は窓から入って操縦室を照らすが、なぜだ

か操縦室の奥にある制御室まで照らしてくれた。
水中でテントウムシが直立(ちょくりつ)したのだった。
「おい……！」
そして、立ち上がった勢いもそのままに、テントウムシは仰向けに倒れていった。
「おいおいっ！」
マハラだけが騒いでいる。
回転運動の途中でバランスを崩(くず)した潜水艇は、前部が浮く勢いと、後部が沈む勢いとで、ひっくり返ってしまった。
紅月丸は水中で転覆した。
「……」
唖然(あぜん)とするルビーローズの制帽が脱げた。天井に落ちた。
ひとりで騒いでいたマハラの制帽も脱げた。やっぱり天井に落ちた。
チャパティのターバンは脱げなかった。ちゃっかり自分だけ、落ちないように長い鼻で押さえている。
「……やい、お茶っ葉。今度から、俺様が運転するからな」

「……はいです」

いやとは言えないチャパティだった。

第二章　ルビーローズ一味

潜水艇〈紅月丸〉は転覆した。

起きてしまったものはしかたがない。

ひっくり返ったままでいいから、とりあえずバランスを保つよう、ルビーローズは冷静に指示した。いまさらチャパティを叱(しか)ったところで、どうにもなりはしない。

チャパティはトリムタンクに注水して前後のバランスを取り、船体を安定させた。

逆さまで操作するのはなにかと不便だった。

水中の景色には上も下もないから混乱しないように思えるが、そうもいかない。重力には上下がある。コンソールに手を置こうにも、重力に逆らってずっと手を持ち上げていなければならない。机に手を乗せるといういつもの動作が、机を押さえつける動作に変わるわけだ。見た目とちがって動きは逆だから、どうしても違和感がある。

おまけに全体重をハーネスで支えているので、ベルトのある肩と腿が痛い。なるべく早く、転覆した船体を復元する必要があった。

だが、その前に。

見失った敵潜を捕捉し、警戒せねばならなかった。

停止していたスクリューが動き出して、紅月丸はまた回り始めた。いつもは船底にある日陰者が、水中に差し込む日光をいっぱいに浴びて誇らしげに稼働している。

「スクリューが上にあるってのも悪かねえな」

「そうね。二号艇を造るときは考えてみようかしら」

マハラが軽口をたたいて、ルビーローズが応じた。

「……」

チャパティはなにも言わなかったが、気が楽になって力が抜けたらしく、長い鼻で押さえていたはずのタービンがすっぽ抜けた。

「敵潜見ゆ！　撃ちますわよ！」

ゲンゴロウは後方で紅月丸の様子をうかがっていた。ゲンゴロウが浮上したのか、それとも紅月丸が沈降したのか、いまは同じ水深のところにいる。水中大砲の

射角はそのままでよかった。
転覆しているにもかかわらず、ためらうことなくルビーローズはぶっ放した。黒いテントウムシの力をアピールしなければならない。ひっくり返って弱っていると見られたら、モンスターの攻撃を誘発しかねない。
「……！」
砲撃のショックはいままでで一番厳しかった。転覆して全体重をハーネスで支えている。重力で下に引っ張られ、反動で前に押し出されて、座席に頼ることができない。しかし、砲撃の結末はもっと厳しいものだった。
ゲンゴロウは逃げなかった。
水流に押されて少しばかり後退しただけ。軽く泳いで、逆に前に出てくる始末だった。
「もう一度！」
逃げようとしないモンスターに、ルビーローズは改めて砲撃した。
けれども、結果は同じだった。水中大砲を物ともせず、ゲンゴロウは悠然としている。
「……なんてこと。ハイドロハンマーの射程を見切ら

れてしまいましたわ」
　水中大砲ハイドロハンマーは大型の水鉄砲だ。ポンプで吸い込んだ水をハイドロ・コンプレッサーで圧縮し、放水している。高い水圧で水の砲弾を撃ち出しても、水が拡散すれば圧力は下がる。ましてや水中では抵抗も大きい。ターゲットが遠くなればなるほど、威力は衰える。
　少し離れてしまえば、ハイドロハンマーは小川のせせらぎにすぎなかった。水中のそよ風だ。
　ゲンゴロウはすっかり水鉄砲に慣れていた。射程内に捉えても一瞬で逃げられるし、射程外では涼しい顔で逃げもしない。
　まとわりつくモンスターを追い払うために開発したハイドロハンマーはもう、役には立たなかった。
「どうするんでえ？　姐御」
「こうなってはしかたがありませんわね。本日のミッションはおしまいにしましょう」
「なんでえ。今日も途中で引っ返すのかよ」
「おいら、転覆のダメージが気になるです。ちゃんとメンテしときたいです」

「それもそうだな。しゃあねえ、引っ返すか」
話はまとまった。
転覆したままの船体を復元するよう、艇長のルビーローズが指示した。
「またグルグル舞々(まいまい)かよ」
ローリングモードで回転運動することを、マハラは『ぐるぐるまいまい』と表現した。
「もう回転しないです。回転すると、ゲンゴロウの監視ができなくなるです」
ゲンゴロウは紅月丸の正面にいる。ハイドロハンマーの射程外から射程内へ、ゆっくりと侵入を試みている。依然(いぜん)として攻撃するそぶりは見せないものの、距離を詰めようとしている。
「回りすぎてひっくり返ったってのによ、回らずにどうやって戻すんでえ？」
「転覆したのはおいらの操縦ミスです。同じことをやらかす必要はないです」
「だから、どうやるんでえ？」
「まずフラッド・バルブを――」
「ちゃっちゃとおやり！」

ルビーローズがふたりの会話に割り込んだ。
「はいですっ」
チャパティはフラッド・バルブを閉めると、右舷（うげん）バラストタンクにエアを送った。
水を詰めたり空気を詰めたりして、船体の重量を調節するのがバラストタンクの役目だ。タンクの上部にはベント弁があって、これを開くとエアが抜ける。タンクの底にあるフラッド・ホールから水が吸い込まれ、重くなった船体は沈む。浮上するときはその逆。ベント弁を閉じてエアを送れば、タンク内の水はフラッド・ホールから押し出される。
簡単な仕組みだが、水中で転覆するともうおしまい。二度と浮上できない。エアを送っても、フラッド・ホールが上にあるのでそこから空気が逃げてしまって、排水できなくなる。
そうならないためには、フラッド・ホールにも弁が必要だった。キングストン弁という。水中でモンスターにひっくり返されることを想定して、紅月丸はしっかりと対策を講じてあった。
チャパティの操作で右舷バラストタンクが排水され

た。
紅月丸のバラストタンクはサドルタンク式になっていた。馬の鞍(くら)にぶら下げた荷物のように、船体の両脇にタンクを抱えている。
テントウムシは上から見ると円形だ。長さと同じくらいの幅がある。そんなテントウムシを模(も)した幅広の潜水艇には、ひとつのタンクを船腹(せんぷく)に持つよりも、ふたつのタンクを左右両舷(りょうげん)に備えたほうが合理的だった。
片方のバラストタンクが排水されて軽くなり、テントウムシは横になり始めた。船体が傾くと、脱げ落ちた制帽が天井をすべった。
やがて、紅月丸は横倒しの状態になった。丸みを帯びたサファイアガラスの窓の中に、ルビーローズの制帽とチャパティのターバンがすべり落ちた。
「右舷バラストタンク、排水完了したです。そして今度は注水するです」
「ああん？　いま排水したのに、もう注水かよ」
「紅月丸の重心は船底側にあるです。横転した状態で注水すれば、重いほうに傾いて自然と復元できるで

す」
「なるほど、そういうからくりかよ」
右舷バラストタンクへの注水が始まってしばらくすると、紅月丸は船底側へと傾いた。チャパティの思惑どおり、水中で転覆した潜水艇は徐々に復元しつつある。
ルビーローズは手を伸ばしてターバンを拾った。無言で真上に差し出して、隣の席に座るチャパティに手渡した。それから、自分の帽子も拾い上げた。
ひとりで制御室にいるマハラには、制帽を拾ってくれる仲間はいなかった。右舷が浮いてマハラは上にいる。脱げた制帽は左舷、つまり下にある。しかも座席は右向き。制帽は真後ろに転がっている。
「……」
マハラはこっそりと、長い腕を後ろに伸ばしてみた。でも、届かなかった。
そこで今度は短い足を伸ばしてみた。やっぱり、だめだった。
自分だけ帽子を取り戻せないのは癪(しゃく)なので、マハラは姿勢を崩(くず)してむりやり足を伸ばした。

「！」
つった。
「どうかして？」
微妙な雰囲気を察知したルビーローズが振り返った。
「な、なんでもねえ」
足がつると、痛くてすぐには動かせない。崩れた姿勢のまま、マハラは精一杯の作り笑いを浮かべた。
テントウムシの姿勢が正常に戻ると、警戒したゲンゴロウが後ろに下がった。執拗にまとわりつくモンスターではあったが、用心深くて攻撃してこないのは不幸中の幸いだった。もっとも、作戦を中断して撤退すると決めた以上、絶対に追い払わねばならない相手だった。
「このまま、ゲンゴロウをつれて帰投するわけには参りません」
ルビーローズは制帽をかぶりなおした。
大きく丸い瞳が、細くするどくなった。
「雷撃戦用意」
冷たい声に空気が凍えた。
「……」

「……」
ルビーローズの隣でチャパティが、そしてその後ろでマハラが、凍りついた。
「早くおしっ」
「うおおお！　マジかよ！」
ルビーローズが叱咤すると、興奮したマハラが魚雷発射管制盤にかじりついた。
「姐さん、それだとバトルが始まるです」
チャパティは冷静に再考をうながした。
「魚雷は一発こっきりです。ゲンゴロウの体の大きさを見ると、九連バースト式魚雷で沈むとは思えないです。水棲モンスターを相手に水中戦をやる羽目になるです」
「覚悟の上ですわ」
ルビーローズは真正面に居座る敵潜を見つめている。
チャパティも視線を戻して前を見た。口はつぐんだ。別に、ルビーローズの決断に異議を唱えたわけではなかった。一味の参謀役として、注意を喚起したにすぎない。
「どこにも異常はねえ！　いつでもいけるぜえっ」

「魚雷発射口、開け」
「合点承知！」
黒いテントウムシが大顎（おおあご）を左右に開いた。本物のテントウムシとはちがって、顔の下側に正面を向いて口がある。口の中には魚雷が隠れている。
マハラは潜望鏡をのぞいた。ハイドロハンマーのものではなく、魚雷用の潜望鏡だ。先端部は魚雷発射口のそばにある。
「的針（てきしん）よし、的速（てきそく）よし。自針（じしん）よし、自速（じそく）よし」
ぶつぶつとつぶやきながら目盛（めもり）りを調整し、マハラは必要な数値を魚雷発射管制盤に入力していった。通常、この手の作業は襲撃運動盤で行うのだが、機能を統合して省スペース化を図ってあった。
せまい船内でマハラの作業は続いた。
「照準線そのまま。方位角よし、射角よし。雷速（らいそく）最大――」
「雷速はゼロでお願い」
「……ああん？」
マハラは思わず手を止めて、ルビーローズを見た。
「雷速ゼロってよ……。それじゃ姐御、魚雷は走らね

えぜ？」
　魚雷の速度がゼロなら、敵潜に命中するどころか前にも進まない。
「雷速を最大にしても、あのゲンゴロウなら恐らく、かわしてしまうでしょう。たった一発しかない魚雷ですもの。確実に、命中させなければなりませんわ」
　ルビーローズは右横にある台をポンと叩いた。
　紅月丸はテントウムシの形をしている。頭部が操縦室になっており、左にルビーローズの艇長席、右にチャパティの操縦席がある。そして両者の間には、太くて長い、丸太のような台がある。
　ルビーローズが気軽に叩いたもの。それは、魚雷発射管だった。
　スペースに余裕のない潜水艇に魚雷発射管室までは用意できなかった。なにより、魚雷を撃って水棲モンスターに水中戦を挑むことは死を意味する。なくてもかまわない装備だった。
　それでも、戦う必要に迫(せま)られるかもしれない。そこで非常時に備えて一本だけ、魚雷を積んであった。再装填(そうてん)できない単発式の魚雷発射管なら機構も簡素化で

きて、なんとか搭載も可能だった。
そんな虎の子の魚雷を、ルビーローズは使おうとしている。
攻撃してこないゲンゴロウに、あえて攻撃を仕掛けてでも、追い払おうとしている。
ゲンゴロウがつきまとって離れない以上、魚雷の使用はやむをえないのかもしれない。確かに、このままつれて戻るわけにはいかない。だが、雷速ゼロで走らない魚雷を撃って命中させるというルビーローズの考えは、マハラはもとより、チャパティにも理解できなかった。
「わからない？」
ルビーローズは説明した。
「撃っても、かわされるだけ。それなら、ゲンゴロウに魚雷を拾わせてしまえばいいのですわ」
「魚雷を拾わせるだぁ？」
「圧縮空気で魚雷を射出（しゃしゅつ）したら、紅月丸を後退させますの。そうすると、ゲンゴロウは近づいてくるでしょう。モンスターにも性格がありますわ。あのゲンゴロウは好奇心が旺盛（おうせい）なようです。きっと、テントウム

シが吐き出したものに興味を持ち、拾い上げるはず」
「そこをドカンといくわけか。おもしれえ！」
「魚雷を機雷のように扱うなんて、おいらも考えつかなかったです」
「問題は起爆時間ですわね。何秒あればいいかしら？」
ルビーローズは参謀に聞いた。
ゲンゴロウが弾頭を叩いてくれるわけもないから、着弾の衝撃で起爆する信管は使えない。
「三十秒もあれば、いけると思うです」
「マッハ」
「おう。時限信管で起爆時間は三十秒っと……」
マハラは入力作業を終えた。
「あとの手はずはわかりますね」
「魚雷が爆発したら、おいらは紅月丸を緊急浮上させるです」
「その途中で俺様はデコイ・シロップを放出な」
「よろしい。それでは――」
ルビーローズは一旦、言葉を切った。トリガーグリップを倒して、水中大砲の制御権を手放す。そして、

続きを口にした。
「ハイドロハンマー格納」
「合点でい」
マハラは壁の操作パネルにあるスイッチを入れた。
水中大砲は重い。引き上げて格納するのは電動式になっている。
「ローリングモード解除」
「了解したです」
チャパティはモード切り替えボタンを押した。右手で操縦桿を握り、左手はテレグラフハンドルに戻す。
「覚悟はよろしくて？」
「どんとこいやっ」
「よろしいです」
ルビーローズ一味の結束は固い。水中でゲンゴロウ相手に雷撃戦を挑むという無謀な作戦にも、怖じ気(おじけ)づく者はいなかった。
「魚雷、発射用意」
「おうよ」
管制盤のT字型レバーをマハラはひねった。下向きの取っ手が横向きとなり、魚雷発射管の安全装置が解

除された。
「発射」
「喰らいやがれっ！」
いまひねったレバーを、マハラは元に戻した。
圧縮空気タンクから大量のエアが送り込まれた。魚雷発射管に充満したエアは魚雷を勢いよく外に押し出した。
テントウムシが魚雷を吐いた。
雷速ゼロに設定された魚雷はスクリューが回転することもなく、惰性（だせい）で力なく進んで、止まった。重心が後方にあるのか、尻を下げて止まった魚雷はまるでボウフラのようで、とても兵器には見えなかった。
「後進半速」
「後進半速するです」
チャパティはテレグラフハンドルのレバーを三つ手前に引いた。
ストップ・モーターからハーフ・アスターンへと切り替わり、紅月丸は後退を始めた。
「うまくいくといいです」
「見てらっしゃい」

「十秒経過でい」
紅月丸の後退にやや遅れて、ゲンゴロウが水を蹴った。太い後脚でひと蹴りして水中をすべり、一気に魚雷に接近した。
ルビーローズとチャパティは息を詰めて、成り行きを見守った。マハラだけは小刻みにうなずいて、体でカウントしている。
「二十秒経過でい」
ゲンゴロウは魚雷にふれようとしない。触角を動かして、用心深く、探りを入れている。
「二十五秒……二十六秒……二十七秒」
マハラのカウントが一秒刻みになった。
残り三秒で、ようやくゲンゴロウは吸盤のついた前脚を伸ばした。
だが、ゲンゴロウが魚雷を拾い上げるよりも早く、タイムリミットが訪れた。
「三十秒でい！」
魚雷が破裂した。
驚いたゲンゴロウが下がった。
魚雷は破裂したが、爆発はしなかった。不発弾では

ない。爆発するのはこれからだ。
破裂した魚雷はふたつのパーツに分かれて沈降していった。弾頭カバーを兼ねた上蓋（うわぶた）と、魚雷本体のふたつだ。魚雷本体にはモーターとバッテリーがあって重く、一直線に湖底へと沈んでいった。弾頭カバーを兼ねた上蓋は水の抵抗を受けながら、ひらひらと舞うように落ちていった。
あとには魚雷の中身が残った。カエルの卵のような物体が水中を漂っている。紐状（ひもじょう）の粘液（ねんえき）の中に黒い玉が点々と九つ、収まっている。
玉の正体は、リヴリーの技を不活性化したものだった。

呪文科学局が不思議な技を開発した――との情報をルビーローズがつかんだ。呪文科学局はリヴリーアイランドを管理する機関のひとつで、技や呪文を担当する重要な部署だ。局長はジュリエットが務（つと）めている。
情報を流したのは呪文科学局の職員で、ルビーローズのシンパだった。人気者のルビーローズは聖母と崇（あが）められている。熱烈なファンも多い。リヴリーアイラ

ンドを陰で牛耳(ぎゅうじ)っているミューミュー一派に対抗できるのは、ルビーローズ一味だけということもあって、一味の首領であるルビーローズには多くの情報が集まってくる。

といっても、情報網として整備されているわけではなかった。あくまでも自然発生的なもので、ミューミュー一派の強力な情報機関とは比べようもなかった。

管理リヴ委員会の委員長であるミューミューには、委員会直轄(ちょっかつ)の中央情報室があり、全管理機関の情報を統括(とうかつ)している。

多くの管理機関を支配下に置くジュリエットには、法務局の公安調査室と財務局の情報調査室がある。

モンスターの脅威(きょうい)からリヴリーアイランドを守る防衛局にも諜報(ちょうほう)部隊があって、局長で総司令官のプーケが指揮を執(と)っている。

地下牢獄獄長のダークヤグラは、配下の囚人を通じて裏社会の情報を吸い上げている。

ミューミュー一派の情報網は広く深く、張り巡らされていた。

これらの組織化された情報機関に比べれば、ルビー

ローズのそれは脆弱(ぜいじゃく)だった。ただし、自然発生的であるがゆえに、とらえどころがなかった。昨日、情報を提供した者が今日も情報を差し出すとは限らず、今日、口をつぐんだ者が明日も沈黙を守る保証はない。全容の解明など、不可能だった。

存在するようで存在しない幻の情報網は「ルビーローズのエスピオナージ・セル」と呼ばれた。そして、一部の者だけが知るルビーローズの昔の異名(いみょう)にちなんで、「紅(くれない)機関」とのコードネームがつけられた。

呪文科学局が開発した不思議な技の情報は、その紅機関がもたらした。

なんでも、シャボン玉のような中空(ちゅうくう)構造の球体が宙に浮いており、玉の表面を電気が走っているという。さわらなければなにも起こらないが、さわるとシャボン玉は割れて「サンダー」になるそうな。

つまり、攻撃技の「雷」が遅延発動していることになる。

呪文科学局はこの技を浮遊機雷として、空中に敷設(ふせつ)する用法を想定しているとのことだった。たとえば、GLL城にモンスターが侵入しても、部屋を機雷で封

鎖してから次の部屋へと退避すれば、追撃に対する備えとなるわけだ。
遅延発動型サンダーは、開発前から一般配布しないと決められていた。リヴリーアイランドを守るためにモンスターと戦う、防衛隊専用の攻撃技として開発されたのだった。
そのこと自体は珍しくもなかった。スリングの石を砕(くだ)いた「散弾投石」という技がある。通称、ショットガン・スリングだ。この技も一般リヴリーには配布されずに、主に防衛隊用となっている。
なにより、管理リヴリーには特権として専用の攻撃技が与えられていた。ルビーローズもマハラもチャパティも、自分だけの攻撃技を持っている。新開発の遅延発動型サンダーを会得(えとく)できなくても、不公平ではないから文句は言えないし、別に不満もなかった。
ルビーローズ一味が新技の情報に飛びついたのは、それが既存(きそん)の技をベースにしたものだったからだ。
一味の目的は、オリジナルの技を開発することにあった。
専用攻撃技を持っているといっても、それは管理リ

ヴ委員会に与えられたものにすぎない。委員会はミューミュー一派が仕切っている。その気になれば、いつでも技を取り上げることが可能なわけで、ルビーローズ一味は圧倒的に不利な立場にあった。これでは、対抗はできても対決はできない。

そもそもミューミュー一派はリヴリーアイランドが創造されたときからの大幹部であり、任命したのは創造主たるミュラー博士だ。それに対し、ルビーローズ一味の三人は、新しい管理リヴの募集に応じて登用試験を受け、合格していまの地位に就いた。一派と一味では、背景が完全に異なる。対抗することさえ、おこがましいといえる。成虫のカマキリに、蝶の、それも幼虫が挑むようなものだ。

そうはいっても、反りが合わないのだからしかたがない。神に選ばれた管理リヴと、試験に受かった管理リヴとでは、考え方に相違があって当然。ミューミュー一派にとってリヴリーアイランドの統治は神に託された義務であり、なにごとも変えてはならないもの。一方、ルビーローズ一味にとってリヴリーアイランドの統治は自ら勝ち取った権利であり、必要に応じて変

えてもいいもの。守旧派と改新派なのだから、水と油である。

ルビーローズ一味がミューミュー一派を凌駕するには、どうしてもオリジナルの技が必要だった。しかし、技の開発と呪文化はトップシークレットであり、探りを入れても、なにひとつ、つかめはしなかった。開発を担当しているのは呪文科学局のエリート技官で、権力機構にがっちり取り込まれた彼らが、一派に背いて一味に通じることはなかった。接触を図ろうにも、ジュリエット麾下の公安調査室が目を光らせている。

そこへ、新開発の遅延発動型サンダーというネタが転がり込んできた。

スリングを少し変えただけのショットガン・スリングでさえ開発できなかった一味であるが、既存の技を遅延発動させるという発想には強い興味を示した。

これなら、まねできると踏んだのだ。

いきなり新技を開発できなくてもいい。まずは、いまある技を応用できればそれでいい――と。

かくして、マハラの出番がやってきた。

マハラショップのオーナーは、アイテム類を担当す

る経済産業局の局長だった。大雑把でそそっかしい性格に似合わず、物資の調達に関しては辣腕をふるった。荷動きには抜け目がなく、月末には必ずショップの棚卸しをするなど、意外に細かい面を併せ持っていた。棚卸表まで作って月次決算をするのはマハラだけ、と財務局長のジュリエットが溜息混じりに語ったという逸話があるほどだ。そこまでしなくてもいいのに、とのニュアンスだったらしいが。

口の悪い連中に言わせれば、単にマハラは物への執着心が強い性格なのだそうな。いずれにせよ、マハラが物流のプロフェッショナルであることに変わりはなかった。

そんなマハラが、呪文科学局に搬入された物資を過去に遡って、細大漏らさず調べ上げた。融通が利かないのか、それとも物の流れに手は抜かないのか、経費で購入された残業用のおやつまで、マハラのリストには記載されていた。

マハラが最もマハラらしいのは、調べが終わってからだった。リストが完成すると、あとはもう関係ねえやとばかりに、チャパティに丸投げしたのだった。

やどかり亭のあるじは控え目な性格で、食糧局の局長をルビーローズに譲り、自分は副局長の座に甘んじていた。といっても、ルビーローズが実務に関心を示さなかったため、実際にはチャパティが局長職をこなして書類を決裁していた。

面倒な仕事はなんでも押しつけられて損な役回りに思えるが、おっとりしているからといって、チャパティをバカにする者はいなかった。なにしろ、ルビーローズ一味の知恵袋である。見かけによらず頭は切れるし、お茶会の暗殺者との異名も持っている。マハラが、ひと呼んでマッハのマハラだと、自分で自分にかっこいいあだ名を付けたのとは大ちがいだ。

とぼけた顔で眠そうな目をしていても、おつむの出来はひと味ちがう。マハラに渡されたリストを精査して、チャパティはいくつかの資材に目をつけた。ブツの入手はマハラに委ね、ついでにちゃっかり残業用のおやつまで用意させて、研究を重ねたチャパティはついに独自の手法を編み出したのだった。

ただし、残念ながら呪文科学局と同じものは作れなかった。遅延発動には成功したものの、技を不活性化

するために特殊な粘液で封印する必要があった。しかも、その粘液は非常に乾燥しやすいものだった。粘液が乾燥すると技が暴発するため、水分を補(おぎな)いつつ、容器に詰めて慎重に保管しなければならなかった。そのため、陸上では使い道がなかった。

おまけに、粘液で封印できる技も限られていた。

「投石」などのように物体化を伴う技は完全には不活性化できずに、粘液が破れてしまった。「竜巻」では裂けたし、「氷の息吹」では凍って割れた。「雷」は漏電(ろうでん)した。

結局、遅延発動に成功した攻撃技は「弾け花火」だけだった。

用途を限定されても道は開けるもので、湖底探査(たんさ)作戦の立案(りつあん)と同時に、独自開発の遅延発動型バーストは日の目を見ることになった。

技を不活性化して封印し、粘液が乾燥しないように水分を補い、容器に詰めて保管。

そして、発射する。

魚雷の誕生である。

スクリューが止まった。
後退をやめた紅月丸は緊急浮上に備えた。一味の全員が沈黙し、そのときを待っている。
ハイドロハンマーはもう使えない。水鉄砲ではゲンゴロウを追い払えない。
魚雷は一発こっきりだ。まともに撃ってもかわされるだろうから、雷速ゼロで射出した。
時限信管を作動させて魚雷を分解し、中身を水中に放り出した。魚雷を機雷のように扱って、ゲンゴロウに拾わせる作戦だ。
九連バースト式魚雷には、九連発分の弾け花火が詰まっている。好奇心旺盛なゲンゴロウが引っかかってくれたなら、緊急浮上して脱出するための時間を稼げる。水中で水棲モンスターを相手に戦うわけにはいかない。
フルダメージを与えて気絶に追い込めたら言うことはないが、ゲンゴロウの体の大きさを見ると、かなりの耐久力があると思われる。
ゆえに、ルビーローズ一味はまばたきも忘れて事態に見入った。攻撃が成功したら、ただちに浮上しなけ

ればならない。リヴリーの攻撃技は水鉄砲とはちがう。弾け花火を食らったモンスターは怒り狂って襲いかかってくる。

のんびり構える余裕はなかった。

魚雷の破裂に驚いて一度は下がったゲンゴロウが、前に出てきた。分裂して沈んでいった魚雷には興味を示さず、目の前を漂う半透明の固まりをじっと見ている。

カエルの卵のような物体だった。紐状の粘液の中に黒い玉が入っている。全部で九つ、点々と収まっている。

ゲンゴロウは前脚を伸ばした。脚の先についている吸盤で、半透明の固まりにそっと触れた。

なにも起こらなかった。

「爆発しねえじゃねえか」

じれたマハラが文句をつけた。

ゲンゴロウは両脚の吸盤で揉(も)むように触っている。けっこう荒々しい。しかし、遅延発動型バーストは不活性化されたままだ。

「このくらいじゃ爆発しないです。これで爆発したら、

魚雷の発射で暴発するです」
「んなこと言ったって、おめえ……」
「吸盤の先には鉤爪がついてるです。あれで引っ掻いてくれたら爆発するです」
技を封印している粘液が鉤爪で引き裂かれることを、チャパティは期待していた。
ところが、事態はチャパティの期待を上回った。
両脚の吸盤で獲物をはさんだゲンゴロウは、脚を曲げて口まで運び、大きな顎(あご)でかじりついたのだった。
水の中で花火が弾けた。
「緊急浮上！」
「はいです！」
ルビーローズに言われる前に、チャパティの手は動いていた。
テントウムシの両脇にあるバラストタンクを排水する。補助用のネガティブタンクも排水する。前部トリムタンクも空にして船体を軽くしつつ、上向きの姿勢を保持する。
潜水艇の床が持ち上がった。紅月丸が浮上を始めた。
チャパティは少しでも船体を軽くしようと、魚雷発

射口を閉じた。管内にエアを送って水を追い出せば、その分も軽くなる。

ちょうど魚雷発射管にエアを送り込んだところで、また花火が弾けた。遅延発動型バーストには九連発分の弾け花火を仕込んである。技を食らったモンスターがショックから回復して動き出す前に、連発するよう調整してある。

ただ、二度目の爆発は明らかに一度目よりも大きかった。

「おいおい、いまのは二発同時じゃねえのか？」

「だと思うです。咬(か)まれたのは端っこじゃないみたいです」

「んなら、連発も半分でしまいかよ」

「最悪、五連発で終わるかもしれないです」

遅延発動型バーストは、粘液で作った紐の中に一列に並んでいる。端から順に爆発するのであれば九連発するが、途中から爆発したなら数が減る。ど真ん中から爆発すれば、連発は半分で終わってしまう。

「……」

ルビーローズは無駄口をたたかなかった。サファイ

アガラスの窓越しに敵潜を見つめている。
ゲンゴロウは泡の中にいた。花火が弾けてガスが発生し、水中に無数の気泡が生まれた。小さな気泡も、大きな気泡も、先を争って浮上してゆく。その争いに紅月丸も参加している。
ルビーローズは視線を上げた。
日光が差し込むほどに、浅い水深だった。けれども、攻撃されて怒り狂うゲンゴロウから逃れることを思うと、水面は空のように遠かった。
眼下(がんか)で花火が弾けた。
「また二発同時です。これで五発消化して、残りは四発になるです」
チャパティが戦況を報告した。
「……」
ルビーローズは無言だった。
返事の手間すら惜(お)しんで、次の一手のタイミングを計っていた。どこで使うか、どう使うか。魚雷の起爆時間は参謀役のチャパティに尋ねたのに、今度は自分ひとりで答えを出そうとしている。
いくら頭が切れても、チャパティには任せられなか

った。計算で出せる答えではないのだ。経験が導き出す答えである。それも並の経験ではない。モンスターを敵に回して、その攻撃をぎりぎりのところでかわす。そんな経験が物をいう。

だからルビーローズは、仲間の誰にも尋ねようとしなかった。

そして仲間のふたりも、ルビーローズの答えを待った。

四度目の花火が弾けた。今度もまた二発同時だった。これで九発のうち、七発までが消化された。

弾け花火の残りも、あと二発。

「デコイ・シロップ、全量放出用意」

ルビーローズが豊富な経験から答えを出した。

パキケフーズで愛敬（あいきょう）を振りまき、聖母と慕われるルビーローズだった。それなのに、マハラは姐御と呼び、チャパティは姐さんと呼んだ。

聖母と姐御。異なるイメージ。

答えを出したのは聖母ではなかった。誰も知らない、もうひとりのルビーローズだった。

「いきなり全部かよ？　そうか、これでさらに軽くし

ようってんだな！」
全量放出は船体を軽くするためだと、マハラは早合点した。
しかし、チャパティは納得しなかったらしく、横目でルビーローズを見た。
船体を軽くしようと全量を放出するのなら、すぐにも行動を起こしたはずだ。そうはしないで待ったのは、デコイ・シロップを使うには早すぎたからにちがいない。
なぜ、いまなのか。
チャパティは質問しなかった。聞いたところで答えてはもらえまい。答えてもらえたとしても、言葉にはなるまい。ルビーローズは計算したわけではない。数式もなければルールもない。ゲンゴロウに魚雷を使って逃げるときのマニュアルなど、存在しない。
ルビーローズは勘(かん)に従ったのだ。
一味の三人は同期である。管理リヴの登用試験には、いっしょに合格した。にもかかわらず、ひとりルビーローズだけが抜きん出ている。一味の首領として、潜水艇の艇長として、リーダーの座に就いている。姐御

よ、姐さんよと、一目置かれる立場にいる。
出会った頃は同格だった。
だが、出会う前にすでに。
ルビーローズは別格の存在だった。
「放出！」
下のほうで花火が弾けた。水を伝わって響く音もすっかり小さくなって、最後の二発が終わったのか、それともあと一発残っているのかはわからなかった。
「おっしゃあ！」
マハラがボタンを叩いた。
黒いテントウムシの脇腹から毒液が出た。いや、毒ではなくて甘い汁だった。
本物のテントウムシは外敵に襲われると、脚の関節から毒のような体液を分泌する。いやな臭いといやな味のする液体で、食べるとまずいよと警告する。
それをまねた紅月丸は、毒液の代わりに甘い汁を出した。食べるとおいしいよとシロップを差し出して、その隙に逃げるわけだ。
デコイ・シロップとは攪乱用の糖蜜だった。中身はミツアリのシロップ。敵を欺くような仕掛けはいっ

さいなく、純粋に、甘くておいしいシロップをモンスターに提供している。
浮上する紅月丸が全量を一気に放出して、水中に茶色の固まりができた。両脇から出たシロップは水の流れに吸い寄せられてひとつになった。シロップは放出の際に水で薄めてある。水中を漂うデコイ・シロップは、ちょうど紅月丸と同じくらいの大きさにふくらんだ。
「浮上したら、いそがしくなるです」
「やい、お茶っ葉。もう転覆させるんじゃねえぞ」
マハラがチャパティをからかった。
とりあえずはゲンゴロウから逃れることができて、ひと安心だ。
紅月丸はすべての手を打ち終えた。
ハイドロハンマーを使い、格納した。たった一発しかない魚雷でゲンゴロウを水中深く足留めした。追撃に備えてデコイ・シロップを使い切った。
水中でできることは全部やった。
あとは浮上するのみ。
しかし、浮上してどうなるというのだろうか。

紅月丸は潜水艇だ。テントウムシに似せてはいても、空は飛べない。あくまでも船であって、航空機ではない。潜水艇が水上を航行すると、水中を進むよりも速度が落ちる。水上では、水を掻(か)き分けて波を立てるという抵抗が生まれるからだ。造波(ぞうは)抵抗という。

つまり、浮上すれば遅くなるだけ。

しかもモンスターに遭遇(そうぐう)する危険度が増す。空中で活動するモンスターもいれば、水面で活動するモンスターもいる。もちろん、水の中からも襲ってくる。

浮上すれば命取りとなりかねない。ゲンゴロウはしつこくつきまとってきたが、攻撃は仕掛けてこなかった。ならば、ゲンゴロウが息継ぎに浮上するまで、水中で耐えるべきではなかったか。

いまさら言ってもしかたがない。

ルビーローズは雷撃戦を選択し、実行した。

ゲンゴロウとの戦いは始まっている。

そして、紅月丸は浮上した。

第三章　星の墓場

真っ先に動いたのはマハラだった。
せまい船内に合わせて、呪文で体を半分ほどに小さくしているとはいえ、実にすばやい動きを見せた。
緊急浮上した紅月丸の揺れがまだ激しいうちにハーネスを外した。体を縛りつけていた座席から解放されると、制帽を拾い上げて、次の持ち場へと急いだ。
マハラのいた制御室はテントウムシの胸部に当たる。その胸部には、ハイドロハンマーの砲塔が格納されている。
格納庫を回り込む細い通路の奥へと、マハラは消えた。
次に動いたのはルビーローズだった。
ハーネスを外して操縦室から制御室へと移った。ハイドロハンマーの格納庫に取り付けてあるはしごを登って、ハッチへと向かった。
チャパティは動かなかった。

ひとりで操縦室に残った。両手で操縦桿を握っているものの、実のところ、することがなかった。紅月丸は浮上したが、船体の半分は水没している。つまり、操縦室のある頭部は水面下だ。窓の外は依然として水中であり、水上が安全かどうかさえ確認することができなかった。

安全を確認するのはルビーローズの役目だった。

ハッチを開けて外に出た。水面が近い。

テントウムシの胸は上から見るとけっこう小さい。鞘翅（さやばね）と呼ばれる硬い前羽が胸の後ろ半分を覆（おお）っているから、そうなる。胸が前半分しか使えないので高さも足りず、ハッチの近くに水面がきてしまう。

さらに視界も悪くなる。低くて遠くまで見通せないばかりか、鞘翅のある後胸（こうきょう）部から腹部にかけてが盛り上がっているため、後ろがまるで見えない。

しかし、それはあらかじめわかっていることなので、対処のしかたは決まっていた。

ハッチを開けたルビーローズは、まず上空を確認した。見える範囲にオニヤンマなどの飛翔（ひしょう）モンスターはいなかった。それから水上を見渡した。水面で活動す

るアメンボなどの水棲モンスターも、見当たらなかった。

「転回！」

伝声管のふたを開け、ルビーローズは叫んだ。

すぐにチャパティの返事があって、紅月丸はその場でくるりと回り始めた。後ろが見えなくても、一回転すれば全方位を確認できる。

空や水面に視線を走らせつつ、ルビーローズは足場を確保した。いつまでもはしごでは、そのうち足をすべらせて転落する。

ハッチのある縦穴通路の内側には、防護ネットのような足場が収納してあった。円を八分割した形状になっている。はしごのある一角が欠けて全部で七枚しかないが、アルミパイプのフレームに丈夫な網を張ってある。ルビーローズがフレームの一枚を起こして踏み倒すと、残りの六枚も連動して倒れ、足場が完成した。

足場ができても、まだ落水の危険があった。内側には転落しなくても、外側に転落するかもしれない。

ルビーローズはロッカーを開けた。後胸部にスペースを確保して、通路の内側に引き戸を取り付けてある。

ロッカーの手前には安全帯(あんぜんたい)が置いてあった。腰ベルト一本で転落を防止する簡単なものだった。ベルトにつながるランヤードも短く、先にはフックがついていた。

ルビーローズは安全帯を腰に回すと、はしごの一番上の段にフックを引っかけた。

これで、落水の危険もなくなった。だが、安心はできない。危険はまだある。モンスターに襲撃される危険だ。水中のゲンゴロウを振り切れたとしても、水上に新手(あらて)が登場するかもしれない。

ロッカーの奥へと、ルビーローズは手を入れた。黒くて重そうな物を引きずり出した。

機関銃だった。

銃身の先端には、バイポッドと呼ばれる脚がついていた。二脚(にきゃく)だ。二股(ふたまた)の脚をハッチのふちにあるレールに当てると、ルビーローズは体を預けて体重で押し込んだ。バネがゆるんで、脚先にある小さなタイヤが前後からレールをはさんだ。

船体に取り付けた機関銃をルビーローズは左右に振ってみた。ベアリングタイヤが軽やかにすべった。

機関銃にはホースがつながっていた。ただのゴムホースではなく、加圧送水用のフレキシブル・メタルホースだった。ルビーローズはもう一度ロッカーの中に手を伸ばすと、今度はコックをひねった。メタルホースに水が通って、金属の蛇(へび)がうねった。

機関銃の機関部側面にはサムピースがついていた。スライド式のスイッチだ。まちがって動かさないように薄く作られている。それでいて動かすときには扱いやすいように、肉薄(にくうす)のスイッチにすべり止めの溝(みぞ)が切られている。

ルビーローズはサムピースに指をかけた。ドレイン・カバーが跳ね上がった。機関部上面に排水孔(はいすいこう)が露出した。内部にたまっていた空気が音を立てて排水孔から抜けていった。そして空気がなくなると、小さな孔(あな)からレーザーのように噴水が飛んだ。

エア抜きをすませたルビーローズはカバーを閉じて、試し撃ちをした。水滴が目にも止まらぬ速さで続けて撃ち出され、水面に線を引いた。

ティアドロップ・マシンガンと名付けられた機関銃は、水中大砲のハイドロハンマーとそっくり同じ仕組

みになっていた。ポンプで水を送り、ハイドロ・コンプレッサーで圧縮して、噴射する。上空や水面からモンスターが接近してきたら、水滴の弾丸をばらまいて追い払うわけだ。リヴリーの技で攻撃せずに、水で叩いて戦闘を回避するという戦術に則(のっと)っている。

マハラも後部銃座で似たような作業をしていた。

テントウムシの腹部末端には機材搬入(はんにゅう)用の水密(すいみつ)ゲートがある。船体の半分が水没しているからゲートは開けられないのだが、開かないゲートの前で、マハラは迎撃の準備に余念がなかった。

テントウムシを模(も)した潜水艇の腹部は、大きくふたつに分かれていた。内殻(ないかく)と外殻(がいかく)だ。

内側の殻と外側の殻があるわけだが、外殻は水や空気をためる構造になっていた。つまり、バラストタンクである。船底には内殻にくっつくようにしてハイドロハンマーの砲身があり、左右の外殻に埋もれる形で半ば格納された状態となっていた。

内殻には電池室があって、大量のバッテリーセルが積み込まれていた。紅月丸は湖底探査用に建造された潜水艇であり、行動範囲も限られているため、エンジ

ンはなかった。
　通路は内殻に一本だけ設けられていた。機材を搬入するからか、高さも幅もそれなりに確保されていた。床は金属製のグレーチングをUボルトで留めてあった。グレーチングとは格子状のふたのこと。通路の壁にはエキスパンドメタルが採用されている。エキスパンドメタルは金網のような網目模様のある金属板だ。床が穴あきなら、壁も穴あき。どうやら、軽量化を考えてのことらしい。
　通路の天井にはグレーチングもエキスパンドメタルもなく、剥(む)き出しの鋼材に、機材搬入用のレールクレーンが取り付けられていた。レールの端に当たる水密ゲート前では、レールをまたぐ形で天井から二本のアームが伸びている。
　アームの先には台座があった。マハラ担当の後部銃座だった。
　後部銃座は通路をふさいでいた。これでは、ドック入りなどで陸に上がって水密ゲートを開放しても、機材は搬入できない。しかし、アームに溶接された台座が斜め下を向いているところを見ると、後部銃座はゲ

ートの外へと押し出されて持ち上げられる仕組みのようだ。それなら、台座の下をくぐって搬入も可能だろう。

とはいえ、船体が半分水没した状況でゲートが開くはずはないのだから、後部銃座が役に立つとは思えなかった。

それでも、マハラは黙々と作業をこなしていた。

急な角度で傾いた台座の上には、トライポッドと呼ばれる脚が設置されていた。三脚（さんきゃく）だ。

三脚の上には重機関銃が搭載されていた。

マッハガンと名付けられた重機関銃もまた、ハイドロハンマーと同じ仕組みだった。ルビーローズの機関銃と同様に、マハラの重機関銃にもメタルホースがつながっている。ただし、こちらのほうが径（けい）も太く、ローラーバンドでアームに取り付けられていた。加圧送水用のフレキシブル・メタルホースは折れ曲がるから、ローラーが転がることで管の伸び縮みに対応するわけだ。

重機関銃にはサムピースがなく、代わりにカムラッチハンドルがついていた。マハラはハンドルに手をか

けた。引き起こして横に倒すと、ドレイン・カバーが開いて機関部上面に排水孔が現れた。通水はまだのようで圧力がかかっていないらしく、排水孔からはなにも漏れてこない。

マハラは壁の中に収納されているメタルホースを引き出した。金属の大蛇が金属の床にとぐろを巻いた。それから、バルブを少しだけひねった。壁のエキスパンドメタルには菱形の穴が無数にあいているのだが、網目模様を切って大きく開口した部分がある。その中にバルブが隠れていた。

水圧がかかって、重機関銃から空気が抜けた。噴水が飛ぶとマハラはすぐにバルブを閉めた。そしてカバーで排水孔にふたをして、カムラッチハンドルを戻し、しっかりとロックした。

エア抜きがすんだので、マハラはバルブを全開にした。大蛇のとぐろが広がって、渦巻く山が崩れた。

マハラは制帽を脱いで壁に掛けた。エキスパンドメタルの穴に帽子掛けが取り付けてある。壁に掛けられた制帽は少し横を向いていた。マハラは制帽に両手を添えると、つばがまっすぐ下を向くように整えた。

すべての作業を終えたのか、マハラは指差し確認を始めた。

まず最初に、伝声管に指を向けた。伝声管はアームから突き出している。台座を支えるアームは空洞になっているらしく、その中を伝声管が通っているようだ。伝声管のふたは開いていた。一番目に確認するくらいだから、持ち場につくと真っ先にふたを開けたのだろう。

次に、重機関銃の三脚に指を向けた。二本の脚が前を向いている。脚には金属製の枠(わく)が取り付けてあって、枠の中にはマニピュレーターがふたつ並んでいる。三本指の機械の手が樽(たる)をつかんでいた。

爆雷だった。

中身はもちろん、独自開発した遅延発動型バーストだ。ひとつの樽に弾け花火を三発仕込んである。銃座に腰掛けてペダルを踏み込むと、マニピュレーターが伸びて爆雷を手放す仕組みになっていた。信管はゼンマイ仕掛けの時限式で、マニピュレーターが爆雷を放すと作動する。

爆雷を指差して安全装置が解除されていることを確

認したマハラは、続けてメタルホース、バルブ、カムラッチハンドルの順に指を向けた。
最後に、壁に掛けた制帽を指差した。どうやら帽子を引っかける作業までルーチンワークに織り込まれているらしい。
指差し確認を終え、マハラはようやく台座に足をかけた。
傾いた台座によじ登り、座ろうにも腰を下ろせない椅子に尻を押し当てる。斜めに突き出した背もたれはもはや障害物で、もたれることもできやしない。折り曲げた体は、くの字になっている。不安定な姿勢を維持するだけで疲れるし、紅月丸が揺れたら転げ落ちる。だから、備え付けのハーネスで体を椅子に固定しなければならない。
実は、配置につくのが一番たいへんな作業だった。
斜め下を向いた椅子に、なんとか見かけ上は腰掛けても、両手は自由にならない。手をどこかに置いて体を支えていないと、傾いた台座から落っこちてしまう。
苦労して片手でハーネスを装着すると、マハラは伝声管に向かって怒鳴った。

「準備完了でいっ」
ちょうど、紅月丸は転回を終えたところだった。
水面に目印はなくても、遠くの景色でそれとわかる。東から北へ、ミュラー山脈が横たわっている。
「敵影見ゆ！」
ルビーローズは船内の仲間たちに警告を発した。
「アメンボの編隊接近中！　正面！」
水の上を走る黒い影があった。真正面から迫ってくる。数は三匹くらいだろうか。先を争うように、互いに追い越しあっている。
紅月丸が浮上したとき、正面にモンスターはいなかった。少なくとも、目の届く範囲に姿はなかった。周囲の安全を確認しようと、くるりと回ったわずかな隙に、一気に距離を詰めてきたらしい。
さすがは水上最速のモンスター。信じられないスピードだった。
しかも、潜水して逃れる手が使えない。水の中にはゲンゴロウがいる。魚雷でフルダメージを与えたかどうかはわからないし、デコイ・シロップに引っかかってくれたかどうかもわからない。ゲンゴロウが紅月丸

を見失った可能性もあるのに、わざわざ潜って、こちらから会いに行くなんてとんでもない。
水中は危険だ。だが、水上はもっと危険だった。接近してくるアメンボは単独ではない。編隊を組んでいる。
潜水するわけにはいかない以上、すぐにもこの場を離れなければならなかった。
一刻も早く逃げ出す必要があった。
しかし、船足（ふなあし）に期待はできない。
潜水艇の紅月丸が、わざわざ浮上して、波を蹴立てて進むのだ。スピードは水中よりも劣る。そして敵は、水上最速のモンスターだ。
そんな状況でも、ルビーローズ一味の三人にあせりはなかった。操縦室で操縦桿を握るチャパティは、半開きの目を眠たそうにパチクリさせている。後部銃座で傾いた椅子に座るマハラは、きつい姿勢を物ともせずに歯を見せて笑っている。ハッチで指揮を執るルビーローズは、こくりとうなずいた。
「鞘翅、開け！」
一味の首領が号令した。

鞘翅とは甲虫の前羽のことだ。硬くなった羽が鎧(よろい)のように背中を覆っている。
紅月丸は二紋型(にもんがた)のナミテントウに似せて造ってある。黒い鞘翅には朱色に塗られた大きな丸が二つあった。左右の羽にある赤い丸は少しだけ盛り上がって、表面は平らになっている。
ルビーローズの指示で紅月丸の鞘翅が開き始めた。上へと持ちあがりながら、横に広がり、羽全体が前に迫り出してゆく。
羽の裏側が見えた。裏も黒く染まっており、厚みのある赤い丸があった。ただし、平らではなかった。丸くても円盤ではなく、リング状になっている。
そのリングが動いた。うつむいていた顔を起こすようにして、下側が正面を向いた。リングの半分は鞘翅の上に顔を出し、残りの半分は鞘翅の下からのぞいている。
リングの中にはプロペラがあった。三枚羽根のプロペラだった。塗装はされておらず、黄銅色をしている。後ろでシャッターが開いて、細身のプロペラが青い空を背景に、にぶく輝いた。

鞘翅の赤い丸が平らになっていたのは、ルーバー型のシャッターでリングにふたをしていたからだ。プロペラを保護していたのだ。

「プロペラ始動！」

接近してくるアメンボをにらみながら、ルビーローズは続けて指示した。

シュラウド・リングの中でプロペラが回転を始めた。左右に広げた鞘翅はまるで翼のようで、プロペラが回転するとそのまま空を飛べそうな錯覚に陥（おちい）る。だが、湾曲（わんきょく）した鞘翅には、船体を持ち上げるほどの揚力は発生しない。

「後羽展開！」

鞘翅を開いたテントウムシは、折りたたんでいた後羽で空を飛ぶ。

紅月丸も折りたたんである後羽を伸ばした。アモルファス・ルビーでできた半透明の赤い羽だった。薄く透きとおって見えても、強度はある。鞘翅のように湾曲していないから、今度こそ空を飛ぶための翼に見える。

ところが、後羽は斜め下へと伸びて、水の中に沈め

られた。
プロペラが高速で回転し、紅月丸のスピードはぐんぐん上がってゆく。水中に沈められた羽が水面を切り裂く。
「……」
ルビーローズはもう指示を出さなかった。
制帽を手に取ると、足元に叩きつけるようにして乱暴に脱ぎ捨てた。正面に機関銃を向け、銃撃戦に備えた。周囲の監視は放棄している。
左右に開いた鞘翅が前に迫り出したものだから、ハッチのそばまで羽が来ていた。横に広がって視界をさえぎっている。もともと後ろが見えないのに、いまでは横まで見えにくくなった。視界が開けているのは真上と正面くらいなもの。
水面を切り裂く後羽が少しずつ上昇しても、ルビーローズのいるハッチからは確認できなかった。
操縦室でははっきりと見て取れた。
浮上しても紅月丸の船体は半分水没しているから、操縦室のある頭部は水面下にあった。窓の外は水中だった。

しかし、スピードが上がるにつれて、水位は下がっていった。硬くて透明なサファイアガラスの上のほうに、空が見えた。青色が水色を押し下げてゆく。窓を洗う波が落ちてゆく。

操縦桿を握る両手に、チャパティは全神経を集中させた。窓の外に水はもうない。太陽を反射して輝く水面がまぶしかった。水中から浮上した潜水艇は、今度は水面からも浮き上がろうとしている。あとは、船底のポッド推進器が離水するのを待つばかり。

眠たげなハナマキの目が、一瞬、パチリと開いた。

「紅月丸、翼走したです！」

仲間たちの耳にしっかり届くように、チャパティは声をふりしぼった。

紅月丸の船体は、後羽だけを水中に残して宙に浮かんでいた。水の上を飛ぶように走っている。

水中翼船だった。

鞘翅のプロペラ推進で前に進むと、水中の後羽が水を切る。わずかに反った後羽の形状に流れる水が押し下げられ、後羽は上へと持ちあがる。揚力の発生だ。

「おっしゃあ！」

翼走のひと言をひたすら待っていたシマオーガが吼(ほ)えた。
シフトレバーを力強く引く。台座を支えるアームからレバーは伸びている。
水密ゲートが左右に開いた。紅月丸は水の上を走っている。水密ゲートの向こうにあった鞘翅はもうない。鞘翅の向こうにあった水ももうない。船内に格納してある後部銃座を外に出すのに、障害となるものはなにもなかった。
「うはははぁーっ！」
下向きの椅子にハーネスでむりやり腰掛けていたマハラが、不敵に笑いながら顔をあげた。
傾いた状態でアームに溶接されていた台座は、外へと押し出されて水平になった。
「突撃！」
ハッチでルビーローズも叫んだ。
機関銃の引き金をしぼって、水滴の弾丸をばらまく。
真正面から接近してきたアメンボの編隊に、紅月丸が高速で突っ込んだ。
アメンボは蹴散らされた。

いや、巧(たく)みに回避したというべきか。長い脚で水面をすべるように走るアメンボは、衝突直前に弧(こ)を描いて障害物をよけた。顔を紅月丸に向けたまま横にすべるさまは、まるでフィギュアスケートでもしているかのようだった。

三匹のアメンボは、サイドに流れてバックを取った。巨大昆虫のモンスターといっても、アメンボは華奢(きゃしゃ)な体つきをしている。突撃してくる甲虫と激突したのでは不利だと判断したのだろう。背後に回っても、脚には自信がある。追いかけ、追いつき、襲えばいい。

だが、相手はただのテントウムシではなかった。

水中では潜水艇。水上では水中翼船。砲撃をし、雷撃をし、銃撃もする。

紅月丸は、鋼鉄のモンスターだった。

「喰らいやがれっ！」

後部銃座の重機関銃がうなりをあげた。

水の固まりを弾丸にして撃ち出す。口径なら機関銃の倍近くもある。威力も、射程も、ルビーローズの機関銃とは比べものにならない。

先頭のアメンボが真っ先に撃たれた。細長い体のア

メンボは、前から見れば顔と脚しかない。顔面を撃たれて一瞬のけぞり、水面に突っ伏した。
邪魔な仲間をひらりとかわして、二匹のアメンボは追いすがった。
「おらおらぁ！」
重機関銃を操るマハラは、かさにかかって攻め立てた。
銃とは思えないような、バカでかい兵器だった。本体の尾部がストンと切り落とされて、そこにグリップが取り付けてある。両手でしっかり、縦に握るグリップだ。トリガーはグリップの間にある。グリップを握りしめた両手の親指で、トリガーを押し下げて連射する。
弾丸は水だ。水上にいる限り、無限に補給できる。そのために水中翼には取水口を設けてある。昆虫の羽には、翅脈という血管のようなものが走っている。紅月丸の後羽にも翅脈はあった。アモルファス・ルビーでできた半透明の赤い羽に、血色の管が走っている。導水管だ。
どれだけ撃ちまくっても、弾切れの心配はいらなか

った。
水の弾丸が脚に当たった。追いすがる一匹が出足を払われてバランスを崩し、転倒した。勢いあまって水面を派手に転がる。アメンボがぶざまに水面を転がるとは、珍しい光景だった。
重機関銃の威力はすごかった。瞬く間に追っ手を撃ち減らした。
けれども、しょせんは水鉄砲。
最初の一匹が戦列に復帰した。次の一匹もすぐに戻ってきた。これで数は元通り。今度は横一列に並んで追ってくる。横隊陣形だ。三匹で連携しての追撃戦を仕掛けてきた。重機関銃で狙われた一匹が後退する。弾をかわそうと右に左に動いてスピードが落ち、撃たれて脚が止まる。その隙に、残る二匹が詰め寄る。うち一匹に狙いがしぼられても、最後の一匹が肉薄する。
「野郎！」
すぐそばまで迫ってきたアメンボをなんとか撃退すると、マハラは戦法を変えた。
狙い撃って追い払うことを断念し、弾幕を張って寄せつけないことに専念した。

「だめだ！　追い払えねえ！」
マハラは仲間たちに戦況を報告した。
「星彩洞に向かいますわ！」
「はいです！」
チャパティはルビーローズの指示に即応した。
水上でモンスターに追われても、振り切って無事に帰還できるよう、策なら事前に練ってある。
操縦桿が横に倒された。鞘翅のシュラウド・リングが向きを変える。紅月丸の船体が傾いて、航跡が急カーブを描いた。
「やい、お茶っ葉！　転覆させるんじゃねえぞ！」
「心配いらないです！」
船体が傾くと、水中翼は片方が沈み込み、もう片方は浮き上がる。沈み込んだ水中翼は揚力が大きくなって浮き上がろうとするし、浮き上がった水中翼は揚力が小さくなって沈もうとする。崩れたバランスは自然と元に戻るわけだ。
転覆させることなく、チャパティは紅月丸を走らせた。スピードは一切落とさずに、疾駆させた。
目指したのは湖岸だった。岸に近づくと、地形を見

て進路を修正した。砂浜を横目に通り過ぎる。岸が岩場になっても、打ち寄せる波は砕けたりしない。湖は今日も穏やかだ。水面は鏡のように風景を写し取っている。

その風景を切り裂いて、鋼鉄のモンスターが駆け抜ける。重機関銃が乱射され、撃たれたアメンボが水面を転がる。倒れてもすぐに起き上がり、水上最速のモンスターは獲物を追う。

湖は今日も危険に満ちていた。

「ばらけるんじゃねえ！」

アメンボの陣形が横一直線から曲線へと変化した。固まって的になるよりも、散開して半包囲したほうが得策だと判断したのか。それとも、単なる偶然か。いずれにせよ、左右両側の敵をマハラひとりで同時に迎撃するのは困難だった。

とりあえず、マハラは自分の右側にいるアメンボに攻撃を集中させ、撃退した。急いで向きを変えると、左側のアメンボは思いのほか前進しており、後部銃座の死角に入り込んでいた。

「いけねえ！　一匹、回り込みやがった！　右舷だ、

姐御！」
「！」
ルビーローズはすぐさま銃口を向けた。
横に広がった鞘翅の陰（かげ）から、アメンボが顔をのぞかせている。紅月丸と併走している。
銃撃すると、アメンボは鞘翅の陰に隠れた。ハッチからも後部銃座からも狙えない、完全な死角だった。
「チャッパ！」
「はいです！」
名前を呼ばれただけで、チャパティは操縦桿を左に倒した。
「マッハ！」
「おう！」
紅月丸と併走していたアメンボは、ほんの少し対応が遅れた。進路がずれて、死角の外に出た。その一瞬を逃さずに、マハラが重機関銃でぶっ飛ばした。
死角に入ったアメンボは排除したものの、事態はさらに悪化した。敵もバカではない。左右に分散すれば撃たれにくいことを学習した。獲物の脇に死角があることも見て知った。

残る二匹のうち、一匹が仲間をまねて右舷にすべり込んできた。もう一匹は反対側で同じことをしようと、左舷に回った。二匹が同時に両舷の死角を狙っている。たったいまぶっ飛ばしたばかりの一匹も、水上を駆け戻ってきた。今度は囮役（おとりやく）を買って出たのか、真後ろでマハラの注意を引きつけようとしている。

このままでは、討ち漏らした一匹がいずれ船体に取り付くだろう。そうなれば、後部銃座は格納することになる。重機関銃の弾幕がなくなる。三匹全部が船体に取り付いて、紅月丸はアメンボに捕獲（ほかく）される。

「やべえ！　挟（はさ）み撃ちにされちまわあ！」

「おいらに考えがあるです！　ジグザグに走るです！」

言う前にチャパティは操縦桿を倒していた。

右に倒し、左に倒し、ジグザグ航走をして、死角に入り込もうとするアメンボに対処した。

「けえっ」

マハラは歯を食いしばったまま吼（ほ）えて、活（かつ）を入れた。

ハーネスで体を固定しているから落水の心配はないが、後ろ向きで左右に小刻みに振られるのはきつかっ

た。おまけに、船体の向きが変わるたびに、マハラも重機関銃の向きを変えなければならない。
だが、もっときついのはハッチにいるルビーローズだった。
転落防止の安全帯はしていても、体は固定されていない。片手ではしごを握って、激しい揺れに無言で耐えていた。もう片方の手は機関銃を握りしめたままだ。いつでも撃てるように、武器は放さないでいる。
「姐さん、どうかしたですか！」
静かになったルビーローズの身を、操縦室のチャパティが案じた。
「心配なら無用ですわ！　そんなことより、星彩洞が見えましてよ！」
紅月丸は岬を越えた。
岬を越えると、景色が変わった。地面が岬の高さのまま、どこまでも続いている。湖岸が断崖（だんがい）になっている。砂浜なんか、どこにも見えやしない。
そして、切り立った崖には黒い穴がぽっかりとあいていた。
天然の洞窟。星彩洞。

水上で追われたときに、モンスターを振り切る策のひとつだ。

チャパティは迷わず、操縦桿を倒した。

「突入するです！」

紅月丸のヘッドライトが点灯した。

黒いテントウムシの鼻先が青く光っている。暗闇で輝くオーロラダイヤを利用した、オーロラライトだった。同じものは重機関銃と機関銃にも装備されている。

闇を照らすのに必要な明かりを灯(とも)して、紅月丸は星彩洞に突入した。

もちろん、洞窟の中は調べてある。湖底探査を始める前に、湖岸探査は終えている。木造の半潜水艇で湖を駆けずり回った。半潜水艇とは、完全には潜水できない船のことだ。潜水できなくても船体のほとんどは水没しており、目立たない。これを流木(りゅうぼく)に擬装(ぎそう)して探査艇とした。

湖岸の地形は様々だった。手を加えれば砂浜でさえ役に立つが、自然のままでモンスター対策に使える場所がいくつかあった。中でも星彩洞は、複数の効果を期待できる有望な場所だった。洞窟に逃げ込むだけで

モンスターは追撃を断念するかもしれないし、追ってきてもせまい場所は通れないかもしれない。通れたとしても、無事に出て行けるとは限らない。

モンスターに追われたときは、星彩洞を最大限に活用する。そう決めてから、紅月丸の設計に入った。つまり、船体の大きさは洞窟に合わせてある。紅月丸は余裕で洞窟内を走り抜けることが可能だ。

といっても、それはあくまでも机上（きじょう）の話。現実には、チャパティが操縦を誤れば壁に激突して紅月丸は大破する。一味の運命は、操縦桿を握るハナマキに委（ゆだ）ねられたわけだ。

ところが、このハナマキ。意外に操縦が乱暴だったりする。おとなしい性格のくせに操縦桿を握ると別人になるのか、強気に操作して紅月丸を水中で転覆させている。

「むっふぅ！」

長い鼻から荒々しく息を吐いて、チャパティは水中翼船を操った。

洞窟がわずかにカーブしている。ゆるやかなコーナーでも、紅月丸は高速だ。気を抜けない。それに周囲

は闇に呑まれてゆく。洞窟の入り口から差し込む光が失われてゆく。

「とっとと、あきらめやがれ！」

マハラは手を休めなかった。

アメンボは三匹とも、紅月丸を追って洞窟に進入してきた。それならそれで、かまいはしない。そこそこ広い洞窟ではあったが、障害物のないところで半包囲されるよりも、ずっと守りやすい。おまけに的をしぼる必要もなくなった。洞窟の中に日は差さない。あたりはもう真っ暗だ。当然、アメンボは光を追うことになる。オーロラライトを点けた重機関銃を目指すことになる。

「ついてくるんじゃねえ！」

ただぶっ放すだけで、弾は当たってくれた。

三匹のアメンボがもつれあうように転倒した。長い脚がからまったのか、なかなか起き上がれないでいる。ふと、マハラは攻撃の手をゆるめてみた。重機関銃で叩くのをやめたら引き返してくれるような、そんな気がした。

追っ手が止まっても、紅月丸は走り続けた。カーブ

の向こうへと、アメンボの姿が消えた。逆コーナーに入った。今度は反対側に曲がる。これで完全にアメンボを引き離したことになる。明かりがなくては、前には進めまい。

「もう追いかけてくるんじゃねえぞ。この先は、墓場だからよ」

暗い洞窟に置き去りにしたアメンボに、マハラはそっと声をかけた。

「追っ手はまいたですか？」

「おうよ。だからおめえも、安全運転しな」

マハラは重機関銃から右手を放した。手のひらがじっとりと汗ばんでいる。手ぬぐいなどはないから、太ももにこすりつけて汗をぬぐった。左手一本で支えられた重機関銃はよそを向いている。オーロラライトの光がそれている。

「？」

マハラは気づいた。遠くの水面を照らしているときはわからなかったが、偶然、近くの水面を照らして、初めて気づいた。

水面が明るい。水中も明るい。透過光（とうかこう）だ。暗い洞窟

の中で、水だけが光を帯びている。
マハラの視線が、近くから遠くへと移動した。水の中を光が流れている。後ろへと延びている。
「……バカ野郎！」
ほのかに光る水の上を、黒い影が走っていた。
「ついてくんなっ！」
再び、重機関銃の乱射が始まった。
「マッハ！」
ルビーローズは伝声管に口を寄せて叫んだ。後部銃座で熱くなっているマハラに声をかけた。
「星の墓場ですわ！」
紅月丸は星空の下に飛び出した。
洞窟から出たのではなかった。確かに空間は急に広くなった。見上げれば、星々の光がオレンジ色に輝いている。だが、ついさっきまでは明るい湖にいたのだ。湖岸の洞窟に突入したからといって、昼が夜に変わるわけはない。
空で輝くものは、星ではなかった。
ここは洞窟だ。そもそも空など、見えはしない。
天井で輝くものはグローワームだった。生物発光を

する昆虫である。
それが群れていた。天井一面に巣くっていた。闇の洞窟に光る虫がいる。だから星空に見えた。固まっているところは星雲に思えた。見とれるほどに、美しい光景だった。
星の光の洞窟。星彩洞。
きれいな夜空に見えても、天井は地獄だった。
ルビーローズは銃口を上に向けた。機関銃に取り付けられているオーロラライトが、星空の真実を暴(あば)いた。
生白いイモムシの群れが天井で蠢(うごめ)いていた。コウエン・タテハチョウの幼虫だった。頭のすぐ後ろ、首に思えるあたりが光っている。自ら発光して闇を照らしている。透明でねばつく糸を口から出している。垂らされた糸は所々で太くなって、玉になっている。よく見れば、玉はお椀(わん)の形をしていた。お椀の中には、尻から出した蜜が注がれていた。
カクテル・シャンデリアだ。
天井から垂れ下がる無数のシャンデリアは壮観(そうかん)だった。
ただし、ねばつく糸でできている。甘い香りにだま

されて、ごちそうにありつこうとすれば、死ぬ。
墓場では、沈黙のパーティが開かれていた。
シャンデリアに貼り付いたモンスターたちの死骸が、痛々しかった。蛾と思われる死骸がある。羽だけをシャンデリアに残している。スズメバチも死んでいる。空を飛び、地を駆け、土に潜る三界（さんがい）の王者が、生首となってシャンデリアを飾っている。
コウエン・タテハチョウの幼虫は肉食だった。蝶の幼虫にしては珍しいことだが、日は差さず、草も生えない洞窟の中に食べるものはない。蜘蛛（くも）のように罠を張り、蜜の匂いで獲物をおびき寄せ、暗闇に光る体で惑（まど）わせて、捕食するように進化したのだろう。
「マッハ」
ルビーローズはマハラにうながした。残酷なようでも、やるしかなかった。倒さねば、倒される。アメンボの餌になるわけにはいかない。そのための星彩洞だった。
そのための、爆雷だった。
「……」
マハラは返事をしなかった。

「わたくしがそちらに参りますわ」
ルビーローズは足場をめくった。ハッチから降りて後部銃座に行き、マハラの代わりに爆雷を投下するつもりだった。
「その必要はねえぜ、姐御」
マハラの声が重い。
「俺様に……任せなぁ！」
迷いを振り切るかのように、思い切りよく、マハラはペダルを蹴った。
マニピュレーターが伸びた。三本指の機械の手が、つかんでいた爆雷を投げ捨てた。
ゼンマイ仕掛けの時限信管が作動した。爆雷は水面に落ちた。
紅月丸は走り去り、アメンボの編隊が追いすがった。沈んだ爆雷の上を駆け抜けようとした。
水中で花火が弾けた。いま投下したばかりの爆雷が、仕込んであった三発の遅延発動型バーストを同時に爆発させた。
水柱が上がった。
白い柱が一匹のアメンボを突き上げた。

アメンボは宙を舞った。水を掻こうにも、空中に水面はない。あわてて羽ばたいた。
空は高かった。星が見えている。アメンボは上昇した。
墓場への飛翔だった。
「……だから言ったじゃねえか」
マハラは重機関銃のライトで、揺れるシャンデリアを照らした。
星の墓場にデコレーションが増えていた。
三匹のアメンボは二匹になった。しかし、消えた仲間のことは気にも留めず、追撃をやめようとはしなかった。
「しゃあねえ。悪く思うな――」
もうひとつの爆雷も投下しようとして、マハラは動きを止めた。
「ん？」
追っ手の足並みが乱れた。スピードが落ちた。
爆雷の起爆時間はセット済みだから、投下するにもタイミングがある。ペダルを蹴ろうとして、すんでのところでマハラは思いとどまった。

星の墓場に明かりが灯った。
ぽつぽつと篝火(かがりび)が焚(た)かれた。明かりが明かりを呼んで、炎の輪が広がってゆく。
焚かれた篝火は宙を舞い始めた。オレンジ色に燃える火の玉が暗闇を飛ぶと、まるで人魂のようだった。
火の玉は明滅(めいめつ)した。明るくなって、暗くなって、また明るくなった。
そこら中で炎が舞っている。星の墓場で人魂が踊り狂っている。
正体は、コウエン・タテハチョウの成虫だった。
羽を閉じて立てた状態で止まる蝶を立羽蝶(たてはちょう)という。羽の表はぴたりと合わされて、裏だけが見えた状態でじっとしている。閉じた羽を広げて、初めて表が見える。
コウエン・タテハチョウが洞窟の壁に止まっていても、闇に溶けて姿は見えない。だが、羽さえ広げたならば、その存在はたちどころにわかる。なぜなら、コウエン・タテハチョウの羽は燃えているからだ。
もちろん、本当に燃えているのではない。幼虫と同じで、生物発光をしている。しかも、ただ光るだけで

はなかった。ただの光なら、羽が生み出す左右の光線が交わったからといって、炎が生まれたりはしない。

蝶の羽は「鱗粉（りんぷん）」で覆われているが、コウエン・タテハチョウの羽は「燐粉（りんぷん）」で覆われていた。うろこの粉ではなくて、リンの粉だ。炎となって燃えているのは、リンだった。

リンが燃えて、燐火（りんか）となる。燐火とは鬼火（おにび）のこと。

光る羽で鬼火を生み出すから、光炎立羽蝶（こうえんたてはちょう）と命名されたのだった。

闇の中を蝶が舞う。

光る羽を開くと鬼火が燃える。開いた羽はすぐに閉じられて、鬼火は消える。けれどもまた羽を開いて、冷たい炎が燃え盛る。

アメンボは、暗闇に乱舞する鬼火にひるんだのだった。

「奴ら、びびってやがる！」

「このまま脱出しますわ！」

「はいです！」

追っ手が鬼火にたじろぐのも、作戦のうち。

紅月丸は星彩洞の出口を目指した。星の墓場を突っ

切った。
真上を、真横を、燃える蝶が通り過ぎてゆく。
光炎立羽蝶はモンスターだった。近くに寄れば体も大きく、鬼火も巨大で恐ろしかった。
それなのに、ルビーローズ一味は燃える蝶を撃ち払おうとしなかった。
光炎立羽蝶も鋼鉄のモンスターを攻撃しなかった。むしろ、よけた。
モンスターには、危険なものと、安全なものがいる。リヴリーをひと目見ただけで襲いかかってくるのもいれば、逆に逃げ出すのだっている。
巨大昆虫のすべてがモンスターなのか、それとも、リヴリーを襲う巨大昆虫だけがモンスターなのか。明確な定義はなかった。
ただ、経験的にわかっていることはある。
モンスターはモンスターを襲わない。なにやら連帯感でもあるらしく、モンスター同士が争っているところを見た者はいない。ジョロウグモとスズメバチは戦わない。
にもかかわらず、光炎立羽蝶の幼虫はモンスターの

スズメバチを捕食した。
つまり、安全なモンスターと危険なモンスターの間に、連帯感のようなものはなかった。リヴリーを襲わない安全なモンスターは、ただの巨大昆虫だった。光炎立羽蝶の幼虫は肉食だからスズメバチを喰らったが、本来、安全なモンスターは危険なモンスターに狩られる存在なのだ。餌として。
だからゲンゴロウは、水中に沈んでいるテントウムシにつきまとった。
だからアメンボは、水面に落ちたテントウムシに襲いかかった。
モンスターは危険な生き物だ。
とはいえ、なにも敵ばかりとは限らない。
光炎立羽蝶は洞窟に迷い込んだテントウムシに興味を示さなかった。
紅月丸は星の墓場を後にした。

第四章　ハンマー・アクセル

一

水路はせまくて浅かった。

星彩洞は大きく三つに分かれる。星の墓場と、それにつながる二本の洞窟水路だ。

入ってくるのに利用した水路は、幅が広くて突入しやすかった。水深もある。潜水したままでも通れるほどだ。その代わり、追っ手にとっても入りやすかった。事実、アメンボの追撃を阻(はば)めなかった。追ってきたのがゲンゴロウだったとしても、水深があるからやはり追撃を許しただろう。

それに対し、出て行くのに利用する水路はせまくて浅かった。洞窟に合わせて設計された紅月丸でさえ、潜水したまま通り抜けることはできなかった。一番浅いところでは、ほとんど浮上した状態になる。おまけにせまいのだから、水面を慎重に航行するのが一番だ。

しかし、成り行きで水中翼船のまま進入した。追われているのだから、羽はたためない。せっかくのスピードを殺すわけにはいかない。

チャパティは両目を見開いて、前方を注視した。せまい洞窟の壁に紅月丸が激突するかどうかは、操縦桿を握ったその手にかかっている。

ルビーローズは前だけでなく、左右にも目を配った。操縦室にいるチャパティとちがって、ハッチにいるルビーローズは、広げた鞘翅を肉眼で確認できる。

その鞘翅から火花が飛んだ。小さな火花だった。虫でも鳴いたような、するどい音も一瞬聞こえた。音だけなら、かすめたと思えなくもない。でもそれなら、火花は飛ばない。

火花が飛んだということは、接触したということ。鞘翅の先端が、ほんのわずかに、壁に触れた。鉄のツタをキルリアン精錬（せいれん）したマハラ特製の鋼板が、岩とこすれて火花を飛ばしたのだ。

「……」

ルビーローズは伝声管に向かって口を開いた。

だが、なにも言わずに口を閉じた。注意しなくても、

チャパティは充分わかっている。よけいなプレッシャーを与えるべきではなかった。
口を出すのなら、緊張をほぐすような話題が望ましい。
「マッハ。追っ手はどうかしら？」
ルビーローズは後部銃座に状況を問い合わせた。
熱くなっていたマハラが静かだ。重機関銃を乱射している気配はない。それはつまり、追っ手がいないことを物語っていた。
「影も見えやしねえ。奴らぁ、あのまま墓場をうろついてやがるぜ」
アメンボの姿はどこにもなかった。
鬼火にひるんで紅月丸を見失い、星の墓場に取り残されたのだった。
「少し、速度を落とすですか？」
「そうね」
正しい判断を下したチャパティに、ルビーローズはやさしく答えた。
チャパティはスロットルレバーに手をかけた。左右の鞘翅にあるプロペラは、二本のレバーで出力を制御

する。両方のレバーを左手でいっしょに握って、チャパティはゆっくりと起こした。奥まで完全に倒してあったレバーが頭を上げた。

紅月丸のスピードが落ちた。

後羽の水中翼がわずかに沈む。スピードが落ちた分、船体を持ちあげる揚力も小さくなった。

「追っ手はいねえんだしよ。翼走、やめちまったらどうでえ？」

「すぐに出口です。このまま行くです」

「まあ、任せらぁ」

チャパティが我を張るので、マハラは引いた。

操縦桿を握っているのはチャパティだ。任せるしかなかった。それに、決めるのは艇長であるルビーローズだ。

ルビーローズはなにも言わなかった。

チャパティが自分から減速するように誘導しただけで、あとは口をつぐんでいる。

せまい洞窟水路を、紅月丸は順調に進んだ。

進むにつれて、水路の底が上昇してきた。浅い水深がさらに浅くなってゆく。ヘッドライトが水底の岩を

照らしている。
実は、出口に続く直線部分が一番浅いのだった。浅いといっても、無事に通れるだけの水深はあるから心配はいらない。
最後のコーナーを曲がって、紅月丸は直線に出た。
出口がまぶしく光っている。
あとはまっすぐに走らせて、湖に出るだけ。追っ手のアメンボはまいたから、問題はなにもない。
チャパティはほっとひと安心した。
だが、そこに落とし穴があった。
いや。穴ではない。網だった。
「まずいです！」
チャパティは操縦桿を引いた。
鞘翅のシュラウド・リングがくるりと反転した。左右のリングがそれぞれ内側を向いて、外側に風を吹き出しながらの反転だった。
後ろを向いたプロペラが、猛烈な勢いで空気を前に送り出した。
紅月丸が急減速しても、ルビーローズは動じなかった。ハッチのある縦穴通路を蹴りつけて、前のめりに

なろうとする体をむりやり起こした。両手は機関銃をしっかり握って正面に向けている。
チャパティとほぼ同時に、ルビーローズもそれを視認したのだった。
洞窟水路に網が張られていた。
赤と黒の縞模様をしたモンスターが、網の中央で獲物を待ち構えている。
「なにごとでえ！」
後部銃座のマハラには事情がわからない。
「ジョロウグモですわ！」
「洞窟をふさいでいるです！」
「マジかよ、おいっ！」
洞窟水路に網を張ったジョロウグモは、光炎立羽蝶を狙ったようだ。頭を下にして、網のこちら側にいる。獲物が洞窟から出るところを捕らえようと、蜘蛛の巣を仕掛けたらしい。
その巣に、紅月丸は突っ込もうとしていた。蜘蛛の巣はただでさえ見えにくいのに、出口の光がまぶしくてジョロウグモの巨体まで見えにくく、気づくのが遅れたのだった。

「突き破っちまえ！」
マハラらしい解決策だった。強行突破で蜘蛛の巣を突き破る。単純明快だ。
「だめです！　蜘蛛の糸はあれでけっこう丈夫なんです！　突っ込んだらバランスを崩して、壁に激突するです！」
チャパティは手を動かし続けた。
減速すれば揚力を失い、水中翼船は着水する。着水すると、水の抵抗でさらにスピードは落ちる。船底のポッド推進器も使えるようになる。そうなれば、六つのスクリューでフル・アスターンできる。後進全速だ。
一秒でも速く着水させようと、チャパティは後羽をたたんだ。
「やべえっ」
マハラはシフトレバーを操作した。
紅月丸は水密ゲートを全開にしている。ゲートを開いて後部銃座を外に押し出している。船体が着水すれば、水の抵抗でスピードが落ちるどころか、浸水して沈没する。
あわてて後部銃座を船内に格納し、マハラは水密ゲ

ートを固く閉ざした。
ルビーローズはかがんでいた。縦穴通路に身を潜め、ハッチから顔だけをのぞかせて、機関銃で狙いをつけている。
ジョロウグモが天井や壁を走って紅月丸に飛びかかってくることを警戒したのだった。
「姐さん！　目がいるです！」
着水した紅月丸は見る見る沈んでゆく。構造上、船体の半分は水没する。操縦室は水面より下になって、蜘蛛の巣は見えなくなる。
ルビーローズが目で見て、口で知らせるしかなかった。
「だいじょうぶ！　止まりますわ！」
着水すると一気にスピードが落ちた。幅のある船体が、水を押しのけようとして押し負けている。二枚のプロペラと六枚のスクリューも、フル回転で制動をかけている。
ルビーローズの声は落ち着いていた。
「それごらん」
チャパティの必死の操縦が功を奏し、蜘蛛の巣への

突入はすんでのところで回避された。
すぐそばまで寄ってきた獲物にジョロウグモが前脚を伸ばそうとする。しかし、プロペラの風に激しく煽(あお)られて、伸ばすに伸ばせないでいる。
「後進最微速」
ルビーローズの注意は後ろに移った。
急減速した勢いのまま後進すると、まずまちがいなく壁にぶつかる。後ろに目はない。テントウムシの背中が盛り上がっているのでハッチからは死角になるし、後部銃座は船内だ。
「了解したです」
チャパティは紅月丸をゆっくりと下がらせた。
獲物を捕らえ損(そこ)ねたジョロウグモは、脚を伸び縮みさせてくやしそうに巣を揺すっている。それとも、プロペラが吹きつけてくる風に憤慨(ふんがい)しているのだろうか。どちらにせよ、巣から離れて襲ってくる気配はなかった。
「どうなんでえ？」
マハラが後部銃座から戻ってきた。
自分の席には座らずに、チャパティの座席に手を置

いて、窓をのぞき込んだ。しかし、なにも見えない。窓の外は水中だ。水と岩しかない。
「リフトしようや、姐御。どうなってるか、この目で見ねえと対策も練れやしねえ」
「そうね。そうしましょう」
「エアリフトするです」
チャパティはスロットルレバーを最後まで引いた。これで出力はゼロになる。すでに回転数の落ちていたプロペラはすぐに止まった。
レバーから手を放したチャパティはトグルスイッチを指で弾いた。続けてもうひとつ。パチリパチリと音がして、銀色に輝くピンが後ろに倒れた。
トグルスイッチはシュラウド・リングの作動モードを切り替えるスイッチだった。プロペラの出力を制御するスロットルレバーの手前に、二本のピンが並んでいる。二本あるのは、左右のリングに個別に対応しているからだ。
ピンを手前に倒すとオフになった。ルーバー型のシャッターが閉じてプロペラを保護し、シュラウド・リングは下向きになる。つまり、鞘翅に収納されるわけ

だ。
ピンを直立させるとオンになった。シュラウド・リングは顔を上げて正面を向き、シャッターが開く。そして操縦桿と連動するようになる。
ピンを奥に倒すと、特殊モードのエアリフトだ。シュラウド・リングは上を向いて、まるでヘリコプターのメインローターのようになる。
チャパティはスロットルレバーをめいっぱい押し上げた。プロペラが勢いよく回転する。空気を吸い込んで下に吐き出す。
二枚のプロペラが上向きの揚力を生み出した。紅月丸の船体はゆっくりと上昇を始めた。
このまま宙に浮かんでしまえば本当にヘリコプターとなるのだが、残念ながら、そこまでの性能はなかった。それにヘリとちがってバランスが悪い。鞘翅は開きながら前へと迫り出している。テントウムシの胸部を横に広がっている。船体中央よりも前にプロペラがある。
紅月丸の船体は斜めになった。胸部が引っ張り上げられて、腹部は沈んだ。

それで充分だった。沈んでいたテントウムシの頭部が完全に浮かび上がった。操縦室の窓から水上の景色が見えた。

「スクリュー停止」

ハッチを閉めたルビーローズがはしごをすべり降りてきた。

「了解したです」

艇長の指示にチャパティが従った。

「なんて野郎でえ。水面ぎりぎりにまで網を張ってやがる」

洞窟をふさいだ蜘蛛の巣を、マハラは自分の目で確認した。出口がまぶしいので、手をかざして見ている。

「あれじゃあ、潜ってもくぐれっこねえな」

「そうですわね。ここは浅いから、どうしても紅月丸の背中が蜘蛛の巣に引っかかってしまいますわ」

ルビーローズはマハラの席に腰を下ろした。艇長席に戻ろうにも、窓をのぞき込んでいるシマオーガが邪魔だ。

「よりによって一番浅いところに、あんなもん張りやがって」

「水深は関係ないと思うです」
「ああん？」
「出口からちょっと入ったところに巣を作っただけです。たまたま水深が浅かったです。ジョロウグモは水の中に入らないから、浅いとか深いとか、全然気にしないです」
「そうかもしんねえけどよ。俺様は気にするっての」
マハラは思い出したように、頭に手をやった。
後部銃座を格納して急いで戻ってきたので、制帽を忘れている。大事な帽子は通路の壁に掛かったままだ。
「で、どうするよ？」
制帽は後回しにして、マハラは聞いた。
「突き破るのは無理なんだろ？」
「左右のバランスが崩れないなら、蜘蛛の巣に突っ込んでもいいです。その代わり、鞘翅の片方が巣を破れなくて引っかかったりしたら、進路が曲がって洞窟の壁に激突するです」
「だったら、ゆっくり行ったらどうでえ？　潜ってもくぐれっこねえけどよ。どうせ網に引っかかるのは背中の一部じゃねえか。糸がひっついたって、引きちぎ

りゃいい」
「スクリューではちぎれないと思うです。プロペラを使うと、鞘翅にもくっつくです」
「それに、ジョロウグモもだまって見ていないでしょうね」
ルビーローズは仲間たちの背中に声をかけた。
「姐さんの言うとおりです。最悪、紅月丸は宙吊りにされるです」
「なら、方法はひとつじゃねえか。野郎をぶっ飛ばすんでい！　なあ、姐御？」
マハラは顔を横に向けると、後ろのルビーローズに同意を求めた。
「もっと安全な方法があるです」
「あるかぁ？」
「あるです。引き返すです」
「……ああん？　引き返すって、なに言ってんだ、おめえ」
マハラの目がいつもよりぎょろついている。
「後ろにゃ、アメンボの野郎が二匹もいやがるんだぜ？　せっかくまいたってのに、戻ってどうするよ。

ジョロウグモは一匹じゃねえか。こっちをぶっ飛ばして、前に進んだほうが得策ってもんだ」
「マッハの言うとおりです。後ろにいるのはアメンボなんです」
「？」
　マハラは首をかしげた。
「なので、潜水するです」
「ああ！　そういうことですのね」
　ルビーローズは一瞬で理解した。
「おいらたちが浮上したのは、ゲンゴロウから逃げるためです。アメンボに見つかって潜水しなかったのは、水中にゲンゴロウがいたからです。でも、ゲンゴロウはあれっきり姿を見ないです。まいたと思うです。それなら潜水して引き返せばいいです。潜れば、アメンボなんてへっちゃらです」
「なるほどな。そんな手がありやがったか。やい、お茶っ葉。やっぱ、おめえは冴えてるぜ！」
　全部説明してもらってようやく理解できたマハラは、豪快に笑いながらハナマキの肩を叩いた。
「そうと決まりゃあ、さっさと片付けようぜ」

マハラは操縦室から制御室へと移った。
「姐御ぉ……。なに、のんびり座ってるんでい。そこは俺様の席だっての」
「はいはい」
ルビーローズはマハラに席を明け渡した。
洞窟内のせまい水路でも、紅月丸は回頭するのに不自由しなかった。
スクリューを回すためのモーターは、ポッドに納めて船外に出してある。ポッドの向きを変えるだけで三六〇度、どの方向にも進める。その場でくるりとターンもできる。
鞘翅を閉じて向きを変えると、紅月丸はいま来た道を引き返した。
水深に合わせて少しずつ潜水する。やがて、船体は完全に水没した。
帰路（きろ）は往路（おうろ）よりも時間がかかった。潜水艇と水中翼船ではスピードがちがう。それでも、戻れば二匹のモンスターがいるとわかっているので、緊張の糸は切れなかった。もしかすると、途中ですれちがうかもしれない。

「これが最後のカーブでえ」
マハラはナビゲーターを務めていた。制御室で水路図を広げている。
「曲がったら星の墓場だぜ」
「ライト、しぼるですか？」
チャパティは前を向いたまま、隣に座るルビーローズに確認した。
紅月丸のヘッドライトは正面を明るく照らしている。いまは洞窟の岩壁にさえぎられているが、星の墓場に入れば遠くまでライトは届く。水中が光ると水面でもそれとわかるから、紅月丸の存在がばれてしまう。
「その必要はありませんわ。目立たないようにすることも大事ですけれど、しっかり見ることだって大事ですもの」
「なんたって地底湖だからな、ここは」
マハラは水路図を指で叩いた。
星の墓場は地底にある湖だった。天井は高く、底は深い。広さもかなりのものだ。水位は湖と変わらないが、地上は遠かった。岬から続く断崖の下に星彩洞はある。厚い岩盤に埋もれているわけだ。地上が遠い分、

闇も濃くなる。
「明かりがねえと、出口もわかりゃしねえ」
「だったら出口を確認してから、しぼるです」
「そうね。出るときは目立たないようにしましょう」
紅月丸はヘッドライトを明々(あかあか)と灯したまま、最後のカーブに入った。
ルビーローズもチャパティもまっすぐ前を見ている。警戒は怠(おこた)らない。
確かに水中は安全かもしれない。アメンボは水面にいる。光炎立羽蝶なら出くわしても襲ってこないし、肉食の幼虫は天井にへばりついている。ほかの水棲モンスターがいないことは過去の探査で確認済みだ。迷い込んでも水中に餌などないし、飛び立てば星の墓場の仲間入り。
しかし、絶対に安全とは言い切れない。もうだいじょうぶと気を抜いたところに、ジョロウグモが待ち構えていた。何度も通った洞窟水路なのに、今日に限って、蜘蛛の巣に行く手をさえぎられた。おかげで引き返す羽目になった。
水中を進めば安全だと判断したものの、予想外の事

態に遭遇(そうぐう)したあとだけあって、ルビーローズ一味に気のゆるみはなかった。だが、一味はひとつだけ見落としていた。前にばかり注意を払って、後ろのことは念頭になかった。蜘蛛の巣があるから、かえって安心だと勘違いしたのかもしれない。

出口をふさいでいたジョロウグモは、巣を放棄した。あと一歩のところで獲物に逃げられて、見限った。

ヘッドライトを灯して水中を進む紅月丸を、八つの目が見つめている。洞窟の天井を八本の脚が這(は)っている。

ジョロウグモは紅月丸の真上にいた。

「戻ってきたです」

行く手に星の墓場が見えた。篝火(かがりび)が水中まで届いている。光炎立羽蝶が燃える羽で乱舞しているのだ。

「まだ鬼火が燃えていますのね」

「アメンボは捕食者です。侵入されたらほっとけないです。それに、なんとか飛ばせたら幼虫の餌にできるです」

「ついてこなけりゃ、いまごろは明るい湖で散歩してられたってのによ。バカな野郎どもでえ。だいたいよ

お――」
マハラの話の途中で、なにかが横切った。
地底湖を悠然（ゆうぜん）と泳ぐなにかが、洞窟水路の前を通り過ぎていった。
「！」
目撃したルビーローズとチャパティの体が硬直した。
相手はほんの一瞬で通過した。体の一部しか見えなかった。しかし、その一部を、紅月丸のヘッドライトはしっかりと照らしてくれたのだった。
角のように前を向いて突き出した、太い脚。
タガメだった。
「――鋼鉄のモンスター取っ捕まえて、どうやって食うつもりなんだか」
制御室のマハラはなにも気づかずに、壁に向かって話し続けている。
「ライトを消して！」
「消すです！」
「ああん？」
マハラはひとりでのんびりしている。
「モンスターですわ！」

「です！」
「おいおい、いるのはわかってたろ？」
腹立たしいくらいに鈍感だった。
「んもう！」
ルビーローズは斜め後ろの席に向かって、制帽を投げつけた。
「……なんでえ？　モンスターだろ？」
「です！」
チャパティはターバンを投げなかった。投げても、やわらかすぎて効果がない。
「……マジかよ！　モンスターかよ！」
ようやく事態を飲み込めたマハラだった。
「ゲンゴロウの野郎、ここまで追ってきやがったか！」
「じゃないです」
「ゲンゴロウじゃありませんわ。あの前脚はタガメですわね。チャッパ、スクリュー停止よ」
「はいです」
「ゲンゴロウじゃねえのかよ？　なんで、タガメなんかがいやがるんでい」

「存じませんわ。湖でわたくしたちを見かけて、追ってきたのかしらね？」
「それか、最初からここにいたかもです。迷い込んだです」
「じゃあ、なにか？　さっきはタガメがいるのを知らねえで、真上を走り抜けたってえのか？」
「ありうるです」
「げえ……」
「どうやら、考えを改めたほうがよさそうね」
「なにがでえ？」
「おいらもそう思うです。いままでは運がよかったです。たまたま安全だっただけで、星彩洞はおいらたちが考えていた以上に、危険なところだったです」
「げえ……」
「敵を誘い込んだつもりでしたのに、退路を断たれるなんて」
「自分で自分の首を絞めたです。浮上しても、翼走する前にアメンボに捕まるです。浮上しなかったら、タガメにやられるです」
「げえ……」

「それにしても、いまのタガメ。妙(みょう)でしたわ」
「なにがでえ？」
「姐さんも見たですか？　おいら、見まちがいかと思ったです」
「だから、なにが妙なんでえ？」
「前脚に手っ甲のようなものをつけていましたわ。ベルトで止めていましたもの」
「げえ……」
「鉤爪(かぎづめ)のついた手っ甲です。たぶん、金属製だと思うです。ライトを反射して光ったです」
「げえ……って、おい！　ふたりして、なに言ってやがんでえ！」
　マハラは信じなかった。
「鎧(よろい)を着込んだ武者(むしゃ)タガメかよ。笑わせらあ。お茶っ葉はともかく、姐御まで幻を見るなんて、どうかしてるぜ」
「あ！　いたです！」
　チャパティが窓の外を指さした。
　遠くをタガメが泳いでいた。ヘッドライトを消しても、鬼火の薄明かりでシルエットが見える。離れてい

るから今度は全身が目に入ったが、遠くて暗く、武装は判別できなかった。だが、タガメが体を傾けて、別のものが見えた。
　頭部がチカリと光った。反射光ではなかった。鬼火よりも強い光だ。そして光ったままでいる。目の錯覚ではない。明らかに人工と思われる光が、タガメの頭部で点灯している。
「……あれだよ、あれっ」
　マハラは思わず席を立った。
「前に言ったじゃねえか！」
　両手を艇長席と操縦席にかけて、マハラはルビーローズとチャパティの間に割り込んだ。
「湖岸探査してたときによ。湖の底のほうを、なんか光るもんが泳いでったって、前に言ったじゃねえか。誰も信じちゃくれなかったけどよぉ」
「そういえば……」
「聞いたです」
「あれだよ、あれ！　あの野郎でい！」
　マハラが指をさした。
　突き出したその手には、さっき投げつけられたルビ

ーローズの制帽が握られている。
「光る湖の秘密に、少しは近づけたかしら」
ルビーローズは制帽を奪い返した。
水上の鬼火が陰って、謎のタガメは暗い水中に姿を消した。
「真相はまだまだ遠いです」
「残念ね」
「なあに。野郎を取っ捕まえちまえば、こっちのもんよ」
マハラだけは威勢がよかった。
「……」
ルビーローズは無言だ。
「んもう、です」
チャパティはルビーローズの口まねをして、ターバンを投げた。マハラは真横にいるから、多少の効果はある。
「なにしやがんでえ」
「おバカさんね。あのタガメをいま捕まえる余裕はなくってよ」
「おバカさんです」

「んだとぉ」
マハラはチャパティにだけ、拳骨(げんこつ)を落としてやり返した。
「魚雷はもうありませんわ。デコイ・シロップも。爆雷だって、あと一個でしょう？　ハイドロハンマーはゲンゴロウにさえ見切られてしまいましたわ。武装した怪しいタガメを相手に、打つ手はなくってよ」
「あと、バッテリーも残り半分切ったです」
「じゃあ、どうするよ？」
マハラはターバンをチャパティに返してやった。
「打つ手がねえんなら、ここから出れねえじゃねえか。上にはアメンボ、下にはタガメ。あわせて三匹だぜ？　出口はふたつしかねえのに、戻ったってジョロウグモが……」
そこまで言って、マハラは答えに気づいた。
「ここを出る方法はひとつですわ」
「おいらもそう思うです」
「俺様もそう思うです」
マハラはチャパティをまねた。
「なんでえ。結局、野郎をぶっ飛ばすんじゃねえか」

愚痴をこぼしながら、マハラは自分の席に戻っていった。
「そうと決まったら急ぐです」
「見つかる前に引き返しましょう」
「やっぱ、俺様は冴えてるぜ」
誰もほめてくれないので、マハラは自分でほめた。
タガメの出現でやむをえないとはいえ、堂々巡りの末に、ジョロウグモを叩いて押し通るマハラの案が採用されたのだった。
紅月丸は回頭した。
そしてまた、いま来た道を引き返した。
照明がないと前には進めないから、ヘッドライトはしぼって点灯している。
わずかな明かりを見逃さずに、ジョロウグモは尾行を続けた。

2

「ふう……」
マハラが大きな溜息をついた。

行って、戻って、また戻る。同じことの繰り返しに、徒労感も深い。
「マッハ」
ルビーローズが注意した。
「心配いらねえ。ちゃんと監視してるって」
マハラは潜望鏡をのぞいていた。
ハイドロハンマーの砲塔に潜望鏡の先端部がある。都合のいいことに後ろ向きだ。船体に半ば格納された砲塔だったが、潜望鏡だけならそのままでも使用できる。
船底にある水中大砲の潜望鏡で、マハラは後方の水中を監視しているのだった。
「暗くて目が疲れただけでい」
「後ろにもヘッドライトがいりますわね」
後方を照らすためのライトは、紅月丸にはなかった。マハラはヘッドライトの光を頼りに、後ろを見ていた。そのヘッドライトは明るく前を照らしている。水深は浅く、水底の岩がよく見える。
「そろそろ出口ね」
ルビーローズは水路図をたたんだ。

「浮上しましょう。このまま進みながらでいいわ」
「上で待機するですか？」
席を立ったルビーローズに、チャパティは声をかけた。
「そうよ。蜘蛛の巣が見える前に、攻撃準備を整えておきますの」
「姐御ぉ。その役目、代わってくれよう」
暗い水中を見つめる仕事に疲れ果てたのか、マハラは情けない声を出した。
「だめだめ。あなたはしっかり見張ってなさい」
マハラの後ろをルビーローズは通り過ぎた。
「ちぇ」
「俺様がぶっ飛ばしてやるぜ」
ルビーローズはマハラの口まねでからかって、はしごに手をかけた。
「それはわたくしのセリフですわ」
裏声を使って、マハラも口まねをやり返した。
ちょっぴり気持ちの悪い声だった。
「ぷっ」
チャパティが吹き出した。

つられて、ルビーローズも笑った。
まねをしたマハラも、自分の声が変だったので笑うしかなかった。
ルビーローズは笑いながらはしごを登っていった。
ハッチは円形だった。中央に丸いハンドルがある。
ハンドルには棒状のノブが取り付けられていた。ノブを握れば、片手でハンドルを回すことができる。ハッチは縦穴通路のてっぺんにあるから、はしごをつかむ手も必要だ。
ただし、ハンドルを回すにはかなりの力を必要とした。片手でやるなら、もっとだ。そのため、片手でも楽に回せるよう、小型の静電モーターがハンドルに組み込まれていた。
ハンドルを回すと、三本のジョイントアームがゆるむ。アームはハンドルの裏側にあり、放射状に伸びている。ジョイント部分で折れ曲がって、船体に爪を立てるようにしてハッチをロックしている。
ハッチロックが解除されると、軽く押すだけでハッチは上にあがる。そして、テントウムシの胸部をスライドして下におりる。油圧ダンパーがあるから、手を

放しても問題はない。落ちるように激しく下りたりはしない。
ハッチを閉めるときは自力で引き上げるか、油圧シリンダーを使う。はしごの裏にレバーがあるから、それを押し下げる。ハッチが閉まると静電モーターが作動して、ハンドルは勝手に回る。つまり、緊急時にはレバーをつかんでぶら下がるだけで、ハッチは自動閉鎖される仕組みになっていた。
「どう？」
「浮上したです」
チャパティに確認してから、ルビーローズはハンドルを回し始めた。
ハッチの内側にはルビーローズの手があったが、外側にはジョロウグモの前脚が置かれていた。
捕まえ損なった獲物をずっと尾行していたジョロウグモは、その獲物がようやく浮かんできたので脚を伸ばしたところだった。
後ろの四本脚で洞窟の天井に張り付き、体を反らせて前の四本脚で紅月丸に触れている。
脚を使って、音を聞いているのだった。

ハッチが持ち上がった。
ジョロウグモは警戒して脚を引っ込めた。獲物は水面を移動している。垂らしていた四本の脚を戻して、ジョロウグモは天井を這い進んだ。
ルビーローズはハッチを開けると真っ先に足場を確保した。アルミパイプのフレームが倒れた。これで縦穴通路を転落することはない。あとは落水防止だ。
ロッカーを開けて安全帯を取り出す。出口に向かう直線にさしかかり、まわりが明るくなる。
ベルトを腰に回しながら、ルビーローズはまぶしさに目を細めた。
「……」
手が止まった。
ベルトを握ったまま、顔の前に手をかざした。まぶしい光を手でさえぎって、目を凝らした。
そこにいるはずのジョロウグモが、いない。
巣を解体して引き払ったのだと思った。獲物に逃げられ、場所が悪いとあきらめた。
そう、思った。
目の隅に、枝が垂れた。風に吹かれて揺れているの

が見えた。いや、枝のわけはない。洞窟水路に木は生えていない。とすると、木の根だろうか。洞窟の天井から垂れ下がった根っこが、ルビーローズの両脇で揺れている。

右に一本。左に一本。ゆらり。

右に二本。左に二本。ゆらり。

揺れている。

動いている。

「！」

ぞっとした。

背中を冷たい電気が走った。

洞窟水路に木は生えていない。枝もなければ、根っこもない。あったとしても、動くはずがない。

ルビーローズは天井を見上げた。

二つの目と、八つの目が、見つめあった。

「ちっ」

舌打ちと同時にルビーローズは動いた。

悲鳴など、あげなかった。足がすくむこともなかった。ふたりの仲間から、姐御よ、姐さんよと、一目置かれるルビーローズだ。泣いて叫ぶような、やわな玉

ではなかった。
ルビーローズは攻撃した。つぶてを撃った。
とっさに繰り出した技は投石だった。しかし、念じた呪文はスリングではなかった。
一度の呪文で、大きめのつぶてが三斉射（せいしゃ）された。連射ではない。斉射だ。三回続けて撃ったのではなく、三発を同時に撃った。専用攻撃技の「三叉（さんさ）投石」だった。呪文は「トライデント・スリング」という。
ルビーローズはそれをダブルで使った。両手で操った。二丁拳銃だった。
六発のつぶてはすべて、真上のモンスターに命中した。だが、ジョロウグモも獲物を捕らえてすくいあげた。
ルビーローズがさらわれるのと、ジョロウグモが撃たれるのは同時だった。撃たれたジョロウグモはショックで脚をすべらせた。洞窟の天井から落ちた。獲物をすくいあげた反動で、ジョロウグモの体は回転しながら落下した。ルビーローズは上に向かって放り投げられた。
ジョロウグモは紅月丸の上に尻から落ちた。もちろ

ん、蜘蛛に尻などないのだが、腹部の末端は尻と呼ぶにふさわしい。ジョロウグモは仰向けになって、紅月丸の船体をすべり落ちた。

放り投げられたルビーローズは、天井を蹴った。忍者ではないのだから、逆さまになって洞窟に張り付く術などない。それどころか、鋼鉄のモンスターの上に落ちれば、骨折する恐れがあった。それならいっそ、生身のモンスターの上に落ちたほうがいい。紅月丸よりもジョロウグモのほうが、ずっとやわらかい。

天井を蹴って勢いを得たルビーローズは、自分からモンスターのふところに飛び込んだ。空中で呪文を念じ、トライデント・スリングをダブルで撃ち込む。またしても全弾命中させて、おまけにドロップキックまで仰向けのジョロウグモにお見舞いした。

なんとも豪快な着地だった。

浮上して航行中の潜水艇は、落下したモンスターを受け止めて沈み、そのモンスターに蹴りを入れたルビーローズのせいでさらにまた沈んだ。

ジョロウグモが落ちたのは、黒いテントウムシの背中のやや後ろ側だった。だから、そのまま船尾へとす

べり落ちた。
船尾が沈めば、船首は浮く。
水中にある頭部が浮き上がって、水面から顔を出した。
一番驚いたのはチャパティだった。さっきまで水底の岩が見えていたのに、いまは天井の岩が見えている。なにが起きたのか、さっぱりわからなかった。ルビーローズは舌打ちをしただけ。無言のまま戦闘が始まったとは、思いもよらない。
顔を上げたテントウムシは、次の瞬間にはもううつむいた。水面を叩いて頭部が沈む。操縦室が水上にあったわずかな間に、チャパティは見た。進行方向に出口はあっても、ジョロウグモの姿はなかった。
「クモです！」
「うおおおーっ！」
チャパティの声はマハラの大声に掻き消された。
マハラはマハラで、別のものを目撃したのだった。
沈んだ船尾が浮き上がって、船底の潜望鏡が真後ろの光景を捉えた。出口から差し込む光のおかげで景色はよく見える。

マハラが目撃したのは、赤と黒の縞模様と、沈んでゆく制帽だった。

「姐御ぉーっ！」

マハラは席を立った。ものすごい勢いではしごを登った。転落防止用のパイプフレームとネットは、体で突き上げた。ハッチから飛び出すようにして船体の上に立つと、せまい船内に合わせて呪文で小さくしていた体を、元の大きさに戻した。

巨漢のマハラが復活した。大きな体で、テントウムシの背中を駆けのぼった。

「……」

チャパティはだまって操縦桿を握っていた。

船体を駆けるマハラの足音を耳で聞き、振動を手で感じ取っている。

マハラはチャパティに声もかけないで出て行ったが、話し合いなどは不要だった。役割なら、はっきりしている。操縦桿を握るチャパティは紅月丸を預かっている。席を離れるわけにはいかなかった。もしも紅月丸を失えば、みんなで泳いで帰る羽目になる。水棲モンスターがうようよしている湖を、泳ぐのだ。

ルビーローズの身も心配だが、紅月丸も守らねばならなかった。
その点、マハラは動きが取れた。もはや後方の監視どころではない。ルビーローズを救いに行くのは当然だ。
救援はマハラに任せておけばいい。いや、おそらくは救援の必要すらあるまい。ジョロウグモは襲う相手をまちがえた。ルビーローズにだけは、ケンカを売るべきではなかった。パキケフーズで愛敬を振りまいて、聖母と慕われるルビーローズだったが、管理リヴになる前は別の異名を持っていた。
チャパティがルビーローズと出会ったのは、管理リヴを登用するための試験会場だった。初めて顔を合わせた自己紹介で、ルビーローズは臆面(おくめん)もなく言ってのけた。
――わたくしはルビーローズ。なかよくしてくださいね。こう見えても、博打(ばくち)とケンカが得意ですのよ。
管理リヴになろうとして試験を受けに来ているのに、博打とケンカはない。てっきり冗談だと思ったら、自己紹介に偽りはなかった。その証拠にいま、潜水艇を

駆って未知の湖を探検するという大博打をうっている。洞窟内のせまい水路でジョロウグモを相手にケンカをしている。

博打とケンカが得意なアカゲパキケの噂なら、チャパティも耳にしたことがあった。道で会うとチンピラは走って逃げ出し、親分衆でさえ目を合わせないように背中を向けたという、伝説の女博徒(ばくと)。

ひと呼んで、紅(あか)い薔薇(ばら)の女。

わけあって足を洗ったそうだが、その名はいまも裏社会で語り継がれているという。

マハラが、ひと呼んでマッハのマハラだと、自分で自分にかっこいいあだ名を付けたのとはちがう。

そのマハラが跳んだ。大きく踏み込んで、船体を蹴った。

足音と振動で、チャパティにはわかった。

「行くです！」

声を出しても誰もいない。チャパティは自分自身に声をかけた。

操縦桿を押し倒す。全速で紅月丸を前に進める。

心を鬼にして、仲間のふたりを置き去りにする。つ

らい選択だった。だが、やらねばならなかった。紅月丸を前進させる必要があった。できれば、星彩洞の外に出る。蜘蛛の巣にさえぎられてそれが無理なら、あえて網にかかる。

蜘蛛の糸で紅月丸を繋留（けいりゅう）するのだ。つないでおけば、急な流れにも耐えられる。

一味の知恵袋は、このあとの展開を読み切っていた。

ジョロウグモともつれあうようにして落水したルビーローズは、モンスターにぴたりとくっついていた。両手をジョロウグモの巨体に当てて、ゼロ距離でトライデント・スリングを撃ち込んでいる。

攻撃すれば、モンスターの動きは一瞬止まる。その一瞬だけは無事でいられる。だから攻撃し続ける。一瞬を積み重ねて、生き延びるのだ。

しかし、使える技がなかった。リヴリーの攻撃技は、どれも水中戦を想定していない。ハンマーで叩けば波に呑まれる。サンダーを落とせば自分も感電する。スリングなら自爆せずにすむが、水の抵抗で威力も射程も減衰（げんすい）する。

ならば、ゼロ距離攻撃するしかない。左右の手をジ

ョロウグモに押し当てて交互に技を放ち、ルビーローズは敵の反撃を封じ込めていた。
このまま百発も撃ち込めば、ジョロウグモは気絶するだろう。その代わり、ルビーローズも消耗することになる。戦闘が長引くと、ほかのモンスターに気づかれるかもしれない。少なくとも、洞窟水路の奥には二匹のアメンボと、得体の知れないタガメがいる。これを呼び寄せるわけにはいかない。
なるべく早く、決着をつけるべきだ。そのためには大技が必要だった。大技を繰り出すには、ゼロ距離では都合が悪い。
立ち泳ぎしていた足で、ルビーローズはジョロウグモを軽く蹴った。水泳でプールエンドの壁を蹴るようにして、少しだけ離れた。
離れたのはほんのわずかなのに、つぶての威力はとたんに落ちた。
モンスターがもがいた。八本もある丸太のような脚で、水を掻き回した。
「！」
水が動いて、流れが生まれた。ルビーローズは水中

に引きずり込まれた。ジョロウグモの真下だった。水の底から見上げれば、水面は巨体でふたをされている。これでは浮上できない。息を継げない。

ルビーローズは水底から攻撃した。両手でトライデント・スリングを真上に放った。たとえ威力は弱くても、暴れるジョロウグモをとりあえず静めようとした。

打ち上げたつぶては水の流れに勢いを吸い取られて、ジョロウグモに届かなかった。敵に当たるどころか、落ちてきたつぶてのひとつがルビーローズに当たる始末だった。

ジョロウグモの反撃が始まった。

八本の脚を盛(さか)んに動かして、水を掻き込む。獲物を水ごと招き寄せようとする。

強い流れに、ルビーローズの体が引っ張られた。どうにかして逃れようと、ルビーローズはキックを打った。ドルフィンキックで、舞い上がる水流から抜け出そうとした。

足と脚が接触した。

獲物の位置を察知したジョロウグモは、八本脚を次々と繰り出した。水を掻き込むついでに、脚で獲物を

引っかけようとした。
このままでは捕まる。絶対に捕獲される。相手はモンスターだ。力がちがいすぎた。泳いでも、水の勢いに負ける。到底逃げ切れない。
それに息を止めて潜っているのは、もう限界だった。気を抜くと、体が勝手に呼吸しようとする。胸を広げて肺をふくらませ、空気を吸い込もうとする。まわりに空気などないのに。水しかないのに。それでも、体は吸おうとする。
どんなに苦しくても、息を止めている間はまだ生還の望みがある。けれども、肺に水を吸い込んでしまえば、そこでおしまいだ。意識を失い、沈んでゆく。
なんとか水面に顔を出して、息継ぎをしなければならなかった。それなのに、ルビーローズは捕まってしまった。水の流れにはあらがえず、ジョロウグモへと吸い寄せられ、太い脚で掻き込まれた。
感触で獲物をたぐり寄せたと知って、ジョロウグモは脚でかごを作った。八本の脚が水中で球形になった。ルビーローズは中にいる。
かごは一瞬でせばまった。脚の間から水は逃げてい

ったが、ルビーローズは逃げられなかった。
水中に牢獄ができた。ルビーローズは水牢（みずろう）の囚人となった。
だが、これで勝負がついたわけではなかった。捕らわれたからには、もう水の流れに逆らって逃げる必要はない。敵にくっついてトライデント・スリングを撃ち込めばいい。
ルビーローズは最短距離で水面を目指した。頭の上には敵の胸がある。狙いをつけるまでもない。
水牢は一撃で破壊された。攻撃されたショックで、ジョロウグモの脚が開いた。
脚の付け根に水面が見えた。そこが、ルビーローズに最も近い水面だった。
モンスターに手をかけて、腕の力で体を引き寄せた。両手でモンスターの脚をつかみ、水面まで一気に体を引っ張り上げた。もはや泳ぐ余裕すらなかった。
水面に顔が出た。ひと息吐いたかと思うと、吐いた以上に吸い込んだ。酸素に飢えていた体が、思う存分に空気を吸っている。張り裂けそうなほどに胸をふくらませて、吸い続けている。

「ぐ……！」

脚の付け根にいるルビーローズを、ジョロウグモが器用にはさんだ。太い脚で前後からはさみつけて、身動きできないようにした。そしてジョロウグモは体を傾けた。ルビーローズは水中に押し込まれた。

当然、攻撃した。すぐさまトライデント・スリングを撃ち込んだ。

しかしジョロウグモは、ダメージを受けながらも獲物を放そうとはしなかった。攻撃されたショックで脚の先が大きく開いても、付け根はそれほど開かなかった。

しかも、ジョロウグモが元気になったのをルビーローズは感じ取った。攻撃されて弱るどころか、強くなっている。はさみつける脚の力が増している。陸上モンスターのくせに、水の中でなぜだか勢いを盛り返した。ルビーローズは水中に押し込まれて、息もできないというのに。

――！

ぴんときた。ジョロウグモは息継ぎをしたのだ。体を傾けることで、腹部の側面にある呼吸器官から空気

を取り入れた。
モンスターだって生きている。呼吸ができなければ死んでしまう。水中で息ができずに苦しんでいるのは、なにもルビーローズだけではなかった。
それなら、自分ひとりが苦しむことはない。
ルビーローズは呪文を変えた。今度はハンマーを使った。空中に出現した大槌(おおづち)が打ち下ろされた。打たれたジョロウグモが沈む。脚の付け根にはさまれているルビーローズもいっしょに沈むが、ここは我慢比べだ。
溺れたほうが負け。
命をかけた大勝負である。
攻撃をやめさせようと、ジョロウグモはルビーローズをはさむ脚に力を込めた。
その力をゆるませようと、ルビーローズは立て続けにハンマーを打ち込んだ。
はさまれるルビーローズ。打たれるジョロウグモ。どちらも水中に沈んでいる。どちらも息ができないでいる。
先に音をあげたのは、ジョロウグモだった。打つのは勘弁してくれとばかりに、自分から脚を開いた。限

界なのはルビーローズも同じだった。ジョロウグモの体に手をかけ足をかけ、登るようにして水面に急いだ。

ジョロウグモも水を蹴って浮き上がろうとした。互いに息継ぎを優先した結果、ジョロウグモはルビーローズを頭に乗せて浮上する形になった。

蜘蛛の体は、頭部と胸部がいっしょになっている。頭胸部（とうきょうぶ）という。そこにルビーローズを乗せてモンスターが浮上すると、まるで水難救助でもしたかのように見えた。

だが、決して正義の味方ではない。頭が水上に出るや否や、ジョロウグモは浮いた頭を勢いよく沈めた。頭を沈めた反動で、腹部を水面高く差し出した。

実は、息をするのに頭は関係なかった。蜘蛛や昆虫は、顔を水につけても溺れない。鼻呼吸も口呼吸もしないからだ。反対に、頭が空気中にあっても、その下が水に浸（つ）かっていれば溺れてしまう。蜘蛛が呼吸するための器官は腹部に、昆虫が呼吸するための器官は胸部と腹部にあるから、そうなる。

なんとも悪知恵の働くジョロウグモだった。先にルビーローズを解放し、お互いに息継ぎをしようとの暗

黙の了解が成立したかに見せかけて、裏をかいた。勢いよく頭を沈めれば、ルビーローズを水中深く引きずり込める。一方で、頭を沈めた反動で腹を持ち上げて、自分だけはしっかりと空気をいただくわけだ。

ルビーローズは引っかからなかった。

ジョロウグモが頭を下げる前にジャンプした。空中に飛び上がってみれば、案の定、敵は仕掛けてきた。息継ぎをするための暗黙の了解など、初めから存在しなかったのだ。

とすれば、攻撃の手を休める義理もない。

ルビーローズはハンマーを打った。水面から突き出たジョロウグモの腹を、打ち沈めた。

背中を反らせていたジョロウグモは、水の中でシーソーのように体が動いた。腹部が沈んで、代わりに頭胸部が浮上した。ルビーローズはそこに着地した。

「姐御ぉーっ！」

「！」

マハラの声に、視線が動いた。

巨漢のシマオーガが水路を泳いでいる。

潜水艇は前進して、巻き添えを食わないように出口

に向かっている。
紅月丸が去るのはかまわないが、マハラがやってくるのは困った。救援はありがたいけれども、水の中は動きにくく、モンスターは狡猾（こうかつ）。狙いをマハラに変更する恐れがあった。
なにしろ、マハラは正面からやってくる。大きな獲物がバチャバチャとしぶきを上げて、ジョロウグモの顔に向かって泳いでいる。
ルビーローズは斜め後ろに腕を払った。前を向いたまま、両手でトライデント・スリングを盲撃（めくらう）ちにした。ジョロウグモの動きを止めて、頭を駆ける。モンスターの顔を踏みつけて強く蹴り出し、斜め後ろに回した腕を前へと振り戻す。
ルビーローズは水路にダイブした。
ジョロウグモとマハラの間に割って入ったのだ。
入水すると、ストリームラインを維持した。大きなキックを無駄打ちすることなく、水の抵抗を抑えた。そしてまだ勢いがあるうちに、振り幅の小さなドルフィンキックを二回打って加速し、バタ足へと移行した。
体が浮き上がると、両手で水を掻いた。気をつけの

姿勢から、上半身を折り曲げ、膝を折り曲げ、小さくするどく回転した。
クイックターンだった。
体の向きが入れ替わった。後ろが前になり、下が上になった。
仰向けの体を水中でひねって、ルビーローズは顔をあげた。正面にジョロウグモがいる。八本脚で波を蹴立てて向かってくる。
立ち泳ぎをしながら、ルビーローズは構えた。指先までまっすぐ伸ばした右腕をV字に曲げて、胸の前に持ってきた。左腕は肘を後ろに突き出し、握った拳を腰に当てている。
V字に曲げた腕が渦を巻いていた。
「ローズ・ストーム！」
呪文を叫んで、ルビーローズは気合いを入れた。V字に曲げた腕をジョロウグモに向けて伸ばした。
腕に巻き付いていた渦が放たれた。縦に回転する渦巻だった。巨大化しながら突き進み、洞窟水路の水ごとジョロウグモを呑み込んだ。
管理リヴは専用の攻撃技を持っている。リヴリーた

ちがモンスターに襲われているところに遭遇したときは、圧倒的な威力で敵を蹴散らせるようにと、特別に開発された呪文を授(さず)かっている。

ルビーローズの専用攻撃技は「薔薇の竜巻」といった。呪文は「ローズ・ストーム」だ。ウインドとストームをあわせたような呪文で、横倒しになった竜巻が吹き抜けてゆく。竜巻の進路上にいると、敵も味方も関係なしに吸い込まれてしまう。

そんな危険な技を、ルビーローズは水中で使った。水の中で使うのは初めてだった。竜巻は渦巻となって吹き荒れた。水路の水をごっそりと呑み込んで、モンスターを洞窟の奥へと運び去った。

水を奪われて、水深が一気に低くなった。洞窟水路は湖とつながっている。水位の下がった洞窟内に水が流れ込んだ。ルビーローズは急流に押し流された。マハラもいっしょに流された。

紅月丸は流されなかった。こうなることを予想して、チャパティは潜水艇を前進させている。わざと蜘蛛の巣に引っかかり、紅月丸を蜘蛛の糸でつなぎ止めている。

「姐御ぉーっ！」
流されながらも、マハラはルビーローズの身を案じていた。
専用攻撃技でモンスターを撃退したからといって、無傷だとは限らない。無傷だとしても、急流を泳ぎ切れるとは限らない。もしかしたら溺れてしまうかもしれない。
だが、その心配はいらなかった。
紅い薔薇の女は無傷だった。それに泳ぎは達者だった。
溺れそうなのは、マハラのほうだった。
「んぷ……ぶはっ！」
マハラの頭が一瞬、水没した。
急流は上と下とで流速（りゅうそく）が異なっていた。底のほうが流れが速く、マハラの足に絡（から）みついて引きずり込もうとした。
「マッハ！　浮きなさい！」
ルビーローズは板のように浮いていた。
水の流れに抵抗せず、体を横にして水面に浮くことのみに専念している。マハラが立った状態で流されて

いるのとは対照的だ。
「体を横に！」
あたりが暗くなったので、ルビーローズはアドバイスを追加した。
ふたりは洞窟の奥に向かって流されている。出口から差し込む光が壁にさえぎられると、水には呑まれなくても、闇に呑まれる。
「ひゅぐ……げっはげっは！」
マハラが咳き込んだ。息を吸おうとした瞬間に底へと引き込まれて水を飲み、あわてて浮かび上がったのだった。
「溺れますわよ！」
「しゃらくせえっ」
暗闇にマハラが吼えた。
なにかをしたようだが、なにをしたのか暗くて見えない。
「マッハ……？」
流れが急に弱くなった。すると今度は、洞窟の奥へと流れ去った水が戻ってきた。水面に浮くルビーローズの進路が逆転した。

「……うえぇぇぇ」
マハラの苦しそうな声が闇をふるわせた。
「マッハ！」
ルビーローズはトーチの呪文を念じた。空中に焚き火が出現した。くるくると回転しながら落ちてきた薪（たきぎ）の一本を手に取り、ルビーローズは松明（たいまつ）としてかざした。
「泳ぐの……めんどくせえ……うえぇぇぇ」
「……なんて人」
ルビーローズはあきれた。
マハラは巨大化していた。ビッグの呪文を何回念じたのだろうか。溺れそうになってあわてたらしく、少々念じすぎたようだ。巨大化して洞窟に詰まった体がぱんぱんにふくれあがっている。
湖から流れ込んできた水は、マハラの体で堰（せ）き止められた。そうなると、勢いに乗って流れる水のせいで水位が下がる。下がった水位に引っ張られて、流れていった水が戻ってくる。
あとは、両側の水位が一致するのを待って巨大化を解けばいい。それならもう、流されることはない。

マハラがそこまで考えたかどうかはわからないが、溺れないように体を大きくするのはいい判断だった。ルビーローズは泳ぎが得意すぎて、こうはいかない。

水の流れが収まると、マハラは体の大きさを元に戻した。

静かな洞窟水路が帰ってきた。急流もなく、渦巻もなく、モンスターもいない。

しかし、暗い洞窟で水につかっているのは気味が悪かった。なにもいなくても、なにかが潜んでいるような気がする。松明に照らされた水は透きとおっているが、少し離れると黒く濁(にご)って見える。黒い水は邪悪な水で、意志を持って襲いかかってきそうな、そんな気がする。

「戻りますわよ」

ルビーローズはキックを打った。

「おう」

マハラは水を蹴った。

足を上げて無駄に水面を蹴りつけるマハラは、進むのが遅かった。ルビーローズはしぶきも上げずにスイスイと進んでは、マハラを待って止まっている。しか

も、片手に松明を持ったまま泳いでいる。
「ぬおぉぉぉ！」
マハラはピッチを上げた。地上を全力疾走するように足を動かした。水面を蹴りまくって、しぶきをいっそう高く上げている。しかし、増したのは勢いだけで、速度は変わらなかった。
「バカねえ。水とケンカしてどうするの。もっとなかよくなさい」
「なかよくって、水とかよ？」
「水だって蹴られたら怒りますわ。キックは水中で打つものよ。うちわを扇ぐようにしてごらん」
「……」
言われたとおりにしてみると、マハラの泳ぐ速度は上がった。
「おお！　すげえ！」
ぐいぐいと進む自分の速さにマハラが感激したところで、水泳教室はお開きとなった。
流された仲間を救出するべく、紅月丸が引き返してきた。
ルビーローズとマハラは左右にわかれて紅月丸によ

じのぼった。
船体には、はしご代わりに小さな出っ張りがある。ハッチへと続いている。ハッチの位置は低いから、よじのぼるのは簡単だった。
マハラはせまい船内に合わせて呪文で体を小さくすると、縦穴通路を降りていった。途中でパイプフレームを引っ張って、ルビーローズのために足場を作ってやった。
「急いで脱出しましょう」
ハッチに残ったルビーローズは操縦室に伝えた。
「ジョロウグモが戻ってくるですか？」
伝声管からチャパティの声が届く。紅月丸はターンを始めている。
「それもありますわ。水中でローズ・ストームを使ったのは初めてですもの。竜巻が渦巻に変わって、どれほどのダメージを与えたか、わからなくってよ。それに……」
「ほかのモンスターがやってくるですか？」
「そうね。それが一番心配ですわ。渦巻が飛んでいって、水がずいぶん動きましたものね。星の墓場に水が

流れ込んだら、この水路の存在がばれてしまいますわ」
「おいらもそれが心配です。なので、急ぐです。あと、蜘蛛の巣は焼き払ったです。このまま、まっすぐ出られるです」
「そう。じゃあ、お願い」
ルビーローズは会話を打ち切った。アカゲパキケの大きな角から滴(しずく)がしたたり落ちている。全身ずぶ濡れのままだ。のんびり体を拭いてなどいられない。いまはとにかく、時間が惜(お)しい。
回頭した紅月丸は全速力で星彩洞からの脱出を目指した。
そして今度はなんの障害もなく、洞窟水路を抜けた。湖に出た。
「鞘翅、開け」
周囲の安全を確認しながら、ルビーローズは指示を出した。
「マッハは後部銃座へ。出るときは気をつけなさい。後ろは危険ですわよ」
テントウムシの背中が盛り上がっているので、ハッ

チから後ろは見えない。追っ手が星彩洞から出てくるかどうか、確認のしようがない。紅月丸の進路を曲げて洞窟を視野に入れても、鞘翅が開いてしまえば結果は同じで、やはり見えなくなる。

どうせ死角になるのなら、進路を変えてもたもたせずに、まっすぐ進んでさっさと離脱したほうがいい。

考えは同じらしく、チャパティは異議を唱えなかった。

「プロペラ始動。後羽展開」

シュラウド・リングが立った。リングの中のプロペラが回り始めた。鞘翅の下で折りたたまれていた後羽は、水の中へと伸びてゆく。

広げた鞘翅が、プロペラ推進で紅月丸を走らせた。

沈めた後羽が、水中翼となって紅月丸を持ち上げた。

「翼走したです」

「おっしゃあ！」

マハラは後部銃座を外へと押し出した。

目の前にモンスターがいても即応できるように、重機関銃をしっかり構えている。しかし、外の世界に危険はなかった。追撃してくるモンスターはいない。

「なんもいねえじゃねえか」
「おバカさんね。いたら困りますわ」
「おバカさんです」
「んだとぉ」
無事に離脱できたと知って、一味にもようやく余裕が生まれた。
「姐さん、どうするですか？」
「ブンカーに帰投しましょう」
「了解したです」
「マッハは監視をお願いね」
「おう。俺様に任せな」
言葉とは裏腹に、マハラは重機関銃から手を放した。紅月丸は水中翼船として、水の上を飛ぶように走っている。星彩洞はどんどん遠ざかってゆく。
監視なら、見ているだけで充分だ。手はいらない。
マハラはあいた手で、頭の毛を乾かした。紅月丸が高速で走っているから、いい感じに風も吹いてくる。濡れたままでぺったりとした頭の毛を、マハラはごしごしと乱暴にこすった。ただ乾かすだけで、頭の毛はソフトモヒカンになった。燃え上がる炎のような、自

慢のヘアスタイルがよみがえった。
マハラは仕上げに、両手で頭の毛をはさんでなでつけた。男振りがよくなって、ご機嫌だ。ひとりでにやついている。
その笑顔が凍りついた。
突然、水面を割って顔を出したタガメが、攻撃を仕掛けてきた。
前脚の左フックがマハラの頭をかすめた。目測を誤ったのか、それともプロペラの風に煽られたのか、奇襲は空振りだった。被害といえば、マハラのおしゃれなソフトモヒカンが風圧に負けて台無しになったくらいだ。
「敵襲ーっ！」
ヘアスタイルどころではない。大声で事態を報告しながら、マハラはあわてて重機関銃を構えた。
奇襲に失敗したタガメは、すばやく水中に逃れた。
「武者タガメの野郎でえ！」
マハラは見た。沈んでゆくタガメの頭に光るプレートがあった。額に金属製のプレートが貼り付いていて、電子部品らしきものと、点灯する発光ダイオードが見

えた。
それに、タガメは手っ甲のようなものも装着していた。
マハラの頭の上を通過した前脚には、金属製の鉤爪とベルトがあった。関節より先の細い前脚は筒状の金属に収まっており、全体が長い鉤爪と化していた。関節より後ろの太い前脚には革製らしきベルトが巻かれていて、金属製の鉤爪が脱落しないように固定してあった。
明らかにふつうのモンスターではない。
星彩洞の地底湖で目撃した、謎の武者タガメだった。
「姐さん！　どうするですか！」
「やるしかねえぜ！　姐御！」
「あわてるんじゃねえやっ！」
凄(すご)んで一喝(いっかつ)したのは、ルビーローズだった。いつもの上品な口振りが消え失せている。
「このまま三日月岩礁(がんしょう)に向かいな！　そこで勝負するよ！　だめなら……あたいがぶっつぶしてやるさっ」
「おうよ！」

「はいです！」
マハラもチャパティも、嬉嬉（きき）としてルビーローズに従った。
一味の三人は同期だ。いっしょに管理リヴになった。それなのに、ルビーローズだけが一目置かれている。ふたりの仲間から、姐御よ、姐さんよと慕われている。
三人は、管理リヴになるための試験会場で初めて出会った。出会ったときは同格だった。
けれども。
出会う前にすでに。ルビーローズは別格の存在だった。
多くのリヴリーたちが聖母と呼んで憧（あこが）れるルビーローズには、管理リヴになる前の、知る人ぞ知る異名があった。
博打とケンカが得意な、伝説の女博徒。
その名も、紅い薔薇の女。
リヴリーアイランドの保安官でさえ手を出せなかった強面（こわもて）の親分衆も、紅い薔薇の女だけは恐れたという。賭場（とば）でいかさまを働いたばかりに、一夜でつぶされた一家もあるそうな。

わけあって無宿無頼の渡世人稼業から足を洗い、いまはしとやかに、パキケフーズの管理リヴに納まってはいても、流れる血は変わりはしない。

ルビーローズは腕を組み、ハッチで仁王立ちとなって、決戦の地をにらみすえた。

マハラは後部銃座で重機関銃を乱射して、水中で揺れる影を牽制している。

チャパティは操縦桿を握りしめ、三日月岩礁に向かった。

3

三日月岩礁は対岸にあった。

遠くに断崖が見えている。青い水面が途切れて、茶色の岸壁がのぞいている。

その岸壁を滝が切り裂いていた。ミュラー山脈から流れ下ってきた川が、断崖で滝となって湖に注いでいる。

川は、砂や土を運んで湖底に堆積させる。大雨で増水すると、巨大な岩でさえ運んでくる。岩は滝壺に沈

みそうなものだが、増水時の水の勢いは激しく、巨岩も押し流されてしまう。そうやって運ばれてきた大小さまざまな岩が、浅瀬にはごろごろしている。

滝壺のまわりにある浅瀬は流れが速かった。滝の水が途切れることはないのだから、注がれた水は滝壺からあふれ出す。

それでも、地形によっては流れのゆるやかなところがあった。岩陰に土砂がつもって砂州（さす）となり、いまでは草木が生い茂るほどになっている。

そんな砂州の、さらに下流に三日月岩礁はあった。滝に向かう者を囲い込むように、口を開いている。中に入れば行き止まり。迂回（うかい）するには後戻りしなければならない。つまり、追う者には都合がよく、追われる者には都合の悪い場所だ。

紅月丸はその三日月岩礁に向かっている。追われる者には都合の悪い場所を目指している。謎の武者タガメを引き連れて、ただまっすぐに、行き止まりに向かって逃げている。

水上を突っ走る紅月丸。

水中を突き進む武者タガメ。

武者タガメは、水上最速のモンスターであるアメンボと変わらないスピードを叩き出した。前脚に手っ甲をつけているくらいだから、水を蹴る脚にもなにか細工があるのかもしれない。脚にヒレをつけてフィンスイミングをしているのなら、高速もうなずける。

だが、スピードなら紅月丸も負けなかった。水中翼船は飛ぶように航走する。水中にあるのは二枚の翼のみ。船体は宙を飛んでいる。

「マッハ！　爆雷を使うよ」

ルビーローズはハッチで仁王立ちのまま、マハラに指示した。

「あたいの合図で放出しな」

「いいのかよ？」

マハラは重機関銃で水面を掃射（そうしゃ）しながら、聞き返した。

爆雷には遅延発動型バーストを仕込んである。使えば花火が弾ける。リヴリーの技で攻撃するわけで、モンスターを激怒させることになる。ただの水を撃ち出す重機関銃とはちがう。

「爆雷で攻撃するんじゃないよ。奴が飛ばないように、

爆風で水面を叩いて押さえ込むのさ」
「爆風だぁ？」
「水に落ちる前に、爆雷を撃ち抜きな」
「空中爆発か！」
「そうさ。ぬかるんじゃないよ」
「合点承知でい！」
「チャッパ！　そろそろ用意しな」
ルビーローズは今度はチャパティに指示を出した。
「了解したです」
チャパティはハイドロハンマーの簡易制御盤に手を伸ばした。
簡易制御盤を使えば、水中大砲のハイドロハンマーを操縦室から撃てる。トリガーグリップを起こすと安全装置が解除されて、ハイドロハンマーの砲口が真正面を向く。あとは引き金をしぼるだけで水の砲弾が発射される。
簡易制御盤では潜望鏡をのぞけないが、操縦室には窓があるのでその必要はなかった。それどころか、窓さえいらなかった。
チャパティはトリガーグリップを起こさなかった。

逆に、グリップホルダーのリングフックを回して、グリップが動かないようにロックした。
それから、グリップホルダーのそばにあるL字型のレバーハンドルを握った。ドアノブなどに採用される、よくあるハンドルだった。そのハンドルを、チャパティは少しだけ下げた。時計でいうと、三時から四時半へと動かした。
すると、ハンドルに連動して船底の砲身も動いた。紅月丸はテントウムシの形をしている。船底には長い砲身が一本あって、胸から腹へと後ろ向きに伸びている。まるで産卵管のように見える。
その砲身が動いた。
動いたのは砲身だけで、砲塔は動かなかった。船体に格納されたままだ。砲塔は縦に大きく割れており、そこを砲身が上下することで射角を調整できる構造になっている。砲塔を格納したままだと左右の狙いはつけられないが、砲身は動くので上下の狙いはつく。
ハイドロハンマーは斜め下を向いて静止した。
大砲の筒先が湖面とこすれて、水を切った。
「準備完了したです」

チャパティはハイドロハンマーの引き金に指をかけた。

「おまえたち、衝撃に備えるんだよ」

ルビーローズは仲間に注意をうながしたが、マハラもチャパティも着席している。ハーネスで体を固定している。注意の必要があるのはルビーローズだ。安全帯の腰ベルト一本で体をつなぎ止めている。

ルビーローズは自分の心配はしなかった。体を前かがみにして、ハッチのふちを両手でつかんだ。その目はまっすぐに前を見つめている。

砂州が迫ってくる。砂の島に木が茂って林となっている。近づくにつれて、木々はどんどん大きくなった。そして後方の滝は小さくなり、林の後ろに隠れてしまった。

滝が見えなくなった。

三日月岩礁は初めから見えない。水面から突き出た岩もあれば、水面下に沈んだ岩もある。湖は穏やかで、滝が起こした波も砂州に吸い取られ、三日月岩礁には届かない。岩に当たって砕ける波がないから、目で見て確認するのは難しい。

それでも、三日月岩礁がどこにあるのか、ルビーローズにはわかった。後ろの林に目印をつけてある。枝を落として、三本の木を丸裸にしてある。三日月岩礁の両端と中央がどこなのか、わかるようになっている。

場所がわかれば座礁はしない。しかし、逃げ道もない。

岩を削って紅月丸を通そうとのアイデアは出されなかった。岩礁を通過したところで、真裏にある砂の島に乗り上げるだけ。

それに、そもそも三日月岩礁は自然にできたものではなかった。自然にできたのであれば、三日月の内側に土砂がつもって砂州ができるはず。

三日月岩礁はルビーローズ一味がこしらえた。湖底に散らばる岩を引き揚げて、三日月型となるように積み重ねた、人工の岩礁地帯だった。

だから、ルビーローズ一味は三日月岩礁に逃げ込んだのだ。

中に入れば行き止まり。迂回するには後戻り。追われる者には不利な地形に見えても、そうではなかった。

モンスターに追われたときに、無事に帰還するため

の最後の策。
それが三日月岩礁だ。
武者タガメは行き止まりに誘い込まれたのだった。
「ハンマー・アクセル！」
ルビーローズが叫んだ。
「はいです！」
チャパティは引き金をしぼった。
船底にぶら下げた大砲が水の砲弾を発射した。反動が紅月丸を突き上げた。たった二枚の水中翼で浮かぶ船は、突き上げられて宙を舞った。
「アクセル！」
「はいです！」
チャパティは続けてハイドロハンマーを撃った。
宙を舞う船は、さらに上へと押しあげられた。
二発目のハイドロハンマーは武者タガメに命中した。空中で放たれ、すぐ後ろを追いかけてくるモンスターを水面越しに叩いた。
水の圧力で深みへと押し込まれて、武者タガメの脚が止まった。
「マッハ！」

「おおうっ」
マハラはペダルを蹴った。三本指の機械の手が爆雷を投げ捨てた。
落下する爆雷をマハラは重機関銃で狙った。水滴の弾丸をばらまいて、遅延発動型バーストの詰まった樽を撃ち抜いた。
花火が弾けた。爆風が水面を揺さぶった。
荒れる水上を警戒した武者タガメは、そのまま水中にとどまった。
「アクセル！」
「はいです！」
チャパティは最後のハイドロハンマーを撃った。空中では取水できないから、タンクが空になればハイドロハンマーは撃てなくなる。
最後の一撃は当たらなかった。脚の止まった武者タガメは絶好の標的なのに、水の砲弾は届かなかった。二発目で水中深く押し込んだあとなので、厚い水面が砲撃の威力を吸い取ってしまった。とはいえ、武者タガメに浮上をためらわせる効果はあった。
ハイドロハンマーを利用した三度のハンマー・アク

セルで、紅月丸は空中高く舞い上がった。
斜め下に伸びていた後羽が持ち上がった。水中翼は水平翼となった。これで揚力は稼げるし、鞘翅にはプロペラもある。姿形はテントウムシなだけに、そのまま飛行も可能に見えたが、残念ながら紅月丸は船だった。空は飛べない。
舞い上がれば、あとは落ちるだけ。
だからといって墜落するわけにはいかないから、水平に伸ばした後羽で滑空(かっくう)した。三日月岩礁を飛び越えた紅月丸は、高度を下げながら林を越えた。
このまま安全に着水できれば、策は成る。身を隠すところのない水上では、砂州に茂った林は唯一の遮蔽(しゃへい)物(ぶつ)だ。岩礁で追っ手を阻(はば)み、林で視界をさえぎって、姿をくらませばいい。
ところが、着水するのは至難の業だった。
浅瀬に降りたのでは、岩や湖底にぶつかる。
流れ落ちる瀑布(ばくふ)のおかげで滝壺は深く広いが、水面は荒れまくっている。
おまけに、紅月丸の船底にはポッド推進器がある。
仮に、波のないところにゆるやかに降下できたとして

も、ポッドが水面に引っかかれば、紅月丸はつんのめってしまう。船体は水の上を転がって、大破するだろう。

それでも、着水を強行しなければならなかった。滝が迫ってくる。

船なのに滑空する紅月丸を待っているのは、断崖の突き当たりだった。飛び続ければ激突する。ハンマー・アクセルで舞い上がった紅月丸よりも、断崖のほうが高い。越えることはできない。

左右に転舵(てんだ)しても、遠くへは行けない。三日月岩礁を迂回した武者タガメに見つかって、再び逃走劇が始まったのでは意味がない。

ルビーローズは眼下をにらんだ。

滝壺は深く、空から見れば青黒く染まっている。流れ落ちる大量の水が湖底を穿(うが)って、広い淵ができている。けれども、荒れた水面にはすべり降りることができない。

つまり、墜落でもしない限り、降りるに降りられないのだった。

「エアリフト！」

滝の音に負けないように、ルビーローズは伝声管に口を寄せて叫んだ。

鞘翅のシュラウド・リングが動いた。ヘリコプターのメインローターのように、プロペラが上を向いて回転した。上向きの揚力を得ても、ヘリのようにホバリングはできない。むしろ、バランスが崩(くず)れてしまった。

プロペラのある鞘翅は、テントウムシの胸部を横に広がっている。エアリフトをすると胸部が引っ張り上げられて、腹部が沈む。安定して滑空していた船体が傾き、紅月丸は尻下がりとなった。このまま傾けば失速する。後羽の揚力を失うと、紅月丸はただの鉄の固まりとなる。真っ逆さまに落ちてしまう。墜落すれば滝壺には降りられるが、船体も乗員も、無事ではすまない。

しかし、上向きに働く揚力のおかげで墜落は免(まぬが)れた。斜めになった船体は失速寸前の状態をなんとか維持して、前に進むスピードだけを殺した。

「後部銃座、格納！」

ぎりぎりのタイミングで後部銃座が格納された。空中に現れるかもしれないモンスターを迎撃するべく、

マハラがひとりで警戒していたのだった。
「野郎どもっ！」
ルビーローズは船内の仲間たちに雄々しく呼びかけると、落ち着いた声で続けた。
「降りるぜ」
紅月丸はハイドロハンマーの砲身から着水した。円筒形の大きな砲身は、水面へのハードランディングにはうってつけだった。丸くてよけいな出っ張りもなく、水が引っかからない。
それに、失速しかけて前に進むスピードは落ちている。それでいて、墜落するほど降下も速くない。
着水すると船体は前のめりになった。もともと尻下がりに傾いていたので、結果的に水平に戻った。水中大砲の射角が変更された。最大俯角（ふかく）でほぼ真下を向いた長い砲身は、水の抵抗を受けてちょうどいいブレーキとなった。二枚のプロペラと六枚のスクリューもフル回転で制動をかけている。
紅月丸は止まった。
空から降りてきた船は、滝壺の荒れた水面に無事に着水したのだった。

だが、感激する暇はなかった。
飛んだから降りた。ただのそれだけのことで、飛んだ理由は未解決だった。
滝壺の後方には砂州がある。砂州にできた林の向こうには三日月岩礁がある。岩礁の中には、手っ甲をつけた謎の武者タガメがいる。
モンスターに追われたときに、無事に帰還するための最後の策。
その仕上げは、これからだった。
後羽がたたまれた。鞘翅もたたまれた。紅月丸は潜水艇に戻った。
ルビーローズは船内に消えた。ハッチが閉ざされて、脚のないテントウムシは沈んでいった。
青くて黒い滝壺へ。
水の荒れ狂う深い滝壺へ。
潜水艇〈紅月丸〉は沈んで、そして見えなくなった。
断崖から水が落ちてくる。膨大（ぼうだい）な量の水が、ものすごい勢いで滝壺へと注いでいる。滝壺の底では水が回転しているという。引きずり込まれたが最後、ぐるぐる回って、二度と浮かび上がってはこないという。

紅月丸は沈んだまま、浮かび上がってこなかった。
水中で影が揺れた。
三日月岩礁と砂州を迂回した武者タガメが、獲物を追って滝壺までやってきた。
モンスターは滝壺の底に潜っていった。
しかし、すぐに浮上してくると、泳ぎ去っていった。
水中に獲物の姿はなかった。

第五章　ローズ・ピーク

一

夕闇にホタルが舞っていた。

右に左にふらふらしながら、川を下ってくる。

川の流れはホタルを追い抜いて、湖へと落ちてゆく。

ルビーローズは断崖に立っていた。背後には、なにもない空間が広がっている。滝の音だけが響いている。

ホタルがルビーローズの横を通過した。

巨大なホタルだった。モンスターのホタルだった。腹部に灯した明かりがまぶしい。川面（かわも）が光を反射して、真昼のようにきらめいている。宙に浮いて周囲を煌々（こうこう）と照らすのだから、まるで道路工事用のバルーン照明だ。

ルビーローズはホタルをながめていた。攻撃はしなかった。身を守る必要すらない。ホタルは安全なモンスターだ。ただの巨大昆虫である。リヴリーを襲った

りしない。
風がホタルの跡を追っていった。ルビーローズの頭を羽風(はかぜ)がやさしくなでた。制帽は洞窟水路でなくしている。
ルビーローズは視線をあげた。
地上は薄暗くても、空はまだ明るい。山の頂(いただき)は夕焼けの色を残している。
連(つら)なる山々はミュラー山脈だった。川はそこで生まれる。
山に降った雨が、染み込み、湧(わ)き出て、小さな流れを作る。谷へと集まって、大きな川に成長する。川はミュラー山脈の山肌を削(けず)り、流れ下ってくる。
上流には、ひときわ深い谷があった。誰かが刀で斬りつけ、斬りあげでもしたかのように、山がV字に切り落とされている。
険しい地形に、プーケ渓谷(けいこく)との名称がつけられた。管理リヴ委員会の大幹部であり、防衛隊の総司令官としてモンスターと戦うプーケの激しさを、地形の険しさに重ねたのだ。
川にはジュリエットの名前がつけられた。プーケと

双子の姉妹で、同じく管理リヴ委員会の大幹部。財務局や呪文科学局など、ひとりで複数の管理機関を統べている。プーケの防衛局以外はすべてジュリエットの支配下にある、との噂まで流れているが、残念ながら事実だった。

ルビーローズとチャパティの食糧局も、マハラの経済産業局も、裏でジュリエットが取り仕切っている。ルビーローズとマハラは局長で、チャパティは副局長だ。しかしながら、ミューミュー一派の権力機構に取り込まれた幹部職員たちが面従腹背するのだから、いかんともしがたい。

険しい谷は厄介で、流れる川には難儀する。

プーケ渓谷にジュリエット川と命名したのは、マハラだった。そして、そのマハラはプーケ渓谷にいた。チャパティといっしょにボートで川を遡上している。無事に到着して、滞りなく作業も進んでいるようだ。

プーケ渓谷に帆が張られた。

逆三角形の帆だった。V字型の谷間に合わせて、上は広く、下は細くなっている。

山から流れてくるのは水だけではなかった。風も吹

き下ろしてくる。
渓谷に張られた帆が大きくふくらんで、風を堰(せ)き止めた。
風力ダムだった。
帆の真ん中には短い筒が刺さっていて、穴があいていた。そこを風が抜けてゆく。筒の正体は風力タービンだ。吹き抜ける風がプロペラを回して発電する仕組みになっている。
潜水艇〈紅月丸〉は電気で動く。バッテリーをフル充電するにはかなりの電力が必要となる。だから、川にも水力タービンを設置してある。流れる水がプロペラを回してくれる。
川底のタービンは隠せるので、水力発電は常時稼働(かどう)していた。一方、渓谷に張った帆はどうしても目立ってしまうから、風力発電は夜間限定だった。
隠すのは、ミューミュー一派に見つからないようにするためだ。
リヴリーアイランドを陰で牛耳(ぎゅうじ)る、ミューミュー、ジュリエット、プーケ、ダークヤグラの一派に対抗するべく、ルビーローズ一味が光る湖の秘密を探ってい

ると知られてはならない。
日が落ちた。月はまだ顔を出さない。
ミュラー山脈は夜の空にまぎれて見えなくなった。
風のダムも闇に溶けた。
ルビーローズは振り返った。
断崖から湖を見下ろした。
先ほど横を通り過ぎていったホタルが、遠くを飛んでいる。いったいどこを目指しているのか、右に左にふらふらしながら、湖を渡ってゆく。
暗い湖面には、別の光る虫もいた。
人魂が湖を横切ってゆく。鬼火が明滅している。こちらは光炎立羽蝶のようだ。星彩洞を出て、夜に咲く花の蜜でも吸いにいくのだろうか。
断崖に立つと、遠くまで見通せる。
南西にたなびく雲が、地上の光に照らされて明るくなっていた。真下にあるのはリヴリーアイランドだ。小アイランドともいう。
リヴリーアイランドには大小のふたつがある。リヴリーたちが暮らしているのは小アイランドだ。平地に街を築いて、そこをリヴリーアイランドと呼んでいる。

波の穏(おだ)やかな湾内には群島(ぐんとう)があって、誰もがみんな、自分だけのちっぽけな島を所有している。

しかし、小アイランドの外にも世界はある。リヴリーたちが住む島は、ほんとうはもっとずっと大きい。それが大アイランドだ。

大きな島の東から北へ、ミュラー山脈が横たわっている。山の裾野(すその)はジャングルだ。川も流れている。滝となって湖に注ぎ、また川となって海に至る。

モンスターだらけのジャングルは怪物密林と呼ばれて恐れられていた。密林の木々はだんだんとまばらになって、怪物の森へとつながっている。その先が、小アイランド。リヴリーたちが夏祭りを楽しんでいる。三日連続のイベントの、今日は中日(なかび)だ。みんなで盛り上がって、浮かれている。

パークはたくさんのリヴリーで大賑(おおにぎ)わいだろう。ショップにもわんさかと詰めかけているにちがいない。

ルビーローズのパキケフーズ。

マハラのマハラショップ。

チャパティのやどかり亭。

パキケフーズとやどかり亭では、夏祭り限定のおい

しい食べ物を売り出している。パキケフーズではケセランパサランの綿菓子を。やどかり亭ではフウセンコガネのたこ焼きを。

マハラショップでは、なにやら怪しい当て物を売りつけているはず。一見すると、ただのカプセル。中身は外から見えないが、企画したマハラに言わせると、当たりと当たりと当たりが入っているそうな。それでは外れはないのかと念を押せば、そっぽを向いて口笛を吹く始末。

そんな楽しい夏祭りに、ルビーローズ一味は参加していない。ここが狙い目と踏んで湖底探査作戦を決行したのだ。

とはいえ、管理リヴの三人がいないと騒動になる。そこで、ショップには身代わりを立てておいた。事情をまったく知らない熱心なファンに変装させ、バイオレコードの偽造までして、ダミーとして店番に置いてきた。

ダミーたちは大喜びで引き受けた。憧れの管理リヴになりきって、夢にまで見たショップを切り盛りできるのだ。これ以上の祭りはあるまい。

かくして、ルビーローズ一味は小アイランドを抜け出した。いつもどおりにショップで働いていると見せかけ、いまは怪物密林にいる。この日のために建造した自慢の潜水艇で、湖底探査に挑んでいる。

初日の昨日は、ヤゴにまとわりつかれて撤収（てっしゅう）した。

中日の今日は、入れ替わり立ち替わりモンスターが現れたものだから、逃げ帰ってきた。

残るは明日、一日（いちじつ）のみ。

だが、無理をする気はなかった。三日しかないのは夏祭りだ。明日もだめなら、次の機会を待てばいい。

湖の南がかすかに明るい。入り組んだ地形のせいで湖面は見えないが、光る湖に岸の樹木がうっすらと照らされている。水中でなにかが光っているのはまちがいないが、南の一角は特に危険なので湖岸探査は断念している。水上から接近するのは困難だから、あとは潜って調べるしかない。

そのためにはまず、バッテリーを充電しなければならない。魚雷やデコイ・シロップの補充も必要だ。

メンテナンスはある程度すませてある。

水中で転覆したり、空高く舞い上がって着水したり

と、船体にはかなりの負荷がかかっている。だからブンカーに帰投したあと、すぐにメンテに入った。日没間近になって作業を中断し、マハラとチャパティは風力発電のため川を遡(さかのぼ)った。ルビーローズは単独で哨戒(しょうかい)任務に就いた。

ブンカーとは潜水艇の基地のこと。

怪物密林のモンスターを避け、ミューミュー一派にも見つからないように、地中に建設してある。

ルビーローズは上流に向かって歩き始めた。

オーロラライトで足元を照らした。暗闇で輝くオーロラダイヤを棒状に削りだして、細長い容器に詰めてある。調光器を取り付け、懐中電灯として使えるように加工してある。

青白い光が岩を照らした。岩場で歩きにくくても、川岸はまだ安全だった。右側には密林が広がっている。左側には急流が下っている。

岩の裂け目をまたぎ、段差を飛び降りた。地面は揺るぎもしないが、ずっと下にはぽっかりと大きな空洞がある。

ルビーローズはいま、ブンカーの真上を歩いている

のだった。

船着き場についた。

堤防のように突き出した巨石の陰に砂が堆積して、浜辺ができている。

ボートはなかった。マハラとチャパティはまだ戻っていない。

ルビーローズは巨石に登った。遠くに明かりが見えた。川を下ってくる。今度はホタルではなかった。見えたのはオーロラライトの光だ。まっすぐに進んでいる。

どうやら急いでいるらしく、かなり飛ばしているのが見て取れた。ルビーローズは警戒した。ボートの後ろに敵がいて、追われているのかもしれない。

しかし、チャパティが船首で手を振ったのを見て、警戒をゆるめた。船尾で操縦するマハラが調子に乗って飛ばしたのだろう。そうにちがいない。

溜息をひとつ漏らして、ルビーローズは砂浜に降りた。

ボートは砂浜に乗り上げて止まった。

底の平らな滑走艇(かっそうてい)だった。船体はそれほど沈まず、水面をすべるように走る。しかも、紅月丸と同じ鋼鉄船だった。キルリアン鋼で造ってある。

川には岩もあれば、石もある。天然の川岸は上陸できる場所も限られる。そんなところでモンスターに襲撃された場合を想定して、チャパティが鋼鉄製の滑走艇を提案した。いざというときには、岩を乗り越え、石の川原に乗り上げてでも逃げられるようにと。

いくら硬い船底を持っていても、岩を乗り越えたときにスクリューが壊れたのでは意味がない。そこで、ボートにはウォータージェット推進器が採用された。船底から吸い込んだ水を、インペラという特殊なプロペラで増速(ぞうそく)し、船尾から噴射する。ステアリングノズルで噴射の向きを変えられるから、舵(かじ)もいらない。

そんなわけで、マハラの乱暴な操縦で砂浜に乗り上げても、ボートが壊れる心配はなかった。

「姐御！　すげえもん、見つけちまったぜ！」

マハラが低い屋根の下から顔を出した。

ボートにはパンチングメタルの屋根があった。パンチングメタルは穴あき鉄板だ。穴をあけて軽量化して

あるのだが、その穴に針金を通して、枯れ枝をくくりつけてあった。鉄板の屋根でモンスターから身を守り、くくりつけた枯れ枝で目立たないように擬装(ぎそう)してある。

「すぐ近くでい！」

マハラはボートから降りようとしない。すげえもん、とやらを見せたくてたまらないようだ。

「……しかたがありませんわね」

チャパティまでボートにとどまっているので、ルビーローズはしぶしぶつきあうことにした。マハラはともかく、チャパティまでこだわるからには、よほどのことだろう。

体を折りたたむようにして屋根をくぐり、ルビーローズはボートに乗った。船首には見張り役のチャパティ、船尾には操縦役のマハラがいるので、バランスを取って中央に座った。

床はチェッカープレートだった。マハラ特製の鋼板にすべり止めの突起がつけられている。×印を分解したような二本の斜線が、交互に盛り上がっている。非常階段などで似たような鉄板を目にする。

ルビーローズが乗り込むと、マハラが降りた。呪文

で小さくしていた体を大きくして、ボートを手で引っ張り、川に戻した。そしてまた、小さくなってボートに乗った。

いそがしい男だった。巨漢で怪力なのは頼(たの)もしいが、ひとりだけ図体(ずうたい)がでかいと、なにかと都合が悪い。潜水艇でもボートでも、マハラだけが規格外だ。けれども、不思議と文句は言わなかった。巨漢であるがゆえの不都合には、慣れっこなのかもしれない。

三人を乗せたボートは川を遡った。

気がつけば、月が出ていた。川面が月の光に照らされている。

月明かりで充分と判断して、見張り役のチャパティはライトを消した。

夜の川上りはなかなか風情(ふぜい)があったが、たいして進まないうちに目的地に着いた。川縁(かわべり)の淀(よど)みにボートは進入した。地形のせいでそこだけ水の流れが遅く、沼のようになっていた。

マハラはスピードを落とした。チャパティは屋根から竹竿(たけざお)を下ろして川底や岩を突き、船を操った。

ボートが止まった。

「見なよ、姐御」
マハラは岸に生えた木にライトを当てた。
「？」
なにもなかった。ルビーローズは小首をかしげた。
幹（みき）と枝と、葉しか見えない。
「よく見なって。真ん中にあるやつでえ」
マハラはライトの光をくるくる回した。
「あれかしら……？」
明かりの中央に、なにかがあった。確かにそこだけ、木とはちがう感じだ。黒くて、黄色くて、白い。白いのは綿（わた）だろうか。
「あっ！」
思わず、ぞっとした。
モンスターのオニヤンマだった。木の枝にぶら下がったまま、死んでいる。
死体から、変なものが生えている。
すぐにわからなかったのは、羽が抜け落ち、頭がもげていたからだ。目立つパーツがないと、トンボの細長い胴体は幹か枝に見える。それでも、よく見れば胸と腹の形からトンボとわかった。枝につかまっている

脚も確認できた。
黒と黄色はオニヤンマの体色で、白いのはカビのようだった。胸や脚にびっしりと生えている。頭のもげたところでは山盛りになっている。
ほかにも、腹部の黄色いところから、トゲのようなものが何本も生えていた。そこには節があるから、体の中から芽が出たように見える。
「あれはよ、ヤンマタケって言うんでい。キノコがオニヤンマに取り付いて、食い殺しちまったのよ。トゲみたいに生えてるのが、そのキノコな。サナギに取り付くサナギタケなんてのもあるんだぜ。白いのは虫殺しのカビよ。そんで、冬は虫でも夏には草になっちまうから……えっと、なんだっけ？　そうそう、豆乳仮装って言うのよ」
「冬虫夏草です」
「そう、それ」
豆乳の仮装をしてどうする。
マハラのへんてこりんな言いまちがいを、チャパティがすかさず訂正した。
なんのことはない。マハラにしては妙に博識だと思

ったら、すべてチャパティの受け売りだった。もっとも、キノコが食い殺すだとか、いささか脚色されているようだが。

「よく見つけましたわね」

ヤンマタケはずっとそこにあったはずなのに、いままで誰も気づかなかった。胴体だけなら枝のようだし、キノコやカビが木に生えていても当たり前すぎて、まわりの景色に溶け込んでしまう。

「今日はたまたま、ホタルの野郎が上の枝に止まってたんでえ。尻の明かりでヤンマタケがよ、ちょうど浮き上がって見えたのよ。な？」

マハラはチャパティに同意を求めた。

「おいらたちが近づいたら、ホタルは逃げていったです」

「ああ、それで。さっきのホタルかしらね」

「でよ。これってけっこう、やばくねえか？」

「あら？　どうして？」

冬虫夏草とは珍しいことだが、オニヤンマはすでに死んでいる。なにがどうやばいのか、ルビーローズにはぴんと来なかった。

「この菌をうまく使えば、モンスターを殺せるぜ」
「細菌兵器……！」
ルビーローズは言ってから、自分の口を手でふさいだ。
「もちろん、おいらたちはそんなことしないです。ミューミューたちも、やらないと思うです」
「そうね。あの人たちはミュラー博士に忠実ですもの。博士が作ったこの世界を、モンスターのいるこの世界を、破壊するようなまねは決してしないはず」
「けどよ。モンスター皆殺しを考えてる奴らはちがうだろうぜ」
「……」
ルビーローズは黙り込んだ。
不穏（ふおん）な噂が流れている。あくまでも噂だが、平和を守るとの身勝手な正論を振りかざして、モンスターの皆殺しを企（くわだ）てる連中がいるという。極秘に、殺しの道具や殺しの呪文を開発しているという。
道具を開発しているのは防衛局で、呪文を開発しているのは呪文科学局だと、噂はいう。防衛局の局長はプーケだ。呪文科学局の局長はジュリエットだ。つま

り、リヴリーアイランドの支配者であるミューミュー一派を、子飼いの幹部職員たちが裏切ろうとしている――と。

だが、この噂は管理リヴ委員会の議題に上り、正式に否定された。ジュリエットは法務局の公安調査室に命じて、呪文科学局を内偵させている。プーケは防衛局の諜報部隊を使って、幹部職員のエリート武官たちを洗わせている。特に、プーケは念入りに調べさせた。独断専行をしたエリート武官が許可なく部隊を動かした事件なら、前にも起こっている。

結果はシロだった。噂を裏付けるものはなにも出なかった。

それでも噂は沈静化しなかった。逆に、公安調査室や諜報部隊の目もかいくぐる組織なのだと、尾鰭をつける結果となった。

「……でも。そんなこと、あの子たちが許しませんわ。きっと」

「ああん？　誰でえ、そりゃ？」

「今度の、新しい保安官たちですわ」

「って、姐御！　保安官選挙なら明日が投票日じゃね

えか。まだ決まってねえって」
「いいえ。わたくしにはわかります。あの子たちには勢いがありますもの」
「そりゃまあ、勢いはすげえよな。前の悪徳保安官をリコールするのに、演説会場に送り込まれた暴漢を一発でぶっ飛ばして、壇上からよぉ、クソ保安官の野郎にケンカ売りつけやがったもんな。姐御にそっくりだったぜ、あんときのどすこい娘はよ」
「あら？　ミミマキムクネより、わたくしのほうがスリムでスタイルもいいけれど？」
「……いや、そっちのそっくりじゃねえから」
「それで、マッハはどちらが勝つと思うのかしら？前職対新人の一騎打ち」
「俺様はクソ保安官の野郎が勝つと思うぜ。選挙に負けたが最後、新しい保安官に取っ捕まって、いままでやらかした悪事のつけを払わなくちゃならねえことぐらい、野郎もわかってらぁな。裏から手を回して、抜かりはねえはず」
「そう。チャッパは？」
「おいらは新人が勝つと思うです」

「なんでえ。おめえもどすこい娘の、もにょりぶを買ってるのかよ。まさか裏でこっそり、りぶたんとか呼んでねえだろうな？　ムクネをおだてると、店の売りもん、ガツガツ食われちまうぜ」
「おいらは選挙参謀のヒナタがすごいと思うです」
「あの別嬪さんかよ」
「前職のリコール運動はヒナタがリーダーだったです。りぶたんはボディガードだったです」
「お。この野郎、やっぱ愛称で呼んでやがる」
「でも、りぶたんが暴漢をやっつけて、前職にケンカを売って人気が出たので、ヒナタは裏方に回ったです。あの判断はすごいと思ったです。ほんとは自分が次の保安官に立候補する予定だったはずです。なので、リコール運動もリーダーやってたです。それをあっさり降りて、相棒のりぶたんを立てたです」
「選挙の戦い方をわかっているのね」
「ヒナタは、目的を果たすためなら平気で自分を犠牲にできるです。簡単そうに思えて、簡単にできることじゃないです」
「それだけ、りぶたんを信頼しているのですわ。だっ

て、あの子たちは幼なじみの親友でしょう？」
「親友といやぁ、ここに来る前におもしれえ話を聞いたぜ」
「なにかしら？」
「ピキのヒナタは、前にいた防衛隊じゃあ、ちったぁ名前の売れた凄腕（すごうで）の別嬪さんだよな」
「そうです。トップスナイパーのひとりだったです」
「……」
マハラの意見をチャパティは肯定（こうてい）したが、ルビーローズは沈黙で答えた。他人を別嬪だと認めることに、女として抵抗感があるようだ。
「俺たちゃ、似たような奴を知ってるはずだぜ。ピキで、防衛隊で、ちったぁ名前の売れた、凄腕のイケメンをよ」
「……え？　まさか？」
「その、まさかよ。奴の妹だって話よ」
「……そう」
「へへっ。どうでえ？　俺様の情報網はよ」
「……」
マハラは得意気だったが、チャパティは口を閉じた。

「そうだったの。ヒナタは妹さんなのね。……あの人の、親友の」

ルビーローズは山を見た。

ミュラー山脈を月の光が照らしている。

主峰(しゅほう)のローズ・ピークが天を突いている。

ルビーローズの名前を山の頂(いただき)につけたのは、ルビーローズ本人ではなかった。マハラでもないし、チャパティでもない。

リヴリーアイランドで一番高い山の頂に、初めて立って、そこをローズ・ピークと命名した男は、山から下りてこなかった。

2

野心家のエリート武官がいた。

次席防衛武官まで進んだが、さらに上を望んでいた。

あとひとつ昇れば、防衛局職員としての最高位である主席防衛武官となる。

だが、エリート武官はもっと高みを望んだ。職員の地位を飛び越え、管理リヴとなることを目指していた。

局長のプーケに逆らう気はなかった。防衛局を乗っ取るつもりもなかった。管理リヴになれるのであれば、担当部門はどこでもよかった。ただ地位がほしいだけの、小物だった。

管理リヴの登用試験は受けたが、不合格だった。これがまた、エリートとしてのプライドをひどく傷つけた。合格者には、女ヤクザがいた。図体と態度だけはでかい粗忽者(そこつもの)がいた。無駄に知識をひけらかす、鼻持ちならない鼻の長い者がいた。

なぜか、役に立たない人材ばかりが選ばれている。防衛局ナンバー3である自分は不合格なのにだ。

エリート武官は抜け駆けを企んだ。

人跡未踏の怪物密林を縦断し、ミュラー山脈主峰の初登頂を計画した。

山に登れば、その裏側にどんな世界があるのかを知ることができる。山の向こうにもジャングルが広がっているという者もいれば、山の向こうは海で、頂上からは遠くに浮かぶもうひとつの島を見ることができるという者もいる。

登れば真実はわかる。快挙(かいきょ)である。人々の賞賛(しょうさん)を

浴びるだろう。英雄を邪険にもできず、管理リヴ委員会はポストを用意するにちがいない。そこまでうまく事が運ばなくても、英雄が忠誠を誓えば、プーケは裏で手を回してくれるかもしれない。

幸い、エリート武官には手駒がそろっていた。

こんなときのために、早くから優秀な隊員に目をかけておいた。上から引きあげてもらって出世できなくても、下から押しあげてもらって出世するのが狙いだった。

さもしい思惑も知らずに、目をかけられた隊員は光栄に思って、エリート武官の部下となった。

計画の前段階として、エリート武官は特殊部隊を創設した。

専守が旗印の防衛隊に、攻撃的なハンター部隊を作り上げた。提案しても、初めはプーケに拒絶された。エリート武官は得意の武器である舌を最大限に活用した。専守防衛ならぬ「専攻防衛」という概念までこしらえた。

先制攻撃をするのではない。攻撃されるその前に、防衛のために打って出る部隊だと力説した。敵が仕掛

けてくるにしても、事前に回り込んでおいて背後から挟撃(きょうげき)できれば、戦いを早期に終結できる。そのためには、進撃部隊が不可欠なのだと。

一理あった。それに防衛のための攻撃は、プーケの望むところだった。剣を捨て、盾(たて)だけを持つのであれば、その盾で殴ればよいではないか。なにも斬りつけられるのを待つ必要はない。かつてプーケはそう語ったことがある。

エリート武官は得意の舌で、総司令官を刺した。やわらかい舌で刺されたとは気づきもしないで、プーケは部隊の創設を認めた。

こうして、山岳猟兵団(さんがくりょうへいだん)と密林猟兵団が誕生した。

エリート武官は人目もはばからずに、新部隊の指揮官に自分の部下を送り込んだ。もっとも、この人事に異議を唱える者はいなかった。部下はふたりとも、猛者(もさ)として防衛隊の誰もが認める実力者だった。名ばかりのエリートにはもったいないほどの男たちだ。

ふたりの団長は親友だった。エリート武官の勧めもあって、幾度となく合同訓練をし、部隊の連携(れんけい)を深めた。上官の胸に秘められた野望のことなど、知る由も

なかった。
防衛隊総司令官のプーケはときどき所在不明となる。同時に、ミューミュー一派も全員がいなくなる。管理リヴ委員会はただの飾りで、ミューミュー、ジュリエット、プーケ、ダークヤグラの四人がリヴリーアイランドを支配していると、幹部職員なら誰もが知っている。一派だけで秘密会合を開くから、そろっていなくなるのだ。
なにか不都合でも起きたのか、珍しく長期不在が事前通達された。主席防衛武官が留守を預かることとなった。大幹部のプーケとちがって、主席防衛武官は与(くみ)しやすい相手だった。席がひとつ上なだけ。
エリート武官は動いた。
密林縦断・主峰登頂計画が承認されるわけはなかった。これを提案すれば、部隊創設の真の狙いがばれてしまう。総司令官を謀(たばか)ったことが露見(ろけん)してしまう。プーケの留守を狙って、勝手にやるしかない。独断専行である。
成果さえあげてしまえば、あとはどうとでもなる。問題は、ふたりの団長が首を縦に振るかどうかだ。エ

リート武官はここでも舌を使った。部下たちは上官を信用していたが、上官は部下を信じていなかった。もともと、出世のために利用するつもりで目をかけたのだから、信義など論外だった。

いかにだますか。エリート武官の舌はなめらかに動いた。

野心を隠しすぎても逆に怪しまれるだろうと、主席防衛武官の椅子を狙っていると打ち明けた。そのために立案した作戦で、局長の承認は得たとうそをついた。ただし、失敗しても公にはできないから、隠密作戦になったと帳尻を合わせた。成功すれば、初めて公にされるのだと。

さらに、主席防衛武官はいい顔をしなかったと、もっともらしく付け加えた。妨害工作の恐れもあるが受けて立つと、雄々しく振る舞って見せた。

だが狡猾にも、山岳猟兵団の団長にだけ話した。豪胆な団長だったが一途なところもあり、籠絡の目処はついていた。

山岳猟兵団の団長は、ルビーローズに惚れ込んで熱心にアプローチしては、袖にされている男だった。ふ

られても、ふられても、懲りずに明るく挑み続けるのだから、笑う者はいなかった。それどころか、応援する者が多数だった。

エリート武官は話の最後に、舌でとどめを刺した。局長が約束してくれた。初登頂に成功したなら、ミュラー山脈の主峰に好きな名前をつけてもよいぞ、と。

このひと言で、山岳猟兵団の団長は落ちた。その場でローズ・ピークと名前まで決めてしまい、親友の説得を買って出た。

密林猟兵団の団長は、親友の熱心な説得に苦笑してうなずいた。熱のこもった友の話は、ほとんどルビーローズの話だった。

二個猟兵団を率いて合同訓練に出るというエリート武官を、主席防衛武官は止めなかった。むしろ、厄介払いができるとほっとした。訓練の成果を見届けるために調査隊を同行すると聞かされても、不審に思わなかった。どうせ、部下に作らせた報告書を局長に渡して点数稼ぎをするのだろうと決めつけた。

二個猟兵団と調査隊はすんなりと出発した。目的地を悟られないように、まずは東に向かって海岸沿いを

進んだ。海に注ぐ川にぶつかったところで、本当の目的地を明かした。密林を縦断し、主峰に登頂すると聞かされて、一同はざわついたが気後れする者はいなかった。

山岳猟兵団と密林猟兵団は特殊部隊である。団員は選りすぐりのコマンドだ。困難な作戦であろうとも尻込みはしない。

調査隊も、学術調査の好奇心があった。それに特殊部隊がガードしてくれるのだから、心強い。

一行は北に転進し、怪物密林へと分け入った。

先頭は密林猟兵団だった。団長は扇形攻囲戦術を採用した。進行方向に対して扇形に展開し、広く索敵する。モンスターを発見したら、避けられるものは当然避け、回避不能とみれば包囲して攻撃した。

開いた扇の後ろを山岳猟兵団と調査隊が続いた。調査隊を中央に置いて、山岳猟兵団は菱形に展開した。

激しい戦闘もあったりして怪我人は出たが、ひとりも欠くことなく、山麓にたどりついた。

密林縦断計画は成功したのだった。

ここで、一行は二手に分かれた。密林猟兵団は山麓

に残留し、前線基地を構築することになった。また、調査隊も一部が残って周辺を調べることになった。

山岳猟兵団と調査隊本隊は、主峰の頂上を目指して夜明けとともに出発した。

同時に誕生した双子の猟兵団は離ればなれとなった。そして、行動をともにすることは、二度となかった。

主峰登頂計画は驚くほど簡単に成功した。山登りはきつかったが、モンスターには出くわさなかった。行く手を地形に阻(はば)まれて、途中でルートを変更した程度のトラブルしか起こらなかった。

先頭をゆく団員は、頂上直前で足を止めた。初登頂の栄光は団長のものだ。主峰にローズ・ピークと名前をつけて、それを手土産に、懲(こ)りない団長がまたルビーローズにアプローチする話はすでに全団員の知るところだった。当の本人がうれしそうに吹聴(ふいちょう)して回るのだから、聞きたくなくても聞こえてくる。

団員たちの声援と冷やかしを背中に受けて、山岳猟兵団の団長はひとりで登っていった。恋する猛(もさ)者は、リヴリーアイランドで一番高い山の頂に、初めて立って、そこをローズ・ピークと命名した。

団員たちも団長に倣(なら)った。頂上の岩や石に、恋人の名前をつけた。恋人のいない者は、しかたがないので母親の名前をつけた。みんなに笑われた。ひとりだけむきになって、母親じゃないと言い張った。彼女もいないくせに、じゃあ誰だと聞くと、死んだおばあちゃんだと答えが返ってきた。みんなで合掌(がっしょう)した。

頂上を極めて、山岳猟兵団は浮かれていたが、調査隊は浮かない顔だった。ガスのせいで見晴らしが悪かった。頂上は雲をかぶっていた。これでは、ミュラー山脈の裏側にどんな世界が広がっているのか、観測のしようがない。

特にエリート武官は不機嫌だった。

調査のためと称して、頂上に滞在する時間を引き延ばした。ガスが晴れるのを待つと粘(ねば)った。山岳猟兵団の団長は不承不承したがった。

ガスは晴れた。雲は流れ去っていった。世界が見えた。山の向こうにジャングルはなかった。ミュラー山脈はそのまま、海へと落ち込んでいた。

調査隊から声があがった。この海は深いぞ、と。もしも海が浅いのなら、海岸には平地が広がっているは

ずだ。山裾(やますそ)に平らな土地が見えるはずだ。しかし、頂上からは海しか見えなかった。波に削られて、海岸線には多少の平地があるかもしれないが、基本的に、山は海の底まで続いていると考えられた。

動揺が広がった。噂のひとつが的中していたのだった。

山の向こうは深い海で、ミュラー博士の夫人の名を取って、ジュリエット海溝(かいこう)と呼ばれている、との噂だった。

エリート武官は一笑に付した。そんなものはただの偶然だ。山を下りれば、そこは陸か海のどちらかだ。二分の一の確率で的中する。海なら、浅いか深いかのどちらか。確率はやはり二分の一。すなわち、深い海との予想は四分の一という高確率で的中するわけだ。ペテン師が四通りの噂話をでっち上げれば、ひとつは必ず当たる。そうして、予言者や霊能者は誕生するのだ。だまされるな、と。

詭弁(きべん)に真理を混ぜて、もっともらしく見せかけてあった。話の前半は、意図的に選択肢をせばめてある。確率が高くなるように話を持っていっただけのこと。

そんな詭弁を、後半の真理で丸め込んだ。必ず当たるように仕組んでおいて、予言者や霊能者を装うと事実を突いた。だまされないように忠告して、話を締めくくっている。

どちらがペテン師かといいたくなるが、動揺した兵を静めるにはそれでよかった。話は単純化されていて、わかりやすい。

だが、動揺はさらに広がった。

水平線の彼方に、もうひとつの島が見えたのだった。

ジュリエット海溝の存在を言い当てた噂は、そのあとに、こう続けている。深い海の向こうには、もうひとつの島がある。島の名はモンスターアイランド。またの名を魔島（まとう）という、と。

怪物の島だから、モンスターアイランド。リヴリーアイランドに巣くうモンスターたちは、自分たちの島を追い出された、か弱い怪物なのだと噂は教えてくれる。つまり、海の向こうにある島には、もっと恐ろしい怪物たちがいるのだと。怪物というよりも、もはや魔物。ゆえに、魔島と呼ぶ。

島が見えると、エリート武官が激しく動揺した。

防衛局ナンバー3の男は、幹部職員にだけ流れる秘密の噂を耳にしていた。

魔島は流刑地(るけいち)だった。リヴリーはリヴリーを殺せない。そこで魔島に島流しにして、モンスターに始末させる刑罰ができた。見てはならないものを見た者、聞いてはならないことを聞いた者、都合の悪いことを知った者が、怪物の島に送り込まれる。

いったい誰が、そんなことをするのか。それは聞くまでもなかった。巨大な秘密を抱えて暗躍(あんやく)できるのは四人しかいない。ミューミュー一派だ。

エリート武官の足がふるえた。

密林縦断・主峰登頂計画は成功した。頂上に立ってみれば、拍子抜けするほどに簡単な偉業(いぎょう)だった。それなのに、過去になしえた者はいない。ミューミュー一派がそれを許さなかったから、密林を縦断した者もいなければ、山に登った者もいないのだ。密林を抜ければ、山に登りたくなる。山に登れば、島が見えてしまう。流刑の島が。

エリート武官は見てしまった。都合の悪いことを知ってしまった。自分ひとりなら、胸に納めておけば命

は助かるかもしれないが、二個猟兵団と調査隊を率いて禁忌(きんき)を犯した。

口封じは不可能だった。その証拠に、噂ならすでに流れている。ジュリエット海溝の存在も、魔島の存在も、埒(らち)もない噂としてなら、すでに流布(るふ)している。真実を見聞きした者はだまっていられない。

独断専行の愚かさを、エリート武官は思い知った。なにもかも手遅れだった。次席防衛武官まで昇進したのに、未来は閉ざされてしまった。この先、待っているのは島流し。おまえは死ねとの、極刑だ。足のふるえは、もう止まらなかった。声を出せば、のどのふるえが音になった。視点が定まらずに、目までふるえはじめた。エリートとは名ばかりの、小物だった。

山岳猟兵団の団長はすべてを悟った。上官のメッキはもう剥(は)がれた。なにもかも、うそだった。全部、口からでまかせ。部隊は、目の前でふるえている男の独断で動かされたのだ。秘密を知っておびえる哀れな男を、怒る気にはなれなかった。その価値すらない。

主峰の登頂はこれが初めてではないとわかった。頂上から山の裏側を眺めた噂が正確だったのだから、過

去に誰かが登っている。頂上に立ち、帰還し、噂だけを残して闇に消えている。

団長は天を仰いだ。初登頂でなくてもかまわなかった。偉業など、どうでもよかった。ただ、ルビーローズのことを思った。ひとりで反対側を向いて、遠いパキケフーズに思いを馳せた。

もう一度、会いたい。あの笑顔を見たい。だから、下りる。部下を連れて、ひとりの落伍者も出さずに、帰還する。どんな裁きが待っていようとも、ルビーローズに会えさえすれば……。

どよめきが起こった。

魔島で異変が発生した。

黒い煙が島から立ちのぼった。まっすぐ昇って上空で滞留すると、ひとかたまりになって水平移動を始めた。動きに意志が感じられた。煙が風に流されたとは思えなかった。

あれはモンスターだ！　モンスターの群れだぞ！

誰かが叫んだ。言われてみれば、確かにそう見えた。

モンスターの群れは雲に突入した。進行方向にたまたま雲があっただけで、通り抜けるものと思っていた

ら、そうはならなかった。雲の中からパラパラとこぼれ落ちるものがあった。通り抜けるモンスターは一匹もいない。

戦争だ！　モンスターの軍団が、雲の中にいるなにかと戦争をしているぞ！　また誰かが叫んだ。実際、そうとしか思えなかった。

エリート武官がつぶやいた。

――こうてんのしろ。

ふるえる声で、そう言った。

「しろ」とは城のことだろうか。戦争をしているようだから、城ならぴったりくる。「の」は「こうてん」と「しろ」をつないでいるとわかる。とすると、「こうてん」の意味は？

空にあるのだから「天」が入るように思う。高い空だから「高天の城」だろうか。それとも、天気がいいから「好天の城」だろうか。どちらもしっくりこない。ならば、「荒天の城」か。これなら勇ましい感じはする。しかし、雲の中が大荒れなら、重たげな黒雲になるのではあるまいか。モンスター軍団が突撃したのは、ただの白い雲だ。そこいらの空にも浮かんでいるよう

な、ありきたりの雲だ。
字はわからないが、城でまちがいはないようだ。
天空に攻め上ったモンスター軍団は敗北したらしく、しばらくすると異変は収まった。海には島が浮かび、空には雲が浮かんでいる。のどかな光景だった。
山岳猟兵団の団長は下山を指示した。
頂上での滞在時間を引き延ばされ、モンスター軍団の戦争に目を奪われて、すっかり予定が狂ってしまった。どんなに急いでも、山麓にたどりつく前に日が暮れる。夜の山を下りなければならなかった。
下りは登りほど時間がかからない。だが、一行の足取りは重かった。登ってくるときとは打って変わって、雰囲気が暗くなっている。
そんな暗い雰囲気に引きつけられたのか、死に神が忍び寄ってきた。
天候が急変した。
風が出た。冷たい風だった。気温が一気に下がった。風速は見る見る強まって、嵐となった。雨が当たると痛かった。待避(たいひ)できるような場所はなかった。吹きさらしだ。立っていると風に飛ばされそうになった。這(は)

って進むしかなかった。
冷たい風が体温を奪ってゆく。雨はみぞれとなった。みぞれは雪に変わった。吹雪が世界を白一色に塗り替えた。
少し下りて風の当たりが和らぐと、調査隊が勝手にテントを取りだした。風に煽られ飛ばされて、数名が滑落した。救助を後回しにすれば、夜が明けるまでに凍死するだろう。持ちこたえたとしても、天候が回復するとは限らない。雪がやむ気配はない。温かい地面に溶かされながらも大地を冷やし、雪は確実に降り積もってゆく。
見捨てて下山するわけにもいかず、団長は部隊をふたつに分けた。調査隊を帯同して三個小隊に先行させた。場所を選んで待機し、後続を待つよう厳命した。残した第一小隊は負傷者の救助に当たらせた。団長は救助隊を指揮した。
救助に手間取っていると、伝令がやってきた。ガレ場で風をしのげたので待機しようとしたら、エリート武官が下山を強行したとの知らせだった。麓に下り、密林猟兵団を救助に向かわせると主張して、調査隊を

率いていったと。その際、道案内として山岳猟兵団の半数に当たる二個小隊が同行するよう脅(おど)しをかけたとのことだった。

防衛局ナンバー3の次席防衛武官には誰も逆らえなかった。救助要請も筋が通っている。後続支援のために第四小隊を残して、先行隊は下山した。二隊に分けた部隊は、さらに三隊に分かれてしまったのだった。

団長は自分のミスに気づいた。痛恨のミスだった。救助は部下に任せて、口先だけの権力者には自分が付くべきだった。

なんとか負傷者を救助し、エマージェンシーストレッチャーに収容した。山を下って、ガレ場で待機組と合流した。岩や石がごろごろしている危険な場所だったが、地形の影響なのか風は弱かった。だが、落石が起こらないとはいえない。

先行隊を追いかけて合流することにした。負傷者の搬送(はんそう)は、体力を温存していた待機組に担当させた。

先を急いだが、なかなか追いつけなかった。

団長は合流を断念した。雪はどんどん深くなる。雪の上に、先行した隊の足跡はなかった。かなり先を進

んでいるものと思われた。それに、そろそろ日も暮れる。ビバークすることにした。

強風のため、テントは張れなかった。林に入って風をよけ、体温の低下を防いだ。水分と食糧を補給し、夜明けを待った。

眠ることは許されなかった。

疲れた体を横にもできずに、雪の中をただ立っているのはつらい。そこここで、ひそひそと雑談が始まった。

この計画はなんか変だぞ。実は無断じゃないのか。いまごろ気づいたのかよ。お偉いさんが勝手に部隊を動かしたのさ。俺たちに言ったことは全部うそなんだぜ。やばいもん見ちまって、あの野郎、帰りはずっとだまりこくってたじゃねえか。なんだよ、やばいもんって。よく知んねえけどよ、モンスターが攻撃してた雲の中に、城があるんだってよ。そんなもん見ちまって、俺たち帰ったらどうなるんだよ。無事に帰れてから心配しろよ。遭難しといて、なに言ってんだ。やっぱりこれって遭難なのか。救助隊は来てくれるよな。バカ、おまえ。俺たちがこんなところにいるなんて、

誰も知らないんだぞ。救助隊なんて、来るもんか。
すっかり士気がゆるんでいた。団長は怒鳴りあげた。
我々は山岳猟兵団である。山では最強の部隊だ。遭難などしない。必ずや、自力で下山する。麓(ふもと)には前線基地がある。友軍が我々の帰りを待っている。ささまらは、密林猟兵団の男たちに泣き顔を見せるつもりかっ！
ひそひそと話す声は消えた。特殊部隊の猟兵たちは、白い夜を無言で耐えた。
夜が明けた。風は収まったが、雪はちらちらと降り続けた。出発の準備をしていると、山を下りてきた者がいた。
調査隊とともに先行しているはずの団員だった。
話を聞いて、耳を疑った。
下山を強行したエリート武官はルートまで強制していた。呆(あき)れかえったことに、道に迷うと同じ場所をぐるぐる回るものだから、意志の力でこれを修正すると唱えて、強引に進路を変更させていた。雪で一変した景色にうろたえているのは、誰の目にも明らかだった。
しかも、崖(がけ)に行く手をさえぎられると、今度は引き

返して再登頂せよと命令した。山の裾野は広くても、頂上は一点。下山中にルートを見失っても頂上まで戻れば、一から出直すことができる。帰路は見つかる。と、したり顔で語ったという。

でたらめな指揮に、調査隊の臆病者が輪をかけた。早く下山したいばかりに、ルートが見つかったと主張した。根拠も示さずに、科学的に判断してまちがいないと断言した。結果、頂上まで登り返す途中で、再び下山が始まった。

山はどこでも歩けるわけではない。下りたら最後、登り返せない場所だってある。そうなると、進路を誤ったと知ってなお、進むしかなくなる。

反対意見は通らなかった。意見具申を許可されても、話し始めるとすぐに怒声を浴びせられ、沈黙に追い込まれた。意見は言うだけ、無駄だった。

理論を優先して現実を無視し、障害を克服するのに権威をもってするのだから、本当に情けない男だった。

雪の山中を上へ下へと迷走する間に、滑落や脱落が続出した。動けない者に手を貸すと、今度は手を貸した者が動けなくなった。エリート武官は言った。いま

は先にゆく。あとで迎えにくるから、そこで待てと。雪よりも冷たい言葉だった。

仲間を見捨てながら迷走した先行隊は窪地にはまった。四方を傾斜のきつい坂に囲まれて、身動きが取れなくなった。挙句の果てに、周囲より低いその場所でビバークすると言い出した。降り積もった雪が崩れて、斜面を流れてくる恐れがある。

雪崩の危険性を指摘しても、低い坂におびえるなと一喝された。夜が明けても、雪は崩れなかった。そら見たことかと、部隊を遭難に追い込んだ張本人は自分の判断に満足した。

疲労困憊して動きたがらないくせに、エリート武官は口だけは達者に動かした。一個小隊を窪地から脱出させ、下山して救助を要請する分隊と、登り返して本隊に救助を要請する分隊とにわけさせた。もちろん、自分は動かないで助けてもらうつもりだ。

そういった事情で、小官らは救助要請のため下山してきたのであります、と分隊長は話を締めくくった。

団長率いる本隊は、迷走した先行隊を追い抜いていたのだった。

結局、部隊は全部で四つに分割されていた。負傷者を運ぶ本隊と、身動きの取れなくなった先行隊、下山分隊、登山分隊の四つだ。そして、下山分隊が本隊に吸収されて、たったいま三つになった。

せっかく合流した部隊を、団長は再分割しなければならなかった。先行隊救助のために登り返す部隊を編制し、負傷者および疲労の著(いちじる)しい者を待機部隊としてビバーク地点に残す。救助隊を選抜していると、下山を申し出た分隊があった。先行隊が派遣した下山分隊は、案内のために救助隊に同行する必要がある。ならば救助要請を引き継いで下山したい。必ず、友軍を連れて戻って参りますと志願してきた。

暖かい山麓で英気を養っている密林猟兵団が駆けつけてくれればありがたい。団長は許可した。これで、部隊は全部で五つに分割されることになった。先行隊救助隊、待機本隊、下山分隊の三つ。それに、動けなくなった先行隊と、自分が最後尾だとは知らずに後ろに救助を求めた登山分隊の二つだ。

待機本隊を残して、先行隊救助隊と下山分隊は出発した。待機する者たちは、姿が見えなくなるまで、下

山分隊を見送った。だが、救助要請のために志願して下山した分隊は、そのまま雪山に消えた。麓の前線基地にたどりつくこともなく、本隊に戻ってくることもなかった。

同じ悲劇は登山分隊にも起こった。最後尾でありながら、後続を探し求めて登り返した分隊は下りてこなかった。大地の白と、空の白との区別がつかずに、頂上を越えてなお、登り続けたのかもしれない。

ちらつく程度の雪は足跡を残しておいてくれた。先行隊救助隊は迷うことなく窪地に到着した。

しかし、窪地はすでになかった。斜面を流れた雪が埋め立てを完了していた。雪の上に残っていた足跡は、雪の下へと続いていた。

それでも救助活動に入った。いつごろ生き埋めとなったのかはわからない。まだ助かるかもしれない。ゾンデ棒を雪に刺し、埋没者（まいぼつしゃ）を見つけ、掘り起こした。冷たくなった仲間の救出はむなしかった。

風が出てきた。雪も本格的に降ってきた。山はまた、荒れ始めた。三人の遺体を回収したところで、救助活動は打ち切られた。エリート武官は見つからなかった

が、惜しむ声は聞こえてこなかった。遺体を整然と並べて安置し、降りしきる雪の中、多くの仲間が眠る地に敬礼した。

先行隊救助隊は待機本隊のところへ戻ろうとしたが、吹雪のために途中で断念した。手分けして雪洞を掘り、待避した。風は吹き止まず、日が落ちた。朝になっても暗いままで、その日一日、そして翌日も動きが取れずに、雪洞に滞留した。四日目の夜明け前になって、ようやく風は収まった。

雪洞を出て点呼を取ると、数は三分の二になっていた。確認された凍死者を足しても、まだ足りない。周辺を探すと、いくつかの雪洞がまるごと全滅していた。死んだ仲間はそのまま放置した。生存者の体力温存を最優先とした。自力歩行の不能な団員が二名いた。ふたりとも搬送を拒否し、雪洞滞留を希望したが、みんなで担ぎ上げてエマージェンシーストレッチャーに収容した。

先行隊救助隊は下山を開始した。

天候はすっかり回復していた。空は青く、晴れ渡っていた。遠くに見える下界は緑色のジャングルだった。

雪など、ちらつきもしなかったのだろう。見るからに暖かそうで、恨めしかった。

腰まである雪を掻き分けて、先行隊救助隊は待機本隊のところに戻った。

すると、今度は待機本隊の姿がなかった。いや、姿はあった。およそ半数に減っていたものの、横たわって雪をかぶり、冷たくなっていた。

ひとりだけ、雪の壁に向かってうずくまる者がいた。口はきけたので、事情がわかった。ただでさえ弱っていたところに、強風でさらに体力を奪われ、低体温症による幻覚・錯乱・昏睡、そして凍死が続出した。死体の横で待ち続けても、先行隊救助隊が戻ってこないものだから、見捨てられた、いや遭難して全滅したと、絶望が広がった。

やがて、統率が取れなくなった。

妄想は伝染する。感応精神病という。

このまま春まで雪は降り続ける。少し下りれば雪は溶けてなくなる。そこまで救助隊は来ている。その証拠にさっき笑い声が風に乗って聞こえてきた。おまえも聞いただろう。

あれこれと希望や憶測(おくそく)や幻覚を並べ立てて、動ける者は先を争って下山を開始した。

こっちが下山ルートだ。いや、こっちから登ってきた。なにをいうか、そこで仲間が手招きしているではないか。

そう言って、みんな、ちりぢりになって下りていきました。でも、無事に下山できたみたいでよかったです。だって、さっき笑い声が聞こえましたよ。自分も手足が温まったら下りるつもりです。

そう話してくれた団員は、雪の中に素手と素足を突っ込んで、温めていた。ようやく異常に気づいた団長が引っ張り出すと、白い雪の中から、黒い手足が出てきた。重度の凍傷だった。

実は、この時点で生存していた登山隊は山岳猟兵団だけで、団長のまわりにいる者がそのすべてだった。総数十八名。うち、自力歩行の不能な重傷者三名。大隊規模だった兵員の八割を失い、山岳猟兵団は小隊並に縮小していた。

待機本隊唯一の生存者を収容して、団長は下山を急いだ。天候に恵まれているうちに、少しでも進んでお

きたかった。
だが、深い雪の中を思うようには進めない。ちりぢりになって下山し、倒れた仲間を見つけたら、生死の確認もしなければならない。
景色は変わらないのに、天候が変わるのは早かった。風雪(ふうせつ)が再び襲いかかってきた。
ここまでずっと団長に付き従ってきた男たちは兵(つわもの)ぞろいだった。滑落者を救助して搬送している。登り返して生き埋めとなった仲間を掘り起こしている。雪洞に潜り込んで耐えてもいる。しかし、そんな男たちも、すでに限界を超えていた。
そこへ、待機本隊唯一の生存者が災いの種をまいた。
笑ってる。ほら、笑ってるよ。声が聞こえる。笑い声だよ。
ストレッチャーの上で、ささやくように独り言を漏らした。誰かに話しかけるわけではなく、自分で自分にささやいている。ささやき続けている。
か細い声が風に乗って、男たちの耳に届いた。
ささやきをやめさせようと、怒鳴りつけたら声はやんだ。しかし、すぐにまたささやきが始まった。相手

は重傷だ。心も病んでいる。手荒なまねはできなかった。怒鳴ることさえ、はばかられた。

だまって聞き流すうちに、幻聴（げんちょう）を聞く者が現れた。

吹雪の中で、確かに笑う声がした。

妄想の伝染が始まったのだった。

だが、男たちは口を閉ざした。この世に存在しない声が聞こえますなどと、弱音を吐くような見苦しいまねはできない。沽券（こけん）に関わる。

口は閉ざせたが、耳は閉ざせなかった。頭の中でどれほど否定しても、笑い声がときおり耳を打つ。声のするほうに思わず顔を向けると、それを見た仲間は妙に安心した。声が聞こえているのは自分だけではなかった。あいつも聞こえている。あいつもだ。

幻聴は、事実として認識されたのだった。

男たちは決して口には出さなかったから、何人が声を聞いたのか、それはわからない。もしかしたら、猛者として知られる団長でさえ、笑い声が聞こえていたのかもしれない。

山を下っていても、地形によっては登りになることがある。行く手をさえぎられて引き返すときは、当然

登りとなる。山岳猟兵団最後の部隊は山中を迷走していた。下るつもりが登ることも多く、下山ルートを探して雪と風の中をさまよっていた。

そして、たどりついた。

笑う者がいる地に。

あの丘の向こうだよ。そこで笑ってるよ。ほら、楽しそうな笑い声だよ。

待機本隊唯一の生存者は、歩けない足で丘の向こうに行こうとした。ストレッチャーから転げ落ちそうになった。

部隊は足を止めた。

自分が見てきますと、斥候（せっこう）を申し出た男がいた。声が聞こえるとは言わなかったが、聞こえないのであれば、見てくる必要はない。

団長はだまってうなずいた。おそらく、すでに全員が笑い声を聞いていたのだろう。反対する者はいなかった。

丘に登った斥候は、下になにかを見つけて、その場にへたり込んだ。問いかけにも答えなかった。団長は自分の目で確認するべく、足を運んだ。団長が動くと、

ほかの者も全員が動いた。そこになにがあるのか、誰もが自分の目で確認せずにはいられなかった。

丘の下には、見覚えのある光景が広がっていた。四方を傾斜のある坂に囲まれている。積もった雪が崩れて、窪地を埋め立てている。雪を掘った跡が残っている。掘り起こした遺体が三体、雪をかぶって転がっている。

そこは、エリート武官と多くの仲間たちが生き埋めとなった場所だった。

なぜ、この場所を知っているのかと、ひとりの男が待機本隊唯一の生存者の、胸ぐらをつかんだ。先行隊の救助に同行しないで待機していたのだから、仲間たちの眠る場所を知るわけがない。

答えは返ってこなかった。胸ぐらをつかんでも、反応はなかった。

山岳猟兵団最後の部隊は総数十七名になっていた。

雪の山中を迷走した挙句に、仲間たちの眠る場所に戻ってきたのはショックだった。だが、整然と並べて安置しておいた遺体が動いているのは、もっとショックだった。遺体の向きはばらばらになっている。

誰が動かしたんだよ。なあ、誰が動かしたんだよ！
ひとりが取り乱した。
バカ者！　団長は一喝した。風に吹き流されたに決まっているだろうが！　誰も動かさん！
安置しておいた遺体に団長はまっすぐ歩み寄った。多くの仲間が眠るその上を、傍若無人（ぼうじゃくぶじん）に歩いた。仲間が眠る事実を忘れたのか、それとも死者に挑戦したのか。あるいは、死の世界に道連れにしようとする者などいないと、おびえる生者に示して見せたのか。
団長が歩くと雪が崩（くず）れた。斜面を流れた雪は規模も小さかった。流れる雪が、その下の雪に染み込むような感じで、すぐに消えた。窪地はすでに埋め立てられている。雪崩（なだれ）の恐れはなかった。
部隊は、団長に続く者と、おびえて逃げる者とに分かれた。団長のそばにいた者は、引きずられるようにして続いた。負傷者を搬送する者も、責任感からか、おびえを克服した。ひとり、またひとりと歩き出して、最後にふたりの男が残った。
ひとりはもうひとりの顔色をうかがいながら、歩き出した。最後に残ったのは取り乱した男だった。男は

自分が最後尾になると、仲間たちに背を向けた。それを見て、もうひとりも逃げ出した。

山岳猟兵団最後の部隊は十五名になった。

団長は自分の手で遺体を整然と並べ直した。部下たちも手伝った。待機本隊唯一の生存者だった男を四人目として安置して、その地を去った。敬礼はしなかった。決別(けつべつ)したのだった。

部隊は山を下りた。

出発点に戻った。

夜明けとともに下山を開始した、今日の出発点に帰ってきた。雪に埋もれた雪洞がある。仲間も眠っている。

日が暮れようとしていた。朝から夕方までの、日中の行動は徒労に終わったのだった。

自力歩行の不能な二名の団員は、改めて雪洞滞留を希望した。これ以上、仲間の体力を奪うわけにはいかなかった。今日の朝、捨てていってくれさえすれば、仲間たちは重い荷物を運ばずにすんだのだ。

ここで救助を待ちます、と男たちは言った。

団長は答えた。ここに、おまえたちを捨ててゆく、

と。

捨てられる男たちは笑顔を見せた。仲間の負担とならないのがうれしかった。

団長は部下の笑顔を見てうなずくと、宣言した。おれが動けなくなったら、おれを捨ててゆけ。これより先、仲間を助けることは許さん。

異議を唱える者はいなかった。限界はとうの昔に超えている。生き残っているのは、自分で自分を切り捨てる覚悟のある者だけだった。

歩けない仲間を置き去りにして、最後の部隊は立ち去った。雪洞を掘ってやることさえ、しなかった。振り返る者もいなかった。

捨てられた男たちは、山を下りてゆく仲間を敬礼で見送った。

山岳猟兵団は十三名になった。

夜になって、待機本隊が壊滅したビバーク地点にたどりついた。壊滅したのは妄想が伝染して統率が取れなくなったからであり、場所に問題はない。積もった雪を掘り下げながら、雪壁を作った。目につく遺体は運び出した。

林の中で高い雪壁に囲まれると、風の影響はほとんど受けなくなった。テントを張って、睡眠を取ることにした。夜が明ければ、天候次第で一気に下山する予定だった。それは今朝も同じことだが、愚痴は出なかった。

愚痴る余裕はなかった。真夜中になると、また笑い声が聞こえてきた。

強い風が木の枝に切り裂かれて鳴っている。そう考えていたら、風の吹く音が消えた瞬間にも笑い声が響いた。夜の山で、誰かが笑っているとしか思えなかった。

待機本隊がおかしくなった理由がわかった。ビバーク初日には、こんな音は聞こえてこなかった。エリート武官が先行隊ともども生き埋めとなってから、声は聞こえ始めている。待機本隊唯一の生存者だった男がそう語っている。

ならば、笑っているのは死んだエリート武官なのではあるまいか。あの男なら、生きている者を怨(うら)んでまとわりつきそうな気がする。

猟兵の最精鋭たちは、笑う夜を耐えた。夜明けには

十三名全員が勢揃いした。熟睡はできなかったが、体を休ませることはできた。

天候は回復しなかった。よくもなく、ひどくもなく、もう慣れたとさえ言えるような状況だった。しかし、全員が下山の意志を固めていた。

天候の回復を待ってこのまま滞留すれば、待機本隊同様に壊滅するだろう。笑う夜に精神がいかれてしまうのは、時間の問題だった。いや、もうすでにいかれているのかもしれない。幻聴だと考える者はひとりもいなかった。笑い声は確かに存在する。そして、この世に存在しない者が笑っている。死者が笑っているのだ。怨霊だ。そう信じて疑わないのだから、病は篤いと言わざるを得ない。

団長は部下のひとりひとりと視線を合わせながら、訓示した。

麓は暖かいジャングルだ。雪さえ抜ければ、生還できる。山麓に残留した密林猟兵団も、異常事態と判断して、すでに救助隊を差し向けたはずだ。案ずるな。ただ、前に進め。……本日、我々は下山する。

山岳猟兵団最後の部隊は歩き出した。笑う夜を明か

したビバーク地点には二度と戻らないつもりだった。事実、戻ってくることはなかった。
白い雪を踏みしめ、白い風を縫(ぬ)って進んだ。前日の足跡はもう残っていない。同じコースをたどっているのか、それともちがうコースなのか、すぐにわからなくなった。
しばらくすると、笑い声が忍び寄ってきた。
生き残ろうともがく男たちを、どこかで笑いながら見ている。死んだエリート武官が怨霊と化して道連れにしようとしている。誰もがそう信じていた。
笑い声が聞こえると、微妙にコースがずれた。先頭でラッセルする団員が、無意識に声のする方角を避けたのだ。部隊の進路は怨霊にコントロールされていた。
その事実に、団長が気づいた。降り積もった雪を掻き分けて道を開くのは、激しく体力を消耗する。ラッセル役が交代するときに、団長は指示した。笑い声に向かって進めと。
豪胆(ごうたん)で知られる団長だった。
声に向かって進むと、怨霊が本腰を入れて襲いかかってきた。遠くで笑うのではなく、近くで笑うように

なった。間近まで一気に接近してくる感じで、声の大きさや動きで威圧(いあつ)するようになった。
団長は部下たちを奮(ふる)い立たせた。
我々の進撃に、敵はひるんでいる。ここを通らせたくないのだ。だから、必死になって脅しをかけている。このルートでまちがいはない。ゆくぞ。おれについてこい。
おうっと雄叫びが轟いた。
雄々しい叫び声に気圧(けお)されたのか、せせら笑う声が消えた。
怨霊はあきらめたらしく、部隊は邪魔をされずに前に進んだ。
林が途切れた。開けた場所があって、すぐにまた林へと続いている。
視界は悪かった。霧(きり)が出ている。そのまま凍りついて、小さな雪となってこぼれてくる。霧雪(むせつ)だ。
風はなかった。どこからも音が聞こえてこない。多少の音は、あたり一面に降り積もった雪が吸い取ってしまう。
音のない世界にただ、霧の雪が降っていた。

なにか不思議な感じのする場所だった。音が消えたせいかもしれない。林の途切れたその場所が、境界に見えた。

境界の手前で足を止めていると、消えたはずの笑い声が戻ってきた。今度は後ろから声は聞こえてきた。

部隊は声のする方向へと進んでいる。だから怨霊は、裏をかいて呼び戻そうとしている。生と死の境界を渡らせまいとしているのだ。団長はそう考え、部下に命じた。渡れ。最後尾はおれが引き受ける。境界を越えろ。と。

部隊は林の途切れたところを渡り始めた。四番目の男が肩までずぶりとはまった。続いて前後の男も肩まではまった。四番目の男はさらに沈んで、全身が雪に埋もれてしまった。

ほんの一瞬、時間が止まった。三人の男が埋まっただけで、なにも問題はないように思えた。だが、それはほんの瞬間のことだった。雪の底が抜けた。四番目と、その前後にいた三番目、五番目の三人が雪を突き抜けて転落した。

雪庇（せっぴ）を踏み抜いたのだった。林の途切れたところに

地面はなかった。入り組んだ山肌がヘアピンのようにカーブして、地面が裂けていた。両側に積もった雪が張り出してつながり、雪の橋を作っていた。

そうとは知らずに、部隊は雪の橋を渡ってしまった。強度のない橋は重さに耐えきれず、四人目で崩落したのだった。三人が落ちていった。しかし、被害はそれだけにとどまらなかった。

橋の崩れたほうへ、大地の裂け目へと、雪が流れた。流れ落ちる雪といっしょに、二番目の男が落ちた。裂け目は渡り終えていたのに、足元が崩れて流されてしまった。六番目の男も同様だった。裂け目にはまだ足を踏み入れていなかったのに、やはり流されてしまった。

戻れと、悲鳴に近い声が響いた。だが、戻ることはできなかった。崩れて流れる雪の中では、歩くことも走ることもできない。

先頭の男が流された。七番目も流されて、裂け目に消えた。

八番目の男は流されながらも、雪がなくなって露わになった崖のふちに手をかけた。なんとか落ちずに耐

えた。けれども、上から流れ落ちてくる雪の重みには耐えられなかった。九番目の男は自分が落ちないように必死になっている。手を貸してくれと叫びながら、雪を掻き分けている。掻き分けた雪は背後へと流れ去る。八番目の男は仲間が崩(くず)した雪に押し流された。

最後尾の団長は林の木をつかんでいた。団長の手をその前の男が握り、その手をまた前の男が握って、腕のロープが伸ばされた。九番目の男はそのロープをつかもうと手を伸ばし、空を切った。

手をつないで作ったロープが縮められた。いまや最前列となった十番目の男を守るために、伸ばした手は引き戻された。

握り損ねた手を伸ばしたまま、九番目の男は裂け目にすべり落ちていった。

十番目の男は助かった。足元の雪は崩(くず)れたが、仲間たちが引っ張り上げてくれた。助けてくれた仲間といっしょに、林の中まであわてて戻った。最後尾の団長よりも後ろに避難した。

団長は呆然(ぼうぜん)と立ち尽くしていた。ここまで生き残ったタフな男たちを、一度に九人も失ってしまったのだ。

そして、渡れと命令したのは自分だった。
哄笑が響き渡った。声は裂け目の底から聞こえてきた。見事に裏をかいて、してやったりと、怨霊が狂喜していた。
風が吹いてきた。霧が遠ざけられて、景色が見えた。左は崖のような急斜面だった。その斜面が切れ込んで、裂け目となっていた。雪の橋は完全に崩落している。ずっと下まで空間がのぞいている。落ちていった仲間たちの姿は見えなかった。声も聞こえない。聞こえたとしても、救助するすべはない。
残ったのは団長と三人の部下だけ。
山岳猟兵団はとうとう分隊の規模さえ保てなくなった。
笑い声が消えると、団長は力なく出発した。裂け目に背中を向けて、来た道を戻ってゆく。部下たちに声はかけなかった。ひとりで歩き出した。表情は険しく、憔悴しきっていた。
三人の部下のうち、ふたりが視線を合わせた。団長の顔を見て、ついて行くのをためらった。険しい表情が死相に見えた。ふたりとも、第一小隊第二分隊に所

属していた。そのふたりの肩を、残るひとりが叩いた。同分隊の分隊長だった。肩を叩いて、団長について行くよう、うながした。

ふたりは団長について歩き始めた。分隊長は最後尾を受け持った。先頭をゆく団長の肩が落ちている。初めて見る後ろ姿だった。

一度に九人を喰らって満足したのか、怨霊は手を出さなくなった。笑い声は聞こえてこない。右に曲がろうと左に折れようと、登ろうとも下ろうとも、一切関わってこなくなった。おかげで、気落ちした男たちの足は進んだ。

ふたりの団員は交互に先頭に立ち、ラッセル役を担当した。進路は最後尾の分隊長が指示した。団長がそうしろと命じたのだった。

団長は進路の決定権を放棄していた。雪の山中で遭難した状況では、事実上の指揮権放棄に当たる。団長の指揮で、仲間が生き埋めとなった地に舞い戻っている。雪の橋を渡ってもいる。団長は自分の指揮能力を自分で否定したわけで、冷静というよりも無残だった。

たぶんこの人は、生きては戻れない。分隊長はそう

思った。
空は真っ白で太陽は見えないが、一歩踏み出すたびに日は傾いていった。夕暮れも迫る頃、先頭の足が止まった。
地形に見覚えがあった。左に丘がある。昨日、見た光景だった。
団長が丘に向かって歩き始めた。残る三人も続いた。丘を登っても、絶望はしなかった。すでに希望など消え失せている。ただ、まだ温もりを残していた心が、凍りついた。
そこはエリート武官率いる先行隊が生き埋めとなった場所だった。また戻ってしまったのだ。しかも、昨日と今日では指揮する者がちがう。昨日は団長の指揮だった。今日は分隊長の指揮だった。それなのに、舞い戻ってしまった。おそらく、誰が指揮してもここに戻ってきてしまうのだろう。死者の霊に呪われているから、そうなる。呼び寄せられてしまう。
その証拠に、安置された遺体がひとつ増えていた。
生き埋めとなった仲間の遺体は三体掘り起こした。整然と並べて去った。昨日、戻ってきたときには、遺

体の向きはばらばらだった。風に吹き流された遺体におびえる男を団長が叱りつけ、並べ直した。死んだばかりの仲間を安置して、遺体は四体となった。しかし、いま戻ってみれば、遺体は五体になっている。雪をかぶった五つの遺体が整然と並んでいる。

死体が勝手に動くわけはないから、誰かがここに戻ってきたのだ。いや、呼び寄せられた。

団長が歩き出した。存在しないはずの五つ目の遺体が誰なのか、確認するつもりだ。まっすぐ歩き出したが、ふと立ち止まって、団長は向きを変えた。丘を迂回するコースを選んだ。

昨日は、仲間が眠るその上を傍若無人に歩いたのに。死の世界に道連れにしようとする者などいないと、示して見せたのに。今日はちがった。死者の霊を恐れた。

団長から豪胆さが失われていた。

最後尾で分隊長は天を仰いだ。滅(ほろ)びの跫音(あしおと)を聞いたのだった。

団長あっての山岳猟兵団だった。猛者として、その名を知られた男だった。

たとえ部隊が壊滅しても、団長さえいれば山岳猟兵

団はよみがえる。だが、その団長はもういない。
山岳猟兵団は滅んだ。たったいま。
分隊長には未来が見えた。暗い未来だった。
五つ目の遺体はおびえた男だった。
風に吹き流された遺体を見ておびえ、逃亡している。逃亡したのはふたりだったが、おびえて逃げ出した男たちが協力するとも思えず、また協力したとしても、死んだ仲間を葬るために呪われた土地に戻ってくるとは考えられない。
つまり、おびえた男はひとりで吹雪の山中を徘徊(はいかい)し、戻ってきたのだ。男もまた、死者の霊に呼び寄せられてしまった。そして心が折れてしまった。男は観念したのだろう。まだ生きているのに、自分から死者の隣に横たわった。そのまま、冷たくなっていった。
想像すると、おぞましい光景だった。五つの遺体は整然と並んでいる。最後のひとつは、自ら並んでいる。生者が自分自身を死者と見なして、葬ったのだ。どんな気持ちで、死者の隣に自分を安置したのだろうか。男の心中はわからないし、わかりたくもなかった。理解したときは、おそらく、死ぬときだ。

遺体を見つめていた団長が、部下たちを振り返った。目に光が宿っていた。妖しく輝く光だった。分隊長にはわかった。それが最後の輝きなのだと。

ただいまをもって、山岳猟兵団を解散する。団長は終わりを宣告した。

各自の意志と判断で下山し、山麓の前線基地に帰還するように。それは、生き残る力のある者だけ生き残れという意味だった。

団長はどうされるのですかと、団員が詰め寄った。なじったのではない。案じたのだ。仲間のほとんどを失ってもまだ、団員は団長に信頼を寄せていた。

おれはここに残る。怨霊を足留めする。おれが生きているうちは、怨霊もおれを取り殺すことに全力を傾けるだろう。その間に、おまえたちは下山せよ。

団長の悲壮（ひそう）な覚悟に言葉もなかった。ただ、団長と、呼びかけることしかできなかった。

おまえたちは下山して、ここで起きたことを、おれたちの身に起こったことを、見聞きしたことを、すべて話すのだ。そして忘れるな。必ず、あいつに伝えてくれ。おれを捜（さが）しに来るなと。おれを連れて帰ろうと

するなと。
あいつとは密林猟兵団の団長のことだった。
頼んだぞ。必ず、伝えてくれ。……さらばだ、友よ。
とな。
そう言うと、団長は部下たちにくるりと背を向けた。その場にどっかと座り込んだ。
分隊長はだまって敬礼した。それを見て、ふたりの団員も敬礼した。
すべてを背負って死ぬと決めた男の背中に、かける言葉はなかった。
分隊長はふたりの団員を率いて下山を再開した。決して振り返らなかった。分隊長が振り返らなかったので、ふたりの団員も後ろを見なかった。
先頭は分隊長だった。自分でラッセルした。雪を掻き分けて道を開く。きつい作業を自らに課した。つらいほうが楽だった。
歩きながら、分隊長は考えていた。
事態はエリート武官の発言どおりに進んでいる。道に迷うと同じ場所をぐるぐる回るものだと、エリート武官は言った。直接聞いたわけではなく、伝聞(でんぶん)だが、

話にうそはないだろう。エリート武官が言ったとおりに、部隊は同じ場所に二度も舞い戻っている。

つまり、エリート武官の判断は正しかったと言えなくもない。

もちろん、こじつけだ。先行隊を迷走させて遭難に追い込んだのはエリート武官である。だが、それは結果論ではあるまいか。もしも、エリート武官が口をはさまなかったら、先行隊は無事に下山できたのだろうか。誰が指揮を執(と)っても、遭難は免(まぬが)れなかったのではないだろうか。

だとしたら、エリート武官ひとりに罪を着せるのは正しくない。少なくとも、本人は大いに不満だろう。なにしろ、出世にこだわる人物だった。名声欲の権化だ。死んで自分の名前が地に落ちると知れば、怨霊となって化けもするだろう。

ということは、山から下りられないということだ。ひとりでも生還を許せば、エリート武官の愚行(ぐこう)が広まってしまう。だから、怨霊は全滅させようとしているのだ。自分の名声を守るために。

怨霊を敵に回して生還できるわけがない。

ならば、味方につけたらどうだろうか？
分隊長の足が止まった。
そうだ。怨霊を味方につければいい。それなら、山を下りられる。エリート武官は死んでしまった。生きている者が妬(ねた)ましいのなら味方にはできないが、そうではなく、ただ単に自分の名声を守りたいだけなら、話のつけようはある。
うんと、分隊長はうなずいた。その背中に団員が声をかけた。振り返ると、後ろにはひとりしかいなかった。
もうひとりはだまって去ったのか、歩けなくなって脱落したのか、それはわからなかった。わかっているのは、目の届く範囲に姿はないということ。捜しに戻る余力もないということ。倒れていても、救いの手は伸ばせない。肩を貸せば共倒れになる。もう仲間を助けるなと、団長も命令している。
もしや、怨霊か。分隊長は気づいた。怨霊が先に団長を取り殺すとは限らなかった。座り込んで動かない男は放置して、下山する者から始末しようとするのは当然ではないのか。

だとしたら、怨霊はいま、すぐそばにいる。
怨霊はいま、ここにいる。
分隊長は決死の作戦に打って出た。戦うのは拳ではなく、言葉だった。
おれは山を登り返そうと思う。分隊長は団員に語りかけた。部下に話すと見せかけて、実のところ、耳を傾けているにちがいない怨霊に話していた。
次席防衛武官殿は正しかったのだ。その証拠に、おれたちは同じところをぐるぐる回っているではないか。先行隊は全滅したが、あれは武官殿のせいではなかった。誰が率いても遭難する運命にあったのだ。
思えば、武官殿は悲運の指揮官だった。正しい判断を下されたが、雪には勝てなかった。それなのに、武官殿の判断が誤っていたかのように言うのはまちがっていると、おれは思う。武官殿は再登頂を目指され、ルートを見つけて下山に切り替えられた。おれは武官殿の判断に従うつもりだ。登り返してルートを見つけ、下山する。
雪にさえ負けなければ、おれたちは下山できるだろう。そうなれば、武官殿はやはり正しかったのだと、

証明できる。
その瞬間、強風が吹いた。風はやんでいたのに、突然吹き荒れ、吹き抜けていった。たった一度の強い風が、ただの自然現象だとはとても思えなかった。
団員は唇を一文字に結んだ。余計なことは言わないとの意思表示だった。怨霊がそばにいて話を聞いている。分隊長は怨霊の調略（ちょうりゃく）にかかっていると、団員は悟ったのだった。
だからな。分隊長は素知らぬ顔で話を続けた。
おれたちが無事に下山できたなら、正しい話を伝えよう。武官殿のお言葉どおりに行動して下山できたなら、おれたちを無事に帰還させてくれたのは、ほかでもない次席防衛武官殿なのだと、世間に知らせよう。
団員はこくりとうなずいた。
分隊長もうなずいた。
ふたりは言葉どおりに、山を登り返した。
すぐに日が落ちた。だが、足元は明るかった。雲はなく、月が出ていた。月光を浴びた雪が照り返している。明るい月と、明るい雪が、夜の闇を寄せつけなかった。

雪は降らず、風も吹かない。うそみたいに晴れた夜だった。

見ろ。次席防衛武官殿が守ってくださっているぞ。分隊長は前を向いたまま、後ろの部下に声をかけた。言葉巧(たく)みに怨霊を調略したら天気が好転したのだから、晴れた夜がただの偶然だとは思わなかった。

しかも、下山ルートまで見つかった。この道をゆけと、月の光が照らしてくれている。雪の上でひときわ輝くラインを目で追えば、どこまでも、どこまでも下ってゆく。

分隊長殿、これで山を下りられます。団員の声が感激している。

山岳猟兵団の生き残りを怨霊が守護していた。

怨霊も、味方につけば英霊(えいれい)となる。善と悪は表裏一体。天使を恐れれば悪魔に見え、悪魔に親しめば天使に思える。嫌われた天使は罰を与えようとするだろうし、好かれた悪魔は褒美(ほうび)を与えるだろう。

あれは悪魔だと指をさすから、悪魔が生まれる。

あれこそ天使と指させば、天使が生まれるものを。

下山ルートの発見で力が湧(わ)いてきたのか、団員がラ

ッセル役を買って出た。このまま下まで自分が引っ張りますと、先頭を切って下り始めた。

団員はもうなにも心配していなかった。怨霊に取り殺される恐れはない。それどころか、天気まで操って下山に協力してくれている。守られている。

雪さえ抜ければ、麓に下りれば、そこには前線基地がある。密林猟兵団が待っている。いや、異常事態と判断した密林猟兵団はすでに救助隊を差し向けたはず。団長はそう言った。だから、少し下りれば、救助隊に出会える。あと、ほんの少し下りるだけで助かるのだ。

助かったら、真実を話す。主峰で見聞きしたことを、ミュラー山脈で起こったことを、すべて伝える。団長命令だ。必ず遂行する。

もちろん、エリート武官のおかげで助かったと正直に言う。それは事実だ。登り返してルートは見つかった。雪はやんだし、風もやんだ。月明かりで下山もできる。天候が劇的に回復したのは、英霊の御加護によるもの。堂々とエリート武官を褒め称えて、なんの障りがあろうか。

団員は疲れを知らなかった。気分が高揚している。

本気で、麓までひとりでラッセルするつもりだった。分隊長のために働きたかった。助かるのは分隊長のおかげだ。祟(たた)る怨霊を、護(まも)る英霊に変えてくれた。

その分隊長は後ろからついてくる。背後に気配がある。視線を感じるし、息づかいも聞こえる。雪を踏みしめる音だって聞こえてくる。

団員は雪を掻き分けて進んだ。

山岳猟兵団、最後の雪中(せっちゅう)行軍だった。

そして、たったひとりの行軍だった。

団員の後ろには、誰もいなかった。

山ではときに不思議なことが起こる。低い山を気軽にハイキングしていても、不可解な現象に出くわす。登山道を下っていると、後ろから足音が聞こえる。背後に迫ってくる気配を感じる。自分よりハイペースの相手が下りてきたと思い、道を譲ろうと振り向いて、驚く。そう、後ろには誰もいないのだ。周囲を見回しても、いるのは自分ただひとり。確かに足音が聞こえたのに。確かに気配を感じたのに。でも、誰もいない。

家から歩いて登るような地元の低山で、体調が万全でもそうなるのだから、雪山で遭難して体力の限界を

超えている団員が、いない仲間の気配を感じていてもおかしくはない。
団員はひとりで山を下った。真後ろに分隊長がいると信じて疑わずに、下り続けた。気配はあるし、音も聞こえるのだから、疑うわけがない。
それに、声もかけられた。
がんばれ、もうひとふんばりだ。はい、分隊長殿。おまえならやれる。まかせてください、分隊長殿。
まっすぐ前を見て、ひたすら足を運んだ。下るにつれて、雪は浅くなってゆく。そうしてついに、沢に出た。流れるせせらぎが月の光を反射して輝いている。沢の向こうは暗い。雪が積もっていないから、地面は光らない。
やった、やりましたよ、分隊長殿！　団員は初めて振り返った。だが、後ろに頼れる上官はいなかった。
分隊長殿？　団員は思わず周囲を見回した。大声で呼んでもみた。しかし、返る声はなかった。
団員は後戻りを始めた。戻れば、そこに分隊長がいると思った。ちょっと遅れただけだと考えた。ここまで来て見捨てる気にはなれなかった。いっしょに生還

したかった。
枝に積もっていた雪が落ちた。落ちて道をふさいだ。簡単にまたげる程度の雪だったが、そこだけ落ちてあえて道をふさいだことを、団員は偶然だとは思わなかった。
足を止めて、下りてきた道を見た。目の前の坂には自分ひとりの足跡しかなかった。坂の上まで、足跡はひとつだけだった。
すぐ後ろで励ましてくれていた分隊長が、実は早くに脱落していたことを、団員は悟った。だまって脱落したのだろう。張り切って先頭をゆく部下に声はかけなかった。分隊長は自分を犠牲にすることで、確実に部下を生還させる道を選んだのだ。
団員は山を見上げた。なんとかして下山しようと、ずっと見下ろしてばかりいたから気づかなかったが、振り返ってみれば、山は見上げるほどに高かった。
夜空を星が流れた。
ミュラー山脈の主峰ローズ・ピークが、月光に照らされて白く浮かび上がっている。
美しい姿だった。

団員はローズ・ピークに敬礼した。
仲間たちの眠る山に、別れを告げた。

3

いまは夏。
ルビーローズが見つめる山に、雪は積もっていない。
しかし、美しいその姿に変わりはなかった。後ろに星空を従えて、月のスポットライトを浴びている。
チャパティは体を傾けると、後ろの粗忽者（そこつもの）に視線をぶつけた。
マハラはルビーローズの陰に隠れて、知恵袋の視線を避けた。
ボートの真ん中にはルビーローズがいる。自分の名を冠（かん）したミュラー山脈の主峰を見上げている。
山岳猟兵団の団長とルビーローズは愛しあっていたわけではない。恋する猛者は熱心にアプローチを繰り返したが、紅い薔薇の女はことごとく袖にしている。
とはいえ、防衛隊でも指折りの猛者に惚れられるのは悪い気分ではないだろう。贈り物も気が利いている。

リヴリーアイランドで一番高い山の頂に名前をつけてもらったのだから、女心はときめくはず。そして、贈った男は山から下りてこなかった。

チャパティは体を反対側に傾けた。女の陰に隠れて知らん顔を決め込む卑怯者(ひきょうもの)に、抗議の視線を突き刺した。もう少し、思いやりの心がほしかった。

知恵袋が追及の手をゆるめないので、マハラは観念した。だまって、そっと、顔の前で両手を合わせた。

「なにをしているの、あなたたち」

ルビーローズはくすりと笑った。勝手に気を回して、無言のうちに怒ったり謝ったりする男たちがおかしかった。

「さあ、帰りましょう。明日は夏祭りの最終日。保安官選挙の結果も、夜には判明しますわ。次の保安官が誰であれ、管理リヴ委員会の臨時会議にはわたくしたちが出なくてはなりません。それまでにもう一度、光る湖の秘密に迫りますわよ」

「おうよっ」

「はいです」

マハラは元気よく、チャパティはふつうに、返事を

した。
ボートが水面をすべり始めた。
ルビーローズは川岸の密林に視線を投げた。
ジャングル最強の部隊である密林猟兵団も、ひとりも生還しなかった。
双子の猟兵団はともに滅び去ったのだった。
山岳猟兵団は山に散った。最後まで生き残った団員も、雪を抜けて安堵(あんど)したのか、夜の山を下りる途中で滑落している。重傷を負い、うめきながら這(は)い進んでいるところを、声を聞きつけた密林猟兵団に発見されている。
救助隊に助けられたと思い込んだ山岳猟兵団最後のひとりは、山で起きたことをすべて語り終えてから、息を引き取った。
助けた男たちは救助隊ではなかった。伝令隊だった。密林猟兵団が山麓に築いた前線基地は、モンスターの群れに襲撃されていた。下山してくる山岳猟兵団にその事実を伝えるために、山を登っていたのだった。
山岳猟兵団と調査隊は全滅したと知り、伝令隊は引き返した。

親友の最後の言葉を伝え聞いて、密林猟兵団の団長はまぶたを閉じた。捜しに来るな、連れて帰ろうとするなとは、残された密林猟兵団の帰途を心配しての言葉だったにちがいない。

そして、友の心配は的中した。遭難者の遺体を収容するどころではなかった。もはや来た道を引き返すことさえ困難だった。モンスターは密林からやってくる。撤退するには、山に向かうしかなかった。リヴリーアイランドに帰還するためには、ミュラー山脈を縦走する覚悟が必要だった。しかし、山岳最強の友軍はもういない。

密林猟兵団の団長も、その名を知られた猛者だった。女たちに騒がれるイケメンでありながら、クールな男だった。前線基地を捨てて、山に退却した。モンスターに囮の部隊を追わせ、側面や後方から奇襲するというゲリラ戦術を駆使して、撤退戦を指揮した。

だが、一戦ごとに兵力は削られてゆく。リヴリーアイランドの防衛網へと近づきながらも、ついに追い詰められてしまい、岩山の裂け目に立て籠もることになった。

このとき、別行動を取っていた斥候隊が思い切って長駆し、防衛網の監視所へと駆け込んだ。

突然やってきた斥候隊の救援要請を受け、監視所が急報。防衛隊はようやく事態を把握した。それまでずっと、二個猟兵団と調査隊は訓練中だと信じていたのだった。

そして、噂はここでピリオドを打つ。

これ以降の話は一切流れていない。

防衛局の正式発表では、二個猟兵団と調査隊は訓練中に行方不明となっている。全滅したものと推定されると、たった一行で片付けられている。密林縦断・主峰登頂計画には触れてもいない。なかったことにされている。

短いだけに、穴のない発表だった。

説得力もある。噂どおりなら斥候隊は生還したはずなのに、我こそは密林猟兵団の生き残りであると、名乗り出る者はいない。

それに、岩山の裂け目に立て籠もった密林猟兵団の最後もわからない。名立たる団長に率いられて、守りやすい地形に立て籠もったからには、モンスターの攻

撃にもかなり耐えたはずだ。事態を把握した防衛隊がすぐに救援部隊を送ったならば、何人かは救い出せてもおかしくはない。しかし、そんな話も聞かない。

噂は、噂でしかない。

根も葉もない与太話(よたばなし)である。雪山での、怨霊との対決がいい例だ。

そうはいっても、細部までよく練られた噂話ではあった。エリート武官や団長たちの性格まで、きちんと把握して織り込まれている。話に真実味がある。たとえ怨霊に祟(たた)られた話であってもだ。

だから、噂は根強く信じられていた。恋する猛者が山の頂に惚れた女の名前をつけて、それっきり戻らなかったという悲劇も、人々を惹(ひ)きつけている。

いつか、ローズ・ピークに立ってみたいとルビーローズは思っていた。

その思いは、今度の保安官選挙で選挙参謀を務めているヒナタも同じなのかもしれない。ヒナタは密林猟兵団団長の妹だという。兄である団長の最期(さいご)はわからない。噂話も伝えてはくれない。

ならば、知りたいと思って当然。そして、最期がわ

からない限り、どこかで生きていると願い信じるのが、肉親の情というもの。

ヒナタは兄の消息を知りたくて、防衛隊に入ったのかもしれない。防衛隊では情報を得られないと悟って、今度はＬＩＳＤ（エルアイエスディー）に狙いを定めた。保安官になれば、好きに調べられる。相棒のりぶたんは、幼なじみで親友のヒナタに全面的に協力している。

そう考えると、防衛隊で武勲（ぶくん）を立てながら、保安官に転身を図ったふたりの行動にも説明がつく。

だとすれば、明日の投票に未来を賭（か）けたふたりは、ルビーローズと同じ道を進んでいる。少し後ろを歩いている。

ルビーローズにも尋ね人がいた。昔、世話になった恩人だ。

ヒナタにしろ、ルビーローズにしろ、隠す者がいるから捜さなくてはならない。

隠す者、それはリヴリーアイランドを支配する者どもだ。すなわち、ミューミュー一派である。うかつに近づけば、ルビーローズも隠されてしまう。噂を信じるなら、魔島と呼ばれるモンスターアイランドに流さ

れてしまう。
いずれ、ミューミュー一派との対決は避けて通れない。
けれども、いまはまだ。
秘密を探ることしかできない紅い薔薇の女だった。

山岳猟兵団と密林猟兵団が全滅してから数ヶ月後。
管理リヴ委員会でプーケの提案が採択(さいたく)された。
怪物密林に潜むモンスターの脅威(きょうい)からリヴリーアイランドを守るべく、要塞(ようさい)を建設する――と。
後(のち)に、リヴリーアイランド史上最悪の惨劇(さんげき)となる「モンスター津波」の、これが始まりだった。

第六章　湖底湖（こていこ）

一

紅月丸の武装が強化された。

魚雷発射管を二本束（たば）ねた連装式の魚雷ランチャーが二基、増設された。

急ごしらえのランチャーは、黒いテントウムシの顔の裏側、ちょうど目の下あたりに取り付けられた。

右と左で魚雷ランチャーの構造は異なっていた。

右側は魚雷発射管にただの鋼管を使用しており、見るからに粗末な作りだった。鋼鉄製の筒を二本まとめて枠にはめ、船体に溶接しただけだ。

左側は予備の魚雷発射管を使用していた。本物だから発射管後部が閉鎖されており、そこにメタルホースがつながっていた。

メタルホースはテントウムシの脇腹へと延びていた。配管支持金具のサドルバンドで船体に固定されている。

Ω(オメガ)型の金具でホースを押さえ、船体に溶接してある。
船腹にはデコイ・シロップの噴射口があった。そこにホースがつながっているということは、デコイ・シロップはもう使えないわけだ。
ルビーローズはだまって船体を見上げた。武装の強化はチャパティに一任している。万事、抜かりはないはずだ。
「あ、姐(あね)さん。説明するです」
チャパティはセルコンリフトに乗っていた。高所作業台を使って、魚雷の調整をしていた。
電動式のリフトが折りたたまれた。チャパティが作業台から降りてきた。
ブンカーに帰投した紅月丸は船台に載せられて、ドックに陸揚げされている。船体から滴り落ちた水のせいで、コンクリートの床に水たまりができていた。
「魚雷を四本追加するです」
チャパティは頭上の魚雷ランチャーを指さしながら、説明を始めた。
「左の二本は九連バーストの通常魚雷です。圧縮空気式じゃなくて、水圧式にしたです。デコイ・シロップ

の水圧ピストンを利用して、魚雷を射出するです」
「これ、だいじょうぶかしら？　落ちない？」
魚雷の詰まった発射管が船底にくっついている。どことなく、頼りない感じがする。いまにもぽろりと脱落しそうだ。
「落っこちないです。ちゃんと超音波溶接してあるです。心配なのはメタルホースとコードです」
チャパティの指が空中に線を引いた。魚雷発射管からホースとコードが延びている。メタルホースはデコイ・シロップの噴射口につながり、コードはポッド推進器につながっている。
「ホースはサドルバンドで固定して、バンドは超音波溶接したです。でも、モンスターに脚を引っかけられたら、たぶんホースはちぎれるです。それと、コードはポッド推進器から取ったです。クッション付きのメタルテープで船体に貼り付けたです。でもこれも、モンスターに引っ掻(ひか)かれたら、切れるです」
ポッド推進器に穴があけられていた。防水端子を取り付けて、細い銅線を接続している。銅線はメタルテープで船体に貼られていた。表面の薄い金属板と、そ

の下のクッションとで、切れないように銅線を保護している。
「後付けですもの。多少のことはしかたがありませんわ」
手持ちの材料で苦労して仕上げた細工に、文句などあるはずもなかった。
「いままでのデコイ・シロップが使えなくなったので、新しく別のを用意したです」
「下にある、あれね」
黒いテントウムシの腹部にドーナツ状の物体が吊るされていた。ハイドロハンマーの砲身をよけて取り付けてある。ドーナツ状だから救命用の浮き輪に見えた。
「はいです。内側から水を吸って、外側にシロップを拡散するです。あと、船尾にライトを付けたです。これで後ろも照らせるです」
「まあ。完璧ね」
さすがは一味の知恵袋。短時間の改修でも、いろいろと知恵をしぼったようだ。
「その代わり、ポッド推進器のバックアップコードを使ったので、なにかあってもバックアップは効かない

です」
「トラブルが起きないよう、祈るしかありませんわね」
紅月丸の船底には六基のポッド推進器がある。そのすべてにコードが取り付けられて、銀色のメタルテープで船体に貼られている。船底の塗装は赤銅色だからテープは目立つ。しかしながら、ごついメタルホースほどではなかった。
テントウムシの両脇から延びたメタルホースは二本とも、左の魚雷ランチャーにつながっている。
右の魚雷ランチャーには、コードを貼り付けたメタルテープだけが延びている。二本の魚雷発射管は、ただの筒だ。後部は閉鎖されていない。だから、圧縮空気式でも水圧式でも、魚雷の射出はできない。魚雷は自走させて、発射することになる。
「右の二本は通常魚雷じゃないです」
ルビーローズの視線を追って、チャパティは説明を続けた。
「片方は通常魚雷を機雷型に改造してあるです」
「あら？」

「姐さんの案を採用したです。自走式発射管なので、勢いよく飛び出さないです。なので、遅延発動型バーストを詰め込んで、十二連発にしたです」
「そう。それで、もう片方はもしかして？」
「おらよ。試作品のジェット魚雷でえ」
マハラが肩に魚雷を担いでやってきた。巨漢で怪力だと、こういうときは本当に重宝する。
「やっぱり、これを使うのね」
マハラが持ってきた魚雷にはスクリューがなかった。末端にはノズルがあり、先端には取水口がある。吸い込んだ水をインペラで増速してノズルから噴射する、ウォータージェット式の新型魚雷だった。
「はいです。ジャイロブーメランも搭載したです」
「まったくよ。姐御顔負けのギャンブラーだぜ、おめえって野郎は」
マハラはチャパティの前を通り過ぎた。体は本来の大きさだから、身長差が倍近くある。
「試作品のジェット魚雷に、これまた試作品のジャイロブーメランなんか搭載しやがってよ」
魚雷を担いだまま、マハラは作業台に乗り込んだ。

「試作品でもちゃんと動くです」
「ったりめえよ。組み立てたのは俺様なんだからな」
「設計したのはおいらです」
「資材を調達したのは俺様だっての」
マハラを乗せたセルコンリフトが上昇した。
ルビーローズとチャパティはマハラの作業を見守った。試作品の魚雷が、増設された魚雷ランチャーの発射管に装填(そうてん)されてゆく。
「ジャイロブーメランを搭載したのなら、気をつけて使わないといけませんわね」
「撃ったら逃げないと、戻ってくるです」
ジェット魚雷はブーメランのように帰ってくる魚雷だった。たとえかわされても、戻ってきた魚雷でモンスターを背後から攻撃できる反面、自爆する恐れがある。敵に命中しなければ、自分自身に命中するわけだ。しかも、ウォータージェット式で雷速は高速。かなり危険な代物だった。
「それと、遅延発動型バーストは六発しかないです。小型のウォータージェット推進器でも場所は取るので、詰め込むのは無理です。その代わり、六発は同時爆発

式にしたです」
「爆発は一度でも、威力は高めてあるのね」
「んじゃ、あとの細かい仕事は頼んだぜ。俺様は残りの一本、取ってくらあ」
装填を終えたマハラはリフトを下ろすと、チャパティと入れ替わった。マハラは歩み去り、チャパティはリフトで上昇した。
ルビーローズは少し離れて、紅月丸の全体を視野に入れた。
鋼鉄のモンスターが船台に鎮座(ちんざ)している。宙に浮かんだ格好で、鞘翅(さやばね)も水中翼も展開している。水中翼はコンクリートの床に接触しないように、水平に伸ばされている。鞘翅のシュラウド・リングは起きており、ルーバー型のシャッターは開いている。中のプロペラも見えている。
点検はすでに完了した。魚雷の装填は仕上げ作業だ。そして、残りは一本。テントウムシの口の中に魚雷を入れたら、再出動の準備は整う。
「姐さん、ここの魚雷も改造したです」
リフトの上からチャパティが呼びかけた。

指さす先にはテントウムシの開いた口がある。魚雷はまだ装填されていないから、空洞になっている。
「使うのはたぶん最後になると思うので、ここのも同時爆発式にしたです。九発まとめて爆発するです」
「とどめの一撃ですわね」
「魚雷を全部命中させても、とどめにはならないと思うです」
「そうね。とどめの一撃ではなくて、最後の一撃になるのね。……紅月丸にとって」
ルビーローズは言い直した。
魚雷は全部で五本搭載される。後付けされた左の魚雷ランチャーには、通常魚雷が二本ある。右の魚雷ランチャーには、魚雷型機雷とジェット魚雷がある。最後の一本は、黒いテントウムシの口の中。
全部命中させても、弾け花火四十五発分にしかならない。魚雷型機雷には十二発も詰め込んであるが、ウォータージェット推進器を採用した新型魚雷には構造上の制約があり、六発しか仕込めなかった。
五本の魚雷で、弾け花火が四十五発。
弱小モンスターならともかく、正体不明の武者タガ

メが、たった四十五発の弾け花火で沈むとは思えない。それに全部命中させるのは至難の業だ。
「武装は強化したけれど、使わないのが一番ね」
水中で水棲モンスターと争うのは愚の骨頂である。あくまでも非常時に備えた武装であって、戦闘が目的なのではない。目的は湖底探査だ。可能な限り魚雷には頼るまいと、ルビーローズは自分自身に言い聞かせた。
高所作業台の上で、チャパティは手を休めずにうなずいた。
「それがすんだら休憩しましょう」
ルビーローズは下から声をかけた。
「そろそろ、おなかもすくころね。ホットドッグはいかが？　カブトムシの幼虫を粉にして焼いたパンに、フウセンコガネのソーセージをはさみましたの。シマミミズのミートソースに、わたくし特製のチリパウダーを混ぜた、ピリ辛のチリドッグですわ」
「おっ、うまそうじゃねえか。俺様はでかいから、ふたつな」
最後の魚雷を担いでマハラがやってきた。

「はいはい」
「おいらもひとつ、いただくです。あと、飲み物はおいらが用意するです。マメムシのブラックコーヒーがあるです」
「まあ、おいしそう」
　軽食を用意するため、ルビーローズは船尾に向かって歩き始めた。
　すれちがう瞬間、マハラがVサインを出した。二本よこせと改めて要求したのだった。
「やい、お茶っ葉。俺様のブラックコーヒーは、ケセパのシュガーとミツアリのシロップ入りで頼まあ」
「それはブラックコーヒーとは言わないです」
「んだとぉ。俺様特製の、シュガーシロップを混ぜた甘甘（あまあま）のブラックコーヒーをバカにすんない」
「バカにしてないです。それに作ったのはマッハじゃないです。シュガーもシロップもコーヒーも、全部おいらが作ったです」
「飲むのは俺様だっての」
　後ろから聞こえてくるよくわからない言い合いに、ルビーローズはくすりと笑った。

紅月丸の船尾にはタラップが架けられていた。機材搬入用の水密ゲートが開いて、後部銃座が外に押し出されている。船内のバッテリーに接続された充電用のケーブルが、金属製の階段に這わされている。

タラップを降りてすぐのところに、休憩用のベンチがあった。ルビーローズはベンチの上にペーパープレートを並べた。チリソースがこぼれ落ちてもいいように、紙の皿を用意した。

そして、フードボックスからチリドッグを取り出した。

リヴリーは不思議な力を持っている。呪文を念じるだけで、魔法のような技を使うことができる。食べ物を収納したフードボックスを、なにもない空間に出現させることだってできる。

皿の上に置かれたチリドッグはほかほかだった。作りたての状態だ。さすがにこれは、一般のリヴリーにはまねできなかった。フードボックスの中に調理済みの食べ物を、それも温かいまま収納できるのは、管理リヴの特権だった。

ルビーローズはチリドッグを全部で四つ取り出して、

皿に置いた。
かいがいしく働くアカゲパキケの後ろ姿を、じっと見つめる黒い目があった。ドックの壁がくりぬかれて、大きな穴があいている。ブルドーザーのバケットのような、どでかい前脚が見えている。長い触角がドックの中に入り込んで、上下に揺れ動く。
のぞき見をしているのはオケラのモンスターだった。別名をモグラコオロギという。
モンスターはのそりと動いた。穴から出て、ドック内に侵入した。巨体の割に音も立てずに、赤いリヴリーの背後に迫った。
ルビーローズは無防備だった。モンスターが忍び寄っていることに、まったく気づいていない。
だが、モグラコオロギはルビーローズを襲わなかった。後ろから、平然と触角を突き出して、チリドッグの匂いをかいだ。
「あら、いつ来たの？　左平次（さへいじ）」
触角に気づいたルビーローズが振り返った。
オケラのモンスターは餌付（えづ）けをして飼い慣らしてあった。左平次と、和風の名前までついている。

「だめだめ。これはわたくしたちがいただきますの」
左平次はチリドッグに興味津々だ。
パンはカブトムシの幼虫を粉にして焼いたものだし、ソーセージはフウセンコガネでできている。チリソースのベースとなるミートソースは、モグラコオロギの大好物であるシマミミズで作ってある。
「あなたはこちらを召し上がれ」
ルビーローズはフードボックスから生のシマミミズを取り出すと、モグラコオロギに与えた。
「お。左平次の野郎、また飯食いに来てらぁ」
「おいらたちがいるときは、おねだりしたほうが楽ちんです」
マハラとチャパティが休憩にやってきた。
「まあ、飯くらいでケチくせえことは言わねえけどな」
「穴掘りしてもらってるです。おなかいっぱい食べさせてやるです」
「だな」
ルビーローズ一味がモグラコオロギを餌付けしたのには理由があった。オケラを手なずけて上手に操れば、

地底にトンネルを掘ることができる。安全な地下道が手に入るわけだ。そうなれば、獰猛（どうもう）なモンスターがうようよしている地上を歩かなくてすむ。

怪物密林は危険な場所だ。特殊部隊の密林猟兵（りょうへい）団でさえ、通り抜けはしたものの戻ることはかなわなかった。

そんなジャングルのど真ん中にある湖に、足繁（あししげ）く通うには専用道は欠かせない。もちろん、リヴリーを襲うような危険なモンスターなら餌付けはできない。それが可能なら、パークに居座るローズウッドはとうの昔に飼い慣らされているはず。

モグラコオロギはリヴリーを襲わないおとなしいモンスターだった。おまけに大食らいなので、餌付けするのは簡単だった。怪物密林の地下に安全な専用道を張り巡らせるため、ルビーローズ一味は複数のモグラコオロギを手なずけた。その中で一番よくなついたのが左平次だった。

シマミミズを食べ終わった左平次は、触角でルビーローズをつついておかわりをねだった。

マハラはチリドッグがふたつ乗った皿を持ち上げる

と、ひとつを手に取り、立ったままかぶりついた。パンは外がカリカリで、中はふわふわだった。ボイルされたソーセージは皮がぱりっとして、肉はぷりっとしている。甘みのあるミートソースは、チリパウダーのおかげでピリリと辛い。

「うはっ。うめえ」

マハラはがっついた。

チャパティはフードボックスからコーヒーカップを取り出した。カップの中には熱々のブラックコーヒーが注がれている。管理リヴの特権で、チャパティも調理済みの温かい食べ物をフードボックスに収納できる。

リヴリーの食べ物を担当している管理機関は食糧局で、チャパティはそこの副局長だ。ルビーローズは局長。だから、ふたりのフードボックスには、試食用のサンプルも含めて、いろいろと珍しい食べ物が入っている。

ルビーローズはベンチに腰掛けると、コーヒーを受け取った。

左平次はおかわりしたシマミミズを食べながら、触角でマハラのチリドッグの匂いをかいでいる。

潜水艇の基地で、リヴリーとモンスターがなかよく食事をした。

2

出動態勢に入った。

タラップもベンチも片付けられて、ドックの片隅へと押しやられた。

セルコンリフトも壁際に移動している。左平次は壁にあいた穴の中だ。ごちそうになった礼なのか、それともまだ食い足りないのか、去らずに見送りをしている。

紅月丸は潜水艇に戻っていた。水中翼も鞘翅もたたんでいる。後部銃座を格納し、水密ゲートを閉ざしている。ハッチも閉鎖済みだから、いつでも潜水できる状態で船台に載っている。

艇長席にはルビーローズが陣取っていた。

そして隣の操縦席には、呪文で体を小さくしたマハラがちょこんと腰掛けていた。

「ほんとうに交代するとは思わなかったわ」

「お茶っ葉の野郎は運転が荒くていけねえ」
「おいら、転覆させたです。しかたないです」
きのうの出動で、チャパティは紅月丸を転覆させている。水中での転覆だったから大事には至らなかったものの、ミスはミスだ。役目の交代をマハラに迫られても、文句は言えない。
「最終日くらい、俺様にも運転させろって」
「そうね。じゃあ、いいわ。でも、これだけは覚えておいて。最終日なのは夏祭りですからね。今日も結果が出なくても、また次の機会がありますわ。ですから、無理は禁物よ」
「合点でい」
「はいです」
「では、出動しましょう。ベースゲート、オープン」
「ベースゲート、オープンするです」
機関制御席に回されたチャパティが、復唱しながらパネルを操作した。
コンクリートの床がゆっくりと、横に動き始めた。紅月丸の真下を残して、床がコの字にスライドしてゆく。右へと動いて、壁の中に消えてゆく。

ベースゲートはドックの出入り口だった。床がそのままゲートになっている。つまり、ドックへの出入り口は真下にあった。

操縦席に座るマハラからは、右下に広がる光景がよく見えた。ずっと下った先で水面が光っている。地下へと降りるシャフトは斜めになっていた。二本のレールがあって、レールの間には太いケーブルが通っている。

「スリップウェイ、ディセント」

ルビーローズの指示で、船台が下降を始めた。床ごと、シャフトのレールを下ってゆく。紅月丸は斜め右下へと降りてゆく。

ルビーローズはサファイアガラスの窓から外を見た。見送りの左平次が近寄ってこないか、心配した。だが、オケラのモンスターは慣れたもので、転落するかもしれない危険な穴に近づこうとはしなかった。

急勾配(こうばい)のシャフトの中を、紅月丸は下降していった。左平次の姿はすぐに見えなくなった。ルビーローズは視線を戻した。艇長席の窓の外は殺風景だ。レールとケーブルしか見えない。

「あと半分でい」
マハラが報告した。
紅月丸は床ごと船台ごと、斜め下へとくだっている。操縦席からは終点が見えている。
ブンカーは湖岸にそそり立つ断崖（だんがい）の中に建設された。地表よりも下にあるが、水面よりは上にある。陸上のモンスターからも、水中のモンスターからも、攻められにくい場所にあるわけだ。
その代わり、出動するには下まで降りなければならなかった。
「着いたぜ」
水面に到着した。
シャフトが途切れて、屋内プールのような場所に出た。広いが、天井はそれほど高くない。
床と船台はそのまま下降を続けて水没した。
紅月丸は水面に放り出された形となって、左右に大きく揺れた。潜水艇が揺れても、ルビーローズ一味の三人はしっかり座席に固定されていた。フルハーネス型の安全ベルトを装着している。
「潜航せよ」

「了解でい」
潜水艇〈紅月丸〉が沈み始めた。
バラストタンクにあるベント弁を開くと、そこから空気が抜けてゆく。フラッド・ホールから水が吸い込まれて、タンク内の空気を追い出す。軽い空気は重い水と入れ替わり、船体は沈む。
黒地に赤丸を背負ったナミテントウが、地底の薄暗いプールの中に消えた。
水中にはトンネルがあった。鋼鉄製の柵(さく)で入り口が封鎖されている。
マハラはヘッドライトを点灯した。青白い光が水中の闇を追い払った。
トンネルの奥が見えた。壁に突き当たって、行き止まりになっている。
「セカンドゲート、オープン」
「セカンドゲート、オープンするです」
鋼鉄製の柵が音も立てずに下がっていった。
よく見れば、柵ではなくて杭(くい)だった。横一列に並んだ鉄棒は連結されていない。一本一本が独立している。そしてトンネルの床の中へと格納されてゆく。

「サードゲート、オープン」
「するです」
セカンドゲートが開ききらないうちに、サードゲートも開放された。
トンネルの突き当たりとなる壁が、重い音を響かせて左右に開いてゆく。セカンドゲートの杭は無音で動いたが、サードゲートの壁は騒々しかった。壁の下に引き戸の戸車でも取り付けてあるのか、重い物を転がす音が水中を伝わってくる。
トンネルの壁が開くと、明かりが差し込んできた。点けたばかりのヘッドライトがもういらなくなった。
「よっしゃ。行くぜえ」
マハラはヘッドライトを消して、紅月丸をトンネル内に進入させた。
突き当たりの壁がなくなっても、すぐ奥に別の壁があった。だが、今度は行き止まりではなかった。横に延びていた水中トンネルは、直角に折れ曲がって上へと続いている。
明るい光は空から差してくるのだった。
紅月丸は浮上を始めた。

コンクリートでできた水中煙突が、途中からガラスチューブに切り替わった。周囲が一気に明るくなり、視界が開けた。同時に、水を叩く轟音が聞こえてきた。

ガラスの向こうは気泡だらけだった。大量の水が荒れ狂うように流れている。気泡は水の勢いに負け、浮かぶことも許されずに流れ去ってゆく。

ブンカーへの出入り口となる水中煙突は、地下から滝壺の中へと突き出していた。

「今日もいい天気みたいね」

ルビーローズの声に緊張感はなかった。

滝壺では水が逆巻いている。ミュラー山脈を流れ下ってきた川の水が、断崖から湖に注いでいる。瀑布の真下にあたるのだから、ガラスチューブの外は水の嵐だ。

しかし、硬いサファイアガラスがしっかり守ってくれるので、水中煙突の内側は平穏そのものだった。その証拠に、紅月丸は揺るぎもしない。

「モンスターはいねえな」

マハラは目を凝らして外を見た。

水中煙突がガラスになっているのは、視界を確保す

るためだ。滝壺が安全だとは限らない。モンスターがいないという保証はない。だから、サファイアガラスでチューブを作って、滝壺の中を目視できるようにしてある。

空は晴れ渡っているらしく、滝壺の底まで日光は届いていた。流れる水に翻弄(ほんろう)される気泡のせいでいささか見えにくいものの、モンスターの姿は見当たらなかった。

「滝壺の底までこうまぶしいんじゃ、上はかんかん照りだな」

「水中は涼しくてよかったです」

「ちげえねえ」

マハラは笑った。

真夏の焼けるような日差しを浴びながら陸上で活動することを思えば、ひんやりとした水の中は天国だ。

「暑くても夏祭りは盛り上がってんだろうな」

「おいらたちも、ここで盛り上がるです」

「おめえもたまにはいいこと言うじゃねえか」

「マッハもたまにはいいこと言うといいです」

「んだとぉ。俺様がつまんねえ話ばっかしてるみたい

に言うんじゃねえ」
「はいはい」
ルビーローズはふたりの会話を引き取った。
「そろそろ行きましょうか」
「姐御ぉ。それじゃちっとも盛り上がりゃしねえ。もっとこう、景気よく頼まぁ」
「困りましたわね」
「ズバッとかっこいいやつな。いつもの調子で」
「あら？　わたくし、いつもこんな感じで上品でしてよ」
アカゲパキケのルビーローズは、カールした角をそっとなでた。
「そりゃねえぜ、姐御。……やい、お茶っ葉。だまってねえで、おめえもなんか言え」
「姐さんはいつもこんな感じで上品です」
チャパティはあっさりとマハラを裏切った。
「でしょう？」
「です」
「それごらん」
「げえ……」

三人組で派閥(はばつ)ができると、少数派はひとりぼっちになる。マハラは体をひねって振り返り、真後ろに座る裏切り者に抗議の視線を向けた。

「……異常ないです」

チャパティは素知らぬ顔で、特に用もないのに目の前の計器類を点検した。

「さあ、行きますわよ。メインゲート、オープン」

「メインゲート、オープンするです」

浮上してきた紅月丸は、水中煙突の最上部で静止していた。

水の流れが入り込まないように、煙突はフードをかぶっている。上にも横にも口はなく、ただ下流にのみ、丸い口を向けている。

その口には、サファイアガラス製の整流板(せいりゅうばん)が四枚取り付けてあった。閉ざせば、メインゲートとしてモンスターの侵入を防いでくれる。開けば、上下斜め方向に広がって、水の流れを遠ざけてくれる。

フードとゲートの接合部は、ゲートが可動式なのでさすがにガラスでは作れなかった。錆(さ)びないように、マハラ特製のキルリアン鋼で作ってある。水中に鋼鉄

のリングが浮かんで見えるのだが、それがちょうどいい目印となっていた。ガラスチューブの中から外の水を見分けるのは簡単でも、滝壺の中から水とサファイアガラスを見分けるのは難しい。帰投するときは、水に煽(あお)られても微動だにしない鋼鉄リングを探せばいい。

メインゲートが開いた。

四枚の整流板が、斜め上と斜め下に展開した。

整流板にぶつかった水は、板によって押しのけられた。だが、それで安全というわけではない。板に沿(そ)って流れた水は、整流板の末端で内側に巻き込まれて渦(うず)を作る。また、四枚しかない整流板の隙間(すきま)から入り込んでくる水だってある。

しかし、ありがたいことに、水の動きは流される気泡が教えてくれた。

「……」

ルビーローズは横目でちらりと隣を見た。

気勢があがらずに、いつも陽気な男が沈んでいる。

小さく咳払(せきばら)いをしてから、ルビーローズは口を開いた。

「野郎どもっ！」

「おお……？」
紅い薔薇の女が突然叫んだので、リクエストしたマハラも面食らった。
「出るぜ」
それは、静かで重い声だった。
「おうよ！」
「はいです！」
マハラとチャパティが元気よく応じた。船内は一気に盛り上がった。
「紅月丸！　出撃！」
艇長のルビーローズは腕を振って、指先を真正面に突きつけた。
「前進全速でえ！」
マハラがテレグラフハンドルを押し上げた。
ストップ・モーターからフル・アヘッドに切り替わり、船底のポッド推進器がうなった。六つのスクリューが水を吸い込み押し出して、鋼鉄のモンスターが水中を駆けた。
メインゲートを飛び出す。整流板によって作られたゆるやかな流れを抜けると、滝壺を吹き荒れる水の嵐

が黒いテントウムシに襲いかかった。
操縦席のある右舷(うげん)が水の流れに跳(は)ね上げられ、次の瞬間には叩き落とされた。
「けえっ」
マハラは操縦桿(そうじゅうかん)を握る両手に力を込めた。
船体が飛び跳ねても、マハラの体は動かない。胴体をハーネスで固定している。
体を飛ばされるわけにはいかなかった。しっかり座席に腰を下ろして、紅月丸を操縦しなければならない。滝壺では水が荒れ狂っている。断崖から流れ落ちてきた大量の水が、湖底を掘り下げて深く広い淵を作っている。つまり、水の嵐の外側には、掘り下げられた湖底が崖(がけ)となって立ちはだかっているのだ。
操縦を誤れば、紅月丸は湖底の崖に激突する。
マハラは操縦桿を引いた。潜舵(せんだ)を操作した。
黒いテントウムシの板状の触角が上を向き、紅月丸は上昇に転じた。
ルビーローズは指示を出さなかった。操縦はマハラに任せている。やることは決まっているし、いちいち口頭で伝達する余裕はない。水は荒れている。流れは

予測不能。判断は瞬時に下さなければならない。
それに、マハラの表情には余裕があった。大きな口を開いて歯を見せて、いつものにやついた笑いを浮かべている。
紅月丸は流れに乗った。
川の水は途切れない。断崖から落ちてくる水は止まらない。次から次へと注がれて、滝壺の水を押し出す。
押されて出てゆく水の流れに、紅月丸は乗っかった。しかもスクリューは全速。流れの速さにスクリューの速さも加わって、紅月丸はロケットのように急上昇した。
高速で移動しても、湖底の崖には激突しなかった。水の流れが崖に近づくと、崖側の水は圧縮される。押しつぶされた水は元に戻ろうと反発して、流れを押し返す。流れと崖の間に、水のクッションができる。
紅月丸は湖底の崖を乗り越えた。
滝壺から悠々と脱出した。
だが、今度は別の危険が迫ってきた。
滝壺のまわりは浅瀬になっている。湖岸のため、もとから水深が浅い上に、掘り下げられた滝壺の土砂が

堆積(たいせき)している。いや、上流から運ばれてくる土砂のほうがずっと多い。それどころか、川は巨石や巨岩すら運んでくる。水の勢いには想像を絶するものがあり、大雨で増水すると巨大な岩でさえ浮いて流される。

そんな岩は滝壺に沈みそうなものだが、そうはならない。岩を運ぶほどの大水は、滝壺の底までさらってゆく。沈んだ岩を持ち上げて、運び去ってしまう。

浅瀬には、巨石や巨岩がごろごろしていた。どこをどう進んでも、流れは岩石にぶち当たる。

「そこ、左です！」

正面に現れた岩をどう避けるか、チャパティが指示した。

「わかってらい！」

いまいましそうに文句を言いながらも、マハラはチャパティに従った。

後ろから操縦席を見つめるチャパティは、気が気でない様子だ。マハラの操縦をはらはらしながら見守っている。

滝壺では流れが予測できなかったが、浅瀬では予測できた。地形や障害物によって、水の流れる方向は自(おの)

ずと決まる。流れのゆるやかなところもあったが、帰投するときには利用できても、出撃するときには利用できなかった。なぜなら、紅月丸は速い流れに乗って滝壺を離脱するからだ。

実は、流れに乗るというのは、流れに呑(の)まれるのと同じことだった。湖底の崖を回避する分には、流れに呑まれたほうが都合よかった。けれども、浅瀬に転がる岩を回避するには、流れに呑まれたままでは都合が悪かった。

「このコースは三つ子岩を通るです！」

「わかってるっつーの！」

マハラは操縦桿を握りしめ、巧(たく)みに岩を避けている。しかし、流れに呑まれたままではいずれ避けきれなくなる。行く手に三つの大岩が並んでいる。手前にふたつ、奥にひとつ。紅月丸を呑み込んだ水の流れは、そこを通過する。

手前にある岩の間を抜けるとき、流路(りゅうろ)がせまくなって水は増速する。そして出口で待ち構えている大岩に乗り上げて、水は左右に割れる。

もしも紅月丸が三つ子岩に吸い込まれたなら、座礁

して一巻の終わりだ。手前にある岩の間をすり抜けることができたとしても、奥にある岩は回避できない。乗り上げて、左右どちらかに横転する。どちらに転がっても、そこに紅月丸が通り抜けられる隙間はない。

つまり、三つ子岩に吸い込まれたが最後、横転した状態で紅月丸は動きが取れなくなる。急流を堰き止める形になるから、水の流れに圧迫されて、もうどうにもならない。

「ここを右でい！」

三つ子岩を回避するための分岐点で、マハラは右に折れた。

水中に沈んだ巨石が左舷の艇長席に急接近した。

「……」

ルビーローズは動じなかった。瞬きさえせずに、かすめるように真横を通り過ぎた巨石を見つめた。

「ちがうです！　まだ先です！」

「げえ……」

右に折れた紅月丸のさらに右側から、別の流れが合流してきた。強い流れに真横から突入した紅月丸は、横向きに押し流された。

マハラは分岐点をまちがえたのだった。

組み合わせは掛け算だ。

二掛ける二はたったの四でも、もうひとつ二を掛けると八になる。このくらいならすべての組み合わせを記憶できても、十六、三十二と、掛けるたびに数字はふくれあがる。右か左か、たった二個の選択肢しかなくても、それが五回も続けば組み合わせは三十二通りにもなる。

左右のどちらに進むのか、それともそのまま流されるか。複数の選択肢に、複数の分岐点。そして、複数の流れ。浅瀬を抜ける組み合わせは三十二通りどころではない。

そのすべてを頭に入れていないと、正解にはたどりつけない。常に思いどおりに操船(そうせん)できるわけではない。

だから、操縦席には一味の知恵袋であるチャパティが座っていた。水流調査は全員でしたし、コースも全員で話し合って決めた。ルビーローズもマハラも、コース取りはわかっている。それでも、チャパティに任せたほうが確実だった。

そもそもブンカーを設計したのはチャパティだ。危

険な場所に出入り口を選んだのはルビーローズだったが、チャパティはそれを実現している。増水時に巨石が降ってくることまで想定して、滝壺の水中煙突は地下に格納できるよう、安全設計をしている。

そんな堅実(けんじつ)なチャパティにも、岩を縫(ぬ)って浅瀬の急流を進むのに、安全策は用意できなかった。

すべては、操縦桿を握る手にかかっている。

一味の命運は、操縦桿を握る男にかかっている。

ところが、その男は分岐点をまちがえてしまった。

そのまま前進を続けて流れを渡ってしまうことはできなかった。地形がそれを許さない。進めば、別の岩にぶつかるだけ。

紅月丸は三つ子岩に吸い込まれるコースから抜け出せなかった。しかも、横向きに流されている。難所に向かうコースで横向きになるとは、致命的なミスだった。

「やっべえ!」

マハラはすぐさま対応した。

ダイヤルアクセラレーターをひっつかんで、思いっきりひねった。

向きを修正するのは簡単だった。紅月丸はポッド推進器を採用している。ふつうの船とはちがって、舵(かじ)はない。ポッドの向きを変えるだけで、三六〇度どの方向にも進めるし、その場でくるりとターンもできる。

鋼鉄のモンスターが下流を向いた。

すると、そこに渦が待っていた。

紅月丸がいま乗っている流れと、さっきまで乗っていた流れが、合流して複雑にからみあい、渦を巻いたのだった。

「マジかよ！　ついてねえ！」

マハラがぼやいた。

たいして大きくはない渦だったが、発生と消滅を繰り返すので予測はできなかった。もう少し早ければ、あるいは遅ければ、消えてなくなるはずの渦だった。

紅月丸は渦に呑まれた。

呑まれた次の瞬間には通り抜けたものの、船体は大きく回転させられて、今度は後ろ向きとなった。

「うおおーっ！」

マハラはもう一度ダイヤルアクセラレーターをひねった。

「緊急浮上！」
ルビーローズは斜め後ろのチャパティに声を叩きつけた。
「はいです！　バラストタンク、排水するです！」
操縦で手一杯のマハラの代わりに、機関制御席のチャパティが操作を代行した。
「だめだ！　間に合わねえ！」
マハラの操作で、船体は時計回りに回転している。右舷を下流に向けて流されている。
巨石がひとつ、右から迫ってくる。三つ子岩を回避するための分岐点となる巨石だ。本来は、ここで右に進むはずだった。合流したふたつの流れはからみあってひとつになる。ほかに合流してくる流れはないし、行く手をふさぐ岩もない。だからここでなら、右に折れてもうまくいく。
しかし、分岐点をまちがえてしまった。
渦に巻かれて、船体の向きまで変えられてしまった。
後ろ向きで急流は下れない。
正面に向き直る途中で、障害物が視野に入った。
巨石はもう、そこにある。

もはや回避不能。
「ちくしょう！」
「このまま回るんだよ！」
ルビーローズはターンの続行を指示した。言葉だけでは真意が伝わらないと判断したのか、艇長席にも用意されているダイヤルアクセラレーターを、自分で直接操作した。
窓の外の巨石が右から左に流れた。
鋼鉄のモンスターは左舷から巨石にぶつかった。
ハーネスで固定されたルビーローズの体が大きく振られた。
衝突音が船内後方から響いてくる。
「やっちまった！　俺様のせいじゃねえか！」
「あとにしな！」
ルビーローズはマハラをしかりつけた。
くやしがるのはまだ早い。先には三つ子岩が控(ひか)えている。
それに、巨石との衝突は被害が軽くなるよう、船体を回転させた。転がるようにぶつかって、少しは衝撃も逃がせたはずだ。

「正面に三つ子岩です！　浮上は間に合わないです！」
時計回りでさらに一回転しながら流された紅月丸の前に、今度は障害物はなかった。
ただ、左右にある大岩の間に、水が吸い込まれてゆく。
「浮けよ、この野郎！」
マハラは操縦桿を乱暴に引き倒した。
いまさら浮上しても手遅れだ。
岩の間に吸い込まれた水は速度を増して、奥に隠れた岩に激突する。水はやわらかく左右に割れ、そのまま流れ去る。けれども、紅月丸は……。
「ハンマー・アクセル！」
ルビーローズはハイドロハンマーの砲身を下げた。船底にある水中大砲をぶっ放した。
浅瀬がえぐられて、水が濁(にご)った。水中大砲の威力に、急流が一瞬堰き止められた。
ハイドロハンマーを撃つと、反動が船体を突き上げる。水中の紅月丸が浮上した。しかし、そこまでだった。水を押しのけるだけで反動は吸収された。

「アクセル！」
ルビーローズは続けてハイドロハンマーを撃った。
水中から浮上した紅月丸が、今度は水面から浮き上がった。だが、高く舞い上がりはしなかった。飛ぶには船体が重すぎた。バラストタンクにはまだ水が残っている。
「飛びな！」
ルビーローズはあきらめなかった。最後の一発を放って、紅月丸をもう一段高く飛ばした。
ハイドロハンマーを応用したハンマー・アクセルの三連発で、紅月丸は低空飛行した。いや、とても飛行とは呼べない。翼がないのだから、ただのジャンプだ。投げた石が水面を飛び跳ねた程度。
それでも、なんとか三つ子岩を飛び越すことに成功した。
奥の岩にハイドロハンマーの砲身が接触したが、バランスを崩(くず)すこともなく、無事に着水した。
三つ子岩を越えると湖は急に深くなった。浅瀬を駆けてきた流れも、深みに足を取られたのか、速度を落とした。

紅月丸は湖面をすべるように進んだ。
「ふう……」
静まりかえった船内では、マハラの溜息がやけに大きく聞こえた。
「やい、マッハ。やっぱり、おいらが操縦するです」
「……面目ねえ」
チャパティの操縦ミスに付け込んで役目を奪い取ったマハラだったが、今度は自分が奪われる番だった。

3

操縦ミスの責任をとって、マハラが水中に潜った。
被害の程度を確認しなければならない。
船体は巨石に衝突したし、砲身は三つ子岩に接触した。ブンカーに戻って検査したほうが正確だが、ひょっとすると戻ることもできない状態かもしれない。だから、戻るにせよ、戻らないにせよ、見ておく必要がある。
ルビーローズはハッチで周囲を警戒していた。
両手で機関銃を構えている。怪物密林は危険な場所

だ。湖には水棲モンスターがうようよしているし、水上には飛翔モンスターの脅威もある。もしもモンスターが接近してきたら、ティアドロップ・マシンガンで水滴の弾丸をばらまいて、マハラを援護する。

船体の確認をすませたマハラは、操縦席のチャパティに窓越しに合図を送った。

チャパティは水中翼をたたみ、鞘翅をたたんだ。

いまのところ、異常はなかった。最初に船内を調べたが、浸水はしていなかった。鞘翅は開いたし、水中翼も展開した。シュラウド・リングも起きたから、羽にゆがみはないようだ。

次は、水中大砲のハイドロハンマー。チャパティは砲塔を下ろして左右に回転させ、砲身を上下させた。

窓の向こうの大男が、水中なのに歯を見せて笑いながら、拳を握って親指を立てた。制帽は脱いでいったから、自慢のソフトモヒカンが水の中で揺れている。頭の上に水草が生えているようで、うっかり吹き出しそうになる。

志願して危険な水中に潜っている男を笑うわけにはいかない。チャパティは鼻先をつまんで自分に苦痛を

与え、笑いをこらえた。
鼻をつまんだハナマキがハイドロハンマーを格納した。
最後にスクリューを調べて、確認作業は終了となる。
マハラは船底まで潜ろうと、カエル泳ぎを始めた。力いっぱい水を蹴っているのに、ちっとも前に進まない。蹴った足をしっかり閉じて水を後ろに送り出す、ということをしないから、いくら蹴ってもたいした推進力にはならない。むしろ、蹴った足をすぐに曲げて引きつけるものだから、それがブレーキとなっている。
泳いでも泳いでもマハラは進まない。チャパティの目の前で、水草が前後に揺れ動く。
視線を感じたのか、マハラはチャパティに顔を向けた。そして、誇(ほこ)らしげに笑って見せた。たぶん本人は、華麗(かれい)な泳ぎを披露(ひろう)しているつもりなのだ。チャパティが見とれていると勘違(かんちが)いでもしたのだろう。
枯れ葉が沈んでいった。
ひらひらと舞いながら、泳ぐマハラを追い越していった。
枯れ葉に抜かれて、マハラはむきになった。抜き返

してやろうと、水を蹴りまくった。
蹴った分だけブレーキがかかるから、差は開く一方だ。とうとう枯れ葉は見えなくなった。
マハラの動きが止まった。顔をチャパティに向けた。枯れ葉なんぞに負けて、よほどくやしかったにちがいない。水の中なのに、瞳(ひとみ)が潤(うる)んでいた。
「ぶぷーっ」
チャパティは後ろを向いて吹き出した。もう我慢はできなかった。
「……なにをしているのかしら？」
伝声管から冷たい声が流れてきた。
「なんでもないですっ」
チャパティはあわてて返事をすると、窓の向こうに身振りで知らせた。
指を一本立てた右手を上に向け、ちょんちょんとつつく動作をした。左手も指を一本立て、両手を顔の横でくるりと回して見せた。その手を頭の上に持ってきて、立てた指をピコピコと動かした。
上の、アカゲパキケが、怒っているです――と。
「！」

マハラの顔色が変わった。泳ぐのをやめ、船体に手をついて体を引っ張り、あわてて潜っていった。
チャパティはそのまま水中を監視した。見える範囲は限られているが、操縦室は水面下にあるので視界は良好だ。
マハラはそそくさとスクリューを見て回った。
船体で一番壊れやすいのはスクリューだった。障害物との接触や、着水時の衝撃などで折れ曲がる懸念がある。
幸い、特に異常はなかった。ペラゲージを当てて精密にチェックをすれば問題が出てくるかもしれないが、そこまではできない。細かい検査はドックに陸揚げしたときにやるしかない。
確認作業を終え、マハラは水面に顔を出した。はしご代わりの小さな出っ張りに指をかけて、船体をよじ登った。
「どう？」
ルビーローズが声をかけた。声だけかけて、顔はよそを向いている。警戒は怠(おこた)らないでいる。
「問題ねえぜ、姐御。船体は、ちいとへこんで塗装が

剥げてやがるが、穴はあいてねえし、亀裂も見当たらねえ」
「ハイドロハンマーは？」
「こすり傷は長いのがついてやがったが、ありゃ、ほんとにこすっただけでい。動作に問題なかったぜ。あと、スクリューも曲がっちゃいねえ」
「そう。だったら、このまま作戦続行ですわね」
ルビーローズは機関銃をマハラに押しつけた。それからタオルを手渡して、先に自分だけ降りた。
操縦室に戻ると、座席から身を乗り出して振り向いたチャパティが、うなずいて見せた。ハッチでの会話は伝声管を通してチャパティにも聞こえていた。
「異常はないのね？」
ルビーローズは念を押した。座席の横で足を止め、チャパティが座る操縦席の背もたれに手をかけた。
「操作感はどうだったのかしら？」
「いつもどおりの感触だったです」
「じゃあ、問題なしね」
「でも、姐さん。ハイドロハンマーは試射したほうがいいです。念のためです」

「そうね。ちゃんと動いても撃てなかったら、いざというときに困りますものね」
「それと、このあとどう進むですか？　初日は湖底を進んで、ヤゴに邪魔されたです。昨日は中ほどを行って、ゲンゴロウに追跡されたです。今日は――」
「今日は浅いとこ行ってみようぜ！」
伝声管から返事があった。
「水深の浅いところは危険です。モンスターが活発に動き回ってるです」
チャパティは伝声管に顔を向けた。
「んなこた、わかってらい。俺様もいっしょに湖岸探査したじゃねえか。まあ、待てって。いま、そっちに戻るからな」
「……」
チャパティは横に立つルビーローズを見上げた。ハッチを閉める音が船内から直接聞こえてくる。
ルビーローズは無言でうなずいた。潜水の許可を出したのだった。紅月丸は浮上している。ほんの少し潜るだけで、飛翔モンスターの脅威はなくなるし、おもに水面で活動するアメンボのような水棲モンスターの

脅威もなくなる。
チャパティはバラストタンクに注水して、紅月丸を水面下まで浅く沈めた。
マハラがはしごをすべり降りてきた。体を拭いたタオルを首からぶら下げている。まるで風呂上がりのようだ。
「とりあえず、浅いとこも行ってみようじゃねえか。だめなら、深く潜っちまえ」
「マッハの言うとおりにして、二日続けて失敗したです」
「俺様のせいじゃねえっつーの。外れくじは誰が引いたって外れに決まってらぁな」
マハラは自分の席につくと、両手で頭の毛をはさんでなでであげた。湿(しめ)った毛がなんとか立って、自慢のソフトモヒカンが復活した。
「どこを進んでも、危険に変わりはありませんわ。今日は浅いところを行ってみましょうか」
「そうこなくちゃな」
三日連続で自分の意見が採用され、マハラは満足そうに制帽をかぶった。

「でも、しばらく進んだら底まで潜りますわよ。だって、目的は湖底探査ですもの」
ルビーローズはマハラの制帽をなにげなく見つめた。そっくり同じデザインの制帽をルビーローズもかぶっていたが、きのう、星彩洞の水路でなくしてしまった。いつも身につけているものがないというのは、妙にさみしいものだった。
ルビーローズとマハラがハーネスを装着するのを待って、チャパティはハイドロハンマーを試射した。
水中大砲に異常はなかった。紅月丸は反動で突き上げられて浮上し、すぐに自重(じじゅう)で沈んだ。
「ハイドロハンマー、異常なしです」
「では、参りましょう」
脚のないテントウムシが水中を走り出した。
水面下の浅いところを紅月丸は進んだ。真夏の強烈な日差しに照らされて、すぐ上の水面がきらきらと光っている。
アカゲパキケの目はぱっちりと大きく開いているから、ルビーローズには少々まぶしかった。
目の小さなハナマキにとってもまぶしいらしく、い

つも半開きのチャパティの目はさらに眠たそうに見えた。
窓のない席に座っているシマオーガだけは別で、マハラのぎょろ目はいつもどおりぎょろぎょろしていた。
しばらく進むと、右手の水中に緑の小山が現れた。
断崖が大きく崩落(ほうらく)して、土砂が湖底に積もっている。そこに水草が生(お)い茂(しげ)っている。リヴリーサイズの小さな水草ではない。モンスターサイズの大きな水草だ。パキケフーズに巨大なチューリップが咲いているように、リヴリーには大きすぎる水草が生えている。
崩(くず)れた断崖は、傾斜がややきついもののスロープ状になっていた。そのため、陸上モンスターが湖面まで降りてくることがあった。
陸上のモンスターといっても、泳ぎの達者な者もいれば、潜るのが得意な者だっている。水中で狩りをする者もいるくらいだから、潜航する紅月丸にも陸上モンスターの脅威はある。だが、危険な場所だとわかっていたから、ルビーローズ一味が気を抜くことはなかった。
水中の小山にはミズグモが棲み着いていた。

ミズグモは、水の中で暮らす風変わりな陸上モンスターだった。水草に糸を張って、わざわざ水中に巣を作っている。巣は袋状になっており、空気を溜めることができる。毛の生えた腹部に空気をまといつかせて、ミズグモは巣の中に運び込む。あとは、巣から顔を出して獲物（えもの）を待ち伏せる。呼吸器官は腹部にあるから、溺れることはない。

紅月丸はミズグモを横目に通り過ぎた。相手はリヴリーを襲う危険なモンスターだが、水中で暮らすわりに泳ぎは不得手だった。うっかり近づきでもしない限り、問題はない。

ミズグモは鋼鉄のモンスターに興味を示さなかった。補給作業でいそがしいようだ。水面に差し出した腹部をすばやく引いて空気を取り込み、巣へと急いだ。

明るい日差しに水草の緑が輝いて見えた。空気に包まれたミズグモの腹部も、空気を溜め込んだミズグモの巣も、どちらも日光を反射して銀色に光っている。

紅月丸は浅い水中を静かに進んで、湖岸から遠ざかっていった。

「なんか、変なのが浮いてるです」

沖まで無事に進出したところで、チャパティが口を開いた。
「？」
ルビーローズはチャパティの視線を追った。
前方に見たこともない物体が浮遊していた。水面を漂っている。横に大きく広がって、かなりの面積を占めている。
「なにかしら？」
「黒くて、雨雲みてえだな。ひと雨くるんじゃねえか」
マハラが軽口を叩いた。
浮遊する物体が日光をさえぎっているようだ。前方の水中は暗くなっている。
「姐さん、どうするですか？　このまま進むと、真下に入るです」
「いいじゃねえか。行ってみようぜ」
「危険かもしれないです」
「おめえだって、あれがなんだか見てみてえだろ？行こうや、姐御」
マハラとチャパティはルビーローズの決断を待った。

「これも探査のうちですわね。注意して進みましょう。
……前進半速」
「前進半速にするです」
紅月丸の速度が半分に落とされた。
「ありゃ、アリじゃねえのか？」
浮遊物体は蠢(うごめ)いていた。
「わたくしもアリに見えますわ」
「……おいおい、モンスターの群れじゃねえか。なんだって、こんな沖を泳いでやがるんでえ？」
水面に浮かんでいるのはアリだった。巨大昆虫のモンスターが群れて、びっしりと水面を覆(おお)っている。遠くからは油でも浮いているかのように見えたが、近づいてみれば、大量のアリがひと固まりになっているとわかった。互いに仲間をくわえて、離ればなれにならないようにしている。
「おいら、聞いたことがあるです。大雨で巣が水没しそうになると、巣を放棄して、自分たちの体でいかだを組んで脱出するアリがいるです」
「雨なんか降ってねえじゃねえか」
「たぶん、別の理由があるです。巣が壊れたとか、新

しい女王が誕生して巣を分けたとかです」
「まあ、理由がねえと、湖を渡ったりはしねえよな。けど、よく沈まねえな、こいつら。つうか、溺(おぼ)れねえのはなんでなんでえ？」
マハラは席を立った。制御室から操縦室に移ると、ルビーローズとチャパティの間にしゃがみ込んだ。窓の外をじっと眺(なが)める。
横に広がったアリの群れは、縦にも積み重なっていた。ごちゃごちゃしていて何層あるかはわからないが、少なくとも最下層のアリは完全に沈んでいる。
「ミズグモと同じですわね。よくごらんなさい。おなかのまわりに空気をまとっていますわ。……チャッパ、前進微速にして」
「はいです」
チャパティは紅月丸の速度をさらに落とした。
「なるほどな。空気の膜(まく)さえありゃあ、息はできるし、沈みもしねえってか」
アリのいかだの真下に、紅月丸は進入した。いかだは幅も広く、厚みもある。日光はほとんど漏れてこない。船内は一瞬で暗くなった。そして、静まりかえっ

た。
ルビーローズ一味は三人そろって、無言で顔を上げている。危険なモンスターの、それも群れを、間近で真下から観察できるとはめったにないことだった。
アリたちはただ浮いているのではなく、泳いでいた。せっせと脚で水を掻(か)いている。水面を埋め尽くしたアリの群れが蠢(うごめ)いているのは、みんなで泳いでいるからだった。
「うは。こっち見やがった」
マハラがつぶやいた。
モンスターの群れは、真下にいる黒いテントウムシに気づいたようだ。背中に真っ赤な丸がふたつもあるから、それが目を引いたのかもしれない。
大顎(おおあご)で仲間をくわえているのでうつむいたりはしなかったが、アリたちは首をひねると、視線を下に向けた。
「……いやな感じ」
ルビーローズが警戒している。
「少し潜るですか？」
「やい、お茶っ葉。水面のアリがどうやって、水中の

潜水艇を攻撃するんでえ？　ありんこ爆雷でもあるのかよ？　笑わせらぁ」
　マハラの言うとおりだった。陸上モンスターであるアリに、水中の獲物を攻撃する手段はない。泳いでいるといっても、水面にただ浮いている程度なのだから、手の打ちようがない。
「もういいでしょう。充分（じゅうぶん）に見物しましたわ。そろそろ、下から出ましょうか」
「はいです。三時の方向が空いてるです」
「では、そちらに」
　紅月丸は左に回頭した。
　すると、水面がざわついた。アリのいかだも、紅月丸にあわせて回転を始めた。水面を埋め尽くすほどの大きさだから、くるりとは回らない。それでも、向きを変えようと全体が動き出した。
　しかも、異変はそれだけではなかった。紅月丸の進行方向にあった明るい水面が、次々と埋め立てられていった。
「なんでえ、こりゃあ！」
　驚いたマハラが大声になった。

「わたくしたちを逃がさないつもりですわ」
「げえ……」
「アリの狙いがわかったです。えら呼吸のできない生き物は、水面にふたをされたら息継ぎできなくて溺れるです。なので、そこを捕まえるです」
「じゃあ、なにか？　アリのくせに、水上で狩りをしてるっつーのか？」
「はいです」
「げえ……」
「落ち着きなさい、マッハ。わたくしたちに効果はなくってよ」
「そりゃそうだ。紅月丸は溺れたりしねえ。でもよ、どうやってあそこを埋めたんでえ？」
　マハラは埋め立てられた水面を指さした。さっきまで明るかった進行方向は、いまやすっかり暗くなっている。
「あっという間に埋まっちまったじゃねえか」
「たぶん、走ったです」
「走っただあ？」
「いかだの上を走ったです。アリのいかだは上と下に

分かれてるです。下のアリは空気をまとって、いかだを浮かせるのが役目です。脚を使って泳いでも、実はたいして進まないと思うです。でも上のアリが、仲間の体の上を走って次々と水に飛び込めば、群れはそっちにどんどん進むです」
「でもよ。それだと、上のアリが一匹残らず飛び込んじまったら、おしまいじゃねえか」
「下のアリが水からあがればいいです」
「なるほど、そういうからくりかよ。群れ全体で水面をぐるぐる回ってやがるんだな。キャタピラみてえによ」
　マハラは空中で手を回して見せた。
「驚きましたわ。こんなアリがいたなんて。まだまだ知らないことがたくさんありますわね」
「で？　どうするよ、姐御。突っ走って振り切っちまうか？」
「そんなことはしませんわ。このまま、ただ潜ればいいでしょう？　……チャッパ」
「はいです」
　チャパティは操縦桿を少し奥へと倒した。

潜舵が下を向いて、紅月丸は下降を始めた。
しかし、みすみす獲物を取り逃がすようなモンスターではなかったらしく、すかさず次の手を打ってきた。
アリたちは、仲間をくわえていた大顎(おおあご)を開いた。いかだがばらばらになった。隙間ができて、暗い水中に日が差した。
「なにごとですの？」
急にまぶしい光が差し込んできたので、ルビーローズは手をかざした。
目を細めて事態を把握すると、余裕は吹き飛んだ。
仲間を放して自由になったアリが、頭を下にしていた。一匹や二匹ではない。群れ全体が下向きだ。無数のアリが水中で逆さまになって、紅月丸を見つめている。
そして、一斉に泳ぎ始めた。
真下に向かって。
「チャッパ！」
「潜るです！」
「うおっ！　マジでありんこ爆雷かよっ」
潜ってくるアリはまさに爆雷だった。潜水艦を攻撃

するために、水中に投下された爆弾そのものだ。
獲物が潜るのなら、その前に捕まえてしまえと、アリたちは潜水を開始した。群れ全体が一斉に潜ったので実に壮観だったが、眺めて楽しむ余裕はなかった。
チャパティは潜舵を最大俯角にした。前進全速で紅月丸を一気に沈降させた。
アリの群れに捕まるわけにはいかない。なんといっても数が多すぎる。群れに包まれてしまえば、スクリューも無用の長物となる。
「だいじょうぶですわ。潜舵水平。ストップ・モーターよ」
窓から外を監視していたルビーローズが指示した。
あまりの迫力に思わずあわてたものの、距離さえ取れば、どうということはなかった。しょせん、相手は陸上のモンスターだ。全速の潜水艇に追いつけるほど、速くは泳げない。
アリたちは早々に狩りを断念していた。たったいま潜ろうとしたのに、もう浮上に移っている。見切りをつけるのが早いのは、名ハンターの証明だった。無駄な労力は最小限に抑えている。

浮上したアリたちは再びいかだを組み始めた。水中に差し込む光の筋が一本、また一本と消えてゆく。
やがて、水中は暗くなった。
別の獲物を求めて、アリのいかだは水面を渡っていった。
日が差した。
「……なあ」
去ってゆく黒雲を見上げながら、マハラが仲間たちに声をかけた。
「軍隊アリってな、聞いたことがあるけどよ。さしずめ、ありゃあ、艦隊アリってとこだな」
「言い得て妙ね」
ルビーローズは感心した。
なかなか見事なネーミングだった。大艦隊で水上を制圧し、敵潜に爆雷攻撃を仕掛ける。アリの特徴をよく言い表している。
「そう呼ぶことにしましょう」
アリの艦隊に肝を冷やしたルビーローズ一味は、コースを変えた。浅い水中を進むのをやめ、本来の目的である湖底探査に切り替えた。

脚のないテントウムシは、水中を斜めにすべり落ちていった。
ルビーローズとチャパティは窓から外を監視した。
自分の席に戻ったマハラは潜望鏡で後方を見た。ハイドロハンマーに取り付けてある潜望鏡を使えば、ごくせまい範囲だが真後ろが見える。
モンスターの尾行はなかった。遭遇(そうぐう)することもなかった。
紅月丸は平穏無事(へいおんぶじ)に、湖底までたどりついた。
「どんなもんでえ。浅いとこ行って大正解だったじゃねえか。俺様に感謝しな」
マハラは大きな鼻をこすりながら自慢した。
「当たりくじは誰が引いたって、当たりに決まってるです」
「んだとぉ」
「あら？　なにかしら？」
ルビーローズはふたりの会話を無視した。
ヘッドライトの光が影を照らした。湖底が黒く染まっている。まるで整地でもされたかのように、広い範囲が真っ平らになっている。もちろん、湖の底が整地

されているわけはない。
「……変ね。水面に見えますわ」
平らだが、整地はされていない。とすると、考えられるのは水面だろうか。波が立たなければ、水面は平らになる。
「ああん？　なに言ってやがんでい。水の中に水面があるわけねえだろ。ちゃんと仮眠したのかよ。姐御が寝ぼけてちゃ、しゃれにならねえ」
「バカね。ほんとうに水面に見えますの。そうでないとしたら、誰かが整地したのですわ」
「行ってみるです」
チャパティは紅月丸の進路を変更した。
「ほんとに平らになってるです」
「おいおい。また艦隊アリじゃねえだろうな」
水面を埋め尽くしたアリの艦隊も、遠くからは平らに見えた。
「ちがうと思うです。アリなら、息が続かないです」
「じゃあ、なんなんでえ？」
「それをいまから調べるです」
チャパティは紅月丸を湖底に近づけた。不思議な地

形を確かめるには、間近で見るのが一番だ。
接近してよく見ると、平らな部分は黒ではなく、赤黒いのだとわかった。いや、赤いところもあれば、黒いところもある。赤が透けて、下の黒地が見えていたりもする。
「ほら、やっぱり。水面ですわ」
湖底の黒い地面に赤い水が溜まっているようだ。しかも厚く。
つまり、湖の底に、もうひとつの湖があった。
「これは湖底湖(こていこ)です」
「湖底湖？　湖の底の湖ですの？」
「ありえねえって。なんで水の中に水が溜まるんでい」
「比重が異なるです。たぶん、海の水が流れ込んでると思うです」
「そりゃあ、おめえ。川を下りゃ、海に出るけどよ」
「つまり、この下にあるのは海水ってことかしら？」
「俺様が行って、ちょいと舐めてくらぁ」
「行ったら死ぬです」
おどけたマハラを、チャパティが脅した。

「塩水くらいで死ぬかっての」
「モンスターは死んでるです」
チャパティが窓の外を指さした。
後ろの席にいるマハラからは見えなかった。席を立って、操縦室に移動した。
「げえ……」
湖底の黒い泥にモンスターの死骸が埋もれていた。種類はわからないが、甲虫のようだ。
「下にあるのは、死の湖です」
紅月丸が停止した。頭を下げて、モンスターの死骸にライトを当てている。
チャパティは仲間たちに話して聞かせた。
汽水湖（きすいこ）と呼ばれる湖がある。汽水とは、淡水と海水が混ざった水をいう。塩分濃度の低い水が淡水で、その逆が鹹水（かんすい）。海の水は鹹水だ。
比重が異なるため、汽水湖の水は二層に分かれることがある。上の淡水湖と、下の塩水湖に分離される。こうして、湖の底にもうひとつの湖が誕生する。
湖水が上下に循環（じゅんかん）しないから分離されるわけだが、それは下層に空気が供給されないことを意味する。元

からあった酸素は有機物分解によって使い果たされ、無酸素となる。硫化水素の濃度が高くなり、卵の腐ったようなドブくさいにおいを発する。

酸素がなくても、生物はいる。紅色硫黄細菌などの嫌気性細菌が繁殖する。この手の細菌は、硫化水素を使って硫酸呼吸をする。

「ってことは、なにか？　下にあるのは硫酸の湖かよ！」

「別に濃硫酸で満たされてるわけじゃないです。水の中に硫酸が含まれるかもってことです」

「舐めるとピリッとするかしらね？」

ルビーローズがからかった。

「塩水くらいで死なないです」

チャパティもいっしょになっておちょくった。

「さあ、行ってらっしゃいな」

「湖水のサンプルよろしくです」

「げえ……」

マハラは自分の席まで後ずさりをした。鬼のような仲間たちだった。

「冗談はさておき……」

ルビーローズは真顔に戻った。
「湖沼図への記載、忘れないでね。マッハ」
「おっ、おう」
マハラは短く答えた。もう、よけいなことは言わなかった。
「姐さん、湖底湖の全容を調べるですか？」
「いいえ。興味はありますけれど、いまは、光る湖の秘密を優先しましょう」
「了解したです」
「潜舵上げ、水平潜航へ。紅月丸、前進全速」
ルビーローズの号令で、鋼鉄のモンスターが走り出した。
湖底の湖がヘッドライトの光を浴びている。細菌の繁殖しているところは水が赤く、そうでないところは湖底に堆積した黒い泥が見えている。
黒い泥はヘドロだ。
奥地の湖に、工場の廃水などは流れ込んでいない。泥の中に含まれる金属が硫化水素と反応して、黒くなっている。ドブをさらえば真っ黒な汚泥が出てくるが、それと同じものが澄んだ湖の底にも溜まっている。天

然のヘドロである。
湖底湖の黒い泥に、ミズカマキリの鎌が一本、突き立てられていた。

第七章　水中島の真珠

一

光った。

水中から水上に向けて、光線が飛んだ。

強い光ではなかった。空には太陽がある。真夏の強烈な日差しが湖面を焼いている。

それでも、雲が太陽を隠して日が陰ると、水の中を浮上してゆく光が見えた。

「ようやく、ここまで来れましたわね」

艇長席のルビーローズが足を組んだ。

潜水艇〈紅月丸〉は峠（とうげ）にさしかかっていた。

水中の峠だった。

岸が左右から迫（せ）り出して、湖底でつながっている。山なら尾根に当たる。尾根の窪（くぼ）んだところが峠。山道は、峠に向かって登りとなり、峠を抜けて下りとなる。

進むにつれて浅くなる水深にあわせて、紅月丸は上

昇していた。
ヘドロの積もった湖底湖はもう見えない。流入した海水は湖の一番深いところに溜まっている。
「峠を越えるです。いよいよ、南の湖に入るです」
「後ろは問題ねえ。前が危険なのはわかってるよな。しっかり頼むぜ」
チャパティが操縦桿を握り、マハラは潜望鏡をのぞいている。
両岸が迫り出しているため、湖はそこで仕切られた感じになっていた。分断されてはいないものの、北と南にふたつの湖があるかのようだ。
「光る湖の秘密。今日こそ、暴(あば)いて差し上げますわ」
ルビーローズは水面を見上げた。
小雨でも降っているかのように、たくさんの波紋(はもん)が水面にある。走る波紋だ。生きている。湖が光るので虫が寄ってくるらしく、それを目当てにモンスターのアメンボが集まっていた。
湖の南側に進入するのは、これが初めてだった。湖底探査に先立って実施した湖岸探査では、あまりに危険なため近づくことさえ断念した。アメンボが群れて

いるところに湖岸探査用の半潜水艇で進入すれば、たちまちたかられてしまう。
そのため、水上からはまったく観察できなかった。水中でいったいなにが光っているのか、潜水艇のおかげでようやく目にすることができる。
スクリューで泳ぐテントウムシが峠を越えた。
目元から横に張り出した板状の触角が下を向いた。紅月丸は船首を下げた。水中の坂が急角度で下ってゆく。
転がり落ちる坂の底に、それはあった。
「見えましたわ！」
組んでいた足を下ろしてルビーローズは身を乗り出した。
湖底に光る物体があった。
輪郭（りんかく）が丸いところを見ると、球体だろうか。深く暗い場所で真っ白に輝いている。その光が湖面にまで達するから、湖は光るのだ。
「なんでえ、あの玉は。水中太陽かよ？」
「熱はないと思うです。もしも燃えているなら、水が蒸発して気泡が大発生するです」

チャパティは冷静に否定した。
「なら、サーチライトにちげえねえ。たぶん、あれだ。灯台だ」
マハラは勝手に決めつけたが、今度は否定されなかった。
湖底に灯台があるはずもない。しかし、誰かが作れば、あってもおかしくはない。その証拠に、滝壺には煙突があって、紅月丸はそこを出入り口にしている。
「どのくらいの深さかしら？」
「玉の大きさがわからないので、なんとも言えないです。でも見た感じ、湖底湖よりもずっと深いところにあるです」
「おいおい。だったら、このまま潜ると硫酸の湖に突っ込んじまうじゃねえか」
「それはだいじょうぶだと思うです」
「ああん？　なんでええ？」
「光る玉はまんまるです。水面で屈折(くっせつ)して、ゆがんで見えたりしてないです。あと、光は白いです。赤く染まったりしてないです。なので、この下に湖底湖はないと思うです」

「そういやぁ、なんたら細菌が繁殖してるとかで、硫酸の湖は赤っぽい水だったな。でもよ。こっちのほうが深いってのに、湖底湖がないのはおかしかねえか。海水は重くて、深いところに溜まるんじゃなかったのかよ」
「峠ですわね」
マハラの疑問にルビーローズが答えた。
「ああ、そういうことか。峠のところで湖底が盛り上がってやがるんで、こっちまで海水が流れてこねえんだな」
「はいです。でも、おいらの読み違えかもしれないので、気をつけて進むです」
「そうね。なにがあるかわかりませんわ。細心の注意を払って進みましょう」
光る物体をめざして、紅月丸はゆっくりと潜航した。ヘッドライトはいらなかった。潜れば潜るほど太陽の光は届かなくなるが、謎の物体が光っているおかげで照明は不要だ。
下り坂になった湖底には、泥が堆積していた。湖底湖のようにどす黒い汚泥(おでい)ではない。よくある茶色の泥

だ。
その泥が徐々(じょじょ)に薄くなっていき、固い地盤が目につくようになった。湖底の坂は、落ち込むように途中から傾斜がきつくなっている。勾配(こうばい)が急になると、泥は積もらずにさらに下へと落ちてゆく。
やがて坂は消え、崖へと変わった。
湖底が垂直に落ち込んでも、紅月丸はそのまま水中を斜めにすべり降りていった。
「玉の下になにかあるです」
「水草みたいね」
光る物体の真下に植物らしきものが見えてきた。白い光に緑が照らされている。
「玉の裏にもなにかあるです」
「あれはなにかしら？」
光る物体の真裏にあるものは見当がつかなかった。明るく照らされていても、それがなんだかさっぱりわからない。屏風(びょうぶ)でも飾っているようにしか見えない。
「うおっ」
船体がきしんで大きな音を立てた。近くで不意に鳴った音に、マハラが驚いた。

水にも重さがある。
下の水は、上の水の重みに耐えかねて、常に逃げ場を求めている。だから潜水すると、水が船体を押す。上からも下からも、そして横からも、押されることになる。このとき、船体も水を押し返している。押し合う力を圧力という。
押し合いに負ければ、紅月丸は圧壊(あっかい)する。上からつぶされ、下からつぶされ、横からもつぶされて、一回りも二回りも小さくなってしまう。もちろん、そうなれば乗員は無事ではすまない。
「やい、お茶っ葉。こんなに潜っちまってだいじょうぶかよ」
マハラは操縦席に声をかけた。
「心配ないです。限界深度まではまだ余裕があるです」
チャパティは振り返らずに答えた。
「おめえ、忘れてるだろ。俺様がぶつけちまったってことをよ」
「あ……!」
チャパティは思わず頭を上げた。すっかり忘れてい

た記憶が、傾いた脳内でコロンと転がった。
「あ、じゃねえっつーの。ちょいと見てくらぁ」
マハラは席を立った。
チャパティは振り返ると、もうしわけなさそうにマハラを見送った。それから、隣に座るルビーローズを見た。
潜水艇の艇長は前方を見つめたまま、うなずいた。
チャパティはテレグラフハンドルを引いて、スクリューを反転させた。紅月丸の足が止まった。
「……」
ルビーローズは無言だった。
座席にもたれて足を組み、脇のコンソールに肘を置いて頬杖をついた。マハラが戻るまで、することがない。リラックスした姿勢ではあったが、その目はまっすぐに光る玉を見つめている。
玉の裏にあるものは依然として判別不能だが、下にあるのは植物にちがいなかった。緑がはっきりと見えている。どうやら、水草が茂っているようだ。光があるのだから、草が生えていても不思議ではない。問題は光のほうだ。

なぜ、光るのか。
どうして、湖の底にあるのか。
はたしてこれは、自然現象なのか。
それとも、やはり。ミューミュー一派の仕業か。
あるいは……。
「あれと同じものが、あなたにも作れる？」
頬杖をついたまま、ルビーローズは聞いた。
「やってみないとわからないです。でも、ただ光るだけなら、おいらにも作れると思うです」
チャパティは一味の知恵袋だ。ブンカーや潜水艇を設計している。ただの照明設備でいいのなら、作って沈めるくらいは朝飯前だ。
「ただ光るだけなら、意味がありませんわね」
「ないです。湖底に灯台とか、いらないです」
「もしもあれが、ただの光でないとしたら？」
「おいらには作れっこないです」
「そうね」
「ミューミューたちにも作れないと思うです」
「そうよね」
「おいらたちリヴリーには作れないものなら、誰が作

ったか悩むまでもないです」
「ミュラー博士しかいないものね」
「なので、光る玉はミューミューたちの管理下にあると思うです。昨日の武者タガメは警備員みたいなもんです。ミューミューたちに飼い慣らされてるです。おいらたちだって、モグラコオロギを飼い慣らしてトンネル掘らせてるです」
「モンスターを武装させて、誰と戦わせるつもりかしらね？」
「それは……」
チャパティは答えなかった。
戦う相手は限られている。モンスターかリヴリーの、どちらかだ。しかし、モンスターはモンスターを襲わない。ならばリヴリーを殺すためにモンスターを飼い慣らしたように思えるが、怪物密林のど真ん中にある湖に、リヴリーがいるわけはない。ルビーローズ一味をのぞけば……。
「問題なかったぜ」
マハラが陽気に戻ってきた。
「俺様がそっとぶつけたからな」

紅月丸を巨石に衝突させておいて、そっともなにもない。それに回転運動で衝撃を軽減したのはルビーローズであって、マハラではない。
ミスを手柄にすり替えたのはマハラ流の冗談だった。
「マッハ」
「わかってるって、姐御」
マハラは自分の席を通り過ぎ、操縦室で足を止めた。船体が傾いているので、天井に手をついて体を支えた。
「こっから先は、もっと危険なんだよな」
大きく裂けた口で不敵に笑っている。
「俺様はマッハのマハラだぜ。物資の調達をさせりゃあ、天下一品の腕前よ。そんな俺様だからこそ、わかるんでえ。湖の底にあんなものをこしらえるのに、どれだけの資材が必要かってな」
マハラは一味の調達屋だ。ブンカーや潜水艇の建造に必要な資材一式を用意している。湖底の灯台を作れと言われたら、道具も材料もたちまち掻き集めてくる。
「俺様以外にブツを用意できるのは、ミューミューたちしかいねえ。つまり、そういうこった」
マハラは胸を張った。光る玉を作ったのはミューミ

ュー一派だと見破って、自慢げだった。
「あら？　わたくしとチャッパは、あれを作ったのはミュラー博士だろうって意見ですけれど？」
「げえ……」
マハラの胸がしぼんだ。
「では、そばまで行ってみましょうか。博士が作って、こんなところに沈めて隠したもの。さてさて、いったいなにかしらね」
ルビーローズは姿勢を正した。光る玉に向かって、腕をまっすぐ伸ばした。
マハラは自分の席へと戻り、チャパティはテレグラフハンドルを押し上げた。
「紅月丸、前進全速するです」
船底のスクリューが回転した。
止まっていた鋼鉄のモンスターが走り出した。
チャパティはちらりと視線を動かして、バッテリーの残量計に目をやった。扇形（おうぎがた）のアナログメーターには九つの目盛りがある。左の三つは赤く、中央の三つは白く、右の三つは緑になっている。
メーターの針は緑を指していた。目盛りひとつ分を

消費しただけ。想定内の使用量だった。
光る玉に近づくにつれ、全容が見えてきた。
輪郭が丸いから球体だと判断したのだが、事実そのとおりだった。光線の加減で球面が見て取れた。光ってはいても、燃えてはいなかった。まるで電球のように、白い玉が輝いている。
玉の下に生えているものは、水草ではなかった。植物ではあったが、草ではなくて木だった。
見誤ったのはしかたのないことだった。パークに咲くモンスターサイズのチューリップもあれば、アイランドに咲くリヴリーサイズのチューリップもある。モンスターサイズの水草とリヴリーサイズの樹木では、大きさはたいしてちがわない。
それに木は一本だけではなかった。目に映るのは梢（こずえ）の緑だけだが、たくさん並んでいる。
水の底に森が広がっていた。
貝殻（かいがら）の中の、森だった。
「こりゃ、貝がら島じゃねえか。もっとずっと、でけえけどよ」
全員の思いをマハラが代弁した。

リヴリーたちの住む島の中に、貝がら島というものがある。小さな島の上に、開いた二枚貝が乗っている。下の貝殻には土が盛られており、菜の花が咲いている。

それとよく似たものが、いま目の前にあった。深く暗い湖底に、開いた二枚貝が沈んでいる。下の貝殻には土が盛られていて、樹木が密生している。

どちらも、上の貝殻は風を受ける帆のように立っている。光る玉の裏側にあって屏風(びょうぶ)のように見えていたものは、開いた貝殻だった。

もちろん、大きさは全然ちがう。

それに水中の島には、真珠のような玉がある。裏から支えているのか、宙に浮かぶオブジェのように見えている。貝がら島で咲く花びらの代わりに、水中島では真珠が光っているわけだ。

「驚きましたわ。まさか、水中に島があったなんて」

「おいらも全然予想しなかったです」

「なあ、おい。なんか膜みてえなのが、うっすら見えねえか？」

後ろの席ではよく見えないのか、マハラが前に出てきた。

「そういえば、見えるです」
「ふくらんでいますわね」
よく見れば確かに、膜のようなものが確認できた。透明で見えにくいが、上下の貝殻の間に張られている。丸みを帯びて外側にふくらんでいる。光る玉も森もその内側にあって、湖底の水から守られている。
「な、あるよな。たぶん、あれだ。ミズグモの巣みてえに、膜の中に空気を溜め込んでるんだぜ」
「そんな感じね。ほら見て、あそこ。木がたくさん倒れていますわ。膜が破れたのかしら？」
ルビーローズが指さす先には、倒れた木々があった。水中島の膜が破れて湖底の高圧な水が噴き出し、森の木を薙ぎ倒したようだ。
「これだけの水圧に耐えてふくらむ膜だと、中はすごい気圧になるです。穴があいたら、空気のほうが噴き出してくるです。なので、膜じゃなくて、薄いけど硬いものだと思うです」
「金魚鉢の逆みてえなもんか。中に空気入れて、外に水があるんだな」
「そんな感じです」

「って、おい！　なんだ、ありゃあ？　建物があるじゃねえか！」
とうとうマハラは操縦席にまで入り込んだ。チャパティを押しのけるようにして、一番前に陣取った。
「え？　どこ？」
「玉の真下でえ！　ちっこい建物だけどよ！」
「あら！　ほんとう！」
「ちっこくないです。けっこう大きな建物です。水中島や光る玉が大きすぎるだけです」
チャパティは目の前の障害物をよけ、横から顔を出した。
水中島に広がる森の中に、茶色い建物があった。レンガ造りだろうか。木に隠れて全体は見えないが、壁か屋根の平面が見えている。明らかに人工の建築物だった。そもそも水中島からしてそうだ。
「こんなとこにあるなんてよ、まるで秘密基地だな」
「もしかして、これが噂に聞く皇天（こうてん）の城ではないかしら？」
ルビーローズは仲間たちを見た。
怪しい噂が流れている。管理機関の幹部職員の間に

だけ流れている。
空に浮かぶ城があるという。その名も皇天の城。
皇天とは、天の神を意味する。
神の城に出入りできるのは、ミューミュー、ジュリエット、プーケ、それにダークヤグラの四人のみ。皇天の城は、リヴリーアイランドを支配するミューミュー一派の根城(ねじろ)なのだそうな。
そこで一派がなにをしているのかは、噂も教えてはくれない。しかし、一派が四人そろって所在不明になることがあるのは事実で、そのとき、空に浮かぶ城では秘密会合が開かれているのだとか。
「マジかよ、姐御。皇天の城ってなぁ、空に浮かんでるんじゃなかったのかよ」
「そう思わせておいて、実は湖の底に沈んでいるなんて、ありそうな話でしょう？」
「やい、お茶っ葉。おめえはどう思うよ？」
「調べてみればわかるです」
チャパティは平然と言ってのけた。
調べるとは、水中島に潜入することを意味する。そうでもしない限り、光る玉の真下にある建物でなにが

行われているか、知りようがない。
「どのみち、姐さんはそのつもりだと思うです」
「おいおい……」
「さすがね、チャッパ。よくわかっていますわ」
「げえ……」
マハラは自分の置かれた立場を瞬時に理解した。
光る湖の秘密を暴くためにやってきたのだから、水中に島があるのなら潜入して捜査するのは当然の成り行きだ。とはいえ、全員で上陸はできない。大事な足である紅月丸に居残る者が必要だ。危険な任務には仲間がいたほうがいいから、潜入するのはたぶんふたり。もうひとりには、さみしくお留守番する損な役目が待っている。
マハラの目がせわしなく動いた。ルビーローズを見て、チャパティを見る。
一味は三人組だ。紅い薔薇の女、マッハのマハラ、お茶会の暗殺者がいる。
リーダーである紅い薔薇の女が潜入捜査を指揮するのはまちがいない。とすると、その相棒を務(つと)めるのは誰だろう。マッハと暗殺者。敵地への潜入という隠密(おんみつ)

行動をとる上で、最適な相棒ははたしてどちらか。
「よっしゃ！　やべえ仕事は俺様が引き受けるぜ！」
マハラはあわてて立候補した。
「まあ、よかった。じゃ、マッハは留守番をお願いね。たったひとりで紅月丸を守る、やばい仕事ですもの」
「げえ……」
立候補はしても、潜入捜査と留守番のどちらなのかは言い忘れてしまった、うっかり者のマハラだった。
「でもよ、姐御……」
「あきらめるです」
操縦席に入り込んだままの邪魔者を、チャパティが軽く叩いてなぐさめた。
「潜入には、おいらの専用攻撃技が役に立つです」
管理リヴリーにはいくつもの特権が与えられている。専用の攻撃技はそのひとつだ。ルビーローズもマハラもチャパティも、自分だけの攻撃技を持っている。
ルビーローズには薔薇の竜巻がある。呪文はローズ・ストーム。星彩洞（せいさいどう）の水路でジョロウグモを退治するときに使った技だ。横倒しになった竜巻が水路の水ごとモンスターを呑み込んで、洞窟の奥まで運び去って

いった。
チャパティの専用攻撃技は、薔薇の竜巻のような大技ではなかった。ただし、一撃でモンスターを仕留める強力な技だった。お茶をすすりながら無言で敵を倒すから、お茶会の暗殺者との異名をつけられている。
紅い薔薇の女も、お茶会の暗殺者も、他人が名付けたもの。
それに対し、マハラは自分で自分にかっこいいあだ名をつけた。ひと呼んでマッハのマハラだと、そんな風には誰も呼ばないのに、自分で勝手にそう呼んだ。
留守番を押しつけられても、しかたがなかった。
「よく考えてご覧なさい。こんな湖の底で、それもたったひとりで、潜水艇を守り抜くなんて。よほどの度胸がないと務まりませんわ。男の中の男でないとね。それなら、あなたしかいないでしょう」
ルビーローズはしょげかえる留守番役をおだてた。
「姐さんの言うとおりです。おいらなんか、怖くてひとりじゃ無理です」
「……まあ、そうだよな。おめえじゃ、務まらねえ。俺様でないとな」

マハラの顎(あご)が少し上がった。
「あなたがいてくれて、ほんとうに助かりますわ。安心して任せられますもの」
「おいらじゃ頼りなくて、ごめんなさいです」
「ったく、しょうがねえな。今日のところは頼まれてやらあ」
マハラは大きな鼻を真上に向けて、自分の席へと戻っていった。
その後ろで、ルビーローズが笑いをこらえた。
侵入口を探すため、紅月丸はさらに沈降した。
湖底を這(は)うように進み、下から水中島に接近した。
出入り口があるとすれば、それは下の貝殻部分だろうと推測したのだった。しかし、大きな貝のまわりを一周しても、小窓ひとつ発見できなかった。裏に回ったときに浮上して上の貝殻も調べたが、どう見てもただの貝だった。小さな穴すら見当たらない。排気口も排水口も存在しない。
「思ったとおりですわ。やっぱり、出入り口はないのね」
「おいらたちみたいに苦労する必要はないです。技で

出入りしたほうが楽ちんです」
「けっ。奴らもちったぁ、てめえの足で歩けっての」
おそらく出入り口はあるまいと、見当はついていた。水中島がミューミュー一派の管理下にあるのなら、当然、ＬＩＰＳ（リップス）に登録されているはず。わざわざ潜水して出入りしなくても、呪文を唱えれば簡単に移動できる。
ＬＩＰＳとは、リヴリーアイランド・ポジショニング・システムのこと。ミュラー博士が開発した、リヴリーアイランドの座標空間識別システムだ。
リヴリーは不思議な力を持っている。魔法のような技を使うことができる。テレポートもそうだ。一度も訪れたことのない場所であっても、その存在さえ知らない場所であっても、呪文さえ正確なら瞬間移動できる。
リヴリーが場所を知らなくても、ＬＩＰＳに登録されているからテレポートは可能となる。現在地を把握（はあく）して目的地にきちんと移動できるよう、システム化されている。だから、出先でモンスターに襲われても、呪文ひとつで安全な自分の島に帰れるわけだ。

ならばなぜ、雪山で遭難した山岳猟兵団はテレポートで帰還しなかったのだろうか。密林猟兵団にしても、未踏の山を縦走しなくても呪文ひとつで家まで飛んで帰れたはず。そもそも、ミュラー山脈の主峰であるローズ・ピークに登頂するのに、山を登る必要さえないではないか。テレポートで瞬間移動すればいい。

実は、リヴリーがテレポートできるのはＬＩＰＳの管理区域内だけだった。システムに登録されていない場所には飛べないし、システムに登録されていない場所からは飛べない。

さらに、ＬＩＰＳの管理区域内であっても、プロテクトされた場所には許可なくテレポートできない。ＧＬＬ城の地下には重要拠点の地ノ塔があり、ルビーローズが局長を務める食糧局などの各管理機関が入っている。しかし、システム上でプロテクトをかけてロックしてあるから、部外者は飛べない。

同様に、噂の真偽を確かめようと移動呪文のランダムを唱え続けても、皇天の城にたどりつくことは決してない。

ＬＩＰＳの管理区域内でさえ移動は制限されるのに、

その外ともなれば、これはもう自分の足で歩くしかない。だからこそ、ルビーローズ一味はモグラコオロギを手なずけて地底トンネルを掘り、潜水艇を駆って湖に乗り入れている。
「出入り口がねえんじゃ、上陸は無理でえ。潜入はあきらめるしかねえな」
「いいえ」
ルビーローズはきっぱりと否定した。
「まだ、膜がありますわ」
「姐さん、まさか……？」
チャパティが心配そうな顔をしている。
「そのまさかですわ。一度は破れて、水が中に噴き出したのでしょう？　森の木がたくさん倒れていますもの。膜なのか壁なのか知りませんけれど、破れるものなら、破ってしまえばいいのですわ」
「……姐御ぉ。潜入ってな、こっそり静かにやるもんじゃねえのかよ。バリバリ破って、ドバドバ漏らしたんじゃ、すぐにバレちまわぁ」
「小さな穴なら、だいじょうぶ。それに、穴はふさいでおけばいいでしょう？」

「ふさぐって、どうやってでえ？」
「紅月丸で」
「……」
「……」
マハラもチャパティも、返す言葉が見つからなかった。
「とりあえず、膜を調べてみるです」
チャパティが提案した。
破ることができなければ、悩む必要もない。
「そうね。そうしましょう」
「紅月丸を寄せるです」
地表近くの適当な場所を選んで、チャパティは紅月丸を膜に寄せた。水中島が水没しないように湖水を遮断（しゃだん）している物体を、まずは間近で観察するのだ。
最初にマハラが膜だと言ったから、以後みんなでそう呼んでいるが、薄くて硬いものだとチャパティは意見している。穴があいて中に水が噴き出した跡があるのだから、内部の気圧よりも、外部の水圧のほうが高い。つまり、膜なら外に向かってふくらんだりしない。
「……なんか、変です」

チャパティはつぶらな瞳をぱちくりさせた。
スクリューが起こした水流で、目の前の膜がわずかに波打ったのだった。
「壁じゃなくて、膜ね。それもすごくやわらかそう」
「なんだよ？　なにが起きたんだよ？　やい、お茶っ葉。見逃しちまったじゃねえか」
マハラが床を踏み鳴らして抗議した。
しかたがないので、チャパティは同じことを繰り返した。紅月丸を前に出し、ポッド推進器を反転させ、ブレーキをかけた。
逆向きになったスクリューが水を浴びせて、膜は波打った。湖底の重い水を押し返してふくらんでいるとは、とても思えないやわらかさだった。
「なんでえ。膜じゃねえかよ。俺様が言ったとおりだな」
「これは技だと思うです。水圧に耐えているにしては、張りがないです。たるんでいるから波打つです。中からも外からも、圧力がかかっていない証拠です。なので、この膜は水圧を無力化する技だと考えるのが妥当（だとう）です」

「こんなところに沈めて隠した、秘密の島ですもの。特別な技を使っていても、不思議ではありませんわね」
「で、姐御。こいつをどうやって破るつもりでえ？」
「ハイドロハンマーを使いますわ」
「ぶっ放すのかよ！」
「バカね。ハイドロハンマーを注射器のように使いますの」
「ああん？　注射器だあ？」
「砲身を膜に突き刺して、圧力タンクを空にすれば、水中島への通路ができるでしょう？」
「ハイドロハンマーの中を通っていこうってのか！」
「ほかに道がありまして？」
　ルビーローズは斜め後ろを振り返ると、呆気（あっけ）にとられるマハラにほほえんで見せた。
「問題は刺さるかどうかです」
　チャパティはルビーローズのアイデアに驚かなかった。ほかに方法はない。紅月丸は深く潜水している。水圧は相当なものだ。もしも外に泳ぎ出れば、水の重みに押しつぶされるだろう。つぶされないとしても、

外に出るためにハッチや水密ゲートを開くわけにはいかない。開けば、紅月丸は沈没する。
「おいらは操縦に専念するです」
「では、わたくしが」
ルビーローズはトリガーグリップを起こした。
船体に格納されていた砲塔が降りて、水中大砲が正面を向いた。黒いテントウムシの顎（あご）の下から砲身が突き出している。まるで口吻（こうふん）のように見える。
アメンボは獲物に口吻（こうふん）を突き刺して、消化液を送り込む。それと同じように、紅月丸は水中島に砲身を突き刺して、密偵（みってい）を送り込むのだ。
「行くです」
チャパティは紅月丸を前に進めた。
ハイドロハンマーの砲口が水中島の膜に当たった。
ゆっくりと、押し込んでゆく。
押されても膜はへこむだけだった。張り詰めていないと、そう簡単に破れはしない。
「だめです」
窓の下に地表を確認して、チャパティは押すのをあきらめた。

膜を破ることができないまま、紅月丸は水中島に入り込んでいた。不思議な光景だった。水中にいるのに、空中に浮かんでいる。窓の下を見れば、地面に草が生え、小石が転がっている。

「うまく穴があいても、その拍子に紅月丸が水中島に落っこちる危険があるです。そうなると、もう脱出できないです。脱出できたとしても、船底のスクリューはひしゃげて使い物にならないです」

「そうね。その危険がありますわね。一旦、下がりましょう」

「ぺらぺらの膜のくせによ。やけに頑丈じゃねえか」

「柳に雪折れなしというです。雪が積もっても、柳の枝はしなるので折れないです。やわらかいもののほうが、かえって丈夫だったりするです」

「なに言ってやがんでえ。そんな木、切り倒しちまえ」

「あら。いいこと言うわね、マッハ」

「ん？　そうか？」

「この木、切り倒してしまいましょう」

「ああん？　切り倒すって、なにをでえ？　姐御？」
「ハイドロハンマー、よろしくて？」
「ちょ……！　もしもし、姐御？」
「撃ちますわよ！」
「やっぱり、ぶっ放すんじゃねえかよっ！」
さすがのマハラも文句をつけた。
ハイドロハンマーを使って膜を破るというから、撃つのかと聞いたら、バカねと答えが返ってきた。しかし、実際はどうだ。紅い薔薇の女はためらうことなく、水中島を砲撃したのだった。
反動が紅月丸を後退させた。
水中島を水から守る膜は破れなかった。
膜が砲口にくっついている状態でハイドロハンマーを撃ったのだが、砲撃の勢いそのままにへこんだだけ。
「ちっ」
ルビーローズは舌打ちした。博打（ばくち）とケンカが得意な伝説の女博徒（ばくと）に戻っている。
「もう一発！」
へこんだ膜が戻る前に、さらに砲撃を加えた。
しかし、薄い膜はびくともしない。

「姐さん！」
「なにさ！」
噛みつくようにルビーローズは返事をした。
「撃っても無駄です！　水圧を無力化する膜です！
なので、水には強いです！」
「ああ、そうかい！　なら、こいつを喰らいなっ！」
今度は魚雷を撃った。
増設された二基の魚雷ランチャーのうち、左のランチャーから通常魚雷が一本飛び出した。九連バースト式魚雷だ。
発射された魚雷が膜を押し込んだ。
押し込まれた膜は元に戻ろうとして、魚雷を押し返した。
魚雷と膜とが押しあって、信管が起爆した。
水中で花火が弾けた。
九連バースト式魚雷には、九連発分の弾け花火が詰まっている。最初の爆発で、膜に小さな穴があいた。湖底の高圧な水が小さな穴を通り抜け、まっすぐ飛んだ。水中島の森の木が、水に切られて枝を落とした。
魚雷に仕込んであった遅延発動型バーストが穴に吸

い寄せられた。穴が詰まって水の噴出(ふんしゅつ)は止まったが、次の爆発で穴は増え、また水が飛んだ。
爆発が続くたびに穴は数を増し、ついに水が膜を押し破った。
膜が大きく破れると、遅延発動型バーストは島内に吸い込まれた。残りの爆発は、噴出する水に乗って遠くで起こった。破れた膜をさらに引き裂く効果はなかった。
そして、噴き出す水は見る見る細くなっていった。膜の破れたところが修復されてゆく。
「突っ込みな！」
「はいですっ！」
ハイドロハンマーを撃った反動で後退していた紅月丸が、突進した。
押しても膜は破れないとわかっている。やわらかい膜だから、激突しても船体に影響はない。
チャパティは思い切りよく突っ込んだ。魚雷でようやく破れた穴が修復される前に、ハイドロハンマーの砲身をねじ込んだ。
破れた膜が修復された。

水の噴出が止まった。
砲身は膜を貫通(かんつう)している。
ふくらむ膜が船体を押し戻してゆくが、ねじ込んだ砲身は押し戻されずに残っている。ハイドロハンマーを注射器のように使って刺すという作戦は、成功したのだった。
「どう？　うまくいったでしょう？」
ルビーローズは仲間たちを見回して、上機嫌で笑いかけた。
「……魚雷を撃って華々(はなばな)しく潜入とか、ありえねえ」
マハラがぽつりとつぶやいた。

2

水中島に上陸した。
まず、ルビーローズがハイドロハンマーの砲口から飛び降りた。空中で呪文を念じて体を元の大きさに戻し、着地した。
踏みしめたのはごくふつうの地面だった。固くもなく、ゆるくもない。土があって、砂があって、小石が

転がっている。雑草も生えている。
周囲を警戒しつつ、ルビーローズは横に動いた。
空いたスペースにチャパティが降り立った。なにか気になるのか、長い鼻を持ち上げて、しきりににおいを嗅(か)いでいる。
ルビーローズは顔をあげた。
見上げれば、夜の空だった。月は出ていない。出ていたとしても、それは月ではない。真夏の太陽だ。厚い水が太陽光線を吸い取ってしまい、夜のように暗くなっている。もちろん、雲はなかった。空にあるのは水ばかり。ルビーローズは湖底の島に立っている。
空は暗くても、島内は明るかった。水中島には光る玉がある。まぶしく輝いている。上を見たり、後ろを向いたりしなければ、昼間の地上と景色は変わらない。
ルビーローズは振り向いた。
すぐ後ろに水圧を無力化する膜があって、その向こうに紅月丸がいる。操縦席に座ったマハラが無邪気に手を振っている。
紅月丸の背後にはなにもなかった。黒い水が景色を殺している。

親指を立てて手を上げると、ルビーローズはマハラに合図を送った。
マハラも手を上げて応え、操縦席を離れた。潜入組が無事に上陸を果たしたので、圧力タンクを閉鎖して、通路として開放したハイドロハンマーを元の状態に戻すのだ。
そうなると潜入組は退路を断たれてしまうが、膜に張り付いて残留する紅月丸も用心を怠(おこた)るわけにはいかない。緊急時にやむをえず離脱することになったとして、そのときあわててタンクの閉鎖に向かったのでは手遅れとなる。
紅月丸はテントウムシに似せて造られた。ハイドロハンマーの砲塔は胸部に格納する構造になっている。頭部が操縦室で、胸部はその隣だから、圧力タンクは操縦席から近いところにある。
ほどなくして、マハラが戻った。立ったまま、手で追い払うしぐさを見せた。しかたなく留守番役を引き受けたとはいえ、自分ひとり貧乏くじを引いたのだから、やはりおもしろくはないのだろう。
「さあ、行きますわよ」

ルビーローズは森に向かって歩き出した。
水中島は下の貝殻に土が盛られていて、そこに樹木が密生している。といっても、足の踏み場もないほど生い茂っているわけではない。貝殻のふちに当たる膜の近くには、あまり木が生えていない。
「姐さん。おいら、確認したいことがあるです」
チャパティはおとなしくついて行きながら、口を開いた。
「なにかしら？」
「膜が破れて木が倒れたあとを、見ておきたいです」
「かまわないけど、どうして？」
「おいらたちは魚雷を使ってようやく穴をあけたです。でも、あいた穴は小さくて、すぐに自動修復されたです。たくさんの木を薙ぎ倒すほどの大穴がどうしてあいたのか、現場を見たら、なにかわかるかもしれないです」
「ちょっと寄り道するだけですものね。かまいませんわ。確かに、こっちのほうだったかしら」
「はいです」
ルビーローズはほんの少し向きを変えた。

ふたりは森へと入っていった。
森の中は意外に歩きやすかった。下草があまり生えていない。外からは木が密生しているように見えたが、中に入ってみれば思ったよりもまばらだった。幹(みき)もそんなに太くない。草木が浴びる光は本物の日光ではないから、それが生育に影響しているのかもしれない。
ただ、においがきつかった。緑のにおいが濃い。空気は透明なのに、緑色に染まっているような感じがした。
「青くさいです」
チャパティは長い鼻の先を両手で包み、においをシャットアウトしようとした。
「そうね。ちょっときついですわね」
ルビーローズは首を振ってみたが、つんとした鼻がどこを向こうと、においは変わらなかった。
「風がないです」
空気がよどんでいるのは風が吹かないからだ。森の中の新鮮な空気なのに、おいしくはない。濃すぎて、逆にまずい。
「ここで風が吹くことはないでしょうね」

水中島は貝殻と膜とで外界から遮断されている。遮断されなかったとしても水没するだけで、外から風が吹き込むことはない。そのため、梢(こずえ)は揺れもせず、ざわめくこともなかった。

静かな森だった。ただひとつの異音を除いて。

「……なにかしら？　あなたにも聞こえて？」

ルビーローズは足を止めた。

どこからか、地虫の鳴くような音が聞こえてくる。かすかな音だ。出所はわからない。

モンスターの可能性もあるから、ルビーローズは警戒を強めた。あたりを見回す。森の木は間隔を開けて生えている。多少の見通しはきくので、いきなり襲撃されることはない。そうはいっても、見回せば視界は木に埋め尽くされてしまう。紅月丸さえ、もう見えない。少し離れたところにモンスターが潜んでいれば、発見するのは難しい。

「おいらにも聞こえるです。切れかけの電球みたいな音です」

チャパティが顔をあげたので、ルビーローズも視線をあげた。上にはなにもなかった。茶色い枝と、緑の

葉と、黒い空が見えるだけ。
「差し迫った危険はなさそうね。進みましょう」
ルビーローズは再び歩き始めた。
しばらく進むと、視界が開けた。森の木が薙ぎ倒されて、ぽっかりと空間があいている。見通しはよくなったが、足元は悪くなった。倒木が積み重なっている。細い木も、重なってしまえば厄介（やっかい）な障害物となる。
倒木の前で立ち止まったルビーローズを、チャパティが追い抜いた。枝に足をかけて階段の代わりとし、倒れた木の上に立った。
一段高いところから、周囲をながめたチャパティは最後に膜を見上げた。釣られてルビーローズも上を見たが、すぐに視線を落として警戒を続行した。
ふたりでいっしょに謎を解く必要はない。現場検証は知恵袋に任せて、ルビーローズは見張りに専念した。
チャパティが木から下りてきた。
「穴は上のほうであいたです。森のここだけ木が倒れているのは、上から水が落ちてきた証拠です」
倒木が作り出した空間は森の中にあった。ぐるりと木に囲まれている。つまり、森の端（はし）から伐採（ばっさい）されて切

り開かれたわけではない。
「おいらたちは侵入するのが目的だったので、地面の近くに穴をあけたです。でも、ここは地面よりずっと高いところで穴があいたです」
「誰かが侵入したわけではないのね」
「……」
チャパティは大きな耳を爪で掻いた。ルビーローズへの回答は保留して、話を続けた。
「穴のあいた理由はわからないです。なにかが落下してきて膜を突き破ったかもしれないです。でも、ざっと見た限り、そんな落下物は見当たらないです」
「……そう」
今度はルビーローズが意見を保留した。
結局、穴のあいた理由はわからないということだ。ならば、結論は出せない。誰かが侵入したわけではない、とは言えない。だからチャパティも答えなかった。
水圧を無力化する膜に大穴があいて、おそらくは大量の水が滝のように流れ落ちたはず。膜の自動修復は働かなかったのか、森の木々が薙ぎ倒されている。なにが起きたのかはわからない。わからなくてもしかた

がないし、なによりそれは、潜入捜査の目的でない。
「なんでもすらすらわかったら、世の中、苦労しませんわ。さ、この先にはもっと大きな謎が待っていますわよ」
「はいです」
ルビーローズとチャパティは森の中に戻った。倒木でできた空間は歩きにくくて発見されやすいから、その脇を進んだ。
先に待つ、大きな謎。それは、真珠のような玉の下にある建物のことだ。ルビーローズ一味は、光る湖の秘密を暴くために水中島に潜入した。建物の用途や、玉が光る理由など、知りたいことは山ほどある。
だが、山にはいくつもの峰(みね)があるように、新たな謎に出くわした。
行く手にモンスターが見えた。
死んだモンスターだった。
「チャッパ」
ルビーローズは足を止め、知恵袋に声をかけた。
「姐さん。そっちにもあるです」
チャパティはリーダーの視線とは別の方向を指さし

た。
「その奥にもありますわね」
「あっちのもそうです」
ひとつ見つけると、それまで景色と一体化していたほかの死骸まで見分けられるようになった。死んだモンスターがごろごろしている。
コオイムシだろうか。タガメを小さくしたような虫が、羽を散らしてうつぶせに死んでいる。脚を丸めて仰向けに転がっているのは、ゲンゴロウの仲間のようだ。硬い体がそっくりそのまま残っている。木にしがみついてひからびているのはヤゴだ。水中島で羽化しようとしたのだろうか。
どうやらすべて、水棲モンスターらしい。そうでなければ、湖の底までやってはこれない。
「死んでいるのはまちがいないわね」
「みたいです」
「行きましょう」
ふたりは死骸に近づいた。歩いた分だけ、死んだモンスターは増えてゆく。
木の森が、死の森に変わった。

死骸を横目に通り過ぎた。数があまりに多くて、じっくり調べる気にはなれない。それにモンスターは大きい。そばにいると死角が広がり、警戒がおろそかになってしまう。足早に歩きながら、視線を走らせて観察した。

「いつごろ死んだのかしら？」

甲虫を見ればつい最近死んだように思えるが、ほかの死骸は古く見える。

「同じころに死んだのよね？」

ルビーローズは続けて疑問を口にした。質問ではないから、回答を待ったりしない。

「どうして死んだの？　モンスターはモンスターを襲わないし、リヴリーはモンスターを殺せませんわ。一度にまとめて死ぬ理由なんて……」

ルビーローズははっとして立ち止まった。

口と鼻を手で押さえ、くぐもった声で続けた。

「もしかして、ここの空気ではなくって？」

「いえ、ちがうです」

チャパティは平然と呼吸を続けた。

それを見て、ルビーローズも手を下ろした。

「空気が青くさいのは、フィトンチッドだと思うです」
「フィトンチッド？」
「はいです。草も木も生き物です。でも、動物とちがって動けないです。虫に食われたりしても、払い落としたり逃げ出したりできないです。なので、特殊な揮発性（きはつせい）物質を発散して、身を守っているです。それが、このにおいの正体です」
「虫除けのにおいってことかしら？」
「そんなところです。フィトンは植物、チッドは殺すという意味です。おいらたちにはわからないだけで、植物だって殺しあいをしているです」
「植物が殺すの？」
「はいです。敵は虫だけじゃないです。同じ植物も、生き延びる上で敵になるです。特にここは、湖の底にあるので光源が限られるです。真珠みたいなあの玉は、太陽のように動いたりしないと思うです。なので、ほかの植物の葉で隠されたら最後、光を奪われて枯れるしかないです」
「それで、ここの森は草が少ないのね。でも、ほんと

うにわたくしたちはだいじょうぶなのかしら？　そのフィトンチッドで、モンスターは死にますのに？」
「おいらたちに害はないです。それに、モンスターも死ぬほどじゃないと思うです」
「そういえば、虫除けでしたわね」
「ここは空気が動かないので、確かににおいは濃いです。でも、いくらなんでもモンスターが死ぬほどの空気なら、植物自体がすでに死んでるはずです。なので、モンスターが死んだ理由はほかにあると思うです。あと……」
　チャパティは一旦、話を切った。倒木のあった方向を振り返り、膜を見上げてから、言葉を継いだ。
「穴をあけたのはモンスターだと思うです」
「あっ、そうね。それなら辻褄（つじつま）が合いますわね」
　水中島に侵入するのなら、地表近くに穴をあけるのが合理的だ。上にあけたのでは落下してしまう。しかし、相手がモンスターなら、そこまで考えることはしない。とにかく群がって、どこでもいいから穴をあけようとするだろう。落ちたら落ちたで、飛べばいい。タガメやゲンゴロウなどは飛翔も得意だ。

穴をあけたのがモンスターなら、落下したあとは移動する。だから、森の木が薙ぎ倒された場所に落下物の痕跡は残らない。水圧を無力化する膜にしても、大顎で咬み裂けば容易に穴があくだろうし、モンスターが雪崩れ込めば修復機能も阻害されるにちがいない。

辻褄は合う。

けれども、それならそれで別の問題が浮上する。

なぜ、モンスターは水中島を襲撃したのか。少なくともいまは、群れてもいないし、攻撃してもいない。

それに、死んだモンスターたちが群れていたのなら、どうして種類がちがうのに群れたりしたのか。これがスズメバチなら、群れで攻撃してきても話はわかる。あるいは、水中に沈む島が獲物だというのなら、たかられても不思議ではない。

そして、最大の疑問は解けずに残る。

なぜ、モンスターは死んでいるのか。

「モンスターは死んだんじゃないです」

「え？　でも……」

「殺されたです」

「！」

ルビーローズの肩がわずかに上がった。
モンスターは殺された。いったい、誰が殺したというのか。
そもそも、モンスター同士は決して争わない。星の墓場では、光炎立羽蝶（こうえんたてはちょう）の幼虫が捕らえたモンスターを喰らっているが、これはあくまでも例外的な事例だ。光炎立羽蝶はモンスターというよりもただの巨大昆虫であるし、洞窟の中ではほかに食べるものがない。
とすると、水中島でも似たようなことが起きたのだろうか。湖底の島では食べるものがないから、モンスターが食われてしまったと？
それはちがう。
モンスターは食われていない。ただ、死んでいるだけ。ただ、殺されただけ。
ならば、殺したのは誰か。
リヴリーではない。リヴリーはモンスターを殺せない。どんなに呪文を唱えても、気絶させるのが関の山だ。
……いや。
ルビーローズは大きな目をゆっくりと瞬きさせた。

「噂どおり、ついに完成したというの？　モンスターを殺すための呪文が？　わたくしにはとても信じられませんわ。たとえ、呪文科学局が極秘に開発したとしても、局長のジュリエットが絶対に許さなくってよ。ミュラー博士の作ったこの世界を破壊するような行為はね」
「おいらもそう思うです」
　チャパティはあっさりと同意した。
「あら？　じゃあ、なにかしら？　モンスターを殺すための道具？　それなら、答えは同じですわ」
　モンスター殺しを目的とする呪文の開発は許されないのだから、道具の開発が許されるわけもない。
「道具と呼べるかどうかはわからないです。でも、すでに完成してるです。おいらたちはもう見たです」
「え？　見た？　見たって……それは武者タガメのこと？」
「はいです。あれはふつうのモンスターじゃないです。もしかしたら、飼い慣らされたモンスターでもないかもです。頭に妙なパーツがくっついていたです。ミューミューたちに操られている可能性もあるです」

ルビーローズが視線を落として考え込んだので、チャパティは話を続けた。
「たぶん、ここは、襲ってきたモンスターを返り討ちにしてでも守らなければならない、特別な場所です。武者タガメはそのための戦闘要員だったです。噂に流れてるような、モンスターを皆殺しにするための呪文や道具とは、根本的に異なるです」
「ちょっと待って」
ルビーローズが顔をあげた。
「よく考えたら、その噂って……。ひょっとして、ここで起きたことって……」
ルビーローズに見つめられたチャパティは、だまってうなずいた。そして、ルビーローズの視線を誘導するかのように、まわりに転がるモンスターの死骸を見回した。
タイコウチが死んでいる。ミズカマキリも死んでいる。スズメバチでもないのに、モンスターが群れて襲撃したあとだ。
「モンスター津波！」
ルビーローズの大きな声が森に吸い込まれていった。

リヴリーアイランド史上最悪の惨劇、モンスター津波。

それは、二個の特殊部隊が全滅したことに端を発する。

エリート武官が独断で部隊を動かした結果、山岳猟兵団と密林猟兵団が全滅した。怪物密林に潜むモンスターの脅威が露わとなり、要塞の建設が決まった。リヴリーアイランドと怪物密林の間に四つの要塞を置いて防衛線を構築し、万一の事態に備えるのが目的だった。

しかし皮肉なことに、防衛のための策が裏目に出て、モンスターの大規模襲撃を誘発することとなった。要塞建設の騒音や振動が、怪物密林のモンスターたちを刺激したと言われている。

大地を埋め尽くし、大空を覆い隠し、津波のごとく押し寄せたモンスターの大軍によって、要塞のひとつは陥落した。要塞守備隊は玉砕し、支援のために差し向けられた連隊も壊滅した。

防衛局はモンスター津波で職員の六分の一を失っている。武官級も含め、六人に一人が戦死した。以来、

防衛局ではモンスターの皆殺しが悲願となった。殲滅作戦を上申して局長のプーケと対立し、更迭された武官も少なくない。

そして、いつの頃からか、巷に噂が流れるようになった。

防衛局はモンスターを殺すための道具を開発している。いや、開発しているのは呪文で、呪文科学局が防衛局に協力している――と。

噂は正式に否定された。

ジュリエットとプーケが調査に乗り出した。法務局の公安調査室が呪文科学局を内偵し、防衛局の諜報部隊がエリート武官たちを調べ上げている。

叩いてもほこりは出なかった。噂は噂でしかなかった。

ルビーローズはそんな怪しげな話を持ち出して、モンスターを殺したのかと問うた。チャパティは否定した上で、武装モンスターを持ち出した。手っ甲をつけたタガメなら実在する。一味の全員が目撃している。それどころか、追われて必死で逃げた。

武者タガメは水中島を守るための戦闘要員だと、チ

ャパティは言った。水中島は、モンスターを殺してでも守らなければならない特別な場所なのだと。
そこまで聞かされて、ルビーローズは気がついた。モンスター殺しの噂が流れるのは、モンスター津波が起きたから。たくさんのモンスターが群れて襲いかかってきたから。
それと同じことが水中島でも起きている。モンスターの群れに襲撃された痕跡が残っている。
つまり、これは。
モンスター津波のあとではないか。
「あのときに死んだにしては、そんなに古くないような……」
「ここに日光は届かないです。夏の日差しに焼かれたり、雨に打たれたりしないです。気温や湿度は一年中、変わらないと思うです。なので、死骸の劣化が少なくて、保存状態がいいです。それに姐さん……」
「なあに？」
チャパティが言いにくそうにしているので、ルビーローズは小首を傾げた。
水中の島に、モンスターの死骸。仲間であるはずの

モンスターを殺したであろう武者タガメと、それをやらせたにちがいないミューミュー一派。
いまさら、なにを言いよどむのか。
「モンスター津波では、空と陸から襲撃されたです。でも、水棲モンスターはほとんどいなかったです。アメンボとかミズスマシとかの、おもに水面で活動するモンスターが飛んできたくらいで、タガメやゲンゴロウなんかは全然目撃されなかったです」
「そうね。空を飛べるのに姿を見せなかったから、不思議に思われていたけれど、水中で活動できるモンスターは別働隊として、ここを襲撃したってことよね」
「はいです。おいら、そこに惨劇の最大の原因があると思うです」
「最大の……原因？」
「モンスター津波でたくさんの戦死者が出たのは、ＬＩＰＳ（リップス）が止まったからです」
「あっ！」
ルビーローズは思わず、口に手を当てた。チャパティが言わんとすることを瞬時に理解した。
ＬＩＰＳ。リヴリーアイランド・ポジショニング・

システム。リヴリーたちが自由自在にテレポートするために欠かせない、座標空間識別システムだ。

水中島に出入り口がないのは、その必要がないからだ。LIPSを利用すればテレポートで簡単に移動できる。要塞もそう。部隊は一瞬で最前線に送り込むことが可能。それは同時に、いざというときには即座に撤退（てったい）できることを意味する。つまり、要塞守備隊が玉砕することなど、ありえないわけだ。死ぬ前にテレポートで逃げればいい。

だが、LIPSが使えないとなると、雪山から生還できなかった山岳猟兵団と同じ運命が待っている。歩いて要塞から脱出しようにも、外はモンスターで埋め尽くされているのだから、どうしようもない。

だったら戦い抜けばいいように思えるが、そうしたくてもできない事情がある。根性ひとつでモンスターを撃退できるのなら、密林猟兵団は追い詰められることなく、無事に帰還したはず。

死ぬとわかっていても、戦闘を継続できなくなる。

呪文を念じても。唱えても。技が発動しないときがやってくる。

それは、霊力を使い果たしたときだ。
呪文を念じて、技を使う。リヴリーの不思議な力は、霊能力だ。ひとりひとりが生まれながらに持っている霊力があって、初めて実現できる。霊力ゼロならスリングも使えない。
ふだんは霊力の存在を気にかけることはない。リヴリーたちはＬＩＰＳの管理区域内で暮らしている。ＬＩＰＳの外へはテレポートできないのだから、おとなしく管理されている。実は、ＬＩＰＳの管理下にあれば、霊力は自動的に供給される。パークで技を使いまくっても、技が出なくなることは決してない。
しかし、ＬＩＰＳの管理区域外に一歩踏み出せば、技を使うたびに自分自身の霊力を消耗（しょうもう）してゆく。密林猟兵団が岩山の裂け目に立て籠（こ）もる羽目になったのは、霊力を使い果たしてしまったからだ。
モンスター津波ではたくさんの戦死者が出たが、ＬＩＰＳさえ止まらなければ、無限の霊力で攻撃し続けることができたし、いよいよとなればテレポートで逃げることもできた。だが、頼みのＬＩＰＳが機能しなくなったことで、史上最悪の惨劇を引き起こした。

「ＬＩＰＳが止まったのはオーバーロードが原因です。モンスターの大軍を相手にしたので、みんなで技を使いすぎたです。霊力を生成する霊子炉はメルトダウン寸前に追い込まれたです。あとで公開された障害報告書には、そう書いてあったです」

「……」

ルビーローズはだまって聞いている。

「でも、それがほんとかどうかはわからないです。霊子炉に関する事柄は、全部機密扱いになってるです」

「……つまり、あなたはこう言いたいのね」

話の結末は、もうルビーローズにもわかった。自分では考えつきもしなかったが、言われてみれば、そのとおりとしか思えない。

「あの日、モンスター津波は水中島も襲った。膜を破られて浸水し、モンスターに乱入されて、湖の底に隠してあった島は大打撃を被った。そのため、ここにある霊子炉が危機的な状況に陥り、ＬＩＰＳは止まった」

「止められた可能性もあるです」

「そう……そうね。ここを守るために、要塞にいる仲

間たちを見殺しにしたのかも……しれませんわね」
ルビーローズは重い息を吐いた。
光る湖には、なにがしかの秘密が沈んでいるとは思っていたが、まさかそれが霊子炉だったとは。そして、惨劇の原因にまでたどりつくとは。
「あくまでも、おいらの考えです。事実と決まったわけじゃないです」
チャパティは念を押した。
「わかっていますわ。……でもそれは、建物の中を確認すればいいことよね」
光る玉の真下にある建物が霊子炉の管理施設であるならば、チャパティの考えにまちがいはないだろう。
チャパティはうなずいた。
ルビーローズは無言で歩き出した。
話は終わった。あとは行動するのみ。
ふたりで死の森を進んだ。
転がる死骸は途切れない。どこまで行っても、二度と動くことのない怪物がいる。
襲撃してきたモンスターを、武装したモンスターが迎え撃ったものだから、リヴリーの攻撃とはちがって

死んでしまった。
それにしても、これだけのモンスターを殺してしまうとは、武者タガメの強さはどれほどだろうか。
いや、本当に武者タガメなのか？　そんな証拠はどこにもない。武装したモンスターは武者タガメしか見ていないだけ。見ていないことと、いないこととはちがう。
だまって運んでいたルビーローズの足が、ぴたりと止まった。
仰向けになって死んでいるモンスターの頭が切り落とされていた。
マツモムシだろうか。長い後ろ脚が、ボートを漕ぐオールのように見える。マツモムシは逆さまになって下から水面に張り付き、水中で背泳ぎをする虫だ。陸上ではもちろん、うつぶせになって歩くはず。それが水中にいたときのように、ひっくり返って死んでいるのは哀れだった。死ぬ間際に、得意の背泳ぎでなんとかしようともがいたのかもしれない。
すっぱりと切り落とされた頭はすぐ近くに転がっていた。切断面を下にして、さらし首のようになってい

る。
ルビーローズは死骸に近寄ると、のぞき込んだ。
胴体に残された切り口はきれいだった。あざやかな手口で切断されたものと思われた。大顎で咬み切ったのなら、こうはいかない。それにタガメには、突き刺す口吻はあっても、咬み切る大顎はない。
「どうやら、武装モンスターはほかにもいるようね。この切り口……。カマキリのしわざかしら？　水中の島でも陸上と変わらないのだから、首狩りモンスターはおそらく、陸上モンスターね。カマキリの前脚に刃をつけたら、こうなるのではなくって？」
「ありうるです」
「となると、ここは危険ですわね」
ルビーローズはあたりを見回した。
死の森は見通しが悪い。転がる死骸がひとつあれば、その後ろにモンスターの巨体は隠れてしまう。これでは、首狩りモンスターに忍び寄られてもわからない。
「急いで抜けましょう」
ふたりは足早にその場を離れた。
死骸の陰からモンスターが飛び出してこないか、注

意しながら急いだ。梢(こずえ)にも視線を飛ばした。モンスターが樹上に潜んでいることも考えられる。

だが、敵は予想もしない形で登場した。

死骸が動いたのだった。

「！」

ルビーローズとチャパティが分断された。

死んだモンスターが突然動き出して、ふたりの間に割り込んできた。

敵から逃れるために、ルビーローズはダッシュし、チャパティはあとずさった。獲物を待ち伏せて引き離したのだから、あなどりがたい相手だ。しかも、すでに死んでいる。

動いたのはタガメの死骸だった。太い前脚だけが獲物を捕らえようと前を向いている。ほかの脚は、への字に曲がって後ろに伸びている。

確かにタガメは動いた。しかし、脚は動かさなかった。

死んでしまった体でのっそりと這(は)っている。

動かない脚で、動くはずのない体を、動かしている。

命が宿っているように見えるのは、長い触角だけ。

「……どうなっているの？　ゾンビ・タガメ？」
死骸の向こうにいるチャパティに、ルビーローズは声をかけた。
ゾンビは存在しなくても、ゾンビのような生き物なら存在する。
獲物に毒液を注入してゾンビと化し、巣まで歩かせて卵を産み付ける寄生蜂（きせいばち）がいる。もちろんそれは、死の行進をする獲物がゾンビのように見えるだけの話だ。
死んでいるのに動く生き物など、存在しない。
「下になにかいるです！　これはタガメの触角じゃないです！」
タガメの触角はとても短い。本当にあるのか疑問に思えるほど、目立たない。それなのに、二本の長い触角がタガメの死骸の下から出ている。しきりに動いて、周囲の様子を探っている。
タガメはゾンビではなかった。ただの死骸だ。それが歩いたのは、死んだタガメを背負って地を這（は）う者がいたからだ。
死骸が持ち上がった。タガメの腹部が突き上げられ、そのまま後ろに投げ捨てられた。死骸の下に隠れてい

たモンスターが姿を現した。
「ハサミムシですわ！」
平べったいモンスターだった。羽はなく、頭部だけならアリのようにも見えたが、寸胴で胸部と腹部の間にくびれはなかった。幅のある腹部は自在に動くようで、反り返らせてタガメの死骸を持ち上げ、放り投げている。
そして、腹部の末端にはハサミがあった。
正確にはハサミではない。角のような突起物であり、箸のようにはさむことのできる器官だ。ちょきりとは切れない。左右からはさんで、尖った先で穴があく程度。
ただし、出現したのは武装モンスターだった。
ハサミには本物の刃が取り付けてあった。園芸用の花鋏のように仕上がっている。厚みがあって、幅広で、短い。
胸部と腹部の背中側は鎧で覆われていた。菱形の鋼を鱗のように重ねた防具だ。これなら、反り返る腹部にあわせて鎧も曲がる。
兜はなかった。その代わり、頭には金属製のプレ

ートが貼り付いていた。武者タガメと同じだ。電子部品と発光ダイオードが見える。

ハサミムシは頭を左右交互にひねった。左の獲物と右の獲物。どちらを先に襲うか、考えているようだ。

「姐さん、おいらがやるです！」

チャパティが戦闘を買って出た。

「お願いね」

ルビーローズもそのつもりだった。水の中の島という閉ざされた空間で薔薇の竜巻のような大技を繰り出したのでは、ここに侵入者がいますと騒ぎ立てるようなもの。かといって小技を使えば、モンスターが気絶するまで足留めされることになるし、霊力もよけいに消費する。

だからルビーローズは、マハラを留守番に残してチャパティを連れてきた。チャパティの専用攻撃技は一撃でモンスターを倒す。それでいて、きわめて静かに戦闘は行われるから、潜入捜査という隠密行動にはうってつけだ。

チャパティは長い鼻をハサミムシに向けた。

ふっと、かすかな音がした。

長い鼻がふくらんで、しぼんだ。
しぼんだときに、鼻息といっしょに矢が飛んだ。
吹き矢だった。
細長くて円錐形(えんすいけい)をした黒塗りの矢が二本、ハサミムシの脇腹に刺さった。背中側に防具はあっても、脇には防具を留めるベルトしかない。やわらかい脇腹は無防備だ。チャパティはそこを狙った。
獲物の間に割り込み、どれから襲うか悠長(ゆうちょう)に構えていたハサミムシが静かになった。六本ある脚の力が抜けた。頭を地面につけ、長い触角も動きを止めた。
ハサミムシは眠りに落ちたのだった。
チャパティの専用攻撃技は「深い眠りの吹き矢」といった。呪文は「ブロー」のひと言だ。
吹き矢には即効性(そっこうせい)のある麻酔薬が仕込まれていた。矢も麻酔薬も、リヴリーの持つ不思議な力で生み出したもの。それを自分の鼻息で吹き放つところに、チャパティの専用攻撃技の特徴があった。
技で飛ばしているのではない。したがって遠くまでは飛ばないし、命中精度も落ちる。その代わり、霊力の消費は少なかった。霊力を使わずに、体力を使って

いるわけだ。
鼻から息を吹きながら、声を出すのは難しい。そのため、呪文は念じることになる。息を吹いてばかりいるとのどが渇(かわ)くので、お茶を飲んで潤(うるお)すことになる。
茶をすすりながら無言で攻撃し、モンスターを一撃で倒すから、ついたあだ名がお茶会の暗殺者なのだった。
眠りこけるモンスターに、ルビーローズとチャパティが近寄った。眠っているといっても、まぶたを閉じているわけでもなければ、いびきをかいているわけでもない。見た目は起きているときと変わらないから、いまにも動き出して襲いかかってきそうだ。
ふたりは忍び足で警戒しながら近づいた。
敵は武装モンスターだ。並のモンスターとはちがうから、吹き矢が通じないこともありうる。なにしろ、獲物を待ち伏せて分断を図ったほどの相手。今度は眠ったふりをしているのかもしれない。
チャパティはもうひと吹きして、念を入れた。さらに二本の吹き矢が刺さっても、ハサミムシはぴくりともしなかった。

「これが、モンスターを操る機械ですのね」
ルビーローズはハサミムシのすぐそばまで接近した。顔の真ん前に立って、頭のパーツに目をやった。
「こんなに早く見られるとは思わなかったです」
チャパティはルビーローズよりも大胆だった。ハサミムシの触角に手をかけると、頭の上によじ登った。
「そうね。水中の武者タガメが相手なら、こうたやすくはいきませんものね」
「……」
チャパティはうなずきを返しただけで、パーツを調べるのに夢中になった。
「剥(む)き出しの基板を貼り付けてあるです。透明ななにかでコーティングしただけです。ケースに入れない理由がわからないです。どんなコーティングです？」
「……さあ？」
ルビーローズは一応返事をしてみたが、チャパティのは独り言だった。
「メビウスコイルがあるです。極性反転レギュレータも。ここのモジュール、なんでテトラマー・アッテネーターをかましてあるです？」

「……」

返事は不要だった。

チャパティの独り言に耳を傾けても、どうせ内容はわからない。ルビーローズはハサミムシの大きな体を回り込んだ。背中を覆った鎧や、マツモムシの首を狩ったであろうハサミを調べることにした。

ひと目で収穫はないとわかった。手の込んだ細工ではあったが、目を見張るような技術は使われていない。

鎧は組紐（くみひも）で編まれていた。敵の攻撃を跳ね返す菱形の鋼が、鱗のように重ねられている。四つある角のうち一点だけを編み込んで、ハサミムシが腹部を反り返らせても曲がる仕組みになっている。おそらく、編み込まれた一点には短い軸が髭（ひげ）のようについているのだろう。ただの点では固定できないが、軸なら固定もできるし、回転もする。

ハサミは、刃の背に溝を掘ってあてがっていた。ハサミムシにあるのは角のような突起物で、それを二本使って獲物をはさむ。その突起物に溝のついた刃をあてがい、ベルトで留めてあった。あてがった刃が回るとハサミとして機能しないから、ずれを防止するため

のレールがハサミの根元に取り付けられている。
どちらも、簡単に手に入るような材料が使われていた。マハラに注文すれば、材料を調達したついでに、そのまま図面も引かずに作ってしまいそうだ。
時折、あたりに視線を走らせながら、ルビーローズはハサミムシの体を一周した。
「どう？　同じものがあなたにも作れて？」
一心不乱のハナマキに声をかけた。
「見た目だけなら、同じ物を作れるです。でも、モンスターを操るのはおいらには無理です」
チャパティは返事をしたが、視線はパーツから動かさなかった。
「やっぱり博士が作ったのかしら？」
「そうとしか考えられないです。この島と武装モンスターは、たぶんセットで作られたです。ミューミューたちは管理と運営を任されただけと思うです」
「外して持って帰るわけには……いきませんわね」
無理は承知のようで、ルビーローズは溜息をついた。
「ぴったり貼り付いているので、簡単には外れないと思うです。それに、外したらモンスターが死ぬかもで

す。死ななくても、もう制御できなくなるので、管理側に犠牲者が出るとかの不測の事態が考えられるです。あと、侵入の痕跡を残すことにもなるです」
「……ですわね」
ルビーローズの声が沈んでいる。
目の前に、モンスターを操る秘密の機械がある。それを入手するという、せっかくのチャンスを見す見すふいにするのだから、残念でならないようだ。
「物は考えようです」
チャパティがハサミムシの頭をすべり降りた。
「このパーツはもう、おいらたちの物です。でもいまは持って帰れないので、ハサミムシに預けておくです」
「必要になったら、また来ればいいってこと？」
「はいです」
「言うわね、あなた」
ルビーローズは笑った。
湖底探査を始めて、三日目にしてようやく水中島にたどりついた。毎回、異なるトラブルに見舞われている。昨日は危うく、武者タガメに捕まるところだった。

次もここまでやってこれるとは限らない。それなのに、チャパティはもういつでも来れるかのような強気の発言をしている。
「でも。持って帰れないのに悩んでもしかたがないですわね。預けておきましょう、このモンスターに」
ルビーローズは、眠るハサミムシの頭を指先でつついた。
すると、それを合図にでもしたのか、風が吹いた。少し離れたところで梢(こずえ)がざわめいて、静かになった。
「……いまの、風じゃないです」
「ここに風は吹きませんものね」
水中島は外界から隔離(かくり)されている。外から風が吹き込んだりしない。
「ハサミムシなら、何匹いても梢(こずえ)は揺れないと思うです」
「地面を這(は)っていますものね」
「姐さん」
「行きましょう、チャッパ」
ふたりは走り出した。
どうやら、武装モンスターはほかにもいるようだ。

ルビーローズ一味は、光る湖の秘密を暴くために水中島までやってきた。光っているのは真珠のような玉だったが、光る理由は不明だ。
ただし、水中島には霊子炉があるらしいとわかった。場所はおそらく、光る玉の真下にある建物の中。
となれば、光る玉と建物にはなんらかの因果関係があるはず。施設内部に潜入できれば、秘密は明らかとなるだろう。
当初の目的を遂行(すいこう)するために、ルビーローズとチャパティは建物をめざして走った。
そして、死の森を抜けた。

3

建物のまわりには芝生が広がっていた。
近くの木陰に身を潜め、ルビーローズとチャパティは様子をうかがった。
追っ手はなかった。
あれから梢(こずえ)はざわめかない。ほかにもいるであろう武装モンスターは、侵入者を追跡しているわけでは

なさそうだ。
「どう？」
ルビーローズは隣の木に話しかけた。
「監視はないと思うです。監視するなら、建物の外じゃなくて、水中島の外です。でも、それならもう、おいらたちは見つかってるです」
「そうよね。わざわざ湖の底に隠した島ですもの。ここには、いままで誰も来なかった。たったの一度、モンスター津波で襲撃されただけで、あとはずっと平穏（へいおん）だった。そういうことよね」
「だと思うです」
「問題はどうやって中に入るか、ですわね」
レンガ造りの茶色い建物は異様な外観をしていた。
全面が壁になっている。出入り口もなければ、窓もない。本当に建物かどうか疑わしいくらいだ。実はただのレンガ置き場だったとしてもおかしくはない。
「出入りはテレポートでまちがいないです。おいらたちはＬＩＰＳにはねられるので、中には入れないです。窓もない壁だけの建物という点で、地ノ塔とおんなじです」

ＧＬＬ城の地下には重要拠点の地ノ塔がある。地面の下に埋められた建物だから、窓はなく、壁だけでできている。水中島の建物は埋まってこそいないものの、壁しかない点で地ノ塔に似ている。
「そういえばそうね。こんなことなら、地下金庫侵入計画をもっと煮詰めておけばよかったわ」
「まず、換気口を探してみるです。地ノ塔の換気口はジャマーがかかっているので、スモールもリトルも使えないです。でもここは、湖底にあるので監視もない施設です。呪文は使える可能性が高いです」
「使えなかったら？」
「そのときはお手上げです。なので、条件は地ノ塔とおんなじです。思った以上に難攻不落です」
「あら？　地ノ塔の攻略法なら、ありますわよ」
「どうやるです？」
「簡単ですわ。壁が邪魔なら、壊してしまえばいいでしょう？」
「それだと壁を壊したあとが残るです」
「だったら、元どおりに直せばいいじゃない。ね？」
「……姐さん。おいら、初めて聞いたです。そんな方

法、いつ考えついたです？」
　確かにルビーローズの言うとおりだ。壁を破壊して侵入しても、きれいに修繕（しゅうぜん）してから脱出すれば、痕跡は残らない。
「ついさっき、ですわ」
　ルビーローズは声を出さずに、いたずらっぽく笑った。
「ここの膜を魚雷で破ったときに思いつきましたの」
「なかなかおもしろい案です。でも実行するには、細部までよく検討した上で、いろいろ取りそろえる必要があるです」
「そうね。さすがに、いますぐは無理ですわね。だって、わたくしたちは手ぶらですもの」
　ルビーローズは広げた手のひらを見せながら、木の陰から出た。
「監視はないのですから、隠れる必要はありませんわ。換気口を探して、そこから侵入できなければ、今日はもうおしまい。出直すとしましょう。じゃあ、先に行くわね。呼んだらいらっしゃい」
　芝生の広場をルビーローズは小走りに駆け抜けた。

監視がなくても、目立つ場所をのんびり歩くのは危険だ。水中島を守る武装モンスターに発見される恐れがある。

建物にたどりついたルビーローズは、壁に背中を押し当ててぴたりと張り付いた。そして、顔をあげた。

上から音が落ちてくる。森で聞いた、地虫の鳴くような音だ。見上げると、頭上に大きな物体があった。光る玉の底が見えている。ルビーローズは目を細めた。光る玉にどれほどの重量があるのかわからないが、まぶしいだけで圧迫感はなかった。

手招きをしてチャパティを呼んだ。

真っ赤なターバンを手で押さえながら、ハナマキが走ってきた。

「あなたは換気口を探して。わたくしが見張りをしますわ」

「了解したです」

チャパティは後ろに下がると、少し離れたところで壁と向かい合った。高くて長い壁の上下左右に視線を走らせた。

そんなチャパティを視野に入れつつ、ルビーローズ

は森を警戒した。
「見当たらないです」
建物の壁にはなにもなかった。換気ダクトがあるのなら、ベントキャップくらいはかぶせてあるはず。ひと目でそれとわかりそうなものだが、まったく見当たらない。
チャパティは地面に這いつくばって、下のほうも確認した。レンガに似せた角型ガラリを取り付け、床下換気口にしてあるのかもしれない。
「ないです、姐さん。換気口は全然見当たらないです」
「変ね。建物じゃないのかしら？　まあ、いいわ。とりあえず、一周してみましょう。考えるのはそれからね」
ルビーローズは壁に張り付いたまま、横向きに移動した。
チャパティもルビーローズをまね、あとに続いた。
建物の角まで行くと、ルビーローズはそっと顔を出して側面をのぞいた。やはり全面が壁になっている。
「次の角まで先に行って、裏の様子を見てきますわ」

「おいらはここで待機するです」
壁が直角に曲がっているところを見ると、建物はよくある四角い形状のようだ。正面と裏面、それに側面の、四つの面を持っているのだろう。
ということは、ひとつの面の両端にふたりで立てば、互いをカバーしながら三面を警戒できる。反対側の一面は死角になるが、それはしかたがない。
ルビーローズは壁際を走っていった。
チャパティはルビーローズを見守りつつ周囲も警戒し、ついでに換気口が近くにないか壁を見上げた。
裏面の安全を確認したルビーローズは、チャパティを手招きした。チャパティは壁に沿わずに、少しふくらんで走った。走りながら、換気口を探した。
「やっぱりないです」
角につくと、チャパティは報告した。
「わざわざ換気口を隠すとは思えませんわ。水没した場合に備えて、初めから作らなかったのではなくって？」
「ありうるです」
「困りましたわね。ドアもなく、窓もなく、換気口さ

えないのでは、それこそ壁を壊さないと中に入れませんわ」
「まだ調べ終わってないです」
「そうね。まずは一周、してみましょう。じゃあ、先に行きますわ」
ルビーローズは建物の裏側を駆けていった。裏も全面が壁でできている。角まで行って足を止めたルビーローズは、反対側の側面をのぞいてからチャパティを呼んだ。
チャパティは今度もふくらんだコースを取った。壁から離れて換気口を探しながら、小走りした。
しかし、駆けるその足が止まった。顔は真上を向いている。壁ではなく、光る玉を見上げている。
「？」
ルビーローズはチャパティの視線を追ったが、なにをそんなに見つめているのかわからなかった。
チャパティは建物から遠ざかるように、後ろ向きに歩き出した。顔を上げたまま、一味の首領を手で呼んだ。
「あっ」

駆け寄ったルビーローズが見上げると、夜の空があった。
光る玉と、帆のように立っている上の貝殻との隙間から、黒い水がのぞいている。双方をつなぐものはなにもなかった。
真珠のような玉は宙に浮かんでいるのだった。
水中島は湖底に沈んだ二枚貝でできている。下の貝殻には土が盛られており、上の貝殻は立っている。光る玉は上の貝殻に支えられて、宙に浮かぶオブジェのように見えるのだと思っていたら、そうではなかった。
「……この玉、浮いていますのね。どうりで重たく感じなかったわけですわ。大きな風船かしら？」
「風船にしては微動だにしないです。重さはけっこうあると思うです」
「それをわざわざ宙に浮かせるなんて。ただの照明ではありませんわね」
「おいらもそう思うです。あの玉は、なにか特別な役割を……」
話の途中でチャパティが口をつぐんだ。
「……姐さん」

「どうしたの？」
「玉の底に、なにかあるです」
「底に？」
ルビーローズは目をこらした。
「結露（けつろ）みたいな感じです。うっすらと、玉の底にしずくがたまってるです」
空気中の水分が冷やされると、しずくが生まれる。冬になれば、窓ガラスに水滴がつく。夏でも、冷たいものを入れたコップが汗をかく。
「あら、ほんとう。光がかすかに揺れていますわね」
玉の底にあるしずくのせいで、光が屈折していた。しずくの量が徐々に増えているのか、屈折率が変動するらしく、まっすぐ進む光が揺れて見える。
やがて、しずくははっきりそれとわかるほど大きくなった。
「光が、踊っていますわ……」
揺れる光は、踊る光に変わった。
「しずくそのものが光っているです」
光が揺れ動くのは、屈折とは無関係だった。しずく自体が発光している。しずくの大きさや形が変わるの

にあわせて、光の飛ぶ方向も変わるから、踊って見えるのだった。
「光る水滴ね」
「ちがうです、これも光る玉です！」
しずくが落ちた。
ふわりと落ちた。
ぽとりでもなければ、ぽつりでもない。それに、水滴でもない。
滴（したた）り落ちたしずくは空中で丸くなった。光る玉のミニチュア版だ。そして、ゆっくりと落ちていった。重量があるとはとても思えない、遅い落ち方だった。それでいて、決して軽くはないようで、落下の軌道がぶれることはなかった。
「このまま落ちると、屋上ですわね」
「です」
ルビーローズ一味のふたりは顔を見合わせた。
光る玉の真下にある建物は、どの面も壁でできていた。入り口どころか、窓さえなかった。ルビーローズは建物をほぼ一周して確認している。だが、ひとつだけ見落としがあった。建物の屋上はまだ見ていない。

その屋上に、光るしずくが落ちてゆく。
「チャッパ。小さくおなり」
ルビーローズは手を差し出した。
「はいです」
チャパティはルビーローズの手のひらに自分の手を置くと、呪文のリトルを念じてどんどん小さくなっていった。
手のひらのゴマ粒を、ルビーローズは頭へと運んだ。アカゲパキケのカールした角の上にチャパティを乗せた。それから、呪文を念じて自分自身も小さくなった。
縮む宿主に負けないように、角の上のチャパティももっと縮んだ。
ルビーローズはケシ粒になった。チャパティは姿が見えない。さっきまで踏みつけていた芝が、いまはもう大木のようだ。
小さくなったルビーローズの体を竜巻が包んだ。専用攻撃技の竜巻防壁だった。呪文はバリア・ストームという。竜巻でバリアを張って身を守る防御的な攻撃技だったが、真ん中で浮かんで空を飛ぶことが可能だった。

ちっぽけな竜巻が舞い上がった。渦の中心にケシ粒を抱えたまま、建物の屋上へと飛んでいった。

驚いたことに、屋上には穴があいていた。大きな穴だった。水中島に雨は降らない。屋根ならいらない。また、換気口も不要だった。壁に穴をあけなくても、屋上に穴があいている。

屋上の大穴の中に、光るしずくが落ちていった。ゆっくりと、沈むように、建物の中に消えた。

ルビーローズは光るしずくを追いかけた。

しかし、穴の中に飛び込むことはしなかった。穴のふちにとどまって、空中から偵察した。

建物は三層構造だった。穴の下は吹き抜けになっていたが、まわりの壁には二階と三階部分があった。吹き抜けに面したところは通路になっていて、その奥に部屋があるようだ。

吹き抜けといっても、デザインや採光を優先したわけではなかった。光るしずくを受け止めるための装置らしきものが、一階に置かれている。

装置からはアンテナのようなロッドが伸びていた。太いロッドに、これまた太い導線を巻き付けて、コイ

ルロッドにしてある。先端は丸くなっている。
コイルロッドは全部で六本あった。それが放射状に配置されていた。六方向に等間隔で並んでいる。ただし、長さは不揃(ふぞろ)いだった。いや、なんらかの目的に沿って、順序正しく長さを変えてあるようだ。丸められたロッドの先端で円を描くと、きれいに六つの輪ができた。
設備として目立つのはコイルロッドのついた装置くらいだった。あとは、三階の一部で通路が張り出しており、なにやらコントロールルームのようになっていた。
最も目を引いたのは、何人ものリヴリーが働いていることだった。建物がミューミュー一派の秘密施設であることに疑いの余地はないが、そこに作業員がいることに強い違和感があった。
もちろん、ミューミューたちも常駐はできないだろうから、代わりに働くスタッフが必要なのはわかる。それに働いているのは、ただの一般職員ではあるまい。特命を帯びた、エリートの中のエリートだろう。極秘任務に就いているのだから、ある意味、管理リヴリー

よりも上位にあるリヴリーたちだ。
だから、秘密も一切漏れてこない。
人気者のルビーローズには、自然発生的な情報網がある。頼まなくても、各管理機関の職員たちが自ら進んで情報を提供してくれる。「ルビーローズのエスピオナージ・セル」と呼ばれる、幻の情報網だ。別名を「紅(くれない)機関」ともいう。
紅機関は、この件に関して完全に沈黙している。
水中島の存在も、真珠のような光る玉のことも、その下にある建物とそこで働くリヴリーたちのことも、まったく伝えてこない。光る湖の存在すら、情報として上がってはこなかった。
知らないのだ、誰も。
ルビーローズのシンパは一般の職員に多い。エリートの中のエリートとして選抜され、秘密施設に配属されるほどの人材は、ミューミュー一派の権力機構に取り込まれている。あえて危険を冒(おか)して、情報を漏らすようなことはしない。
待っていても、秘密は絶対に明らかにはならない。
ならば、自ら飛び込んで探り出すよりほかに手はな

い。
もとよりその覚悟で、怪物密林の湖に挑んだルビーローズだった。
「さあ！　行きますわよっ」
ルビーローズは建物内部に突入した。
ケシ粒ほどに小さくなっているのだから、人目を気にする必要はなかった。竜巻のバリアも体同様にちっぽけで、まったく目立たない。
そうは言っても、空気が渦を巻けば風は吹く。空中を漂うほこりが急に動いたりすれば、感づかれる恐れもある。細心の注意を払わなければならない。
ところがルビーローズは、大胆不敵な行動に出た。
建物の中に入ると、ひとけのない場所を目指すどころか、まっすぐコントロールルームに向かった。天井をかすめるような高い位置取りではあったものの、進路はためらうことなく一直線だ。
実は、それが最も発見されにくいコースだった。
秘密施設は光るしずくに関わっている。そのしずくが滴り落ちたのだから、スタッフはしずくに集中している。三階通路の張り出し部分にあるコントロールル

ームでは、どうしても視線が下を向くことになる。
つまりルビーローズは、頭上という死角をついたわけだ。しかも、接近すればするほど、死角に深く入り込むことになる。
ちっぽけな竜巻は、誰にも悟られずに天井近くを走った。そして、コントロールルームにたどりついた。ルビーローズは敵中枢部の真上を取ったのだった。
してやったりとの感慨はなかった。向き直ると、光るしずくが一階の装置に捕捉されていた。球体が変形を始めている。
装置の本体は一階にあったが、六本のコイルロッドは斜めに突き出しており、二階に届いていた。長さの異なるコイルロッドを順番に、放射状に並べると、丸められた先端部は螺旋を描くことになる。
そんな螺旋構造に応じるように、光るしずくが形を変えた。きれいな球体は下から崩されて、コイルロッドに囲まれた空間を下ってゆく。細く、長く、うねるその形は、立ち上る煙のようにも見える。
だが動きは、煙とは逆だった。下に吸い込まれて消えてゆく。まるで、見えない渦巻に呑まれてゆくかの

ようだ。
コイルロッドに秘密があることは、見ればわかった。
光るしずくは、順番に短くなる棒が作り出した螺旋の中で破壊され、消滅してゆく。なにかこう、電磁界のようなものが発生しているのかもしれない。光るしずくに電場も磁場も関係なさそうだから、さしずめそれは、霊子界だろうか。
いや、考えても無意味だ。技術的なことは一味の知恵袋に任せている。ルビーローズは見たままを受け入れることにした。光る玉は霊力の固まりで、それを取り込むコイルロッドの装置が霊子炉。そう思えば、理解はしやすい。まちがっていても、あとでチャパティが正してくれるだろう。
ひょっとすると、いまこの瞬間にも、チャパティは教えてくれているのかもしれない。
けれども、その声はルビーローズの耳には届かない。チャパティは角の上のゴマ粒で、ルビーローズはケシ粒だ。おまけに竜巻をまとっている。
光るしずくが消滅した。
完全に消え去ったところで、ようやくコントロール

ルームから声があがった。
「ルーチェ・ルジアーダ、回収完了しました」
報告したのはスナイロユンクだった。施設内の全員に聞こえるように、マイクを使って放送した。
「霊力の供給状況はどうか」
コントロールルームには、スナイロユンクのほかにイッカクフェレルとカンボジャクがいた。スタッフの中心人物なのか、イッカクフェレルの物言いには威厳(いげん)があった。
「問題ない」
カンボジャクがぞんざいに答えた。明らかに面倒くさがっている口調だった。
「心配しなくても安定している。たいした需要もないしな。ブロックパークで、やや過剰に消費している程度だ。まったく、真夏に雪合戦とはのんきなことだ」
なにか不満でもあるのか、それとも、もとからそういう性格なのか、カンボジャクは文句をつけた。
「いいじゃないか、楽しそうで。夏祭りの催事(さいじ)にけちをつけると、局長ににらまれるぞ」
「おっと。そいつはごめんだな」

「それで、やや過剰に消費とは、具体的にどの程度なのか」
イッカクフェレルはカンボジャクを上手にあしらいながら、正確な報告を求めた。
「現在、千二十一名がブロックパークにいる。そのほとんどが、断続的にスリングを使っている」
「そうか」
「……あのう。そろそろ、ドラギラが帰還する時間なんですけど？」
スナイロユンクが口をはさんだ。
「ああ、すまない。担当を行かせてくれ」
「それとシャッターの閉鎖だ」
イッカクフェレルに続いてカンボジャクも指示を出した。どうやら、このふたりはあまり差のない、長と副長のようだ。
スナイロユンクはマイクに向かった。
「ドラギラの帰還予定時刻です。担当官は給餌室（きゅうじしつ）で待機してください」
「シャッターの閉鎖を忘れるな」
たったいま指示したばかりなのに、カンボジャクが

念を押した。くどくて嫌われるタイプだ。
「はい……」
スナイロユンクは険(けん)のある言い方で返事をしたが、カンボジャクが気にする様子はなかった。
「これより、ルーフ・シャッターを閉鎖します」
「繰り返せ」
「はい……。繰り返します。これより、ルーフ・シャッターを閉鎖します」
放送を終えると同時に、スナイロユンクはヒステリー気味にスイッチを操作した。
秘密施設の天井に取り付けられたシャッターが音を立てて動き始めた。横にスライドして大穴をふさいでゆく。
「!」
ルビーローズは即座に行動した。迷うことなく、脱出を選んだ。
天井のシャッターが閉まると逃げられなくなる。スイッチにさわって勝手に開けると、派手に存在がバレてしまう。かといって、次にシャッターが開くまで、のんびり待つわけにはいかない。

そもそも、光るしずくがどんな周期で発生するのかわからない。数時間ごとなら、じきにシャッターは開くだろうから、潜入捜査を継続してもいい。だが、日に一度なら、たちまち不都合が生じる。いつまでたっても戻らなければ、なにか起きたとみてマハラがやってくるはず。そうなると、大事な足である紅月丸は無人で放置されることになる。

それに、今夜中にリヴリーアイランドに戻ることもできなくなる。

三日間続いた夏祭りのイベントも、今日で終わる。夜には、保安官選挙の結果も判明する。LISD(エルアイエスディ)を手に入れるべく、リコールされた前職の悪徳保安官と、リコールした新人の元防衛隊員が、舌戦(ぜっせん)を繰り広げている。

LISDは、正式名称を「Livly Island Sheriff's Department」という。リヴリーアイランドの保安官事務所だ。捜査権を持つ唯一の機関である。

新しい保安官が誰に決まろうと関係なく、管理リヴ委員会の臨時会議が今夜半(こんやはん)に開催される。そこで、イベントの総括(そうかつ)と選挙結果の報告が行われる。

もしもルビーローズ一味が戻らなければ、店番としてショップに置いてきたダミーたちが会議に出席する羽目になる。バイオレコードの偽造は完璧でも、ダミーたちの管理リヴとしての立ち居振る舞いにはまだまだ不安がある。ショップではうまくやりおおせても、会議という特殊な場ではそうもいかない。

だから、会議が始まる前に戻らなければならない。

秘密施設で夜を明かすわけにはいかない。

竜巻に乗って脱出を図るルビーローズは、ちらりとコントロールルームを振り返った。

施設内に潜入できたのはごくわずかな時間だったが、収穫はあった。

光るしずくはルーチェ・ルジアーダと呼ばれていた。正しい名称を知ることは大切だ。光るしずくで探索しても、勝手にそう呼んでいるだけなのだから、情報はつかめない。しかし、ルーチェ・ルジアーダで調べたなら、なにかを探り当てることもあるだろう。

また、スタッフも三名、顔と声を覚えることができた。リーダーらしきイッカクフェレルにはつけいる隙（すき）がなさそうだが、サブリーダーと思われるカンボジャ

クはそれほどでもない。現状に不満があるか、性格が悪いか、どちらかの問題を抱えている。そんなカンボジャクとの関係に、スナイロユンクは鬱憤をつもらせている。エリートの中のエリートとして選抜されたスタッフであっても、楔の打ちようはあるわけだ。

スタッフの名前はわからなかったが、モンスターの名前なら、ひとつわかった。ドラギラというのがいるらしい。担当官は給餌室で待機との指示が出た。えさを扱うのが給餌室だろうから、ドラギラはモンスターとみてまちがいない。いかにも怖そうな名前だが、武者タガメだろうか。それとも首狩りハサミムシだろうか。あるいは、梢をざわめかせた奴か。

なにも知らないよりは、ずっと多くのことを知って、ルビーローズは秘密施設を脱出した。

天井の大穴から飛び出すと、一陣の風として吹き抜けた。穴のそばにとどまることはしなかった。

もう光るしずくはないのだから、シャッターが完全に閉まるかどうか、確認のために天井を見上げている者がいるかもしれない。穴のそばでまごまごしていると見つかってしまう。

ルビーローズはケシ粒と化した状態のまま、秘密施設の屋上を飛んだ。そして、建物から去ろうとしたところで、急上昇した。

驚いて、空中で飛び上がったのだった。

芝生の上におぞましい生き物がいた。

長い胴体から、とげのような脚が何本も生えている。脚は黄色だったが、黒光りする胴体の先には血色の頭がついていた。赤黒黄色と、見るからに毒々しいその生き物は、ムカデだった。見た目に違わず、猛毒を持っている。

血色の頭にはプレートが貼り付いていた。発光ダイオードも点灯している。武者タガメや首狩りハサミムシとそっくり同じだ。

ムカデは無数にある脚をうねらせて歩いていた。

胴が長い。長大なモンスターだった。大ムカデだ。しかも武装している。

もっとも、なにを目的とした武装なのかはよくわからなかった。体の側面から短い角が出ている。脚の上から、ちょこんと突き出している。角というよりは筒のようだ。先端は尖っていないし、穴があいている。

おそらく、内部は空洞なのだろう。それが体節（たいせつ）の数だけ、両脇から出ている。脚の数と同数の筒がある。

ルビーローズは上昇を続けた。

猛毒モンスターのドラギラから、ひたすら距離を置こうとした。竜巻防壁は飛行呪文ではない。防御的とはいえ、あくまでも攻撃技だ。飛ぶのに利用できてもスピードは遅いし、敵の攻撃を巧みにかいくぐるような機動性もない。幸い、相手は飛べないのだから、上に逃げれば見つかっても大丈夫だ。

ドラギラは空を飛ぶケシ粒に気づかなかった。気づかないまま、姿が掻き消えた。テレポートしたのだった。

モンスターもテレポートできるのだと、ルビーローズは初めて知った。頭にある電子パーツでそれが可能となるのだろうか。からくりはわからないが、警備の武装モンスターがわざわざテレポートするからには、やはり建物には天井以外の出入り口はないようだ。

ルビーローズは飛び続けた。地上に降りるのは避けた。

技を使うと霊力を消耗するが、地上に降りればモン

スターに出くわす。ハサミを構えた首狩りモンスターとは、すでに一戦を交えている。そろそろ目覚めて、侵入者を捜しているかもしれない。そうでないとしても、なるべく戦闘は回避したいし、ドラギラのような大物を敵に回すのは願い下げだ。

霊力の消耗は、安全とのトレードオフ。どちらかを損なうのはしかたのないことだった。

ルビーローズは水中の島を高く飛んだ。

上空からは倒木の空き地がよく見えた。眼下に広がる森は平和そうだが、地理的に見て、そこが死の森だった。かつて、大挙襲来してきた怪物たちの死骸は、森の木に隠されている。

たぶん、いやきっと。モンスター津波のときに、敵を迎え撃って水中島を守り抜いたのはドラギラだろう。

ムカデはものすごい牙を持っている。根元は脚よりも太く、先端は針のように尖った毒牙だ。正確には牙ではなくて、顎肢という。頭のすぐ後ろにある体節の、脚が発達して、牙のようにも大顎のようにも見える特殊な器官になっている。ゆえに、唇が脚と書いて、唇脚類と呼ぶ。

太い脚を牙に変えて敵に打ち込み、毒を注ぎ込むのだから、とんでもないモンスターだった。おまけに、ハサミでちょきりと首を切り落とす仲間までいる。

次に潜入するときには、しっかりとしたモンスター対策を練っておかねばならない。それを思うと、今回、無傷で撤収(てっしゅう)できるのは奇跡といえた。

ルビーローズは、マハラが守る紅月丸へと帰り着いた。

黒いテントウムシの目の中に人影が見えた。操縦席に座り、コンソールに足を投げ出して、だらしない姿勢でくつろいでいる。暇を持て余しているらしく、あくびをしながら自慢のソフトモヒカンの手入れをしている。

無事でなによりだが、反面、腹立たしいくらいにのんきな留守番だった。

地表近くまで降下したところで、角の上のゴマ粒が飛び降りた。

ルビーローズとチャパティは、競い合うように元の大きさに戻った。

仲間が帰ってきたのに気づいて、マハラがうれしそ

うに手を振った。しかし、その仲間に笑みはなく、しきりに背後を気にしているのを見て、マハラも真顔になった。ハイドロハンマーを通路に戻すべく、あわてて操縦席から離れた。

再び顔を見せたマハラが大きくうなずいた。

艇長であるルビーローズが危険なしんがりを務め、先にチャパティを船内に戻らせた。チャパティは操縦を担当している。潜水艇の状態を確認させ、発進の準備を急がせる必要があった。

ハイドロハンマーに手をかけ、呪文を念じて体を小さくし、チャパティは砲身の中に潜り込んだ。

ルビーローズはひとりで水中島に残った。チャパティが操縦席につくのを待って、ようやく、ルビーローズも秘密の島を後にした。

「なんでえ、姐御。中でいったい、なにがあったんでえ？」

船内に戻ると、事情を知らないマハラがうるさかった。

「話は後ですわ。ただちに離脱します。ハイドロハンマーを元に戻して、あなたも席につきなさい」

「おう」
ぴしゃりと言われて、マハラは引き下がった。
「どう？」
艇長席に腰掛けながら、ルビーローズは隣の席に聞いた。
「異常なしです。マッハがちゃんと留守番してくれたです」
「ったりめえよ」
後ろから声が飛んできた。
「そう。じゃあ、あとは帰投するだけね。時間に余裕もありますわ。あわてる必要はなくってよ」
「……姐さん」
「なあに？」
「……そうもいかないみたいです」
チャパティは窓の外を指さした。
水中島に風が吹いていた。
森の木が、一本だけ不自然に揺れている。まわりの木は、風に葉がそよぐこともない。それなのにたった一本の木だけが、なにが怖いのか、ぶるぶるとふるえている。

もちろん、湖底の島に風は吹かない。
つまり、これは……。
「まさか、これは……」
ふるえる木が爆発的に生長(せいちょう)した。黄色い幹(みき)がぐんぐん伸びた。トゲのように短い枝が、何本も横に張りだした幹だった。
伸びた幹は生長を止めると、しなるように垂れ下がった。
幹の向こう側は黒かった。先端は血の色をしていた。
蠢(うごめ)く触角と、脚よりも太い毒牙がついている。
頭の上で光る電子パーツが、まるで第三の目のようだった。

第八章　ドラギラ

―

「うおーっ！」
大ムカデのモンスターを見たマハラが声をあげた。
「作業を急ぎなさい！」
ルビーローズはマハラをしかりつけた。
ハイドロハンマーが通路になったままでは、水中島から離脱できない。離れると、大砲の筒先から水が入ってきて、紅月丸は沈んでしまう。
魚雷で撃退することもできない。紅月丸とドラギラの間には、水中島を守る薄い膜がある。魚雷を撃ってこれを破ると、やはり水の脅威にさらされる。
つまり、なにもできないわけだ。ドラギラに攻撃されても、だまって耐えるしかない。そして、その攻撃で膜が破れてしまえば、結果は同じ。
逃げるにしろ、戦うにしろ、臨時の通路をしっかり

閉鎖しないことにはどうにもならない。
「ハーネス装着！」
ルビーローズはとりあえず、いまできることをした。なにが起きても姿勢を維持できるように、体を座席に固定した。
チャパティもハーネスをつけた。
ドラギラはのんびりと木から下りてくる。
「おっしゃあ！　作業完了でい！」
マハラはロックナットレンチをその場に捨てた。
ハイドロハンマーへの出入り口には、圧力タンクの点検口を利用した。そこさえ閉じれば、あとは放置してもかまわなかった。
水中大砲の砲塔は制御室の中央に格納される。床がテーブルのように盛り上がって、格納庫になっている。作業のために外したカバーも工具もそのままにして、マハラは大急ぎで自分の席についた。
「離脱します！　後進全速！」
ルビーローズが号令した。
「後進全速するです！」
チャパティはテレグラフハンドルを引いた。フル・

アスターンをかけた。
船底にある六つのスクリューが猛烈に回転し、紅月丸を後退させた。
だがそれは、とても全速とは呼べないほど、勢いがなかった。
「なにをしているの！」
ルビーローズは右手を伸ばして、チャパティの左手に重ねた。テレグラフハンドルを一段上げて後進半速とし、改めて下げて後進全速とした。
しかし、紅月丸のゆっくりとした動きは変わらなかった。
むしろ逆に、止まってしまった。
「膜が癒着（ゆちゃく）しているです！」
原因は目の前にあった。
水圧を無力化する膜に突き刺した砲身が抜けない。膜は水中島を覆っている。広げた二枚貝の、上下の貝殻の間に広がっている。それをまるごと全部引っ張ろうと無理をして、紅月丸は力負けしていた。
「自動修復する膜です！　引いても抜けないかもです！」

破れても、自動的に修復される膜だった。薄くても丈夫で、押し破ろうとしても破れなかった。それが破れたのは、魚雷を撃ったからだ。

ルビーローズは魚雷ランチャーの発射装置に手をかけた。

「だめです、姐さん！」

チャパティはルビーローズの手をつかんで止めた。

「膜を引っ張った状態で撃つと、魚雷は膜に沿って流れるです！　一本、無駄になるです！」

潜入するときは、膜を押し込んだ状態で魚雷を撃った。だから魚雷も膜を押して、起爆した。それが逆になると、引っ張り出された膜は魚雷をそらせてしまうだろう。

「ハイドロハンマーぶっ放しゃいいじゃねえか！」

マハラが声をかけた。

水中大砲を撃つと、反動が紅月丸を襲う。抜けない砲身も抜けるかもしれない。

「ハイドロハンマー、よろしくて？」

ルビーローズは口早に確認した。

隣に座るチャパティはルビーローズと目があった。

無言でうなずいた。反動で抜けるかどうかは、やってみないとわからない。ならば、やるしかない。
「ハイドロ・コンプレッサー、正常！　圧力タンク、満水！　いつでもいけるぜえ、姐御！」
制御室のマハラがゴーサインを出した。タンクを空にして通路になっていた大砲は、紅月丸最大の武器に戻った。
「撃ちますわよ！」
ルビーローズは引き金をしぼった。
接近してくるドラギラを狙うことはしなかった。目的は、膜に刺さったままの砲身を引き抜くことにある。狙い澄まして、水の砲弾をモンスターに当てる必要はない。
砲撃の反動で紅月丸が後退した。ルビーローズは座席から飛び出しそうになり、その動きをハーネスが止めた。ベルトが体に食い込んだ。
後ろ向きに逃げようとした潜水艇を、薄くて透明な膜が引っ張り戻した。
ドラギラは一瞬動きを止めた。
水の固まりが飛んだのは、黒いテントウムシの仕業

だと理解したらしい。それを逃げの一手と見たのか、それとも攻めの一手と見たのかはわからない。どちらであろうとも、水中島の守護神が打つ手は初めから決まっていたようだ。逃げるならつぶす、攻めるならつぶす、といったところか。

大ムカデが一気に攻め込んだ。俗に百本あるといわれる脚で走ると、速度も百倍になったような気がした。

「撃ちますわ！」

ルビーローズは連射した。

今度はドラギラを狙った。接近は阻止しなければならない。

水の砲弾はムカデの長い背中に命中した。

ドラギラは踏みとどまった。

ムカデの胴部背面はなめらかだ。突起もなにもないから、水が引っかかるところはない。平らな体は地面に張りつくし、無数の脚が土を噛(か)んでいる。

脇腹には筒状の短い武装があったが、水の勢いで簡単に倒れてしまい、やはり抵抗とはならなかった。

ハイドロハンマーが放った水は、ドラギラを地面に押しつけて、背中を洗っただけだった。

背中を洗い流されても、ドラギラは感謝などしなかった。シャワーを浴びてさっぱりするムカデはいない。ドラギラは頭を持ち上げ、太くてするどい毒牙を大きく開いて威嚇(いかく)した。

ハイドロハンマーの開発コンセプトは、モンスターを攻撃しないで追い払うことにある。リヴリーの技を使うと、モンスターは怒り狂う。だから、水で叩いて遠ざける。ゲンゴロウには通用した。追い払えなかったものの、怒らせることはなかった。

だが、ドラギラはちがった。伏せていた頭を持ちあげて、上からにらみつけてきた。

怒らせてしまったのは想定外だが、怒ったドラギラの行動は好都合だった。

「撃つ！」

ルビーローズはドラギラの胸を狙った。

ムカデに胸部はない。頭部と胴部があるだけ。ルビーローズが狙ったのは胴体の上のほうだった。

的は宙に浮いている。狙いやすい位置にある。てっぺんには頭もついているし、当たれば大きな効果を期待できる。

水の砲弾が飛んで、牙を剥(む)いた敵をぶん殴った。
理想的な直撃だった。ドラギラは、胸で受け止めるような形で水の砲弾をまともに食らった。頭を持ち上げていたから、地面を噛む脚の数も減っている。長い体は浮き上がり、吹き飛ばされる形で、後ろへと倒れた。
猛毒モンスターは仰向けにひっくり返ったのだった。
「前進全速！」
ルビーローズはこの機を逃さず、前に出た。
スクリューのパワーでは、膜に刺さった砲身は抜けない。水中大砲の反動で勢いをつけても無理。となれば、膜を破ったときの手を使うしかない。前進して膜を押し込み、魚雷を発射するのだ。
前に進むと、自分からモンスターに近づくことになる。敵を遠ざけようとハイドロハンマーを撃てば、自分も後ろに下がってしまう。しかたがないのでまた前に出ると、また撃つことになる。これでは、いつまでたっても埒(らち)が明かない。そうこうするうちに、紅月丸のバッテリーがあがってしまう。
ルビーローズは敵の失態に乗じて、一気に事態を好

転させようとしたのだった。
ひっくり返ったドラギラはすぐに体を起こした。胴体が長くてもハンデはなかった。横に回転するだけで、くるりと元どおりになった。ただし、頭と尾は入れ替わった。毒牙のある危険な頭は向こう側になり、なにもない安全な尾がこちら側になった。
そう思ってルビーローズが落ち着いていたら、なんと。ドラギラは尾にも触角があって、前後を入れ替えることなく、まっすぐ向かってきた。
「双頭……！」
ルビーローズは驚いた。ドラギラは双頭のムカデなのだと思った。その証拠に、前にも後ろにも触角がある。
「ちがうです！　これは偽の触角です！　後ろ向きに進んでいるです！」
チャパティが指摘した。
ムカデの胴体にある一番最後の脚は、長く伸びて変色し、まるで触角のようになっている。だから、ムカデが後ろ向きに歩くと尾が頭に見える。進む方向と目立つ触角で判断するから、勘違いしてしまう。

ドラギラは偽の触角で尾に注意を引きつけた。後ろ向きに歩くことで前進したと見せかけ、相手を混乱させた。距離を詰めるとすばやく反転し、体勢を立て直した。無数に生えている脚を使えば、フットワークも軽い。長い体の向きを入れ替えるのはあっという間だった。

ハイドロハンマーの直撃を食らってひっくり返ったミスは、あっさりと帳消しになった。

しかし、ドラギラの相手をしているのはほかでもない、紅い薔薇の女だった。

ドラギラが体の向きを入れ替えたときにはもう、魚雷が発射されていた。

増設された右の魚雷ランチャーから、魚雷型機雷が飛び出した。雷速は遅かった。右のランチャーは自走式だ。魚雷発射管はただの筒で、後部は閉鎖されていない。水圧をかけて射出することはできない。魚雷は、自分自身のスクリューで走り出す。

左のランチャーなら、もっと勢いよく魚雷は飛んでゆく。閉鎖された魚雷発射管後部にメタルホースが接続されており、デコイ・シロップの噴射口につながっ

ている。デコイ・シロップ用の水圧ピストンを利用して、魚雷を射出する仕組みになっている。

ルビーローズは魚雷型機雷をあえて選択した。発射速度は遅くても、機雷のほうが感度は高いので、通常魚雷よりも先に起爆すると考えたのだ。コンマ一秒でもいいから、少しでも早く爆発させたかった。

体の向きを入れ替えたドラギラが突撃してきた。

紅月丸は動けない。

砲身に膜がくっついている。後ろに下がると膜を引っ張り、魚雷がそれてしまう。ハイドロハンマーを撃てば、反動で膜を引っ張り、やはり魚雷はそれる。ドラギラが襲いかかってきても、撃退するすべがなかった。魚雷を発射したことで、打つ手がなくなってしまった。

紅月丸はなにもできない状態に陥(おちい)った。膜を押し込んでゆく魚雷にあわせて、微速で前進するしかなかった。

でもそれは、魚雷が爆発するまでの辛抱(しんぼう)だった。押し込む魚雷と、押し戻す膜との圧力で、すぐにも信管が起爆する。遅延発動型バーストが弾けて、膜は裂け

る。そこでハイドロハンマーを撃ち、ドラギラを撃退しつつ離脱すればよい。
ところが、そううまくはいかなかった。
発射された魚雷が爆発するまでの、ほんのわずかな時間で、ドラギラは戦況をひっくり返した。
魚雷を咬もうとして、毒牙が膜に突き立てられた。湖底の水圧を無力化する膜は、すぱりと切れた。
ムカデの毒牙は先端がするどく尖っている。黒くて光を反射するので、鍛え上げられた鋼でできているように見える。
丈夫な膜も、ドラギラの毒牙の前ではただの薄絹だった。
膜が裂けたため、湖底の高圧な水が噴き出した。魚雷は水の流れに乗り、森に向かって宙を飛んでいった。そして森の木に当たって爆発した。
せめてドラギラに命中してくれたなら、多少の役には立ったものを。
紅月丸は数少ない魚雷を無駄にしたのだった。
「撃ちますわ！」
ルビーローズは落胆しなかった。

魚雷が無駄玉に終わっても、結果的に膜が裂けたことをよしとした。ピンチにもかかわらず、好機到来とばかりに打って出た。

だが、運はモンスターに味方した。

毒牙に切り裂かれた膜が、ハイドロハンマーの砲口にかぶさった。薄くても、湖底の水圧を無力化する膜だった。

放たれた水の砲弾は霧散(むさん)した。一瞬で蒸発したように見えた。信じられない光景だった。高い圧力をかけて放水したのに、ぺろりとかぶさった透明な膜は、まるで鉄板のようにびくともしなかった。

それでも、ハイドロハンマーを撃ったことで反動は得られた。ドラギラに当てることはできなかったが、紅月丸は大きく後退した。

膜が引っ張られて、裂け目が広がった。抜けなかった砲身がようやく膜から抜けた。

砲身には膜がこびりついたままだったが、それを引きちぎるようにして、紅月丸は水中島から離脱した。

「ああっ……！」

チャパティが絶望的な声を出した。

噴き出す水をものともせずに、ドラギラが追い討ちをかけてきたのだった。執念深いモンスターだ。陸上の生き物なのに、水中まで追ってくるとは。

ドラギラは大きな毒牙を開いては閉じ、また開いては閉じて、水の中を迫(せま)ってきた。咬む気満々だ。おそらく、紅月丸に咬みついて島内に引きずり戻すつもりだろう。

「後進全速！」

「はいです！」

スクリューがうなると、簡単に距離が開いた。

ドラギラはムカデだ。紅月丸は潜水艇。ムカデの脚が本当に百本あったとしても、水の中では役に立たない。たった一枚のスクリューにも劣(おと)るだろう。ましてや、紅月丸には六枚ものスクリューがある。

舞台が水中に移った以上、ムカデのモンスターは怖くもなんともなかった。

「追い払わねえでいいのかよ？」

マハラが聞いた。

「その必要はありませんわ」

ドラギラは水中を歩くようにして追ってくる。脚を

うねらせて、水の中を這(は)っている。
「あんな泳ぎ方では追いつけませんわ、絶対に。もしもドラギラが、ドルフィンキックを打つというのなら、話は別ですけれど」
「ドラギラっつーのか。あのムカデ野郎は」
「そうですわ。ほかに、首狩りハサミムシがいましてよ。危うく、首を切り落とされるところでしたわ。わたくしたち」
ルビーローズは少しばかり話を脚色した。
「うっは。やべえじゃねえか。留守番して損したのか、得したのか。わからねえな、こりゃ」
「姐さん……」
チャパティは雑談に加わらなかった。気を抜かずに、ずっとドラギラを観察している。
「ドラギラが引き返さないです」
「追いかけても届かないって、わからないのかしら？」
ドラギラの全身は水中にあった。ムカデにとって安全なはずの、空気のある水中島から抜け出している。
「おいら、ドラギラはすぐに引き返すと思ったです。

怒りにまかせて出てきただけで、水中で追い続けることはしないと思ったです」
「そうよね。息ができませんものね。……そう言えば」
「はいです。ドラギラの脇腹にあった短い筒状の物体は、もしかしたらシュノーケルだったかもしれないです。根元はちょうど気門になるです」
「でも、シュノーケルがあるからって、水の中で息はできなくってよ？」
「水中から酸素を取り込めるのかもしれないです」
「そうだとしても、スピードがちがいますわ」
仮に、ムカデのドラギラが水中でも呼吸ができて、どこまでも紅月丸を追ってきたとしても、泳ぎが下手なのだから恐れる必要はない。
「チャッパ。ストップ・モーターよ」
「はいです」
後ろ向きに進んでいた紅月丸の足が止まった。
獲物が逃げるのをやめたのだから、ドラギラはさらに張り切って追ってきそうなものだが、そうはならなかった。

追いつけないと承知しているのか、ドラギラは浮上を始めた。見えない壁を登るような感じで、脚を使って歩いて浮き上がってゆく。
「あら？　水中島には戻りませんのね？」
「溺れたんじゃねえのか？」
「ちがうと思うです」
「なら、なんで島に戻らねえんでえ？」
「それは……おいらにもよくわからないです」
「あのまま浮上すると、アメンボと遭遇(そうぐう)しますわね」
ルビーローズは横目でチャパティを見た。
水中島にはモンスター津波の爪痕(つめあと)があった。襲来してきたモンスターを、ドラギラと首狩りハサミムシが撃退している。
ということは、ドラギラが浮上するとアメンボが襲撃するのだろうか。それとも、襲いかかるのはドラギラのほうか。アメンボは水上最速のモンスターで、数も多い。一方、ドラギラは猛毒のモンスターで、体は長く大きい。どちらが先に仕掛けるにせよ、モンスター同士で死闘が始まるのはまちがいなさそうだ。
「追ってこねえんなら、それでいいじゃねえか。とっ

とと帰ろうぜ」
マハラは席を離れ、途中で放り出した作業の後始末に取りかかった。砲塔格納庫のカバーを床から拾い上げている。
「そうね。帰投しましょう」
ルビーローズは大ムカデから目を離した。猛毒モンスターの脅威は過ぎ去った。ドラギラが水面に顔を出したあとに起こる戦いのことなど、気にかける必要はない。
紅月丸は斜めに浮上を開始した。
峠を越えて下ってきたから、今度は峠まで登り返す。水中なのに、やることは登山と変わらなかった。

2

ドラギラが浮上した。
湖面にはアメンボがたくさんいた。
光る玉が水中にあるから、湖面が光って小虫が寄ってくる。それを目当てに、アメンボが集まっていた。
アメンボは肉食だ。水に落ちた昆虫にたかって体液

を吸う。
ドラギラが浮上すると、水面の揺れを感じ取ってアメンボが群がってきた。
しかし、大ムカデにたかろうとはしなかった。猛毒を持った危険な相手だとわかったのか、あるいは、水中島の守護神ドラギラだと知っていたのか、アメンボは一斉に逃げ出した。
光る湖は北と南に分かれている。岸が迫(せ)り出して、南側の一角を区切っている。南の水域はせまく、北は広い。
アメンボの集団は我先に、北に向かって走り出した。南に残ろうという度胸のある者はいなかった。それどころか、前を走る仲間に脚をかけて滑走(かっそう)を妨害し、仲間の体の上を乗り越えて逃げる者さえいた。モンスターの威厳(いげん)だとか貫禄(かんろく)だとかは、微塵(みじん)もなかった。ただ、脚だけは本当に速かった。
アメンボの群れが逃げ散って、湖はすっかりさみしくなった。
のんきな甲虫が一匹だけ、くるくると円を描いて泳ぎ回っている。

ライバルのいなくなった餌場を独占しているのはミズスマシだった。優雅にシンクロナイズドスイミングでもしているように見えるが、ミズスマシも肉食のモンスターだ。水上を見張るふたつの目と、水中を見張るふたつの目を持っている。

四つも目があるのに、ミズスマシはドラギラに気づかなかった。くるくると円を描くうちに、目を回してしまったのだろうか。

近寄ってきたミズスマシにドラギラが咬みついた。根元は太く、先はするどい毒牙が、甲虫の硬い体を突き破った。毒腺（どくせん）から毒液を送り込むと、ドラギラは頭を振ってミズスマシを投げ捨てた。

遠くの水面に転がったミズスマシは、仰向けになってしばらくもがいていたが、やがて動かなくなった。

静かになった湖でドラギラは寝そべった。溺れる心配はなかった。脇腹にはシュノーケルがある。気門は水中にあっても、短い筒が水上に出ており、空気は吸える。

ドラギラは武装モンスターだ。湖底の島を守る大ムカデである。武器なら、わざわざ追加しなくても強力

な毒牙があった。防具なら、無理に背負わなくても百本の脚を活かしたフットワークがあった。唯一、弱点と呼べるのが呼吸だった。

ムカデにエラはない。水中生活に適応した生き物ではないから、タガメやゲンゴロウのような呼吸方法も持っていない。にもかかわらず、守る島は水の底に沈んでいる。そのため、ドラギラの武装にはシュノーケルが選ばれた。もちろん、ただのシュノーケルではなかった。

水面に横たわるドラギラから音が聞こえてきた。シュノーケルから聞こえてきた。空気を猛烈に吸い込んでいる音だった。

シュノーケルの根元がふくらんで、球形のガスホルダーができた。脚と脚の間に鉄の玉を抱えるような感じになっている。脚はたくさんあるから、玉の数も多い。

スキューバだった。

潜水するための呼吸装置だ。ガスホルダーは空気ボンベで、中には圧縮空気が詰まっていた。

空気の取り込みを終えたドラギラは、長い体を上下

にうねらせた。ムカデは平べったい体つきをしている。左右にうねるよりも、上下にうねったほうがしっかり水を捉(とら)えることができる。

ドラギラは浅く潜って泳ぎ始めた。

ゆったりとうねっているのに、意外に速い。体全体を使って扇(あお)ぐように水を蹴ったあと、まっすぐ伸びて水中をすべってゆく。

グライドストロークと呼ばれる泳ぎ方だった。水の抵抗を抑えて前に進む。せかせか動かないから、水中を飛んでいるようにも見える。

まっすぐ伸ばした体はわずかに傾いていた。水面に対して平行ではなく、頭側がやや下がっている。体重移動で重心を前に移し、頭のほうへと沈んでゆくことで、結果的に前にも進んでいるのだった。

体を上下にうねらせて水を蹴るのは、ルビーローズが警戒していたドルフィンキックだ。

しばらく泳ぐとドラギラは体を折り曲げ、一気に沈降した。

峠を越えたところで、紅月丸が浮上した。

湖底から斜めに上がってきて、そのまま水上に出た。チャパティの要望だった。

砲身に癒着(ゆちゃく)していた膜を引きちぎるようにして、紅月丸は水中島から離脱した。膜は完全には剥(は)がれず、一部が砲身にこびりついたままだった。

そのため、ハイドロハンマーは格納できなかった。格納して船体に膜が触れると、今度は船体にくっつく恐れがある。そうなれば、ハイドロハンマーは動かせなくなる。もしものときにハンマー・アクセルも使えない。

格納しないまま帰投するか、浮上して除去するかを話し合って、格納しないと決まった。水中大砲を出しっぱなしだと船足(ふなあし)がにぶるが、水上で作業する危険は回避できる。安全第一だった。

ところが、切り離された膜は徐々に小さくなっていった。わざわざ除去しなくても、じきに消滅するものと思われた。それはそれで問題だった。

自動修復機能が働いて巨大な膜に成長されても困るが、消えてなくなるのも困る。水圧を無力化する膜の、貴重なサンプルを失うことになるからだ。

チャパティは膜の採取を願い出た。自分が外に出て作業するといった。

確かに、多少の無理をしても手に入れておきたいブツだった。なくすのは惜(お)しい。

全員の意見が一致して、紅月丸は浮上することになった。危険な仕事は俺様に任せろと、マハラが志願した。艇長のルビーローズがマハラを指名し、周辺を警戒するために自分も出るといった。チャパティは引き続き操縦を任された。

浮上した紅月丸は九十度回頭した。

テントウムシの背中が盛り上がっているので、胸部にあるハッチからは真後ろが死角となる。後ろは南の湖だ。どこかにドラギラが浮上したはず。危険な南はしっかり視野に入れておかねばならない。

回頭を終えるとハッチが開いた。

真っ先にルビーローズが姿を見せた。制帽はなくしたからかぶっていない。

続いてマハラが出てきた。これから潜水するので制帽は脱いでいる。

窮屈(きゅうくつ)な船内から解放されて気が楽になったのか、

マハラは背伸びをすると体をもとの大きさに戻した。夏の青空に向かって突き上げられた手はビンを持っている。

マハラはいそいそと湖に降りていった。口にナイフをくわえているせいか、無駄口は叩かなかった。

ルビーローズはティアドロップ・マシンガンを肩に担いだ。マハラが潜るのを見届けてから、周囲に視線を投げた。水上を見張り、水中に目を凝らし、空を見た。

すぐに異変に気づいた。水平線が黒ずんでいる。南の湖でなにかが群れているようだ。

初めは、また艦隊アリかと思った。遠くの黒ずみがモンスターなら、かなりの集団になる。思い当たるのは艦隊アリくらいだ。群れで水面にふたをして、水生昆虫を溺れさせるという狩りをしている。

艦隊アリならスピードはない。近くに来る前に、作業は終わるだろう。だが、水平線の黒ずみは見る見る大きくなった。高速で向かってきている。水上最速の脚を持っているとしか思えなかった。

ルビーローズは肩に担いでいたマシンガンを下ろし

た。
「作業中止！　すぐにマッハを上がらせて！」
命令は伝声管を通って操縦室に伝わる。紅月丸が浮上しても操縦室は水面下にあるから、チャパティにはなにも見えていない。事態を正確に把握させるため、ルビーローズは情報を追加した。
「湖面南方に敵影見ゆ！　アメンボの軍団と推測される！　その数、無数っ！」
無数の軍団と聞かされて、チャパティはあわてて窓を叩いた。腕で大きく×印（ばつじるし）を作って、マハラに急を告げた。
マハラはナイフで膜を切り裂いていた。
水圧を無力化する膜の特徴は、ある程度つかめている。ゆっくり力を加えても、丈夫で破れない。その代わり、膜がくっつくこともない。ハイドロハンマーの砲身で押しても破れなかったし、くっつかなかった。
魚雷や毒牙など、水以外の力を一気に加えると膜は裂ける。そして、切断面に触れると張り付いて剥がれなくなる。膜は砲身に癒着したが、表面ではなく断面でこびりついている。

もっとも、水中に出てきたドラギラにはくっつかなかったところを見ると、瞬間的に張り付くわけではないようだ。しばらく接すると、くっついてしまうのだろう。

マハラは膜の表面にナイフを当てて、さっくりと切り裂いた。窓を叩かれたのはそのときだった。

一瞬、手が止まった。

チャパティが腕を交差させている。緊急事態だと理解したことを伝えるために、マハラはうなずいた。そのうえで、作業を完遂(かんすい)しようとした。あとは切り取った膜をビンを詰めるだけだ。

しかし、ナイフはもう切れなかった。ほんの一瞬手を止めただけで、膜の断面が張り付いていた。

回収しようにも薄皮一枚残っている。完全に切断できていない。マハラは腕ずくで切り落とそうとした。ナイフを握った手に力を込めて伸ばした。けれども、膜もいっしょに伸びるだけだった。

しかたがないので砲身に足をかけ、力(ちから)いっぱい引っ張った。それでも膜は切れないし、ナイフも取れない。薄皮一枚がひどく丈夫だった。

チャパティがまた窓を叩いた。上を指さして、あがれと指示した。それから、紙を引き裂くそぶりを見せた。小さな動きだった。力を入れて大袈裟(おおげさ)に引っ張るのではなく、異なる方向に引いて裂くのだと、身振りで伝えた。

こくりとうなずいて、マハラは教わったとおりにしてみた。

持っていたビンを膝ではさんで内股(うちまた)になると、両手の指先で膜の表面をつまんだ。背中は丸くなっている。妙に女らしいしぐさだった。

断面に触れないように注意して、手を動かした。膜は簡単に裂けた。

マハラはチャパティに笑顔を向けた。

そのチャパティは伝声管と話をしていた。相手はもちろん、水上で見張りをしているルビーローズだ。

すると、水中に銃弾が撃ち込まれた。紅い薔薇の女が痺(しび)れを切らして、ティアドロップ・マシンガンを乱射し、マハラを脅(おど)してきたのだった。

チャパティが事情を知らせてきた。

指を一本立てた右手を上に向け、ちょんちょんとつ

つく動作をした。左手も指を一本立て、両手を顔の横でくるりと回して見せた。その手を頭の上に持ってきて、立てた指をピコピコと動かした。

上の、アカゲパキケが、怒っているです――と。

「！」

マハラの笑顔が凍りついた。

「鞘翅（さやばね）、開け！」

ルビーローズは伝声管に向かって怒鳴った。

サンプルを採取しようと欲をかいたマハラが上がってこないものだから、作戦を変更しなければならなくなった。

アメンボを回避するには、潜水すればそれでよかった。多少タイミングがずれて、たかられたとしても、沈む潜水艇を引き上げるほどの力はアメンボにはない。潜って追ってくることもないから、楽勝だ。

しかし、ハッチを閉じないと潜水できない。見切り発車で潜ろうとすれば、マハラを置き去りにしかねない。

おそらく、ハッチを閉める前に対敵（たいてき）するだろうと、ルビーローズは読んだ。ティアドロップ・マシンガン

では頼りにならないし、腹をくくってリヴリーの技で応戦するにしても、敵の数は多すぎる。
そこで潜水をあきらめ、翼走(よくそう)を選択した。走れば、走った分だけ時間を稼げる。
スクリューは使えなかった。水中で作業するマハラを巻き込む恐れがある。鞘翅を広げ、プロペラを回して走るしかなかった。
ルビーローズは縦穴通路のロッカーに機関銃を戻し、代わりに救命浮き輪を取り出した。四つ折りにして収納する簡易式の浮き輪を広げ、通路のはしごにフックを引っかけた。
浮き輪があれば、マハラが間に合わなくても助けられる。
黒いテントウムシが羽を広げた。
「プロペラ始動！」
羽の赤い丸が動いた。
シュラウド・リングがうつむいていた顔を起こした。リングの半分は羽の上、残り半分は羽の下にある。プロペラを保護していたシャッターが開いて、リングの中で三枚羽根のプロペラが回り始めた。

「後羽展開！」
伸ばされた水中翼が水の中に沈んでゆく。
プロペラの回転速度が上がった。空気を切り裂く音が大きくなった。
紅月丸は動き出した。
「ぶっは！」
ようやくマハラが浮上してきた。
さっさと上がればいいのに、サンプルを採取したビンを持ち上げて、誇らしげに見せた。
「早く上がりなさい！　バカねっ」
ルビーローズは浮き輪を投げたついでに雷も落とした。
「マッハが浮上しましたわ！　ハイドロハンマーを戻して！」
操縦室に指示を送りながら、ルビーローズは迫ってくるアメンボ軍団との距離を目で測った。
敵はすぐそこまで来ている。間に合うかどうかは微妙な距離だった。
「うお！　やべっ！」
マハラは船体によじのぼることができなかった。

船体には、はしご代わりの小さな出っ張りしかない。指を引っかけても、紅月丸が動いているから水が引き離しにかかる。怪力の大男も浮き輪につかまるのが精一杯だった。

流されたマハラは鞘翅の下に入った。頭上ではプロペラが高速回転している。シュラウド・リングがあるから、いきなりプロペラで切り裂かれる恐れはないのだが、音は激しい。マハラは首をすくめた。

「小さくおなり！」

ルビーローズは浮き輪のロープをたぐりよせた。女の細腕で巨漢のマハラを引っ張り上げるのは無理がある。

マハラはおとなしく、呪文で体を小さくした。ビンを落とさず、浮き輪につかまっていられる程度で、可能な限り小さくなった。

紅月丸はもう、水上を本格的に走り出している。浮き輪は水面を引きずられている。マハラが手を放せば、それでおしまい。湖面を漂(ただよ)い、アメンボ軍団にたかられ、一巻の終わりとなる。水面を引きずられて、まるでバナナボートのような状態でも、水遊びを楽しむ

余裕はなかった。
ルビーローズは浮き輪を引っ張り上げた。
ちっこいシマオーガが釣れた。叱られないように、愛想笑いでごまかしている。
墨を塗りたくって、記念に魚拓(ぎょたく)でも取りたいところだが、そうもいかなかった。
軍団の先頭を駆けてきたアメンボが襲いかかってきた。
ルビーローズはその場に倒れ込んだ。
ハッチのある縦穴通路の内側には、防護ネットのような足場がある。下まで転落することはない。倒れたら、そこは縦穴の中。上からしか攻撃されないので少しは安全だ。
倒れるルビーローズの頭をアメンボの槍(やり)がかすめた。
アメンボに顎(あご)はない。口吻(こうふん)を突き刺して、獲物の体液を吸う。
敵の攻撃をかわすと、ハッチは灰色の壁でふさがれた。雨水が染み込んで、汚らしいシミのできた壁だった。
アメンボの胸だとすぐにわかった。半潜水艇で湖岸

探査をしたときに、一味はアメンボにたかられている。下からアメンボを見上げる光景には慣れていた。
ルビーローズはスリングを念じた。つぶてをたったの一発、真上の敵に打ち込んだ。
ちびっ子マハラはロッカーの中にせっせと浮き輪を押し込んでいる。せまい通路の中では、浮き輪はかなりかさばる。
「マッハ！」
「おおうっ」
ちっこいくせに、返事だけは勇ましい。
「ジェットパックを使いますわ！　先に下りて用意なさい！」
「合点承知でえ！」
足場のフレームをひとつ起こすと、ちびっ子はするりと隙間を通り抜けた。大事そうにビンを持ったまま、器用にすべり降りていった。
ルビーローズはまたスリングを念じた。今度も最小の攻撃にとどめた。ハッチをふさいだアメンボを撃退するつもりはなかった。目の前にいるのは一匹でも、敵は無数の軍団だ。退(しりぞ)けたところで別のが現れるだ

け。真上にアメンボがいるのなら、そのままそこに釘付けにしたほうが、ちょうどいい遮蔽物(しゃへいぶつ)となる。

マハラがはしごから離れた。

ルビーローズは足場のフレームをはねあげた。はしごの裏に手を回してレバーをつかむとぶら下がった。油圧シリンダーが作動し、スライドして下りていたハッチが引き上げられた。

ハッチが閉まると、ハンドルに組み込まれていた小型の静電モーターが動き出した。ハンドルを回し、三本のジョイントアームを伸ばし、船体に爪を立ててロックした。

ハッチは全自動で完全に閉鎖された。ルビーローズはハッチの閉鎖を見届けてから、制御室に降り立った。

「紅月丸、翼走したです!」

チャパティが大声で知らせてきた。

潜水艇は水中翼船になった。水の上を飛ぶように駆ける高速艇に生まれ変わった。しかし、水上最速のモンスターはもっと速い。きのうは重機関銃で弾幕(だんまく)を張ったのに、わずか三匹のアメンボに追い詰められた。今日は三匹どころではないのだから、状況は絶望的だ。

しかも、いまさら潜水という選択肢はなかった。
きのうはゲンゴロウがいたから潜水できなかった。今日はいないのだから、ハッチさえ閉めればいつでも潜水して逃げることができた。ところがマハラの戻りが遅れて、水上を走る羽目になった。
一旦、水上を走り出したからには、そのまま逃げるしかなかった。潜水するのなら、追っ手を振り切ってからだ。なにしろ、敵の数が多すぎる。宙に浮かんだ船体の下に、もしもアメンボが体を入れてきたら、紅月丸はモンスターに担がれた状態になる。そうなれば、沈むに沈めず、走るに走れず、脱出不能の状態に陥(おちい)ってしまう。
アメンボが一匹や二匹なら、かまわず潜ってしまえばいい。紅月丸は鋼鉄のモンスターだ。重さでは分(ぶ)がある。だが、十匹、百匹、いや千匹ともなれば、立場は逆転する。アメンボの軽さのほうが勝る。
だからここは、走って逃げるしかなかった。速さではかなわない相手を大軍で敵に回して、ひたすら逃げるしかなかった。
チャパティは操縦桿を倒した。南の湖に背を向けた。

船体が傾いて、ルビーローズはバランスを崩(くず)した。はしごを握って体を支えた。
「チャッパ！　ジェットパックを使いますわよ！」
後ろから操縦席に声をかけた。
「合点承知です！」
話は聞こえていたようで、チャパティはマハラの返事をまねた。
ルビーローズは砲塔格納庫を回り込み、テントウムシの腹部へと移動した。
中央を通路が貫いている。行き止まりには水密ゲートがあって、その前を後部銃座がふさいでいる。床は金属製のグレーチングだった。格子(こうし)状の隙間にUボルトを差して留めてある。壁はエキスパンドメタルだった。金網のような金属板だ。
穴あきの壁をスライドさせて、マハラが作業をしていた。手にはウォーターポンププライヤーを握っている。どうやら力のいる仕事のようで、もうちびっ子ではなかった。
「急いで！」
ルビーローズは声をかけながら、マハラの横を駆け

抜けた。まっすぐ後部銃座に行って、重機関銃の準備を始めた。

マハラは返事も忘れて、ハイドロ・コンプレッサーの配管を付け替えていた。ハイドロハンマーのシステムからコンプレッサーを外し、ジェットパックに置き換える作業だった。

コンプレッサーがなくなると、ハンマー・アクセルは使えなくなる。それでもかまわなかった。なぜなら、ジェットパックはハンマー・アクセルを改良したものだからだ。

ジェットパックの正体はウォータージェット推進器だった。吸い込んだ水をインペラで増速して水中大砲から噴射すれば、ハンマー・アクセルは常時使えるようになる。

実地試験はブンカーの地下プールで終了していた。期待どおりの成果を収めた上で、取り外した。

うまく機能したものを外してしまったのは、ジェットパックがあくまでもプロトタイプだったからだ。ハンマー・アクセルを常時使えても、水中大砲としてのハイドロハンマーを使えないのでは意味がない。簡単

に機能を切り替えられるよう、もうひと工夫する必要があった。

それに、ウォータージェット推進器を搭載するのなら、いっそのことポッド推進器と置き換えてはどうかという話にもなってくる。水の噴射で推力（すいりょく）を得られるのなら、スクリューはいらない。

だが、そうなると紅月丸を大々的に改造しなければならない。さて、どうしたものかと思案するうちに、夏祭りはやってきた。

ひとまず問題を棚上げにして、ルビーローズ一味は湖底探査作戦に乗り出した。そうしたら、たった三匹のアメンボに追い詰められた。そこで、ブンカー帰投後の改修で急遽（きゅうきょ）、プロトタイプのジェットパックを再搭載したのだった。

配管の付け替え作業が終わると、マハラは次の行動に移った。

取水しなければウォータージェット推進器は使えない。紅月丸の水中翼に取水口があるといっても、それは重機関銃に銃弾を補給するためのもの。流量が小さすぎて話にならない。

後部銃座での準備を終えたルビーローズが、手伝うために走り寄ってきた。

マハラは、二本のポールと水平安定板をルビーローズに渡した。それから、太くて重い金属製のホースをドラムから引っ張り出した。引っ張り出して輪を作っては、自分の肩にかけた。取水用のメタルホースは径が太いから、それを収納するホースドラムも大きい。とても持ち運べるような代物ではなかった。

メタルホースを担げるだけ担いだマハラは、残りを通路まで引き出して、船尾に向かった。ホースを引きずりながら歩くと、金属製の床と金属製のホースがこすれあって、冷たい音を立てた。

通路をふさぐ後部銃座を窮屈（きゅうくつ）そうにすり抜けて、マハラは水密ゲートの前に立った。

二本のポールを床のグレーチングに差して、ルビーローズが待っていた。ちょうど通路の真ん中だ。格子状で隙間だらけのグレーチングには、実地試験のときにポールの受け口を作ってある。

立てたポールの間にマハラがメタルホースを通した。上からホースが抜けないように、ルビーローズがワ

イヤーを渡した。
　二本のポールはロープ止め金具だった。頭に輪っかのあるヒートン型だ。運動会などでよく目にする。コースと観客席の仕切りとしてポールを立てて、輪っかにロープを通していたりする。
　これでホースの可動範囲はせばまった。固定されたといってもいい。なにもないと、通路の幅をいっぱいに使ってホースは動き回ることになる。それでは船の安定に支障が出る。ホースが激しく動けば、足を払われたり、はさまれたりして、怪我もする。手間を惜しむわけにはいかなかった。
　マハラは肩に担いでいたホースの輪を、通路の隅に無造作に投げ出した。そしてホースの先端を拾い上げると、ルビーローズから水平安定板を受け取った。
　手ぶらになったルビーローズは後部銃座に手をかけた。
　マハラは水平安定板にホースを差し込んでロックした。取水用のホースが水面を転がったのでは、空気ばかり吸い込んで役に立たない。しっかり水没させる必要がある。水没させても浮き上がったのではやはり役

に立たない。水中で安定させたい。そのための水平安定板だった。
V字の短い翼を持った物体を両手でつかむと、マハラは通路の壁にへばりついた。あとは水密ゲートを開けて、湖に投げ込むだけ。
「後部銃座！　出ますわよ！」
ルビーローズが叫んだ。
シフトレバーを引いた。
水密ゲートが開いた。
目の前には、黒い壁があった。
壁はアメンボでできていた。個体を識別することさえ不可能なほど、びっしりと群れている。しかも、すでに紅月丸に取り付いていた。入り口が開いたのをいいことに、大きいが細い頭を船内に突っ込んできた。
後部銃座は、そんなモンスターに向かって押し出された。
「ローズ・ストーム！」
ルビーローズは専用攻撃技の薔薇の竜巻を見舞った。
横倒しになった竜巻が吹き荒れた。
薔薇の竜巻は大技だが、一撃でモンスターにフルダ

メージを与えるほどではなかった。もちろん、ただの竜巻でもなかった。見た目は横倒しになって突き進むストームだが、実はとんでもない作りになっていた。

逆回転二重竜巻構造だ。

竜巻の中に、逆方向に回転するもうひとつの竜巻が隠れている。外側の竜巻は中に向かって風を吹くが、内側の竜巻は外に向かって風を吹く。これに呑まれると、ふたつの竜巻にはさまれて激しく錐揉(きりも)みさせられる。

しかも、風の棘(とげ)まで潜んでいる。

ふたつの竜巻が逆向きに回転しているから、気流の乱れは尋常(じんじょう)ではない。小さな竜巻が次々と発生しては、大きな竜巻の間で錐揉(きりも)みする獲物に襲いかかるのだ。

ルビーローズの竜巻には棘(とげ)がある。

だから、技の名前は薔薇の竜巻という。

進路上にいるすべてのアメンボを呑み込んで、薔薇の竜巻は遙か彼方に飛び去っていった。

黒い壁が削(けず)り取られて、青い道が拓(ひら)けた。

「マッハ！」

「おっしゃあ！」
マハラは水平安定板を湖面に突き刺すようにして、投げ込んだ。
安定板は水中に没した。V字の短い翼で水の抵抗を受け止め、走り去る紅月丸からホースを引っ張り出した。
通路の隅でとぐろを巻いているメタルホースが、グレーチングの上をすべって船外に出て行く。勢いがあるから、金属のこすれあう音がけたたましい。
マハラはダッシュで駆け戻った。ジェットパックのスイッチはマハラが入れなければならない。操縦室からは一切操作できない。
通路は走りやすかった。後部銃座は外に押し出されて、もう通路をふさいではいない。
戻る途中で騒音がやんだ。通路に転がるホースがぴんと張った。同時にかすかな衝撃を感じた。
メタルホースが全部引き出されて、紅月丸が水平安定板を引っ張り始めた衝撃だった。
チャパティは操縦席でおとなしく待っていた。
操縦は大役だから、気が抜けない。湖面を漂う流木

一本で、水中翼は破損する。そのまま高速で着水すると、船底のスクリューがひしゃげて使い物にならなくなる。最悪の場合、ポッド推進器が湖面に引っかかり、紅月丸が派手に前転することだってありうる。

仲間たちを信じて、操縦に専念するだけだった。その仲間たちも、チャパティの腕を信じて自分たちの仕事に専念している。

ルビーローズが後部銃座で出たのは伝声管から聞こえてきた。外には無数のアメンボ軍団がいるとわかっていて、平然と出たのだから、さすがは紅い薔薇の女だった。

出ると同時に、ローズ・ストームを唱えたのも聞こえた。後ろの戦況が目に見えるようだった。操縦席の窓の外には、紅月丸と並走（へいそう）しているアメンボが何匹もいる。前に出て進路を妨害するつもりなのか、スピード勝負を仕掛けている。後ろにはもっとたくさんのアメンボがいることだろう。

マハラが水平安定板を放り込んだときの雄叫びも聞こえた。そのあとすぐに、操縦桿を握る手が衝撃を感じ取った。紅月丸が安定板を引っ張り始めた衝撃だ。

チャパティは出番に備えた。
水中大砲の筒先を後方斜め下に向け、いつでもハンマー・アクセルを使える状態にした。
「ぶっ飛ばせーっ！」
伝声管の向こうでマハラが叫んだ。
「はいです！」
出番がやってきた。ここから先はチャパティの見せ場だ。
ジェットパックを実戦で試すのはこれが初めて。意気込んだハナマキの、鼻の穴が広がった。
ハイドロハンマーのトリガーグリップを寝かせたまま、チャパティは引き金をしぼった。この状態がハンマー・アクセルの発射モードだ。ただし、今回は引き金を戻せない。一発撃って終わりではないからだ。ハンマー・アクセルは噴射しっぱなしになる。当然、引き金もしぼりっぱなしになるわけで、手は放せない。操縦桿は片手で握ることになる。
ジェットパックは正式採用されたわけではないのだから、操作に難があるのはしかたのないことだった。
引き金をしぼっても、すぐには加速しなかった。

ジェットパックにはタイムラグがある。長いホースで取水し、吸い込んだ水をインペラで増速して、水中大砲に送り込む。

初めのうちは、砲口からちょろちょろと水が出る。まるで小便でも漏らしているかのようで、体裁が悪い。しかし、小便が終わったころに、大砲は威力を発揮する。

ハイドロハンマーが水のビームを発射した。

紅月丸は爆発的に加速し、一瞬、離水した。

水上最速のモンスター軍団が引き離された。それでも、スピードで負けたのでは沽券に関わると思ったのか、スパートをかけてきた。アメンボの軍団はふるいにかけられて、俊足を誇る精鋭のみが追いすがってきた。

一度は引き離されたにもかかわらず、逆に距離を詰めてきたのだから、敵ながら天晴れな奮闘ぶりだった。

爆発的に加速して一瞬離水した紅月丸が、また跳ねた。今度は先ほどよりも長く滞空して、着水した。

ポーポイジングと呼ばれる現象だった。

水切りという遊びがある。平らな石を水面に向かっ

て水平に投げると、石は水の上を飛び跳ねる。
それと同じように、紅月丸も湖面を飛び跳ねていた。ただし、ひとつだけ違いがあった。石には推力がないから、跳ねるごとに飛ぶ距離は短くなってゆく。紅月丸には、鞘翅のプロペラ推進とジェットパックのウォータージェット推進があるから、跳ねるたびに飛ぶ距離は伸びていった。
そして。
「行くですーっ！」
チャパティが大声を張り上げた。珍しく目をぱっちりと開けて集中している。
右手でハイドロハンマーのトリガーグリップを握り、長い鼻を操縦桿に添えたチャパティは、左手でコレクティブクラッチレバーを引き起こすと、レバーの先端にある真っ赤なスイッチを押し込んだ。
ハイパーテンション・チャージャーが稼動(かどう)した。
クラッチがつながって、鞘翅のプロペラ軸に取り付けられていたプーリーが回転を始めた。プーリーは円盤だ。外周には黒いベルトを噛ませてある。
そのベルトがうなりを上げて回り出した。ベルトは

シュラウド・リングに延びていた。リングの下側にマイクロ荷霊発電機が取り付けてある。

ハイパーテンション・チャージャーは水の過給機だった。回転するプロペラ軸の機械エネルギーを、プーリー経由でベルトが拾い上げて、マイクロ荷霊発電機に伝達する。動力を得た荷霊発電機は、霊子を帯びた特殊な電気を発生させ、ハイパーテンション・チャージャーに伝送する。荷霊電気で動くハイパーテンション・チャージャーは、ジェットパックが吸い込んだ水を霊子レベルで圧縮し、ウォータージェット推進器に強制的に送り込む。

圧縮された水がさらにインペラで増速され、船底の大砲から噴き出した。

大きく湖面を跳ねた黒いテントウムシは、空中で後羽を真横に伸ばした。水中翼は水平翼となった。

羽を広げたテントウムシはほんの少し下降したあと、超低空で安定した。もう着水はしなかった。

水上を駆ける潜水艇〈紅月丸〉は、ついに空を飛んだのだった。

3

紙飛行機を飛ばすと、地面の近くで急に安定することがある。

出来の悪い紙飛行機なら真っ逆さまに墜落するが、上手に作ったものは空中をすべり降りてゆく。そして地面に落ちる寸前にぴたりと降下が止まり、そのまましばらく飛び続ける。まるで、見えない氷の上をすべっていくかのように。

この現象を地面効果と呼ぶ。水上で起きる場合は水面効果と呼んだり、あるいはまとめて表面効果と呼んだりもする。

地面の近くでは揚力（ようりょく）や空気抵抗が増減するため、不思議な効果が生まれるのだが、紅月丸はそれを利用して空を飛んだ。

もちろん、取水用のメタルホースは水中に延びている。完全に離水したわけではない。

ジェットパックの推進力にハイパーテンション・チャージャーが力を添えて、初めて飛行できるのだから、

大空高く舞い上がるのは無理だった。仮にホースを長くしたところで、やはり高くは飛べない。あくまでも水面効果を利用して飛んでいるからだ。

そのため、見た目は水中翼船とたいして変わらなかった。

水中翼船は水上を飛ぶように走るが、水面効果翼船は水上を走るように飛ぶ、といったところか。

それでも、走るのと飛ぶのとでは決定的な違いがあった。

水上最速のモンスターは紅月丸に追いつけなくなった。ジェットパックが稼動(かどう)した段階で俊足の精鋭以外はふるい落とされたのだが、その精鋭の脚をもってしても、空を飛ぶ相手は追い切れないようだ。

アメンボはゆっくりと後退し始めた。

ルビーローズは竜巻防壁を解除した。

後部銃座で外に出たルビーローズは、すでに紅月丸に取り付いていたアメンボ軍団に囲まれて、防御的な攻撃技で身を守った。竜巻防壁なら、襲いかかってくるモンスターだけを弾き飛ばすことができる。薔薇の竜巻のようにごっそりと始末できなくても、霊力の消

耗は抑えられる。なにも無数の軍団を討ち滅ぼす必要はないのだから、防御に徹するだけでよかった。

その防御を解いて、ルビーローズは重機関銃をお見舞いした。

水滴の銃弾で叩かれたアメンボは、水面をぶざまに転がった。遠くで立ち上がって追撃を再開しても、もう距離が縮まることはなかった。

ルビーローズは手近な敵をすべて撃ち払った。あとは、死角に入り込んだアメンボを片付けるだけ。

両舷（りょうげん）を並走するアメンボは、後部銃座からは狙えない。アメンボが下がってくるのを待つ手もあるが、ハッチから銃撃したほうが手っ取り早い。

「マッハ！　代わってくださる？」

マハラの状況を問い合わせた。

手が放せないようなら、アメンボが下がるのを待てばいい。交代はせずに、マハラがハッチに行ってもいい。いずれにせよ、後部銃座には誰かがいなければならない。ジェットパックを使用している以上、水密ゲートは開きっぱなしなのだから、守備要員が必要だ。

「おう！　いま行くぜ！　マッハガンは俺様の担当だ

からな！」
伝声管から威勢のいい返事があった。
暇を持て余した男が出番に飢えているようだ。
ジェットパックのスイッチを入れたあと、マハラはすることがなかった。急遽（きゅうきょ）取り付けた装置が誤作動しないか、ただ見守るのが役目だった。操縦するでもなく、戦うでもなく、本当にただ見ているだけ。
重機関銃で敵の追撃を阻止するという、ようやく回ってきた男らしい役目に、マハラは喜んでいた。
ルビーローズは急いで後部銃座を格納した。床に飛び降りるとダッシュした。反対側から陽気な男が駆けてくる。
手を上げて、ルビーローズはマハラとハイタッチを交わした。
「おっしゃあ！」
なにも知らない無邪気な男の士気が盛り上がった。
後部銃座に飛び乗ると、マハラは大急ぎでハーネスをつけ、男の仕事場へと身を乗り出した。
「うはははぁーっ！」
だが、しかし。

重機関銃を構えて外に出てみると、射程内の敵はルビーローズによって一掃(いっそう)されたあとだった。
マハラの仕事は、遠くを走って追ってくる敵を見守ることだけ。
マハラの仕事は、走っても追いつけない敵を見ていることだけ。
ここでもやっぱり。仕事は見張り役なのだった。
「なんもいねえーっ！」
通路の奥から聞こえてきた悲痛な叫びに、ルビーローズの笑みがこぼれた。
「姐さん！　ちょっとです！」
はしごに手をかけたルビーローズを、チャパティが呼び止めた。
「横のアメンボなら、いまから排除しますわよ？」
返事をしながら、ルビーローズは操縦室まで小走りした。チャパティが呼び止めるからには、それなりの理由がある。
「あれです」
チャパティは右前方を指さした。
「……またアメンボ？」

ルビーローズは自分の座席につかまりながら、窓の外に目をやった。ついでに右、左と首を振って、見える範囲でまわりを確認した。併走しているアメンボは、軽く十匹はいそうだ。空を飛ぶ紅月丸にいまだに追いすがっているのだから、おそらく最精鋭だろう。

「ちがうと思うです。あれはたぶん、艦隊アリです」

右前方の湖面に黒い絨毯（じゅうたん）が浮いていた。今度はアメンボの群れではなく、いかだを組んで湖を渡るアリの群れだった。

「来るときに出くわした艦隊が、巣に帰投中かもです。おいらたちも帰投を急ぐです。空を飛んでいるので、バッテリーの減りが早くなったです。いまちょうど、ＰＳＲ（ピーエスアール）です」

ＰＳＲはポイント・オブ・セーフ・リターンの略語だ。安全に引き返せる地点を指す。つまり、これより先に進むともう戻れないわけで、燃料が半分になったことを意味する。

ルビーローズはバッテリーの残量計に視線を落とした。

メーターの針は中央を指している。扇形のアナログ

メーターには九つの目盛りがあって、左は赤く、中央は白く、右は緑に色分けされている。残りは、赤が三個と白が一個半だ。

紅月丸はすでに引き返しているのだから、その意味では、バッテリーは充分に残っていることになる。ただし、行きと帰りでは足がちがう。行きは、浮力の助けを借りて水中を進んだ。帰りは、重力に逆らって空を飛んでいる。電力の消費量は桁違(けたちが)いだった。

「バッテリーは追加したでしょう？」

「したです。二割増しになったです。でも、もう半分使ったです。なので、早く潜水したほうがいいです」

「アメンボを振り切ってからでないと、潜水する前に無数の軍団に追いつかれてしまいますわ。一か八かで潜っても、だいじょうぶだとは思うけれど……」

「俺様に名案があるぜえ」

伝声管の向こうからマハラが割り込んできた。

「どうするです？」

「艦隊アリがいるんだろ？　だったら、奴らの真上を飛びゃあいいじゃねえか。そうすりゃ、アメンボは艦隊アリが邪魔になって追ってこれねえ。迂回(うかい)するしか

手がねえぜ。俺様たちは艦隊アリを飛び越えてから着水して、潜っちまえばいいのよ。どうでえ、名案だろ？」
「でも、それだと取水用ホースがアリに吸い付くです」
「……」
伝声管が沈黙した。
「ウォータージェット推進が止まって、おいらたちはアリの艦隊に着艦することになるです。そのまま運ばれて、アリの巣に帰投するです」
「……そして、俺様たちはアリの国の王様になるです」
名案が廃案になったので、マハラはふざけてごまかした。
「めでたしめでたし、です」
「めでたくねえっつーの！」
逆切れした。
「……」
ルビーローズはなにも言わなかった。視線もよそを向いている。

しかし、チャパティは別のことに注意を奪われた。
「あ！」
右前方の湖面を漂(ただよ)っていた黒い絨毯が消えた。
いかだをバラして、艦隊アリが一斉に潜水したのだった。
「艦隊アリが潜ったです。水中になにかいるです。……姐さん？」
チャパティはようやく気づいた。ルビーローズが会話に参加していない。
「……王者が……飛んでいますわ……」
つぶやいたルビーローズの視線は、青い空に向けられていた。
上空に機影があった。
戦略爆撃機が飛んでいた。
高い空を一直線に進んでいる。蝶のようにふらふらしない。何者も恐れずに、堂々と、ただまっすぐに飛行している。
飛ぶ姿に、王者の風格があった。
「あの飛び方は……」
チャパティは言葉を濁(にご)した。

最後まで言わなくても、ルビーローズにはわかっている。
「だいじょうぶですわ、きっと。水面のこんな小競り合いに、興味を示すはずがありませんもの」
小競り合いではなかった。
追うアメンボは無数の軍団だ。逃げるテントウムシは異常に高速。上空からは、艦隊アリまで出撃していると見えたことだろう。
世紀の大水戦である。
しかも、高度がちがうだけで空の王者は真正面からやってくる。進路上で繰り広げられる眼下の戦いが、目を引かないわけはなかった。
案の定、戦略爆撃機が急降下した。急降下爆撃機だ。いや、空の王者は舞い降りて参戦してくるにちがいないのだから、こうなるともう戦闘機だ。
「マッハ……」
ルビーローズは伝声管に呼びかけた。
「おう、なんでえ？　姐御？」
「覚悟しなさい」
「ああん？」

「正面に、上空より急降下してくる機影あり」
「マジかよ、おい！」
「敵機は……オニヤンマと推測される！」
「げえ……」
紅月丸は水面効果翼船として、超低空を飛行している。飛んでいるといっても、しょせんは船だ。空の王者オニヤンマと空中戦をしたのでは、敗北は必至。
「さっさと潜っちまえ！」
「あわてなくてもだいじょうぶです」
チャパティの声は落ち着いていた。
「紅月丸は鋼鉄のモンスターです。オニヤンマも、甲虫と正面衝突したら無事ではすまないことくらい、わかっているです」
「じゃあ、どうするんでえ？」
「戦闘が始まると決まったわけではないです。オニヤンマは縄張りを哨戒飛行しているだけかもしれないです。なので、一旦やりすごしてから、隙を見て潜るです。潜水すれば、おいらたちの勝ちです。オニヤンマもアメンボも、へっちゃらです」
「だな」

話をしている間にも、距離は縮まってゆく。互いに相手に向かって飛んでいるのだから、急接近する。
「変ね……妙に恰幅(かっぷく)がよくなくって？」
「はいです。おデブさんです」
接近するオニヤンマは、トンボ特有のほっそりしたシルエットではなかった。太って見える。
「なにか捕まえているのかしら？」
「かもしれないです」
獲物を捕らえているのなら、シルエットが細くなくてもうなずける。また、急降下した理由の説明にもなる。餌を見つけて襲いかかったのだろう。
しかし、事実はルビーローズやチャパティの想像を超えていた。
アメンボがいなくなった。紅月丸と併走していた最精鋭の十匹ほどが、操縦室の窓の外から姿を消した。
「おいおいっ」
伝声管の向こうでマハラがあわてている。
「アメンボの野郎どもが逃げていきやがったぜ！」
「……」
「……」

ルビーローズとチャパティは顔を見合わせた。
モンスターはモンスターを襲わない。それはつまり、モンスターはモンスターを恐れないということだ。襲撃してこない相手を怖がる必要はない。なのに、水上最速のモンスターは、空中最速のモンスターを恐れて逃げていった。
「まさか……」
ルビーローズは唇を噛んだ。
水面効果翼船と戦闘機がニアミスをした。空中で正面からすれちがった。
超低空で飛ぶ紅月丸の頭上を、大きな目の怪物が飛び越えていった。
両脇にミサイルを抱えたオニヤンマだった。
「武装モンスターじゃねえかーっ！」
少し遅れて、マハラの絶叫が届いた。
「姐さん！　操縦を手伝ってくださいです！」
「そっ、そうね！」
ルビーローズは艇長席についた。
「こんなことなら、ペダル式にしとけばよかったです！」

チャパティは両手に鼻まで使って操縦している。両足は遊んでいる。ペダルでも操縦が可能なら、手を借りる必要はなかった。ルビーローズは迎撃要員に回せた。

「いまさら言っても始まらねえ！　ヤンマ・ファイターは俺様が撃ち落としてやらあっ！」

マハラはもう名前までつけていた。

「ハイドロハンマーをもらいますわ！」

ルビーローズは艇長席のトリガーグリップを握った。

「了解したです！」

チャパティは自由になった右手で操縦桿を握りしめた。手の代わりに使っていた長い鼻は、ひとまずお休みだ。

「いくら武装モンスターだからって、ミサイルなんて……」

「おいらたちだって、魚雷をぶら下げたテントウムシです」

「でも、どうやって発射するの？　あの脚でスイッチを押すの？」

「たぶん、脳波コントロールだと思うです」

「おしゃべりしてる暇なんざあ、ねえぜ！　野郎、宙返りしやがった！」
紅月丸の頭上を飛び越えていったオニヤンマは、垂直方向にターンした。急上昇して高度を稼ぎ、空中で逆さまになった。そのまま円を描いて降下してくれれば元に戻って脅威はないのだが、オニヤンマは円の頂点で回転運動をやめた。背面飛行の状態で、滑空しながら降りてきた。
つまり、仰向けで空を飛びながら、紅月丸を追ってきたのだった。
「しゃらくせえっ！」
マハラは重機関銃を連射した。
敵機は余裕 綽々 に背面飛行している。逆さまになってふざけている。隙ありと見てマハラは狙いを固定し、水滴をまとめて叩き込んだ。
水の弾丸は連なって飛んでいった。空中に一条の線が引かれた。
オニヤンマは羽を下げた。背面飛行だから、羽は上がった形になる。揚力が減って、体がすとんと落ちた。飛んできた水の線を楽々くぐり抜けた。

空中を一段落ちたところで羽を広げ、オニヤンマは滑空を再開した。狙われても背面飛行はやめない。意地が悪いのか、ひどく挑戦的なモンスターだった。

「けえっ」

マハラは狙い続けた。オニヤンマが高度を下げるなら、マハラは銃口を下げるまで。

狙われたオニヤンマが弧を描いた。羽の向きをわずかに変えただけで、羽ばたきもせずに左下に移動した。時計でいうと、十二時から九時へと曲線で動いた。体は横向きになり、左右の羽が天と地を指している。

そこにも弾が飛んでくると六時にすべり込み、三時まで移動した。そこから、元いた場所である十二時に戻るそぶりを見せた。

マハラはオニヤンマの逃げる先を狙い撃った。

だが、狙いは外れた。十二時に戻るそぶりはフェイントだった。オニヤンマは二時まで移動して、羽をたたんだ。九時から半周してきた遠心力を利用して、自分の体を放り上げた。

そして、羽を広げるとまた背面飛行を始めた。マハラが狙い撃った空間よりは右に位置するものの、高度

は同じ。明らかに、相手を弄(もてあそ)んで楽しんでいた。
「これならどうでえ！」
マハラは狙うのをやめた。
手を小刻みに動かして、弾を散らした。今度は弾幕を張った。
それでも、一発も当たらなかった。数え切れないほど大量に水の弾丸をばらまいても、頭の大部分が目になっているオニヤンマには数えられたらしい。水滴の一粒一粒を、物の見事によけて見せた。それも、背面飛行したままで。
銃撃は突然終わった。弾切れだった。
重機関銃の弾丸は水でできている。水鉄砲と同じ原理で、圧力をかけて撃ち出している。水上にいる限り、弾は無限に補給できる。そのために、水中翼には取水口を設けてある。
しかしいま、紅月丸は空を飛んでいた。水中翼は水平翼になっている。空中の翼から取水はできないし、臨時に搭載されたジェットパックから水を取る仕組みもない。
「ちっ！　もう、しめえかよっ！」

重機関銃を平手でぶって、マハラはハつ当たりした。
そんな相手を嘲笑(あざわら)うかのように、背面飛行のオニヤンマはゆっくりと紅月丸を追い越していった。
マハラは頭上の敵機をにらみつけた。
額の位置に電子パーツがあった。
脇に抱えたミサイルは弾頭がはっきりと見えた。あとは羽が邪魔をして、よく見えない。オニヤンマは逆さまになって飛んでいるから、ミサイルの下には羽がある。
胸にはベルトもあった。
トンボの胸部は横から見ると五角形をしている。背中はちょうど屋根のようで、真ん中が盛り上がっている。羽が生えているのは後ろ側の斜面で、前側の斜面は胸板のようになっている。中には筋肉が詰まっているのだが、その胸板にベルトは巻かれていた。
どうやら、ミサイルの発射台を胸にかぶせて、ベルトで締めて固定しているらしい。
悠々と追い越してゆく戦闘機を、マハラはだまって見送った。
「マッハ！　戦況は？」

ルビーローズは、沈黙した後部銃座に問い合わせた。
「すまねえ、姐御。一発も当たらずに弾切れでえ。野郎ならいま、俺様たちを追い越そうとしてらあ。逆さまでな」
伝声管から返事が届く。
「逆さま？　それより、技は使わなかったのね？」
「おうよ。野郎はこっちを見てるだけ。まだ戦いは始まっちゃいねえからな。……本気の戦いはな」
負けてねえぞと、マハラはくやしそうに念を押した。
「来ましたわ」
ルビーローズは顔を上げた。
「……逆さまって、このことね」
オニヤンマが紅月丸を追い越してゆく。テントウムシは弱虫だと見くびって、からかっているのか、天地を逆にして飛んでいる。
完全に追い抜くと、紅月丸のすぐ目の前で、オニヤンマはさらに挑発（ちょうはつ）してきた。体を軸にして横に回転した。くるりと回って天地を戻し、背面飛行をやめた。
姿勢を正したのだから、相手をバカにしたわけではないと思えるかもしれないが、それはちがう。オニヤ

ンマは、紅月丸をわざわざ自分の死角に入れたのだった。

顔の横に張り出したオニヤンマの大きな目は、頭の上まで続いている。背面飛行をしていれば、後方斜め下の紅月丸は目の届く位置にある。しかし背面飛行をやめると、自分の体が邪魔をして紅月丸は見えにくくなる。

つまり、オニヤンマは行動で語っているわけだ。どうせこいつはなにもできやしない、と。

ルビーローズもチャパティも、挑発には乗らなかった。むしろ、オニヤンマの行動に感謝した。おかげで脇に抱えたミサイルを観察できる。

ミサイルは左右に一本ずつ、あわせて二本あった。胸部側面に張り付くように装着されている。これなら羽ばたいても、あまり支障はない。そのまま発射すると大きな目のある頭部に接触するから、ミサイルは切り離して点火する仕組みのようだ。

ミサイルを装着するための胴巻きのようなものと、それを留めるベルトはあったが、スイッチらしきものは見当たらなかった。チャパティが言ったように、脳

波でコントロールするものと思われた。
「魚雷より小さいのね。中身はなにかしら？　やっぱりサンダー？」
「中身はわからないです。でも、小さいからってバカにはできないです」
ヤンマ・ファイターの飛行能力に影響しないよう設計されたのか、ミサイルは紅月丸の魚雷よりも小さくて細かった。
ただし、威力も小さいとは限らない。呪文科学局が遅延発動型サンダーを開発したとの情報を、紅（くれない）機関がつかんでいる。チャパティは遅延発動型バーストしか開発できなかったが、呪文開発の専門家集団ならチャパティひとりの成果を当然上回るはず。魚雷より小型でも、ミサイルのほうが威力は上にちがいなかった。
オニヤンマが羽ばたいた。
挑発しても乗ってこない弱虫をからかうのに飽きたのか、速度をあげて上昇していった。
「このまま行ってほしいです」
「そうね」
「姐さん。ヤンマ・ファイターがスピードを上げたの

で、おいらたちは落とすです。どのみち、空中戦で勝ち目はないです。それに着水すれば、星彩洞に逃げ込む手も使えるようになるです」
「あら？　あそこはあそこで、危険だったじゃない」
「それはそうです……」
「まあ、いいわ。バッテリーを節約しないといけませんものね。ハンマー・アクセルは解除しましょう」
ルビーローズはハイドロハンマーのトリガーグリップから手を放した。
それを見て、チャパティはハイパーテンション・チャージャーのスイッチを切った。
「マッハはそのまま後方を監視して」
「おう。結局、あれだな。アメンボ追い払ってくれて、ご苦労さんってことだよな」
「ほんとうね」
ルビーローズは笑った。
話がうけたので気をよくしたのか、伝声管の向こうでマハラも豪快に笑った。
「お？　やい、お茶っ葉。おめえの言ってた艦隊アリが浮上してきたぜ。こいつら、実は潜って隠れてたん

じゃねえのか？」
　チャパティは首を伸ばして、窓の外を見た。右後方の湖面に、黒い絨毯が漂っている。潜水して姿を消した艦隊アリが、またいかだを組んでいる。
「マッハの言うとおりだと思うです。さっき潜ったのは、ヤンマ・ファイターから隠れたです」
「な？　脚の速いアメンボがすっ飛んで逃げていきやがったんだから、ありんこもさぞかし、あわてたろうぜ」
「おいらたちが浮上したときに、アメンボの大群に襲われた理由もわかったです。南の湖にドラギラが浮上したので、向こうにいたアメンボが全部、こっちに逃げてきたです」
「あのムカデ野郎のせいかよ。しかし、なんだな。モンスターはモンスターを襲わねえってのに、武装モンスターは別だって話はほんとだったんだな」
　水中島離脱後に話を聞かされて、留守番をしていたマハラも事情は承知している。
「着水するです」
　チャパティは操縦に専念した。

ジェットパックの推進力を失った紅月丸は、水面効果翼船から水中翼船に戻った。斜め下に伸ばされた水中翼が水を切って、黒いテントウムシが湖面を跳ねた。

その動きが、去ってゆくオニヤンマを刺激した。

意地の悪い者は、自分がそうであるように相手もまた意地が悪いと考える。オニヤンマは、自分が弱虫をからかったように、今度は弱虫が自分をからかってきたと判断したのかもしれない。怖い相手が去ってゆくので、安心した負け犬が遠吠えをしたのだと。

上昇するヤンマ・ファイターが機体を翻(ひるがえ)した。表と裏を入れ替えて、宙返りをした。さっきまで背中を見せて上昇していたのに、いまは背中を見せて降下している。

「ちっ」

ルビーローズが舌打ちした。

「まずいです、姐さん。急降下で高度は速度に置き換わるです。さっきと変わらないスピードでやってくるです」

紅月丸がまた湖面を跳ねた。ポーポイジングだ。

「今度はやる気でしょうね。二回目ですもの」

「このタイミングだと、潜水する前にミサイルを撃たれるです。どうするです？」
チャパティは真っ赤なボタンに指を置いていた。押し込めば、ハイパーテンション・チャージャーがうなり出す。
潜るか、走るか、それとも飛ぶか。答えはひとつ。
「もちろん！　飛びますわ！」
ルビーローズは引き金をしぼった。船底にぶら下げた大砲が水のビームを発射した。
潜水すれば安全だが、それは間に合わないとチャパティは言った。水面を走れば電力の消費は抑えられるものの、取水用のホースを引きずっているので本来のパフォーマンスは得られない。ならば、飛ぶしかない。たとえバッテリーが残り少なくとも。
「了解したです！」
チャパティは赤いボタンを押し込んだ。紅月丸は再び、空を飛ぶ船となった。
「左舷旋回！　百八十度！」
ルビーローズは左方向へのUターンを指示した。
右にターンすると艦隊アリがいる。その上を通過す

れば、艦隊アリが浮いていても潜っていても、取水用ホースはアリに吸い付くだろう。そうなれば、ジェットパックが使えなくなって、紅月丸は着水する。艦隊アリの真上に降りる羽目になる。
「後部銃座を敵機に向けよ！」
「うおっ？　てえことは、やっちまっていいんだな！　姐御！」
オニヤンマに後部銃座を向けても、もう重機関銃は使えない。撃とうにも弾切れだ。にもかかわらず、マハラをモンスターに向けるとなれば、攻撃手段は決まっている。
「バッテリーがレッドゾーンに入る前に、決着をつけますわ！」
「それじゃ盛り上がらねえって！　ズバッとかっこいいやつで！　いつもの調子で！」
緊急事態だというのに、伝声管の向こうでおねだりが始まった。
「いいから、やっちまいなっ！」
紅い薔薇の女が怒鳴りあげた。
「おっしゃあーっ！」

マハラは拳を握ると指を鳴らした。待ちに待った、男の仕事だ。
急降下したヤンマ・ファイターは、紅月丸よりも低く飛んで接近してくる。実は、トンボも経験的に不思議な効果を知っており、地面や水面の近くを飛ぶことで日常的に活用しているのだった。
そのトンボが水面効果を捨てた。羽ばたいて上昇すると、紅月丸と高度を合わせた。それから、また羽ばたいて上昇した。
脇に抱えたミサイルの片方が切り離された。六本ある脚は、飛行の妨げとならないように折りたたまれている。ミサイルを撃つのに、スイッチを押すような動作はなかった。やはり脳波コントロールだ。
切り離されたミサイルが点火した。ジェット噴射で紅月丸に挑(いど)んでくる。
マハラは不敵に笑いながら、胸の前で両腕をクロスさせた。×印を作って、勢いよく振り下ろした。
「マッハ・ハンマー!」
短い柄のハンマーが出現した。柄はただの飾りで意味などなかった。誰かが手に持つわけではないし、持

つには大きすぎる。
出現した巨大ハンマーはロケット噴射で飛んでいった。
マハラの専用攻撃技は「マッハ・ハンマー」といった。呪文もそのままマッハ・ハンマーだ。リヴリーたちが使うふつうのハンマーは上から相手をぶっ叩く技だが、マッハ・ハンマーはロケット噴射でぶっ飛んでゆく。
マハラは、敵ミサイルをロケット弾で迎え撃った。
迫(せま)るミサイル。迎(むか)えるロケット。ミサイルが細いのに対し、ハンマーのロケットはバカでかい。的を外すことなく、迎撃できるはずだった。
「なにぃーっ！」
だが、失敗した。
羽ばたいて加速したオニヤンマが降下し、ミサイルに追いついた。ジェット噴射で飛ぶミサイルを六本の脚で捕まえると、水面すれすれまで高度を下げて、マッハ・ハンマーをかいくぐった。
そして紅月丸と同じ高さにまで上昇すると、捕らえたミサイルをリリースした。もちろん、紅月丸に向け

て。
「かわせーっ！」
マハラが叫んだ。
「曲がれーっ！」
事情を説明する暇はなかった。ただ、単語だけを口にした。
口だけでなく、手も動かした。まっすぐ伸ばした右腕に左手を添えて、マハラはマシンガン・スリングを放った。
スリングの呪文は構造がシンプルで、改良しやすかった。おまけに霊力の消費も少ない。そのため、強化した専用攻撃技がいくつも開発された。
一番使われているのはショットガン・スリングだった。散弾投石だ。とりあえず敵に向けて放てば、狙わなくても散弾の一粒くらいは当たってくれる。その一粒でモンスターの動きは止まるから、とても重宝する。リヴリーアイランドを守る防衛隊では、標準装備として全員が会得しているほどだ。
ルビーローズはスリング強化技に、好んでトライデント・スリングを使った。大きめのつぶてを一度に三

発も撃ち込むのが性に合っているのだろう。しかも、たぐいまれな戦闘センスを発揮して、二丁拳銃のように両手で同時に操ってみせた。

派手好みのマハラは、速射が魅力のマシンガン・スリングがお気に入りだった。撃ち出されるつぶては小粒だが、呪文を一度念じるだけで霊力の続く限り弾が飛ぶ。連発の効かないマッハ・ハンマーを補完するのに最適だった。

マハラの叫び声に反応したチャパティが操縦桿を倒して、ミサイルはそれた。

マシンガン・スリングも命中した。つぶては小粒なので弾かれてしまったが、ミサイルの軌道を狂わせるくらいの効果はあった。

ヤンマ・ファイターは上昇に転じた。マハラが、ミサイル迎撃からオニヤンマ迎撃に切り替える寸前という絶妙のタイミングで離脱し、急上昇した。

天に向かって飛翔するオニヤンマを、マハラは下から銃火で追った。しかし、ヤンマ・ファイターは錐揉(きりも)みするように機体を回転させつつ、一ヶ所にとどまらない飛び方をして、マシンガン・スリングによる対空

砲火をすべてかわした。
「野郎、味なまねをしやがる……！」
マハラは太い声でうなった。
「マッハ！　どうなっているの！」
伝声管の向こうでルビーローズがやきもきしている。無理もない。敵機のミサイル攻撃は、あわや直撃というところだった。
「くやしいぜ、姐御。野郎には一発も当たりゃしねえ。ＬＩＰＳがありゃ百発百中なのによ」
リヴリーアイランドでモンスターを攻撃するのに、狙いをつける必要はない。攻撃呪文に相手の名前か種名をセットにすることで、必中する。
狙わなくても当たるのは、ＬＩＰＳがあるからだ。
リヴリーアイランド・ポジショニング・システムは、リヴリーたちがテレポートするための座標空間識別システムだが、機能はほかにもある。技を使うのに必要な霊力を供給してくれるし、技を使う相手まで特定してくれる。
パークに居座るモンスターであれば、無害なベビーグリフォンでさえ名前をつけて管理されている。居座

らなくても、リヴリーアイランドに侵入した時点で種名管理がなされる。
　だから、呪文を念じるだけで目をつぶっていても命中する。ＬＩＰＳが当ててくれるわけだが、管理区域外ではそうはいかない。しっかり自分で狙わないと当たらないし、狙ってもかわされてしまえばそれでおしまい。
　ロケット噴射で飛んでいくマッハ・ハンマーも、速射が魅力のマシンガン・スリングも、当たらなければ意味などなかった。大事な霊力を無駄に消耗したことになる。
「ミサイルはどうして落とせなかったの？」
「それなんだがな。あの野郎、発射したミサイルを脚でひっつかんで、俺様のマッハ・ハンマーをかいくぐりやがった」
「脚で？　つかんだの？」
「おうよ。でもな、次はやらせねえぜ。しっかり引きつけてから、ぶっ飛ばしてやらあ」
　オニヤンマは上空を背面飛行で後退してゆく。少しずつ、降下もしている。宙返りをして、もう一度、紅

月丸の後尾につこうとしている。
実は、追われることを想定して設計された紅月丸は、船尾の守りが堅い。後部銃座に重機関銃を据え付けているのを見てもわかるように、後ろから攻められるのは望むところだ。水中大砲でさえ、ふだんは後ろに向けて格納される。
オニヤンマにはそれがわからないようで、空中戦のセオリーどおり、後背(こうはい)から攻めてくる。それとも、空の王者の威信(いしん)にかけて、相手のストロングポイントを叩きつぶそうとの魂胆(こんたん)だろうか。
「降りてきたぜえ」
オニヤンマが宙返りを終えた。大きなループで、紅月丸のかなり後方につけた。低く飛んで水面効果を利用している。
ところが、そこから前には出てこなかった。ヤンマ・ファイターは追撃ではなく、追尾の態勢に入った。
「姐さん……」
チャパティは長い鼻でバッテリーの残量計を指した。
扇形のアナログメーターに警告灯が点いている。本当は白い表示板が、警告灯に染められてオレンジ色に

なっている。
「マッハ。バッテリーがレッドゾーンに入りましたわ」
ルビーローズは伝声管に呼びかけた。
「んなこと言われてもよ。野郎が近づいてこねえんじゃ、どうしようもねえぜ？」
「このままだと、おいらたち帰投できなくなるです」
「おいおい、バッテリー切れが狙いじゃねえだろうな？」
「それはないです。たぶん、湖岸（こがん）に追い込むのが狙いだと思うです」
「岸に追い込んでどうするよ？　陸に揚（あ）げちまおうってえのか？」
「湖岸に追い込まれたら、左右のどちらかに曲がるしかないです。片側を陸でふさがれて、動きが制限されるです。なので、そこを仕留めにくると思うです。ミサイルがあと一本になったので、慎重にやるつもりです。それと、おいらたちが水上でしか動けないことを見破ったです」
「けっ。トンボのくせに生意気な野郎でい。だったら、

逃げるのはやめだ。こっちから仕掛けようぜ。なあ、姐御？」
「そうね。打って出るしか、ありませんわね」
ルビーローズはチャパティを見た。
チャパティはだまってうなずいた。逃げ続けたところで、終わりはじきに訪れる。湖岸に追い込まれなくても、バッテリーがあがる。電池の切れた鋼鉄のモンスターは、もうモンスターではない。ただの鉄くずだ。
「で、どうやるよ？　打つ手はいくらでもあるけどよ、あの野郎はすばしっこくていけねえ」
後部銃座のマハラは、足を伸ばして爪先で爆雷をつついた。重機関銃の三脚には爆雷の投下装置がある。遅延発動型バーストの詰まった二個の樽が、出番を待っている。
「魚雷を使いますわ」
伝声管からあっさりと答えが返ってきた。
「その手があったか……って、おい！」
腕章に手を当てて、なにかを確かめていたマハラの動きが止まった。
「トンボに魚雷撃ってどうするんでえ！　野郎は空を

飛んでるんだぜ！」
「あら？　水圧で発射できる魚雷がまだ一本残っていますわよ？」
　増設した二基の魚雷ランチャーの片方は、発射管後部を閉鎖してある。デコイ・シロップ用の水圧ピストンを利用して魚雷を射出できるよう、メタルホースをつなげてある。二連装のうち一本は水中島潜入時に使用したが、離脱時に使ったのはもう片方のランチャーに積んだ魚雷なので、水圧射出式はまだ一本残っている。
「そういう問題じゃねえっての！　空中じゃ魚雷は走らねえんだっつーの！」
　マハラはひとりでむきになっている。
「どうかしてるぜ、姐御。……やい、お茶っ葉。だまってねえで、おめえもなんか言え」
「おいら、わかったです。水圧で魚雷を飛ばして、オニヤンマに拾わせる作戦です。きのう、ゲンゴロウにやったのとおんなじです。さっきオニヤンマは、ミサイルを脚で捕まえたそうなので、成功する確率は高いと思うです」

「さすがね、チャッパは」
ルビーローズはチャパティだけをほめた。
「とんでもないです。空中魚雷なんて思いつく、姐さんのほうがさすがです」
チャパティもちゃっかりとほめ返した。
操縦室のふたりは、なかよしこよしだ。
「げえ……」
後部銃座のマハラは蚊帳(かや)の外。
「エアリフト！」
「はいです！」
ルビーローズ一味は方針を変更した。
逃げながら迎撃するのではなく、待ち構えて襲撃するのだ。
鞘翅のシュラウド・リングが上を向いた。プロペラが、ヘリコプターのメインローターのように回転した。上向きの揚力を発生させて紅月丸を引っ張り上げるのだが、残念ながら、船体を宙に浮かせるほどの揚力は発生しなかった。なにより、バランスが悪い。
広げた鞘翅は前に迫り出している。中心よりも頭側にプロペラがあるわけで、そのままでは船体は尻下が

りとなり、後部銃座のマハラが水中に沈んでしまう。
しかし、いまの紅月丸にはジェットパックがあった。臨時に搭載されたウォータージェット推進器が力を貸してくれる。
シュラウド・リングが動くのと同時に、船底の大砲も動いた。
砲身が湖面に落ちた。船体を持ち上げながら前進するために、砲身は後方斜め下を向いていた。それが水中に沈められて、最大俯角(ふかく)となった。長い砲身が下を向き、紅月丸にブレーキがかかった。前進する力はなくなったが、代わりに上昇する力が生まれた。
前には進まなくなり、ブレーキもかかって、紅月丸は水面効果を失った。惰性(だせい)で前進しているのだから、水平翼が生み出す揚力は知れている。けれども、紅月丸は空中で持ちこたえた。
二枚のプロペラと、一本のハンマー・アクセルがあれば、重い船体も宙に浮く。
紅月丸はスピードを落としながらも、上昇を始めた。ホースを残して、見る見る水面から遠ざかってゆく。下に向けられたハイドロハンマーが、水のビームを湖

面に撃ち込んでいる。
不思議なもので、噴水が紅月丸を高く押し上げたように見えた。
空中浮揚した紅月丸の砲塔が回った。砲身は最大俯角だったが、真下よりもやや後ろ向きだった。砲塔が回転したことで、それがやや前向きに変わった。砲身の筒先から噴き出す水が、後方斜め上に力を向けた。紅月丸の重い後部が持ち上がった。傾いていた船尾が水平に戻った。
ハンマー・アクセルは逆噴射ともいえる状態になったから、船足はさらに落ちた。そして、ついには止まってしまい、後退を始めた。
宙に浮かんでも、ホバリングはできなかった。空中の一点に静止するのは至難の業だった。
垂直方向に安定させることはできた。仮に上昇し続けたとしても、取水用ホースの長さが限界高度となる。
安定しないのは水平方向だった。そもそも紅月丸は潜水艇だ。ヘリコプターとして運用することを想定した設計ではないため、空中浮揚時のバランスは考慮されていない。胸部にあるハイドロハンマーで船尾を持

ち上げるには、後方斜め上に向かう力が必要だった。つまり、水は前方斜め下に噴き出す。

宙に浮かぶ船は微速で後進し続ける運命にあった。プロペラの角度や出力を調整すれば、斜め方向の力を打ち消してホバリングは可能になるのかもしれない。だが、そんな機構は開発していない。ジェットパックは試験用のプロトタイプだ。あくまでも臨時に搭載している。

腕一本でホバリングに挑戦する余裕もない。空の王者にミサイルで狙われている。

いまはとにかく。宙に浮いてくれればそれでよかった。

紅月丸は敵機に向かって、ゆっくりと後退した。

「これで俺様が先頭よ」

腕組みをした能天気な男が、天下でも取ったかのようにふんぞり返った。

離れて追尾してきたヤンマ・ファイターとの距離はすっかり縮まった。

すぐにも勝負が始まる。

宙に浮かぶ潜水艇の空中魚雷が勝つのか。

それとも空の王者のミサイルが勝つのか。
「マッハ。あなたに全部、任せますわ」
ルビーローズはマハラに託(たく)した。操縦室からはなにも見えない。マハラだけが頼りだ。
「敵機を落とせたなら、それでよし。だめでも、オニヤンマが追い越してくれれば魚雷を拾わせますわ」
狙いは空中魚雷だった。オニヤンマが紅月丸を追い越す瞬間に、水圧で魚雷を射出する。オニヤンマを狙って撃つことはできないが、トンボには空中で獲物を捕らえる習性がある。自分で撃ったミサイルは拾っているのだから、動きに慣れもあるだろう。それに魚雷を拾わせる作戦なら、すでにゲンゴロウ相手に成功している。今度もうまくいく可能性は高い。
「俺様が仕留めちまってもいいんだよな、姐御？」
「もちろんですわ」
ヤンマ・ファイターが水面効果を捨てた。ターゲットである紅月丸と高度を合わせようとして、上昇に移った。
「ならよ、船を上下に動かすぜ？」
「好きになさい。この勝負、マッハのマハラが仕切り

ます」
「そうこなくちゃな。ってなわけで、降下ーっ！」
マハラは気持ちよさそうに号令した。
ハンマー・アクセルの勢いが衰(おとろ)えて、紅月丸が落下した。
上昇したヤンマ・ファイターは高度を修正しようと、紅月丸を追って降下してきた。
「やっぱりな。てめえのくせはわかったぜ。高さを合わせて狙いをつけたら上昇し、少し上からミサイルを切り離すって戦法でえ」
独り言のようで、独り言ではなかった。伝声管を通じて仲間たちに聞かせている。
「上昇ーっ！」
ヤンマ・ファイターと高度がそろう瞬間を見計らって、マハラは叫んだ。
ハンマー・アクセルが勢いを盛り返し、紅月丸は一転して上昇した。
敵機はミサイルを発射しなかった。もう一度、高度を合わせようとしている。なにひとつ攻撃しないまま、ただ接近してくる。

ちょうどいい的だった。
「マッハ・ハンマー！」
珍しく読み勝ったマハラが先手を取った。
しっかり引きつけてから、ロケット噴射の巨大ハンマーでぶっ飛ばしにかかった。
それでも、マッハ・ハンマーはかわされてしまった。相手はさすがに、空の王者だった。
オニヤンマは羽ばたいて急上昇した。ただし、王者も余裕はなかったらしく、飛行はやめていた。しっぽのように長い腹部を曲げてたらした状態で、オニヤンマは垂直移動した。マッハ・ハンマーをかわし、羽ばたきながらホバリングした。羽を巧みに操って、空中でぴたりと静止している。
オニヤンマは戦闘ヘリになった。
「ホバリングしやがった！　いまだ、姐御！」
「チャッパ！」
「はいです！」
紅月丸が反転した。
上を向いて寝ていたシュラウド・リングが起きた。
それぞれ別方向に回転して、片方のプロペラで前進、

もう片方のプロペラで後進し、紅月丸は瞬時にターンした。

「拾いなっ！」

空中で魚雷が発射された。

デコイ・シロップの水圧ピストンが、シロップの代わりに詰められた水を押し出した。加圧送水用のフレキシブル・メタルホースに圧力がかかった。曲がりくねった金属の大蛇が身をよじらせた。圧力のかかった水は魚雷発射管に到達し、栓(せん)をしている魚雷を吹き飛ばした。

魚雷ランチャーから空中魚雷が飛び出した。

だが。

結果は無残だった。オニヤンマはよけもせず、拾いもしなかった。空中魚雷はなにもない空間に放り出されて、力なく落ちていった。ゴミを捨てたのと変わらなかった。

当然といえば、当然の結果だった。

マッハ・ハンマーが飛んで、オニヤンマは上に退避(たいひ)した。

反転するためにシュラウド・リングを起こした紅月

丸は、その分だけ下に落ちた。
空中で静止することもできないのだから、魚雷を敵には向けられない。ただ射出するだけ。
もっともルビーローズは、初めから当てる気はなかった。拾わせるのが狙いだった。
とはいえ、戦闘相手が飛ばしてきた物を受け止めるバカはいない。愚か者では大空に君臨できない。ゲンゴロウも、飛んできた魚雷にかぶりついたわけではない。遅延発動型バーストが水中を漂ってもなにも起こらないのを確認してから、警戒を解いている。
ルビーローズは魚雷の発射方向と、オニヤンマの飛行方向をシンクロさせるつもりだった。魚雷とオニヤンマが同じ方向に飛べば、相対的な速度はゼロに近づく。オニヤンマからは魚雷が止まって見えるだろう。それなら、習性にしたがって魚雷を捕まえると、ルビーローズは読んだのだった。
だから、マハラに言った。オニヤンマが追い越してくれれば魚雷を拾わせる、と。
考えは正しく伝わらなかったようだ。それともマハラは、戦闘機が戦闘ヘリに変わってあわてたか。

勝負はマハラに託されている。いまだと言われて、本当にいまかと問い返す暇などない。勝機は一瞬なのだから。

マハラのボーンヘッドで魚雷は無駄になった。骨の頭でボーンヘッド。中身は詰まっていない。

けれども、ルビーローズは叱責(しっせき)しなかった。マハラに任せたのは自分であり、紅月丸のターンを指示したのも自分であり、魚雷は自分で撃っている。少なくとも、撃たなければ魚雷は無駄にならなかった。

なによりも、当たるかどうかは運次第で、拾うかどうかは相手次第の作戦である。自らの努力で結果を左右できないのだから、責を負うのは作戦を立案した自分しかいない。

落ちてゆく魚雷が割れた。時限信管が作動して、黒い玉の入った紐状の粘液が宙を舞った。遅延発動型バーストだ。このタイミングでオニヤンマが拾ってくれると最高なのだが、事態は最悪の展開となった。

捨てられたゴミには見向きもせずに、戦闘ヘリはミサイルを切り離した。

「ちぃっ！」

「撃ったです！」
操縦室のふたりが同時に叫んだ。
ルビーローズはトリガーから指を放した。ハンマー・アクセルの出力をゼロにした。
チャパティはスロットルレバーを手前まで引いた。プロペラの出力をゼロにした。
ふたりは話し合わなかった。アイコンタクトもなかった。それぞれが別々に、同じ目的で操作をした。
ミサイルをかわす最善の策は落下だった。上がるには重力に逆らわねばならないが、落ちる分には重力が助けてくれる。
切り離されたミサイルが落ちてくる。
紅月丸も落ちてゆく。船体は重いのに、落下速度はもどかしいくらいに遅かった。
ミサイルが点火した。ルビーローズは直感した。このミサイルは当たる――と。
「だめです！」
チャパティが弱音を吐いた。いや、未来を冷静に予測した。
武器はなかった。

魚雷ランチャーには、雷速が最速のジェット魚雷が残っている。しかし自走式なので水中でないと発射できないし、発射したところでミサイルを撃ち落としてくれるわけでもない。

テントウムシの口の中に仕込んである魚雷も同様だ。撃っても役には立たない上に、撃つ前には魚雷発射口を開かねばならない。そんな余裕があるわけもない。

ハイドロハンマーなら下を向いている。ジェットパックのために配管を付け替えたので、どのみち水の大砲は撃てやしない。

いまさらルビーローズがハッチに向かっても手遅れ。目の前のミサイルに対して、打つ手はなかった。

命中するのを、ただ見つめるだけだった。

しかも、船内には異音が響いている。なにかで叩かれる音がする。振動もある。音がするたびに船体がふるえる。

戦闘ヘリの機銃掃射(そうしゃ)でも食らっているような感じだったが、オニヤンマは空中でじっとしている。

音と振動は船体を駆け下りてきた。

最後にドスンと、操縦室の真上で踏み切った。

ルビーローズは天井を見た。音の正体はもうわかっていた。
「マッハ・ミサイル！」
巨漢のシマオーガが空を飛んだ。
マッハ・ミサイルなどという技は存在しなかった。
マハラは後部銃座から船体に飛び移り、テントウムシの体を駆け上がり駆け下りて、ジャンプしたのだった。
言わば、肉弾ミサイルだ。
体は呪文で大きくした。自分で自分を発射したあとも、呪文を念じて成長を続けている。
おそらく本人は、かっこいいミサイルのつもりでいるのだろう。手足を伸ばしている。たぶん、丸太に近い自分の体型は忘れてしまったにちがいない。
かわいそうだが、現実はイメージにほど遠かった。
マハラは顔を上げていた。頭が起きて、胸が反っている。両腕も両足も、力を入れて伸ばしたせいか開いている。ミサイルなら姿勢はまっすぐにしてほしいものだが、マハラのは×印だ。
しかし、そんなことはどうでもよかった。目的は敵

ミサイルの迎撃にある。
飛んできたミサイルを、マハラは両手でがっしりとつかんだ。上から押さえつけて体重を預け、ミサイルをそらせようとした。
ミサイルが少しばかり下を向いた。間が悪いことに、紅月丸は落下中だった。
「げえ……」
操縦室にはぎりぎり当たらないはずのミサイルが、操縦室直撃コースに変わった。
さらにマハラは、体勢を崩(くず)した。決死の行動にもかかわらず、滑稽(こっけい)な姿を仲間に見せる羽目になった。つかまれてもミサイルは突き進む。空中では踏ん張りようもないから、マハラの体はひっくり返ってしまった。
たとえば、上から落ちてきた鉄骨を空中でキャッチしたとする。鉄骨はそのまま落ちてゆくから、つかんだままだと手を引っ張られて、上半身を下に持っていかれる。それでも鉄骨を放さないでいると、上半身は下半身を道連れにして落ちてゆく。つかんだときは鉄骨が胸の前にあっても、落ちてゆくときは鉄骨が背中の後ろにある。天地が逆になり、体がひっくり返るの

で、そうなる。
マハラはひっくり返った。上からミサイルを押さえつけたはずなのに、気がつけば、ミサイルをつかんだまま仰向けになっている。しかもミサイルは、仰向けになった体の下にある。これではなにもできない。
マッハ・ミサイルは、えびぞりマッハ・ミサイルに進化した。
でも、役には立っていなかった。
「おりゃあっ！」
マハラは下半身を頭の上に運んだ。マット運動の後ろ回りの要領で、ひっくり返った体を元に戻した。
「どっせい！」
ミサイルが紅月丸に着弾するよりも先に、マハラの両足が船体に着地した。
「ぬうんっ！」
足場ができた。踏ん張りが効くようになった。
マハラは渾身（こんしん）の力でミサイルに対抗した。紅月丸に命中させるわけにはいかない。
つかんだミサイルを押して止め、押して下げる。下げるのは、船体の下を通過させるためだ。止めるのは、

下げるための時間稼ぎ。
「んがぁーっ！」
うなった。
全身の筋肉が盛り上がって硬くなった。
持ち前の怪力を発揮して、マハラはミサイルに押し勝った。
「ぷっ」
力みすぎて、おならが出た。
船内に聞こえるはずはないのだが、操縦室からはマハラのおしりが丸見えだ。恥ずかしくて、思わず力が抜けた。
ミサイルがマハラに押し勝った。
マハラは船底を走った。両足で紅月丸を蹴り、両手でミサイルにつかまり、逆さまになった状態で船底を駆け抜けた。
そして最後にドスンと、船尾で踏み切った。
ちょっぴりにおったけれども、マハラは敵ミサイルの迎撃に成功したのだった。
「……」
「……」

操縦室の時間が止まった。
ルビーローズもチャパティも、思考が停止した。
船体を駆け下りてミサイルをひっつかみ、つかんだミサイルを持ったまま、今度は船底を走り抜ける。そんな防御方法は想像の埒外(らちがい)だった。なにが起きたかわかっていても、脳が理解することを拒んだ。常識で考えて、ありえない。
マハラは空中の紅月丸をほぼ一周している。技も使わずに、ぶっつけ本番で成功している。命中を覚悟したミサイルは、確かにそれた。肉弾ミサイルと化したマハラが体を張って阻止した。
目の前で実際に起きたことなのに、とても信じられない光景だった。
「……あのバカっ！」
ルビーローズは我に返った。
ほめ言葉は出なかった。バカとしか言いようがない。
マハラは責任を取ったのかもしれない。撃つべきではないタイミングで魚雷を撃たせてしまい、無防備の船首を敵にさらして、ミサイルで攻撃された責任を。
それとも、なにも考えていなかったのだろうか。な

にしろ、考える前に動く男だ。動いてから考えるのならまだしも、動いた後でもやっぱり考えなかったりする男だ。

マハラは飛行呪文を持っていない。紅月丸は空中にあり、湖上にいる。外に出れば、湖に落ちる。怪物密林のど真ん中にある、モンスターだらけの湖に落っこちるのだ。ゲンゴロウがいる。アメンボがいる。タガメもいれば、ミズカマキリだっている。湖は水棲モンスターの巣窟(そうくつ)だ。アリでさえ、群れでいかだを組んで狩りをしている。

武装モンスターのオニヤンマがいるから、ほかのモンスターは逃げていった。それを考慮したのだとしても、あまりに無謀だった。

しかし、マハラは行動した。

仲間を守る。ただ、そのために。

「チャッパ！」

ルビーローズはあわただしく席を立った。

「おいらひとりで操縦するです！」

チャパティは先に答えた。

操縦なら、すでに始めている。紅月丸が墜落しない

ように落下を止めなければならない。それでいて、ルビーローズが移動できるようにしなければならない。急上昇したのでは、Ｇがきつくて走れない。

「お願いねっ」

ルビーローズは船尾に向かって駆けだした。

砲塔格納庫を回り込み、通路に出た。水密ゲートは開いたまま。後部銃座も外に出たまま。ホースが転がっていても、通路は走りやすかった。ルビーローズは全速力で突っ走って、水密ゲートからダイブした。

美しいフォームだった。

全身がまっすぐに伸びている。両脚はぴたりと合わさって、一本になっている。もともとスタイルがいいだけに、ローズ・ミサイルとでも命名したくなるような、きれいな空中姿勢だった。

眼下にマハラがいた。落ちながら飛んでいったと見えて、少し距離がある。

体はさらに巨大になっていた。大きく重くなった体を活かして、空中で上下を入れ替えたようだ。片手で握ったミサイルを、マハラは槍投げのように放った。

しぶきが上がった。マハラが派手に落ちた。足から

落ちて、水の中に沈んでいった。
ミサイルはあさっての方向に飛んでいった。もう警戒の必要はない。警戒すべき相手はほかにいる。
ルビーローズは空中でクイックターンの動作に入った。
マット運動の前回りとは動きが全然ちがう。体を丸めたりしない。上半身はまっすぐのまま、折りたたむ。頭が真下に来ると、後ろが見える。オニヤンマがマハラを狙って飛んでいくのを、ルビーローズは確認した。
たたんだ上半身が下半身にくっつく前に、脚が持ち上がる。上半身はひっくり返ったので、ルビーローズは真上を向いている。水泳をするときは、真上を向いた状態を水中でキープする。水面から持ち上がった脚は膝を曲げて着水し、壁を蹴る。
しかし、いまは泳いでいるわけではないから、ルビーローズはそのままくるりと一回転して上体を起こした。空中にいるので、クイックターンというよりも高飛び込みの前方回転技に近い。
わざわざ縦に回転したのは、それが得意な動作だったからにすぎない。後ろを見て、そこにオニヤンマが

いたとしても、得意な動作ならあわてずに対処できる。
オニヤンマは落ちていったマハラを狙って動き出していた。獲物が水没した場所に急行しようとしている。
「ローズ・ストーム！」
ルビーローズはいきなり大技を繰り出した。当たっても、当たらなくても、オニヤンマの注意を引きつけることができる。
オニヤンマは危険を察知して回避した。後退しつつ上昇し、後方斜め上に移動した。大きく避けたことで、吹き荒れる竜巻には呑まれなかった。マッハ・ハンマーをかわした空戦能力は本物だった。
オニヤンマは戦闘ヘリとなってホバリングした。向きを変えて、新たな獲物を見つめた。
ルビーローズも竜巻防壁を使って空中に静止した。
両者はともに動かず、にらみあった。
ルビーローズは人気者だ。パキケフーズの管理リヴとして、絶大な人気を誇っている。慈悲深くてやさしいから、聖母と呼ばれて慕(した)われている。
しかし。
「この虫けらがっ」

モンスターに呼びかけたその口調に、聖母の面影はなかった。
「てめえの相手は、このあたいがしてやるさ！」
わたくし、ではなかった。あたい、だった。
「ぶっつぶしてやるから、覚悟しなっ！」
ルビーローズが前に出た。
オニヤンマも羽ばたいて、空中を突進した。
博打とケンカが得意な、伝説の女博徒。
紅い薔薇の女と、オニヤンマとの、空中戦が始まった。
圧倒的に有利なのはオニヤンマだった。なんと言っても、空の王者だ。それもただのモンスターではなくて、武装モンスターだ。ミサイルは使い切ってしまったが、そもそもトンボはミサイルなど抱えていないのだから、なくても問題はなかった。空中を自在に飛び回って獲物を捕らえ、大顎（おおあご）で咬み裂けばいい。
ルビーローズには竜巻防壁があった。飛行呪文ではないからすばやく動けないものの、モンスターと接触するだけで自動的に攻撃することができる。
戦いは、間合いの取り合いとなった。

ルビーローズは徹底して間合いを詰めた。触れたらぶっ飛ばせるのだから、逃げる必要はない。間合いはゼロが望ましい。ルビーローズはぶつかりにいった。

オニヤンマは接触を避け、距離を保った。近づけば技を食らうと、本能で理解したようだ。優れた空戦能力を駆使して、時にルビーローズの背後に回り込み、時に頭上を押さえようとした。

竜巻防壁は上下に弱点があった。風はまわりを横に吹いているのであって、縦には吹いていない。それを見抜いたオニヤンマは、背面飛行で下からルビーローズを捕まえようとした。トンボの脚は胸部の下側にあるから、上のものを捕まえるときは逆さになるしかない。

弱点を突かれたときのルビーローズの対処は二通りあった。

ひとつは、竜巻の向きを変えること。横回転を縦回転にすれば、上下の弱点はなくなる。その代わり、今度は左右に弱点ができるわけで、オニヤンマはそこを突いてきた。そうするとルビーローズはまた回転の向きを変え、互いに空中をくるくると回りあうことにな

った。
　もうひとつは最強の防御方法だ。すなわち、攻撃である。ルビーローズはトライデント・スリングを使った。大きめのつぶてを一度に三発も斉射（せいしゃ）する専用攻撃技「三叉（さんさ）投石」だ。マッハ・ハンマーもローズ・ストームもかわすほどの相手に、トライデント・スリングは通じなかった。肉迫（にくはく）するオニヤンマを下がらせる効果はあったが、ルビーローズはぶつかりたいのだから痛し痒（かゆ）しだった。
　オニヤンマはオニヤンマで、動きにフェイントを織り交ぜてきた。頭を押さえると見せかけて空中をスピンターンし、フェイントに釣られたルビーローズが竜巻防壁を縦回転にしたところを、弱点の横から襲いかかった。それに対し、ルビーローズは殴りつけるようにトライデント・スリングを放って応戦。オニヤンマは後方斜め下にスウェーバックしてかわした。
　オニヤンマは何度となくフェイントを成功させたが、ルビーローズが仕掛けたフェイントには一度も引っかからなかった。竜巻防壁には絶対に触れないし、トライデント・スリングはかすらせもしない。空を飛ぶ目

玉の怪物の、本領を発揮した。よく見て、よく飛ぶ。
一発も当たらなくてくやしいとマハラが漏らした言葉を、ルビーローズは思い出した。
そのマハラが水面に浮かび上がったのが見えた。高所から飛び降りただけあって、よほど深くまで沈み込んだのだろう。泳ぎは下手だから、浮上するのもたいへんだったにちがいない。
ともあれ、無事な姿を見てルビーローズは安心した。武装モンスターがいるせいで水面のモンスターは姿を消したが、水中はどうだかわからない。もしかしたらと心配していたのだが、それは杞憂（きゆう）に終わった。
浮上したマハラは紅月丸を探して空中戦に気づき、拳を突き上げて応援を始めた。
それどころか、もっと近くで声援を送ろうと、マハラは泳ぎ始めた。下手くそなバタ足で水面を蹴りつけている。太鼓を叩くような音が空まで響いてくる。わざと囮（おとり）になろうとしているのか、それともモンスターを招き寄せる危険に気づいていないのか、判断に苦しむところだ。
いずれにせよ、近寄られるのは困った。オニヤンマ

撃退作戦に支障が出る。マハラが邪魔をする前に、ルビーローズは仕掛けることにした。
竜巻防壁を解除した。
空を飛べなくなって、ルビーローズは落下を始めた。両脚をそろえ、両腕は広げて、落ちていった。背中は下に向けて、上を飛ぶオニヤンマを見つめている。
落ちてゆく獲物をオニヤンマは追った。が、手は出さなかった。簡単には誘いに乗らないのだから、なかなか用心深い。
ルビーローズはさらに隙を見せた。体の向きを入れ替えて、オニヤンマに背中をさらした。
敵の動きを目で追えなくなるのだから、背中を見せるのは命取りだ。振り向けばいいのだとしても、その前に攻撃されれば、ルビーローズは散る。
オニヤンマが動いた。意を決して羽ばたくと、これまでにない速度で獲物に襲いかかった。
獲物が振り向く前に捕まえれば、オニヤンマの勝ち。捕まえる前に獲物が振り向けば、オニヤンマの負け。
空の王者も、覚悟の上で勝負に出た。
どちらが早いか。どちらが先か。決戦はスピード勝

負となった。
驚いたことに、ルビーローズは目をつぶっていた。いつもは大きく開いたつぶらな瞳を、いまは閉ざしている。
もちろん、気絶はしていない。寝ているのでもない。ひたすら思考を重ねて、オニヤンマの動きを正確にシミュレーションしているわけでもない。そんな難しいことはチャパティにしかできない。
ルビーローズはただ、感じていた。感覚を研ぎ澄ませていた。
なにも考えない。なにも思わない。
自分という存在は、決してひとりではない。ひとつではないのだ。目が見えなくなっても、鼻がいる。ロがいる。手も足も、角も。皮膚だってそうだ。外からは見えない、体の中にも自分はいる。心臓。肝臓。腎臓。胃も腸も。筋肉だって。骨だって。流れる血でさえも、自分自身だ。
すべてが集まって、一個のルビーローズを作っている。
自分の中の、自分たち。

行動を司(つかさど)っているのはルビーローズという名の意識だが、行動するのは名前では呼ばれることのない骨と肉だ。もしも、ルビーローズという意識が滅んだなら、だまって運命をともにする自分たちがいる。

ふだんは声を聞くこともない自分の中の自分たちに、ルビーローズは命運を委(ゆだ)ねた。

生きるも死ぬも、自分次第。自分の中の自分たち次第。

風が吹いている。夏の日差しが照りつけている。暑くはなかった。寒くもなかった。すべてが心地よかった。

オニヤンマは六本の脚を開いた。捕まえて、咬み裂けば、勝利。

ルビーローズは身を翻(ひるがえ)した。

危険を感じ取ったわけではなかった。目ならつぶっている。風は下から吹いてくるから、背後を取ったオニヤンマのにおいは嗅(か)ぎ取れない。

体を動かしたのはルビーローズではなかった。動こうと思って、動いたのではない。ルビーローズの意志とは無関係に、勝手に体は動いた。体という生き物が

自ら行動を起こしたのだ。
ルビーローズという意識は、体の中に宿っている。勝手に動く体の中で、意識はただ感じていた。動く体を心の中で眺めていた。なにも思わずに、他人事のように、心の中の目で見つめていた。
肉眼はつぶっている。
「！」
目が開いた。
外の世界が飛び込んできた。
オニヤンマの顔の前だった。
空中で身を翻（ひるがえ）したルビーローズは、オニヤンマの脚を逃れて顔の前に移動していた。
ルビーローズは角を打ち込んだ。首を振って、カールしたアカゲパキケの角を、オニヤンマの顔面に打ち込んだ。
そうしようと思ったわけではない。さっきから体は勝手に動いている。ルビーローズが自分の意志で行ったのは、自分の中の自分たちにすべてを任せることだ。あとは、その自分たちがやってくれている。身を躍（おど）らせ、目を開き、角で打つ。生き延びるために、体が、

自分の中の自分たちが、みんなで協力して戦っている。
ルビーローズは角で攻撃した。技は使わなかった。武器もない。持って生まれた己(おの)が角で、ルビーローズは戦った。
紅い薔薇の女は、モンスターを相手に素手でも戦う。
あの日もそうだった……。

ルビーローズは生きる気力をなくした。
この世に未練はなく、自分が存在する必要さえないと考えていた。憎いモンスターを殺して、自分も死のうとした。
いまは怪物の森と呼ばれている場所に陣取って、素手でモンスターと戦った。技を使わなかったのは、モンスターを殺すためだ。自分が死ぬまで戦い続けるつもりだった。
ハンター気取りのリヴリーがやってくると、これも素手で叩きのめした。殺せるものなら殺すつもりでいた。
モンスター同様に、ハンター連中も憎かった。こいつらがいるからモンスターが荒ぶるのだ。迷い込んだ

幼い子を見捨て、子の跡を追おうとした母を見捨て、守って戦うことはせずに、おのれひとりのうのうと逃げ延びる卑怯卑劣な者ども。そう思うと、モンスターよりもハンターのほうが憎くて、ルビーローズは本気で相手を殺しにかかった。

女の姿をした鬼だった。

殺される前に逃げ出したハンター連中は、仕返しをしようと仲間を募った。一斉に攻撃してルビーローズを動けなくしてしまい、モンスターに始末させるという悪辣な計画を立てて、実行に移した。

ハンター仲間全員でムーブすると、ルビーローズはモンスターと戦闘中だった。手傷も負っている。ちょうどいいやとばかりに、全員でルビーローズを攻撃した。

ダメージを受けたルビーローズは動きがにぶり、モンスターに咬まれた。

だが、決して悲鳴はあげず、ひるみもしなかった。ルビーローズはモンスターに背中を向けると、ハンターに迫った。向けた背中を、さらにモンスターが襲った。

ルビーローズは血にまみれた。
ハンターたちはたじろいだ。目の前の女がにらんでいる。血みどろになって、モンスターに殺されようとしながら、憤怒(ふんぬ)の形相(ぎょうそう)でにらみつけてくる。
血の色が紅(あか)かった。アカゲパキケの角が棘(とげ)のように見えた。いや、ルビーローズと視線を合わせた者は見た。深い緑色をした瞳の中に、棘(とげ)が生えているのを。
ルビーローズは血色(ちいろ)の薔薇だった。花は美しいが、棘(とげ)があり、紅(くれない)の血で染められている。
卑怯卑劣な者どもはおびえて逃げ出した。あとには、ルビーローズとモンスターが残された。
ルビーローズはとどめの一撃を待った。
これで楽になれる。ふたりのところに行ける。そう思った。
ところが、そこに幼い少女が迷い込んできた。きれいなピンク色をしたショウジョウダルマだった。殺しあいが行われているとも知らずに、少女はあどけない顔でルビーローズを見上げた。そして、にっこりと笑った。
ルビーローズは愕然(がくぜん)とした。

幼い少女が、死んだ姪に見えた。攻撃されたモンスターは荒れ狂っている。幼い少女も咬み殺されるだろう。ならば、少女を、姪を、死なせたのはルビーローズではないか。

ルビーローズは気づいた。仇と恨んでモンスターを殺そうと、いまの自分がしていることは、卑怯卑劣な者どもとなにひとつ変わらないのだということに。

モンスターが幼い少女に襲いかかった。

ルビーローズは身を挺してかばった。その場にかがんで、少女を抱き寄せた。とっさにできたのは、ただ守ることだった。自分を咬ませて姪を守るのだ。いや、姪はすでに亡くなっている。ルビーローズがかばったのは見知らぬ少女だ。けれども、すっかり混乱したルビーローズの頭の中では、少女は姪だった。

ルビーローズは咬まれなかった。

少女はルビーローズが守り抜いた。

モンスターが咬みついた相手は、ショウジョウダルマの老人だった。

孫娘を捜しに来た老人は、身を捨てて孫をかばうルビーローズの盾となり、モンスターの大顎に自分の拳

をねじ込んだのだった。
老人を咬んだモンスターは、なぜか急におとなしくなった。
けえんな、と老人はモンスターに語りかけた。しわがれた声だった。どっしりと重く響いた。
ここはお前さんの来るところじゃねえぜ、老人はモンスターを諭(さと)した。モンスターは大顎(おおあご)を開いて老人の拳を放すと、すごすごと立ち去った。
孫がとんだ世話になったようで、迷惑をかけやした。老人は膝に手をついて、ルビーローズに頭(こうべ)を垂れた。
ところで、娘さん。老人はルビーローズの瞳をのぞき込んだ。
なんで、泣いていなさるね？　ルビーローズは泣いてなんかいない。
涙はこらえるもんじゃねえ。こぼすもんだ。悲しいなら、かまやしねえ。泣いちまいな。老人がそう言うと、幼い少女がルビーローズの頭をなでた。まるで、母のようなしぐさだった。
冷たくなっていた血が、温(ぬく)もりを取り戻した。
ルビーローズは救われた。死んでいった姪が、助け

てはやれなかった姪が、許してくれたと思った。ルビーローズの目から涙がこぼれた。こぼれ始めた涙は止まらずに、ルビーローズは泣き崩(くず)れた。

少女はだまって、ルビーローズの頭をなで続けた。

老人はだまって、やってきたモンスターやハンターを目で追い返した。

それが、親分との出会いだった。

ルビーローズは親分の一家に世話になり、少女の面倒を見ながら、賭場(とば)で壺(つぼ)を振って暮らした。博打をして、ケンカもして、楽しい日々を送った。

やがて、別れの日がやってきた。親分が博徒の一家をたたんだのだった。

ルビーローズは親分に呼ばれた。新しく管理リヴが公募(こうぼ)されるからと、応募するように勧められた。ルビーローズは笑って断った。書類選考で落とされるに決まっている。履歴書(りれきしょ)の職歴欄に、壺振りの女博徒でしたと書いて受かるはずがない。得意なスポーツが水泳なのはいいとして、趣味にケンカと書いたのでは、不合格に決まっている。

そう答えると、親分も笑った。しかし、すぐに真顔

になって話を続けた。友人に推薦を頼んである。書類選考だけは通してもらえるから、あとの試験は地力(じりき)で勝負しな。だめならだめでいいじゃねえか、と。

親分は本気だった。断り切れずにルビーローズは受けた。不合格でも話の種にはなると思った。

ルビーローズは書類選考に通った。履歴書には事実を正直に書いたから、きちんと選考されたのなら通るはずがなかった。親分の友人が、会ったこともないルビーローズを推薦してくれたおかげなのだが、選考に手心を加えられるほどの友人が何者なのかは、親分は語ってくれなかった。

書類選考に通ったところで、どうせそのあとの試験で落とされる。ルビーローズは見物するつもりで、試験会場に気楽に出向いた。

そこに、マハラとチャパティがいた。

気が合う仲間たちとの出会いだった。

その仲間が危険な湖にいる。

体を張ってミサイルを防いでくれた勇敢(ゆうかん)な男だ。

ルビーローズと出会わなければ、マハラもチャパテ

ィものんびりできた。怪物密林に足を運ぶこともなく、安全なパークで楽しく過ごせた。

けれども、ルビーローズと出会ったばかりに、命(いのち)懸(が)けで危ない橋を渡る羽目になった。もちろん、強制はしていない。マハラもチャパティも、自分の意志で行動をともにしている。

そうはいっても、旗(はた)を振っているのはルビーローズだ。ふたりはついてきただけ。一味の首領として、ルビーローズは仲間のふたりを無事に帰す責任があった。

だから、素手でも戦う。

どんな技もかわしてしまう空の王者を相手に、これが本気の、ケンカ勝負だ。

ルビーローズは角を打ち込んだ。首を振って、左右の角で交互に殴りつけた。オニヤンマは顔を上げた。大顎(おおあご)でルビーローズを咬もうとした。その顔にさらに一発、角をぶち込んで、ルビーローズはオニヤンマの頭の上に移動した。顔を上げるモンスターの力を利用して、空中を動いた。

そして、オニヤンマの顔に手を置いた。そっと置いて、とんと突いて、体をさらに高く押し上げた。

手が放れた瞬間に、ルビーローズはサンダーを念じた。
空の王者が感電した。ようやく、技が当たったのだった。
ダメージを受けたオニヤンマの動きが止まった。
ルビーローズは空中で逆さまになった。足が上で、頭は下だ。右腕をV字に曲げ、指先までまっすぐ伸ばして、胸の前で盾のように構えた。左腕は握った拳を腰に当て、肘を後ろに突き出している。
構えた右腕に風が巻き付いた。魔法の風だった。
「ローズ・ストーム！」
ルビーローズは薔薇の竜巻を放った。
V字に構えていた腕を、真下にいるオニヤンマに突きつけた。腕に巻き付いていた魔法の風が、大きくふくらみながら飛んでいった。
サンダーを食らったダメージからまだ回復していないオニヤンマは、羽ばたくことすらできずに、薔薇の竜巻に呑み込まれた。
逆回転する二重の竜巻が吹き下ろす。湖に向かって逆落(さかお)としに落ちてゆく。竜巻の中には空の王者がいた。

内側の竜巻と外側の竜巻とにはさまれて、激しく錐揉(きりも)みしている。
乱れに乱れた気流は風の棘(とげ)を生み出す。小さな竜巻が発生して、囚(とら)われの王者に襲いかかった。錐揉(きりも)みの回転方向が瞬時に逆転した。オニヤンマの回る体がぴたりと止まって、逆に回転した。受けたダメージはどれほどだろうか。
しかも、行く手には湖が待ち構えている。
薔薇の竜巻は湖面に激突した。湖水を呑み込んで、水中に潜っていった。
竜巻は渦巻に変貌(へんぼう)した。
オニヤンマは風と水の両方に巻かれた挙句(あげく)、水の中に姿を消した。
空中は飛べても、水中は飛べまい。それはつまり、空の王者は溺(おぼ)れて死ぬことを意味する。
モンスターを殺す結果となっても、ルビーローズは悔(く)やまなかった。湖に落ちたマハラの救出が最優先だ。そのためには、どうやってオニヤンマを撃退するか。時間をかければ、バッテリーがあがって紅月丸は鉄くずとなる。急いだところで、技はかわされる。

船からダイブしたときにはもう、紅い薔薇の女は覚悟を決めていた。素手で倒し、技で仕留める。湖に沈めて、奴を殺す――と。

親分とその孫娘に救われたとはいえ、ルビーローズは心の底でいまもモンスターを憎んでいた。妹と姪を失ったのだから、許せはしないし、好きにもなれない。

モグラコオロギたちは別だった。あれはリヴリーを襲わないモンスターだ。ただの巨大昆虫である。図体がでかいだけ。左平次と名付けられたモグラコオロギに至っては、まるでペットのようになついている。

「！」

下から声が聞こえた。

マハラがルビーローズを呼んでいる。

薔薇の竜巻のせいで湖面が渦を巻いている。下手くそなバタ足で水面を蹴りまくるシマオーガが、必死になって渦から逃れようとしている。

「教えてあげたのに」

星彩洞の水路で水泳教室を開いて、ルビーローズはキックの正しい打ち方をマハラにコーチした。教えたのはついきのうのことなのに、マハラはもう忘れてい

る。
ルビーローズはマハラを拾って帰還した。
体を小さくして運んでもらった巨漢の男は、後部銃座に降ろされると、頭を下げた。
「すまねえ、姐御」
運んでもらって、すまないのか。危ないことをして、すまないのか。マハラは言わなかった。全部ひっくるめての話かもしれない。
「バカねえ」
ルビーローズの返事はたったひと言だった。
「おバカさんです」
伝声管の向こうからも返事があった。
「んだとぉ」
マハラはそれ以上、言い返さなかった。バカと言われても、バカにされたのでないことはよくわかっている。
ルビーローズは竜巻防壁を解除しないまま、船内に戻った。水密ゲートをくぐり、通路を飛んで移動した。紅月丸は客船ではないのだから、風に吹き飛ばされるような装飾品は置いていない。と思ったら、エキスパ

ンドメタルの壁に掛けてあったマハラの制帽が飛んだ。
仲間が大事にしている帽子だ。いつも、つばをまっすぐ下に向けて掛けているのを、ルビーローズは知っていた。竜巻防壁を解除して、ルビーローズは通路に降りた。マハラの帽子を拾い上げ、壁の帽子掛けに戻した。つばを下に向けたあと、ふと思い直して、つばを上に向けてみた。
茶目っ気を出してちょっぴりいたずらをすると、ルビーローズはくすりと笑った。
操縦室に戻ると、チャパティが立ち上がって操縦していた。窓の外を凝視(ぎょうし)している。見ているのは艇長席側の窓だったから、操縦席に座ったままでは見えにくかったのだろう。わざわざハーネスを外して確認しているのだから、よほどのことだ。
「どうかして？」
「姐さん！　オニヤンマが……」
「えっ？　もう浮上してきたの？」
想定外の事態だった。たったいま沈めたのに、早くも浮上してくるとは。二度と浮かび上がってこないか、しばらくたって浮いてきても二度と動かないかの、ど

ちらかだとルビーローズは考えていた。
自分の目で確認しようと、ルビーローズは艇長席まで走った。場合によっては再出撃しなければならない。
「あっ……！」
窓の外では、想定外の事態が二重に起こっていた。
オニヤンマは浮上していた。
生きて、動いている。溺死なんてとんでもない。昔取った杵柄だろうか。空の王者はその昔、水中の暴れん坊だった。ヤゴは時に、産卵に訪れた成虫のトンボでさえ捕食する。幼虫の間は水中で暴れ、成虫になると今度は空中で暴れるのだから、筋金入りの悪だ。
昔に戻ろうとしたのか、それとも薔薇の竜巻を食らったせいなのか、オニヤンマは羽を四枚とも落としていた。リヴリーの技でモンスターが傷つくことはないが、薔薇の竜巻は途中で薔薇の渦巻に変わっている。ひょっとすると、渦巻く水の流れが羽をもぎ取ったのかもしれない。
いや、きっとそうだろう。オニヤンマが自分で羽を落としたとは思えない。その証拠に、水面から脱出しようともがいている。六本の脚と長い腹部で水を押さ

えて背中を突き出し、いまはもう存在しない羽で大空に飛び立とうとしている。

哀れな姿だった。飛べない空の王者に、かつて誇った威勢はない。勢いが衰えると、滅びの跫音が忍び寄る。衰えて滅亡することを、衰滅という。衰亡という。

空中最速のモンスターを、水上最速のモンスターが取り囲んでいた。

いつの間にかアメンボが戻ってきていた。その数、十匹ほど。最後まで紅月丸に追いすがっていた最精鋭だろう。武装モンスターを恐れて逃げ出したが、鋼鉄のモンスターとの戦いが始まったので、どこかで成り行きを見守っていたにちがいない。そうでなければ、こんなに早くは戻ってこれない。

アメンボは大きいようで、実はそれほど大きくない。細く長く、広い。長い脚を広げるとかなりの面積を専有するので、つい大きく見えてしまうが、じっとして動かなければ、長くても細い体は目立たない。

逃げ散ったと見せかけて、好機が到来するのを待つ抜け目のなさは、さすがに最精鋭といえた。

空の王者は、もはや王者ではなかった。最速でもない。羽がそろっていたとしても、水面に落ちたからには、もう最速ではないのだ。水上で最速なのはアメンボである。

相手が飛び立てないのを見届けてから、アメンボは襲撃した。取り囲んでいた最精鋭が一斉に躍(おど)りかかった。群がり、たかって、槍を突き刺した。アメンボは、口吻(こうふん)という名の槍で刺して消化液を注ぎ込み、獲物の体液を吸う。

モンスターはモンスターを襲わない。しかし、相手が武装モンスターなら話は別だ。頭に金属製のプレートをつけて、ミューミュー一派に飼い慣らされたモンスターは、もう怪物たちの仲間ではなかった。

オニヤンマの命が吸われてゆく。

最初に見たときは、戦略爆撃機だった。それが急降下して戦闘機に変わった。戦闘ヘリにもなった。重機関銃をかわし、マッハ・ハンマーをかわし、マシンガン・スリングをかわした。空中魚雷には見向きもせずに、ミサイル攻撃で紅月丸を脅(おびや)かした。ローズ・ストームも、トライデント・スリングも、ひらりとかわ

して見せた。
確かに、空の王者だった。紅い薔薇の女とケンカして負けるまでは。
ルビーローズに視界をさえぎられたので、チャパティは着座した。ハーネスをつけながら、バッテリーの残量計に目をやった。警告灯が点いているので、扇形のアナログメーターはオレンジ色になっている。赤い目盛りの二つ目が終わりに近づいている。
残りひとつでも帰投は可能だった。水中島を発見するまでに消費した電力は目盛り一個分だ。浅瀬の急流を遡(さかのぼ)り、荒れ狂う滝壺へと潜るのはパワーがいるが、いまいる場所は水中島よりもずっとブンカー寄りなので移動距離は少ない。その分、バッテリーは減らない。つまり、赤い目盛りがひとつあれば、ぎりぎり帰投できる計算になる。
いよいよとなったら、湖岸探査作戦で使用した半潜水艇用の仮設(かせつ)ブンカーに、一時帰投する手もある。軽くて丈夫なアルミ合金製のパイプで檻(おり)を作って、草木で擬装しただけの簡易施設だが、モンスターに襲撃されてもある程度は耐えられる。実戦で使われる資材を

流用したから、堅牢さはお墨付きだ。
モンスターの脅威からリヴリーアイランドを守る防衛隊において、拠点の構築を得意とする連隊が同じ資材で仮設砲塁を築いている。もっとも、その連隊はモンスター津波で壊滅してしまったが。
ブンカーと仮設ブンカーのどちらに帰投するにせよ、急いだほうがいい。チャパティはルビーローズに注意をうながそうとした。だが、先に口を開いたのはルビーローズだった。
「仲間を食っちまうような連中とさ、どうすりゃ、なかよくいっしょに暮らせるのさ？　でも、親分は……」
声が途切れた。ルビーローズは最後まで言わなかった。
ただの独り言だ。チャパティは返事をしなかった。伝声管の向こうで聞いているはずのマハラでさえ、空気を読んでだまっている。後部銃座からも、アメンボにたかられたオニヤンマの悲惨な姿は見えているはずだ。
リヴリーとモンスターの共存共栄という思想なら、

ルビーローズは過去にも口にしたことがある。でもそれは、ルビーローズ自身の考えではなかった。伝説の女博徒がかつて世話になった親分の考えだという。

ルビーローズの身に降りかかった悲しい出来事は、マハラもチャパティも聞いている。だから、ルビーローズがモンスター愛護派だとは思わない。やむをえずモンスターと戦うとき、ルビーローズの言葉はいつも苛烈（かれつ）だ。この虫けらがと、抑えきれない憎しみを叩きつけている。

しかし、恩人である親分はモンスター愛護派だったのだろう。救われたルビーローズとしては、恩人の思いを無下（むげ）にするわけにもいかない。もしも本当に共存共栄できたとしたら、家族を失う不幸はもう起こらないのだから、そこに希望を見いだしているのかもしれない。

親分は行方知れずと聞く。ルビーローズは義理堅くも、恩人の意志を受け継ごうとしているのだろうか。

「……姐さん」

チャパティはひと呼吸置いてから、声を掛けた。

「バッテリーが残り少なくなったです」

「そうね。すぐに潜水しましょう」
ルビーローズは席に着いた。
「アメンボは数も少ないし、餌にたかっているから、そんなに離れなくてもいいわよね？」
「少し距離を置くだけでだいじょうぶだと思うです」
「では、着水して翼走。大急ぎでホースを回収して、潜水ね」
「ホースは投棄したいです」
紅月丸が潜水するには、水密ゲートを閉じなければならない。その前に、ジェットパックの取水用メタルホースを回収する必要がある。取水が止まればジェットパックも止まるから、水中翼船の状態でないと回収はできない。
だが、口でいうほど簡単な作業ではなかった。重労働だ。ホースが浮いてこないように、先端には水平安定板を取り付けてある。水上を高速で走る船から、水の抵抗に逆らって引き上げるわけで、時間もかかる。
ところが、捨ててしまえば一気に解決する。時間もバッテリーも節約できる。
ホースを捨てるとジェットパックは使えなくなるが、

紅月丸を飛ばしたところで、どうせバッテリーが持たないのだから気にする必要はない。
「そのほうがよさそうね。わかったわ。ホースは捨てましょう」
話をしている間にも、空中浮揚をしている紅月丸は後ろに進んでいる。オニヤンマと、それにたかるアメンボから離れてゆく。
オニヤンマはまだもがいているようで、アメンボの固まりが動く。動いても、決して逃しはしない。水面はアメンボの縄張りだ。水に落ちた飛翔モンスターなど、恐れるに足りない。
なのに。
突然、アメンボが逃げた。最精鋭の集団が一瞬で逃げ散った。水上最速の脚に物を言わせて、一目散に走り去っていった。
「え？　どうして……？」
ルビーローズは窓の外を見回した。
異状（いじょう）はなかった。オニヤンマなら死にかけている。危険はない。ほかのモンスターも見当たらない。アメンボから獲物を横取りしようとする者はいない。

いや、そうではない。モンスターはモンスターを襲わないのだから、獲物を奪われそうになっても、逃げる必要はないではないか。

モンスターのアメンボが逃げ出すほどの相手。つまり、それは……。

マハラは頭の毛を整えていた。

湖に落ちて、全身ずぶ濡れとなった。いつものかっこいいヘアスタイルになるよう髪を乾かさないと、男が廃る。

自慢のソフトモヒカンをしっかり立たせようと、マハラは両手ではさんだ。

その瞬間だった。

空中の紅月丸を衝撃が襲った。船体が船尾の方向に落ちた。降下とはちがう。落ちたあと、上昇して持ち直した。なにかに引っ張られたような感じだった。

「なんでえ、いまのは！」

マハラは首を伸ばして、後部銃座の下をのぞき込んだ。メタルホースになにかが引っかかったにちがいない。

青い水面に丸太のような黒い物体が浮かんでいた。

黄色い枝が無数に生えている。よく見ると丸太ではなかった。もっと平らで、メタルホースに巻き付いていた。

黒い物体と比べると、光を反射して輝くメタルホースは細くて、糸のようだった。船から垂らしているので釣り糸だ。不気味な物体を釣り上げたように見えるが、事実は逆で、紅月丸は釣り下げられようとしていた。

「うおっ！」

また落ちた。今度は落ちたまま、船体が傾いて戻らない。それどころか、ぐいぐいとさらに引っ張られている。船尾側に傾いたため、外に突き出している後部銃座が船体の一番下になった。おかげで、なにが起こっているのか、よく見えた。

不気味な物体には血色の頭がついていた。真っ赤な触角が揺れるように動いている。

ドラギラだった。

水中島の魔神が長い体をメタルホースに巻き付けて、よじ登ろうとしていた。

「敵襲ーっ！」

マハラはあわてて叫んだ。
「ムカデ野郎でえっ！」
伝声管に口を寄せて、大声を送り込んだ。
「なんですってーっ！」
伝声管からはもっと大きな声が返ってきた。
「野郎！　ホースに巻き付いてらぁ！」
「まずいです！　攻撃は控えるです！」
「なに言ってやがる！」
「ハンマーを打ったら、紅月丸が引っ張られるです！
サンダーを使ったら、電気がメタルホースを通って紅月丸もやられるです！　コールドブレスもだめです！　ホースの水が凍って、ジェットパックが止まるです！」
「くそったれ！」
マハラは腕章に手を伸ばしたが、拳を握りしめて、なにかを断念した。
「マシンガン・スリングなら……ぅぬーっ！」
話の途中でマハラはうなり声を上げた。
ドラギラがメタルホースに巻き付いた巨体をくねらせ、捕らえた獲物を振り回したのだった。

紅月丸は操縦不能となった。なすすべもなく、ただ振り回された。
金属製のホースは丈夫で切れなかった。ウォータージェット推進器も、がっちり固定してある。それが不運なことなのか、幸運なことなのかはわからない。ホースが切れたり、推進器が外れたりすると、紅月丸は遠心力で飛ばされ、墜落する。
チャパティは操縦を続けた。むなしい努力でも、あきらめてコントロールを放棄したらおしまいだ。
「姐さん！　後部銃座、格納するです！」
チャパティは後部銃座の格納を進言した。
「水密ゲート、閉鎖するです！」
ゲートを閉じろとも言った。
取水用のメタルホースは出しっぱなしだ。ドラギラが巻き付いているから、引き離さないと回収はできない。すでにホースを回収するつもりはなく、投棄の予定だが、船体を振り回されていては切り離しに行けない。それに切り離したところで、ハンマー投げのように飛んでゆくだけ。
水密ゲートを閉じると、メタルホースがはさまる。

湖底の水圧にも耐えるゲートは、ホースを押しつぶすだろう。ゲートは閉まるが、ジェットパックは止まる。紅月丸は空中浮揚できなくなって、湖に落ちる。

その湖には猛毒モンスターがいるのだから、みすみす餌食(えじき)になってしまう。

だが、後部銃座を格納しないとマハラの命が危ない。格納してもゲートを閉じなければ、マハラが危ない。

チャパティは仲間の安全を第一に考えたのだった。

「バカ野郎！　俺様が仕留めてやらあ！」

マハラはマハラで、仲間の安全を考えていた。操縦室にいるふたりは動けないのだから、外にいる自分がどうにかするしかない。ゲートを閉めれば、紅月丸はドラギラの魔の手に落ちるだけ。戦って倒せば、自由を勝ち取ることができる。

「！」

ルビーローズは即座に決断した。無言で、艇長席にあるレバーを操作した。後部銃座を強制格納し、水密ゲートを緊急閉鎖した。

マハラが行動を起こす前に、手を打ったのだった。

ヤンマ・ファイターとの戦闘で、マハラは肉弾ミサイ

ルと化している。敵ミサイルに対して、自分自身を発射している。

動けるのは自分だけという強い思いが、マハラの命を危うくする。対オニヤンマ戦はまだよかった。身を守る方法があった。水中に潜ってしまえば、飛翔モンスターは手を出せないからだ。

しかし、ドラギラが相手ではそうはいかない。安全なのは空だが、マハラに飛行呪文はない。

泳ぎの得意なルビーローズでさえ、星彩洞の水路でジョロウグモを相手にしたときは苦戦した。それを思えば、泳ぎの下手なマハラが広い湖で大ムカデと戦って、勝てる見込みはない。放っておけば、今日がマハラの命日となるだろう。

「なにしやがるんでえ！」

マハラの目の前で水密ゲートが閉じた。

金属製の硬いメタルホースが、ゴムホースのように押しつぶされた。これで取水できなくなった。ジェットパックは止まる。ハイドロハンマーから水を噴射して、船体を持ち上げることはできなくなる。

紅月丸は、落ちる。

「俺様には奥の手だってあるんだぜ！」
操縦室からは見えないのに、マハラは腕章を叩いて抗議した。
そして、シフトレバーに手を伸ばした。
「いまから行って――」
「あわてるんじゃねえやっ！」
紅い薔薇の女が一喝（いっかつ）した。
伝声管が恐怖にふるえたのか、音が割れた。
「てめえひとりのケンカじゃねえんだよ！」
ルビーローズはマハラを叱（しか）り飛ばした。無意味な出撃をやめさせるためだ。水密ゲートはもう閉じたのだから、メタルホースはつぶれている。いまさら開いたところで、取水はできない。マハラが出て行ってドラギラを倒したところで、紅月丸が落ちることに変わりはない。ならば、危険な単独出撃は無用だ。
「チャッパ！　紅月丸をムカデ野郎に落としちまいなっ！」
「はいです！」
鋼鉄のモンスターで、猛毒のモンスターを押しつぶす。それがルビーローズの作戦だった。落ちるなら落

ちるで、逆手(さかて)に取って攻撃に転じるのだ。
実際には水がクッションとなるから、つぶせはしないだろう。そんなことはわかりきっている。つぶせなくても、ホースに巻き付いたドラギラが離れるかもしれない。巻き付いたままでも、落下の勢いに乗って急速潜航すれば、水中深く逃げられる。
つぶせても、つぶせなくても、問題はない。ひとつだけ問題があるとしたら、落ちるために力を抜くことだ。プロペラとウォータージェットの強い推進力で、重力に逆らって宙に浮かんでいたのに、それがなくなる。
つまり、鋼鉄のモンスターから力が失われることになる。
そこを見逃すドラギラではなかった。
水中島の魔神はさらに大きく体をくねらせた。今度は猛烈な勢いで、力の衰(おとろ)えた獲物を振り回した。
黒いテントウムシは水面に叩きつけられた。
羽がちぎれた。

第九章　沈む薔薇（ばら）

一

空を飛ぶ潜水艇〈紅月丸〉は墜落した。

右舷から水面に激突した。

羽は開いたままだった。

チャパティは羽をたたむ操作をした。自然に落下したのなら、羽はたたまれて障害とはならなかった。

しかし、激しく振り回されたことで風圧による負荷がかかり、正常に動作しなかった。

右の後羽は中ほどで折れ、根元でちぎれた。

水中翼である後羽はアモルファス・ルビーでできていた。薄く透きとおっていても強度はあるのだが、水とぶつかって簡単に壊れた。

水というのは不思議なもので、やさしく押せば存在さえ感じさせないが、強く叩けば殴り返してくる。さらさらしているようでも実は粘（ねば）り気があるから、そう

なる。粘性(ねんせい)という。ゆっくり押すと時間があるので水は移動するが、早く押すと移動する時間がないため、水は動かない。動かなければ、それはもう固体と同じだ。

猛烈な勢いで振り回されて水面に叩きつけられた紅月丸は、高速で水を押すことになった。つまり、固体のように硬い水面に激突したのだった。

激突した瞬間に、右の後羽は折れた。硬い水面がへこんで、残った羽が根元からちぎれた。羽を水中に押し込んだ形となり、羽と船体との接合部が破断したのだった。

右の鞘翅も大きく損傷した。

鞘翅はキルリアン鋼でできていた。モンスターのゲンゴロウに引(ひ)っ掻(か)かれても傷ひとつ入らない頑丈(がんじょう)な鋼板だったが、水に負けて折れ曲がった。羽の中央にシュラウド・リングがあるため、強度は高めてある。にもかかわらず、リングのところでめくれるように曲がり、裏側が外を向いた。

船体との接合部は破断しなかった。シュラウド・リングがあるので輪の中を水が抜けたし、折れ曲がった

ことで水の圧力を逃がすことができた。といっても、ちぎれなかっただけで、羽の開閉機構は壊れた。曲がった鞘翅は、たたむことも開くこともできなくなった。壊れて曲がった鞘翅を、折れて飛んだプロペラが切り裂いた。

プロペラは三枚羽根だった。スクリューとちがって細いから、剣のようにするどく見える。

操縦室でスイッチを切られても、プロペラの回転速度はさほど落ちていなかった。風圧でシャッターも閉じていない。水に浸かったプロペラは、回転しているので水面を叩きまくって、折れ飛んだ。

三枚あるプロペラのうち、一枚はまっすぐ水中に沈んだ。羽の裏側に飛んだから、表側にあるシャッターに当たることもなく、折れたこと以外に、船体には損傷を与えなかった。

もう一枚は、プロペラを保護するシュラウド・リングごと、鞘翅を切り裂いた。めくれた鞘翅に切れ目が入った。ルーバー型のシャッターも一部が切られて、板状のルーバーが切断された。

最後の一枚はひどかった。シャッターのせまい間を

すり抜けて飛び、紅月丸に突き刺さった。昆虫採集用の虫ピンで、羽を開いたテントウムシの腹部を刺したような感じになった。

折れて飛んだプロペラは、ドラギラには当たらなかった。当たり所によっては致命傷となったのに、かすりもしないのだから、魔神は悪運も強いらしい。

左舷の羽は無傷だった。船体は右舷から水面に激突したので、左側の羽はしぶきを浴びた程度で水とぶつかることもなく、折りたたまれた。もっとも、羽は両方そろって初めて使い物になる。片方だけ無事でも、意味はなかった。

損傷は船内にも及んだ。

衝撃でゆるんだバルブから水や油、エアなどが漏れた。

一番ダメージを受けたのは、生身だった。ルビーローズ一味は三人ともハーネスを装着していたので、座席から放り出されることはなかったものの、墜落の衝撃はそっくりそのまま体に伝わる。

だが、気を失った者はひとりもいなかった。全員が衝撃に耐えた。

それは訓練のたまものだった。
潜水艇なのに、紅月丸は空を飛ぶ。追っ手を三日月岩礁に誘い込んで舞い上がり、滝壺まで滑空し、ほぼ垂直に降下して着水したりもする。空中でトラブルが起きれば即、墜落するわけで、対策は欠かせない。いざとなってあわてることのないように、様々な事態を想定した訓練を積んである。
中でも、対衝撃訓練は重要視された。
ブンカーが完成すると、真っ先に訓練用の模擬操縦室を製作した。それを船台に固定して、ドックから地下プールまで一気にシャフトを降下するという訓練を、何度も繰り返した。紅月丸を建造する前から、墜落することに体を慣らしておいた。
実際にはドラギラによって水面に叩きつけられたわけだが、受けた衝撃は、訓練計画を策定(さくてい)したチャパティの予想内だった。つまり、一味の三人にとっては、訓練ですでに経験済みの衝撃だったわけだ。
墜落の衝撃は予想できても、魔神の攻撃は予想できなかった。見たこともない大ムカデとの水中戦なんて、事前に考えておくわけがない。

ドラギラは獲物を搦め捕った。長い体で縛り上げるように絡みついて、丸くなった。

窓の外に覆いができた。操縦室が暗くなった。電灯は消されていた。紅月丸は水中島から浮上した後、ずっと日光を浴びていたので明かりは不要だった。消しておけば、少しはバッテリーを節約できる。

常時点灯している非常灯があるので、完全な暗闇とはならなかった。また、覆いから漏れた日光が水面越しに窓から入ってくる。

墜落で窓が壊れなかったのは不幸中の幸いだった。もちろん、湖底の水圧にも耐えられるように頑丈に造ってあるが、操縦室がテントウムシの頭部にあったのが幸いした。大きな腹部よりも引っ込んでいる分、水の直撃をまぬがれた。

とはいえ、無事な窓もふさがれたのでは役に立たない。

ムカデに捕まったテントウムシがふるえた。船体が大きく揺れた。

すでに絶望的な状況だったが、このまま指をくわえて見ていると、絶望は絶命に置き換わる。

「急速潜航ーっ！」
ルビーローズが号令した。
潜航以外に選択肢はなかった。
ドラギラに捕まっている。空は飛べないし、水上も走れない。水面にとどまるわけにもいかない。ならば、打つ手はひとつ。潜るのみ。
「はいです！」
チャパティはバラストタンクのベント弁を開いた。重い水がタンクに入って、軽い空気を追い出した。船体の重量が増し、紅月丸は沈み始めた。
メインタンクであるバラストタンクだけでなく、ほかのタンクにもチャパティは注水した。釣り合いを取るために、船の前後に設けたトリムタンクにも。補助用のネガティブタンクにも。
さすがのドラギラも、水の詰まった鋼鉄のモンスターを持て余した。がっしりと捕まえていたから、いっしょになって沈んだ。
獲物が逃げようとしていることを悟ったのか、ドラギラは体を揺すった。ところが、揺すったことで脚をすべらせた。脚ならたくさん生えているのだが、キル

リアン鋼で造られた船体に鉤爪(かぎづめ)は引っかからないし、水のせいですべる。
すっかり重くなった獲物をドラギラは落としてしまった。
しかし、紅月丸の船尾からは、まるで金魚のフンのようにメタルホースが伸びていた。おまけに、ドラギラの体に巻き付いたままだった。
ドラギラは体をくねらせた。
空中にいた獲物を振り回して落としたのと、同じことを試みた。せっかく捕らえた獲物を逃すまいとしたのだが、水中の獲物は、空中のようには振り回せなかった。
メタルホースが切れた。
金属製の丈夫なホースだったが、水密ゲートにつぶされ、宙に浮かぶ船を引きずり下ろすのに利用され、すでに限界が来ていた。
トカゲがしっぽを切るように、紅月丸はホースを切って、魔神の手から逃げ延びた。
操縦室では事の子細(しさい)がわからなかった。
ドラギラのあがきは軽いショックとなって操縦室に

も伝わった。ルビーローズの体が一瞬だけ前のめりになり、すぐに元に戻った。引っ張られたメタルホースが切れたのだが、操縦室からは見えない。ただし、受けた衝撃にドラギラが関わっていることは理解できた。もっと深く潜航して、大ムカデの追撃を振り切る必要があった。

「潜舵下げ！　前進全速！　湖底に向かいますわ！」

「了解したです！」

チャパティは潜舵を下げた。テレグラフハンドルを操作し、前進全速にした。

スクリューを回して高速で潜航し、追撃してくるドラギラを引き離すのが狙いだ。

だが、船足は伸びなかった。代わりに、船底から異音が響いてきた。

「なにかしら？　この音？」

「スクリュー音です。墜落したときの衝撃で、スクリューがひしゃげたです。この音は、スクリューが無駄に水を掻き回して発生する音です。なので、動かしても意味がないです。バッテリーが減るだけです」

「……そう」

ルビーローズは声を落とした。
バッテリーどころの問題ではなかった。
「ブンカーには、もう戻れないのね」
スクリューが壊れた以上、ブンカーへの帰投はもはや不可能だった。浅瀬の急流を遡(さかのぼ)り、荒れ狂う滝壺に潜航するなど、到底(とうてい)望めない。
「ストップ・モーターよ。それから潜舵水平ね」
小さな声で、ルビーローズは指示した。
黒いテントウムシは頭を下げている。すでに湖底に向かっている。潜舵を水平にすると、現在の状態を維持してそのまま斜めに沈降することになる。
「はいです。でも、姐さん。だいじょうぶです」
チャパティはルビーローズをなぐさめた。
「潜水と浮上を繰り返せば、移動は可能です。スクリューが使えなくても、仮設ブンカーには帰投できるです」
斜めに潜って、斜めに浮き上がれば、横にも移動することになる。浅瀬の急流を遡ることはできなくても、湖岸の仮設ブンカーにならたどり着ける。
モーターが止まると異音は消えた。潜舵は船体に対

して水平となった。船首方向に傾いた紅月丸は、水中を斜めに沈んでゆく。
「なんでえ。八方塞(はっぽうふさ)がりじゃねえかよ」
元気な声がした。後部銃座にいたマハラが戻ってきた。
「空は飛べねえ。水上は走れねえ。でもって、水中もだめときやがった。こいつぁ、腕の見せどころってもんだぜ。なあ、お茶っ葉」
ゆるんだバルブを閉めて、マハラは水漏れを止めた。
「おいらの腕が鳴るです」
「ちがっ！　鳴るのは、俺様の腕だっつーの！」
「折れたです？」
「そうそう、ポキッと……って！　折れて鳴るんじゃねえ！」
突然始まった漫才に、ルビーローズの硬い表情が和(やわ)らいだ。
「まあ、そんなわけでよ。やるこたぁ、山ほどあるんでえ。……やい、お茶っ葉！　のんびり座ってねえで、手ぇ貸しやがれ！」
話の途中で、マハラの口調ががらりと変わった。責

任を感じるルビーローズはいたわり、チャパティの尻は叩いた。
「なにか起こったです？」
「ちぃと水漏れでえ。ついてきな」
「わかったです。姐さん、おいら、ちょっと行ってくるです」
ターバンを濡らさないように操縦席に置くと、チャパティは緊迫感のない足取りでマハラを追いかけた。
「念のため、水密ドアは閉めていくです」
ひと言付け加えて、チャパティは砲塔格納庫の向こうに消えた。
「……」
操縦室にひとり残ったルビーローズは、隣の席のターバンを見つめた。星彩洞の水路で制帽をなくしてから、ずっと無帽なので頭がさみしかった。
「な？　ちぃと水漏れしてやがるだろ？」
マハラは水漏れを指さした。
船体後部の通路だった。
「……」
チャパティは絶句した。

折れたプロペラが船体に突き刺さって、大穴があいている。その穴をプロペラがふさいでいるものの、隙間から水が噴き出している。

ポンプで排水できるかどうか、チャパティは判断に迷った。目に見える水漏れもけっこうな量だが、見えないところではもっと漏れているかもしれない。それに、バラストタンクにも穴があいたはず。

プロペラは斜めに刺さっていた。貫通はしていない。先端が通路に突き出した状態で止まっている。斜めに刺さったということは、外殻（がいかく）を破ってバラストタンクに穴をあけ、内殻（ないかく）を突いて、ようやく止まったことになる。

紅月丸はサドルタンクを採用していた。船腹（せんぷく）は、内殻と外殻の二層構造になっている。内殻は本体とも呼べる部分で、耐圧殻だ。その外側にもうひとつ殻があるのだが、ふたつの殻の間にはなにもない。なぜなら、そこがバラストタンクだからだ。水や空気をためる場所になっている。

テントウムシに似せた幅のある潜水艇には、両脇にふたつのタンクを抱えたほうが合理的だった。だから、

馬の鞍にぶら下げた荷物のように、船腹の左右両舷にタンクがある。

その片方に穴があいている。いまは潜航中だからいいものの、浮上するときには問題となる。バラストタンクを排水しようと、圧縮空気タンクからエアを送っても、穴から抜けていく恐れがある。最悪の場合、刺さったままで栓となっているプロペラを、エアが押し出してしまうだろう。

そうなれば、バラストタンクの片方は排水不能となる。いつまでも満水のままで、船体のバランスが崩れるし、軽くもならない。それどころか、プロペラが抜けてしまえば、内殻への浸水はもう止められない。排水ポンプを回すような応急措置では、どうにもならなくなる。

「溶接して穴をふさぐです！　シンクロトロン・バーナーを使うです！」

チャパティは、せめてプロペラが抜けないように船体と溶接することにした。

「ああん？　バッテリー食うじゃねえか」

「それでもやるです！　おいらに任せるです！　マッ

ハは排水ポンプを頼むです！　手回しでバッテリーを節約するです！」
「おう！　俺様は力仕事の担当な！」
男ふたりはあわただしく働き始めた。
ちょうどそのころ、操縦室のルビーローズは、誘惑に負けてターバンをかぶっていた。
黒い羽根飾りのついた真っ赤なターバンだった。
どのくらい似合うか知りたくて、バッテリー節約のために消しておいた明かりをルビーローズはつけた。外の水中は暗いから、船内を明るくすれば、サファイアガラスの窓が鏡のように姿を映してくれる。
割と似合っていた。
少なくとも、色目はルビーローズにあう。真っ赤なターバンは、青い体色のハナマキよりも、赤い体色のアカゲパキケのほうが、いい感じに同系色でまとまる。きっと、外を泳ぐ血色（ちいろ）の頭にかぶせても似合うことだろう。
そう、窓の外を泳ぐムカデにかぶせても……。
「敵襲ーっ！」
操縦室に声が響いた。

猛毒のモンスターが、鋼鉄のモンスターと並んで泳いでいた。

実は、一味の全員が勘違いをしていた。ドラギラはうまく泳ぐことができないと。陸上モンスターだから息が続かずに深くは潜れないと。勝手に思い込んでいた。

知らなかったのだ、誰も。

水中島の魔神は、ドルフィンキックを打ち、グライドストロークで水の中をすべるように泳ぐのだということを。

大ムカデの武装モンスターは、圧縮空気の詰まったガスホルダーを持ち、スキューバダイビングをするのだということを。

潜航して魔の手を逃れたというのは、ルビーローズたちの早合点だった。なにも見えないから、頭で判断してわかったつもりになっていた。

ドラギラは、体に巻き付いた細いメタルホースを外すのに手間取った。その間、沈む獲物は自由にさせた。そして邪魔なホースが外れたところで、追撃を再開したのだった。

陸上モンスターでも、泳ぎは達者だ。水中で活動するための装備もつけている。つまりドラギラは、水棲モンスターと同じくらい自由に、水の中でも活動できた。水中島から抜け出したときは、準備不足だったから泳がずに浮上しただけ。

敵は、スキューバダイビングで自在に泳ぎ回るモンスターだった。

それに対して紅月丸は、ただ浮き沈みすることしかできなかった。

「敵襲ーっ！」

ルビーローズはもう一度叫んだ。伝声管から応答がなかったので、改めて急を告げた。返事がなくても、声は届いていると信じるしかない。

「これより直降（ちょっこう）します！　なにかにつかまりなさいっ！」

浮くか、沈むか。

それしかできない紅月丸を操って、ドラギラから逃げるためにルビーローズが選んだ手段は、垂直急降下だった。

「マジかよ！　なんもしてねえじゃねえか！」

「まずいです！　とにかくつかまるです！」
「その前に道具を戻せっての！」
「急ぐです！」
男ふたりは通路にいた。
作業はまだ始めてもいない。壁の中の収納庫から、バーナーとポンプを引っ張り出しただけだ。
通路の壁にはエキスパンドメタルを使っていた。金網のような網目模様のある金属板を採用して、軽量化を図っている。
その網目がつかまるのにちょうどよかった。指を引っかけ、爪先を押し込み、しがみつくことができた。
船体が急激に傾いた。
紅月丸は水中で逆立ちをした。
「けえっ」
マハラは握りつぶす勢いで、穴あきの壁をつかんだ。
「……」
チャパティは無言だったが、壁の穴に鼻まで押し込んで体を支えている。
水平に作られた通路が垂直になった。落ちるとただではすまない。頑丈な水密ドアに激突する。

「おい！　水がたまってるじゃねえか！」
マハラは下を見た。
通路の底に水たまりがあった。紅月丸は浸水しているから、低いところに水が集まっていた。
「やい、お茶っ葉！　やっぱ、おめえは冴えてるぜ。水密ドアを閉めてなきゃ、いまごろ姐御は溺れてらぁ！」
念のためといって、水密ドアを閉めたのはチャパティだった。おかげで、操縦室と制御室は隔離された。浸水から守られた。もちろんチャパティは、紅月丸が逆立ちする事態を想定したわけではない。単純に、水漏れに備えただけだ。
もしも水密ドアが閉まっていなかったら、水は操縦室に流れ込んでいた。低いところに集まるのだから、逆さまになって一番下となった操縦席と艇長席が水没していた。そうなれば、操縦ミスの危険が高まる。紅月丸は垂直急降下をしている。湖底に向かって一直線だ。下手をすれば、そのまま湖底にぶち当たる。
何気なくドアを閉めた。たったそれだけのことで、危機的状況にあるルビーローズ一味に、幸運のひとか

けらが舞い込んだのだった。
ルビーローズは船体を水平に戻した。
あまり長くは垂直降下できない。湖は底なしではないし、仮に底なしだったとしても限界深度を超えれば紅月丸は圧壊(あっかい)する。
急激な沈降でスピードを稼ぎ、その勢いを借りて、ルビーローズは紅月丸を水平移動させた。
狙いはひとつだった。
ヘッドライトが湖底を照らしている。
潜水艇が水を押しのけて進むごとに、スピードは殺されてゆく。急降下で稼いだ勢いが失われてゆく。船底のポッド推進器は、いまやただの障害物だ。ひしゃげたスクリューが勝手にブレーキをかけてくれる。ルビーローズは知らないが、折れ曲がった右の鞘翅も、スピードを殺すのに一役買っている。
じきに、ドラギラに追いつかれるだろう。
ルビーローズは目を凝(こ)らした。暗闇の湖底で、希望を探した。
発見できるかどうかは運次第。だが、ルビーローズ一味には、舞い込んだばかりの幸運が、ひとかけらあ

った。
遠くに平らな湖底が見えた。重い水がたまってできた水面だった。
湖の底に、もうひとつの湖があった。
ルビーローズが目指したのは湖底湖だった。淡水に海水が流れ込んで、比重の異なる水が上下に分離している。上の淡水湖と、下の塩水湖に分かれている。
分離したのは湖水が上下に循環しないからで、それは下層に空気が供給されないことを意味する。酸素は有機物分解によって使い果たされ、無酸素となっている。硫化水素の濃度が高くなり、硫酸呼吸をする細菌が繁殖している。
つまり、そこは。
硫酸の湖。
モンスターの死ぬ湖だった。
暗闇に希望は見つかった。ひとかけらの幸運が、紅月丸を湖底湖のそばまで連れてきてくれた。
しかし、舞い込んだ幸運はちっぽけなかけらだった。近くにつれてくるのが精一杯。
スクリューの壊れた潜水艇に、湖底湖まで伸ばす足

はなかった。
紅月丸の勢いが止まった。前にはもう、進まなくなった。
湖底湖にはまだ遠い。
「船体後部を放棄しますわ！」
伝声管に向かって、ルビーローズが宣言した。
「マジかよ！　おい！」
「まずいです！　早くここを出るです！」
「その前に道具を戻せっての！」
「急ぐです！」
船体が水平になったので、男ふたりはもう一度バーナーとポンプを収納庫から引っ張り出したところだった。
「ジェットパックのメタルホースを切断しなさい！」
伝声管から指示が飛んだ。
「ああん？　切ってどうするんでえ？」
「おいらにもわからないです！　とにかくやるです！」
「なんで切りゃあいいんでえ？」
「それで焼き切るです！」

チャパティはマハラの手を指さした。道具を戻そうとして、マハラはシンクロトロン・バーナーを持っていた。
「水密ゲートを開けて水を入れ、ハンマー・アクセルを使う！」
「うおーっ！」
「さすが、姐さん！　その手があったです！」
マハラは吼(ほ)え、チャパティはほめた。
思いも寄らない一手だった。
確かに、ゲートにはさまれてつぶれたホースを切って、船体後部を水没させると、ウォータージェット推進器が使えるようになる。船内に入ってきた水を直接吸い込んで増速し、ハイドロハンマーの筒先から噴射すれば、紅月丸は水中を走れるようになる。
それにしても、すごい決断だった。すでに浸水しているとはいえ、応急措置を優先したため、ルビーローズには状況が知らされていない。船体にプロペラが突き刺さり、放棄もやむなしの状態だとわかるはずがない。にもかかわらず、ばっさりと切り捨ててきた。
だから、マハラは吼えてチャパティはほめたのだが、

ルビーローズの次のひと言で、ふたりは沈黙した。
「湖底湖に突入する！」
硫酸の湖に潜ればどうなるか。
「……」
「……」
マハラとチャパティは顔を見合わせた。
「返事はどうした！　野郎どもっ！」
紅い薔薇の女がぶち切れた。
「合点承知！」
「はいです！」
男ふたりは返事が届くようにと、近場の伝声管に顔を向け、大声で答えた。
「どこで切りゃいいんでえ？」
バーナーを抱えたマハラは右往左往した。取水用のメタルホースは通路を這(は)っている。どこでも切れる。
「根元で切るです！　推進器のところです！」
そこらで切ると、ホースが壁や床に吸い付く恐れがある。壁も床も穴あきだが、流量が減る。
「だな！」
「おいらは先に行って、水密ドアを開けて待つで

す！」
「おう！」
ふたりは走った。
マハラはすぐに足を止め、壁のエキスパンドメタルをスライドさせて開け放したままのスペースに潜り込んだ。中にウォータージェット推進器を据え付けてある。
チャパティは突き当たりまで走った。水密ドアを開け、マハラを待つ間に伝声管の閉鎖作業を始めた。
船体後部が水に浸かると、伝声管も湖底の高い水圧にさらされる。水にも重さがあり、水面から積み重なった水が湖底ではぎゅうぎゅうに押しつぶされている。押された水は、縦にも横にも斜めにも逃げようとするから、すべての方向に等しく水圧がかかる。通路には天井があるから大丈夫というわけではなかった。
チャパティは伝声管の継ぎ手を引っこ抜いて分断した。それから、伝声管用の小さな隔壁を操作するハンドルを回した。
そこへマハラが走り込んできた。バーナーはその場に捨ててきたようで、手ぶらだった。

「こっちは俺様が閉めらぁ！」
「頼んだです！」
ふたりで競争するようにハンドルを回した。
先に閉まったのは小さな隔壁だった。
「お先するです！」
チャパティはマハラにひと声かけて、操縦室に向かった。
「姐さん！　伝声管は閉鎖したです！」
報告しながら、チャパティは操縦席に着いた。大事なターバンは、なぜだかルビーローズがかぶっていた。それでいて、かぶったことは忘れているらしく、ルビーローズは真剣な表情でチャパティに話しかけた。
「操縦は任せますわ。わたくしはハイドロハンマーを預かります」
「了解したです」
「姐御！　水密ドアはばっちり閉めたぜ！」
戻ってきたマハラは報告するなり、はっとして頭に手をやった。ターバンをかぶったルビーローズを見て、自分の制帽のことを思い出したらしい。大事な制帽は帽子掛けにかけたままだ。いや、通路を走っても目に

入らなかったから、墜落したときにどこかへ飛ばされたようだ。
いまさらどうしようもないので、マハラはあきらめて機関制御席に座った。
「水密ゲートを開きますわ！」
艇長席にあるレバーを操作して、ルビーローズは水密ゲートを開けた。
湖底の高圧な水が船内に押し入ってきた。船体のそこかしこに激流がぶつかった。衝撃は振動となって、船がふるえた。
雪崩（なだ）れ込んできた水に押されて、紅月丸が前に進んだ。前進するのに、ちょうどいい呼び水となった。
「ハンマー・アクセル！」
ルビーローズの操作と、ドラギラの襲撃は、ほぼ同時だった。
獲物に追いついた水中島の魔神は、黒いテントウムシに覆（おお）い被（かぶ）さった。広げた脚は、何本あってもキルリアン鋼の船体をすべる。上からはとても捕まえられないのだが、それでもドラギラは、のしかかるようにして押さえつけた。

そして長い体を活かして、湖底で脚を踏ん張った。泥の中に脚が埋もれてたいして踏ん張れなくても、脚の数だけは多いから、アンカーとして役には立った。

ドラギラの攻撃には、なんとしても前には進ませないとの気迫がこもっていた。逃がさないというよりも、湖底湖には行かせないという感じだ。さすがの魔神も、死の硫酸湖は恐ろしいと見える。

となると、なおのこと紅月丸は湖底湖に向かわねばならなくなる。そこにしか、身を潜める場所はないからだ。そこでしか、生き延びられないからだ。

浮こうにも、押さえつけられている。沈もうにも、下は湖底。スクリューは壊れた。船体後部を放棄してようやく手に入れたウォータージェットで、前に進む以外に道はない。

水中大砲から水が飛ぶ。砲口は真後ろに向けてある。船体に覆い被さった大ムカデの体に水が当たって、湖底の泥が巻き上げられた。

紅月丸もドラギラも、どちらも一歩も引かなかった。進む者も下がる者もいなかった。両者ともに、その場に釘付けとなった。力は互角だ。

ただ、時間がすぎてゆく。ただ、バッテリーが消耗してゆく。時間は無限に流れても、電気は無限に流れない。

「姐さん！　このままでは……」

「鞘翅、開け！」

ルビーローズはドラギラに勝るパワーを求めた。水中で鞘翅を開いてプロペラを回転させ、さらなる推進力を得ようとした。

「右のプロペラは折れてるです！　たぶん、左しか使えないです！」

チャパティは操作しながら、艇長に状況を伝えた。

「ハイパーテンション・チャージャーを使う！」

「だめです！　開かないです！」

鞘翅は開かなかった。のしかかったドラギラに押さえつけられている。

「ちっ！」

ルビーローズは自分でテレグラフハンドルを押し上げた。ひしゃげたスクリューを回してでも、前に進む力を得ようとした。

船底から異音が響いてきた。

音に反応したドラギラが、新たな攻撃を繰り出した。鋼鉄のモンスターに毒牙を突き立てたのだった。

正確には、牙ではなかった。大顎(おおあご)でもない。頭部に一番近い脚が顎(あご)のように発達した、顎肢(がくし)と呼ばれる器官だった。つまり、ムカデは脚ではさむだけで相手を咬むことができるわけだ。

元は脚でも、太くてするどい牙と化している。毒腺(どくせん)もある。とがった鉤爪が鋼のように黒光りしている。

ところが、咬んだ相手は本物の鋼でできていた。黒いテントウムシは鋼鉄のモンスターだ。硬さだけなら、最強。

マハラ特製のキルリアン鋼には、ドラギラの毒牙も通用しなかった。

「……」

そのマハラは潜望鏡をのぞいていた。

水中大砲の砲塔には攻撃用の潜望鏡がある。メンテのついでに武装を強化した改修作業で、後ろを照らすライトも取り付けてある。

潜望鏡が見せてくれたのは、泥水の世界だった。

湖底に堆積した泥が水流に巻き上げられている。流

されていっても、泥は途切れることなく舞い上がってきては、視界を殺す。透明な水はどこにもない。
時折、泥の薄いところに黄色い壁が見えた。大ムカデの腹だ。紅月丸に上から覆い被さって、まだ余った長い体が湖底に横たわっている。
「お！　そうか！」
突然、マハラは意味不明な声をあげた。なにかひらめいたようだ。
「姐御！　後部銃座でえ！」
「……銃座？」
ルビーローズの目つきが険(けわ)しかった。
マハラの話が見えない。水密ドアの向こうは、もう湖底だ。船内は高圧の水で埋め尽くされている。後部銃座には行けないし、行ったところで重機関銃が役に立つとは思えない。
「ムカデ野郎の腹が真後ろにあらぁ！　銃座を押し出せば、野郎にぶち当たって爆雷が弾けるぜ！」
「あっ！」
言われて初めて、ルビーローズは思い出した。重機関銃の三脚には、遅延発動型バーストの詰まった二個

の爆雷が装備されている。うまくいけば、あわせて六発の弾け花火をドラギラにお見舞いできる。
「やい、マッハ。やっぱ、おめえは冴えてるです」
少し前にほめられたお返しを、チャパティは忘れなかった。
「ったりめえよ。なんたって、この俺様は――」
「ハンマー・アクセル停止！」
ルビーローズはハイドロハンマーのトリガーから指を放した。マハラの自慢話に耳を貸す余裕はない。ついでに、スクリューはうるさいだけで役に立たないから、テレグラフハンドルも戻した。
進む力をなくした黒いテントウムシを、大ムカデが引き寄せた。紅月丸の船尾がドラギラの腹に密着した。
獲物が弱ったと見て、ドラギラはここぞとばかりに攻め立てた。鋼鉄のモンスターには毒牙が刺さらない。今度は目を狙った。硬くて透明なサファイアガラスにも毒牙は刺さらなかったが、キルリアン鋼とちがって傷が入った。
「衝撃に備えよ！」
ルビーローズはレバーを操作した。

水没した船体後部で、無人の銃座が動いた。通路の天井から伸びた二本のアームが、抱えていた銃座を船外に突き出した。

後部銃座はドラギラの腹にぶち当たった。重機関銃の銃身が折れ曲がり、二個の樽(たる)が押しつぶされた。

樽の中に仕込まれていた遅延発動型バーストが起爆した。弾け花火があわせて六発。全部まとめて一度に弾けた。

大ムカデの長い体が爆発の衝撃で持ちあがった。下のほうの脚は湖底から浮きあがり、上のほうの脚は紅月丸から離れた。水中島の魔神といえども、モンスターであることに変わりはない。リヴリーの技で直撃を食らって、ドラギラはダメージを受けた。

しかし、ダメージを受けたのは紅月丸も同じだった。船尾はドラギラの体に密着していたから、ほとんど船内で爆発は起こった。激しい衝撃が、紅月丸を襲った。

水圧に耐えるように設計されたのは船体であって、取り付けた装置類ではない。それでなくても船体後部は水没して湖底の高い水圧にさらされているのに、その上さらに、爆発の圧力まで受けたのではひとたまり

もない。
電池室の壁が抜けるように押し破られた。水が一気に流れ込んで、電池室を高い水圧で満たした。バッテリーセルが圧壊した。抜けた壁が直接当たって破壊されたセルもあった。
船体に突き刺さっていたプロペラは、爆圧で噴き出した水に押されて、すっぽ抜けた。おかげで、栓のなくなった大穴から圧力を逃がすことができたものの、バラストタンクの片方は排水不能となった。
爆発で発生した圧力を船体後部で受け止めた紅月丸は、突き飛ばされたように前進した。
ハッチへと延びる縦穴通路でなにかが大きく損傷したらしく、水が滝のように流れ落ちてきた。
「やべえ！」
マハラはハーネスを外して席を立った。浸水を止めなければならない。ただの水でも、放置すれば操縦室と制御室が水没する。狙いどおり、紅月丸が湖底湖に突入したなら、今度は有毒な水が入ってくる。
「前進！」
ルビーローズはハンマー・アクセルを作動させた。

ダメージを受けたドラギラの動きが止まっているうちに、なんとしても湖底湖にたどり着き、もうひとつの湖に潜航しなければならない。それ以外に助かる道はない。

「はいです！」

チャパティは操縦桿と潜舵、それに鞘翅を受け持った。

覆い被さっていたドラギラがいなくなったので、鞘翅が開いた。

開いたのは左側だけだった。右側は開閉機構が壊れている。鞘翅は折れて曲がって切れているし、プロペラは全損した。水中翼は脱落してもうない。

左の鞘翅でシュラウド・リングが起きた。シャッターが開いて、三枚羽根のプロペラが回り始めた。

水上用の、それも片羽（かたは）のプロペラ推進は微力で役には立たなかったが、プロペラ軸さえ回転してくれたなら、別の装置が動き出す。

「行くですーっ！」

コレクティブクラッチレバーを引き起こしたチャパティは、レバーの先端にある真っ赤なスイッチを押し

込んだ。
ハイパーテンション・チャージャーが稼動した。
プロペラ軸がプーリーを回した。プーリーはベルトを回した。水の中で黒いベルトがうなった。
ハイパーテンション・チャージャーは水の過給機だ。鞘翅のプロペラから動力を得ている。プロペラ軸がプーリーという円盤を回転させると、そのプーリーに噛ませてあるベルトが回って、マイクロ荷霊発電機が動き出す。霊子を帯びた特殊な電気が発生し、ジェットパックが吸い込んだ水を霊子レベルで圧縮。ウォータージェット推進器に強制的に送り込み、潜水艇を水面効果翼船に変貌させる。
潜水艇〈紅月丸〉は水中を飛んだ。
頼みの綱であるウォータージェット推進器は正常に動いた。水を吸い込み、インペラと呼ばれる特殊なプロペラで増速する機関だから、堅牢に造ってある。水圧にも爆圧にも壊れなかった。
幸いなことに、圧縮空気タンクには被害がまったく及ばなかった。実は圧縮空気タンクは船内にはなかった。紅月丸の船腹は内殻と外殻の二層構造になってい

る。ふたつの殻の間がバラストタンクになるのだが、そこに圧縮空気タンクは設置されていた。内殻の外側に固定してある。水圧にさらされる場所なのでタンクは耐圧仕様になっていた。内殻と外殻にはさまれているから、爆発の衝撃からも守られた。

圧縮空気タンクが無傷だったのに比べて、バッテリーは大きな被害を受けた。ただでさえ残量に乏(とぼ)しいのに、たくさんのセルが損壊(そんかい)した。

艇長席のルビーローズも、操縦席のチャパティも、バッテリーの残量計に視線を走らせた。レッドゾーン最後の目盛りが終わろうとしている。まだ残っていたはずの電力がセルごと失われて、残量はゼロに近い。

そして、浸水は膝下にまで達していた。

「マッハ！　状況を報告せよ！」

ルビーローズは大声で呼びかけた。浸水が止まらないようなら、硫酸の湖には突入できない。

「だいじょうぶでえ、姐御！　もう止まるぜ！」

マハラは先に回答してから、状況を説明した。

「ティアドロップ・マシンガンの配管が破裂しやがった！　どうせ、もう使わねえんだ！　おおもとの止水(しすい)

栓を閉めてるとこだぜ！」
「よし！」
ルビーローズの目が光った。
「これより、湖底湖に突入する！　潜航せよ！」
紅月丸はすでに潜航しているのに、ルビーローズはあえて潜航という言葉を使った。論理的には矛盾するが、感覚的には違和感がなかった。
窓の下には水面が広がっている。比重の異なる水が上下に分離して、ふたつの湖ができている。上の淡水湖は無色透明で、澄んだ水が空気のように見える。一方、下の塩水湖は赤黒い。
赤いのは、紅色硫黄細菌が繁殖しているからだ。
黒いのは、天然のヘドロ。泥の中の金属が硫化水素と反応して黒くなっている。ドブをさらえば真っ黒な汚泥が出てくるのと同じだ。
紅月丸は湖底の水面を突き破った。
ハンマー・アクセルのジェット水流が赤い煙を上げた。淡水湖の澄んだ世界が毒された。
赤い水に混じってどす黒いヘドロも巻き上げながら、紅月丸は深みへと沈んでいった。奇しくも、船体の力

ラーリングがちょうどいい迷彩となった。紅月丸は二紋型(にもんがた)のナミテントウを模(も)している。地色(じいろ)は黒く、シュラウド・リングとシャッターは赤い。黒いヘドロと赤い水にまぎれることができる。

偶然の迷彩が役に立ったのか、追いかけてきたドラギラは紅月丸を捕まえようとはしなかった。

それとも、ヘドロや湖水を警戒したのだろうか。紅色硫黄細菌は硫酸呼吸をしている。湖底湖の水には硫酸が含まれている。濃度まではわからないが、モンスターが死ぬ水であることはまちがいない。

その証拠に、水中島の魔神が追撃を断念した。

舞い上がったヘドロを避け、自分から距離を置いた。リヴリーの技で攻撃されて、怒り狂って追いかけてきたのに、湖底湖には近づこうとしない。

ドラギラは紅月丸の真上を通り過ぎてから、長い体を翻(ひるがえ)した。向き直って、少し離れたところで、死の湖に沈んでゆく獲物を見つめた。

紅月丸は湖底湖に逃れることに成功した。

だがそれは、安心も安全も意味しなかった。

ドラギラは去らなかった。湖水は有毒だった。

船体後部は水没し、バラストタンクは片肺。硫酸を含んだ水が、外からも中からも紅月丸を蝕んでゆく。

頼みのウォータージェット推進器も、とうとう止まってしまった。ついにバッテリーがあがったのだった。

船内の照明が落ちた。ヘッドライトも消えて、この世のすべてが闇色に塗りつぶされた。

すぐに予備電源が作動した。非常灯だけが再点灯した。予備電源に切り替わると、保護継電器が必要最小限の装置類にだけ電気を流す仕組みになっている。

バックアップのバッテリーは制御室にあった。水圧とも爆圧とも無縁だったが、供給できる電力はわずかだった。バッテリーの残量計は、メーターの針がほんの少し戻っただけ。目盛りひとつ分どころか、その半分にも届かない。

ルビーローズの指示で、チャパティはヘッドライトを再点灯した。

明かりをつけても、視界は闇に閉ざされていた。暗い湖底を漂う黒いヘドロが、光を吸い取った。どうやら、ヘドロの上層は水分を多く含んでいるようだ。意外にさらさらで、濁った水程度に見える。

軽い衝撃があって、沈降が止まった。紅月丸はヘドロに埋もれるようにして、湖底に沈座(ちんざ)した。

「ふう……」

マハラが吐息を漏らした。

作業を終え、はしごを降りる途中で、息を詰めて事態の成り行きを見守っていたのだった。

「ただちに点検せよ」

ルビーローズはハイドロハンマーのトリガーグリップから手を放した。

点検作業は仲間たちに任せて、ルビーローズは頭上の怪物を見張った。黒いベールの向こうに大ムカデが沈んでいる。いずれ獲物は浮いてくると確信しているのか、斜め上で待ち構えている。

武装モンスターであるドラギラの装備を、ルビーローズはつぶさに観察した。脚と脚の間に球形のガスホルダーが見える。シュノーケルも備えている。ひと目で潜水装置だとわかった。

ドラギラが泳ぐところをルビーローズは目撃している。平たい体を上下にうねらせて、それはみごとに泳いでいた。ろくに泳げない陸上モンスターとの判断は、

誤りだった。
ルビーローズは視線を船内に戻した。
腰をかがめたマハラが胸まで水に浸かっている。
「やい、お茶っ葉。鞘翅は閉じちまったほうがいいんじゃねえのか？」
「はいです。開いたままだと、浮上するときに水の抵抗が大きくなるです。羽は閉じたほうが賢明です」
「閉じるぜ、姐御？」
マハラは水中で大きなハンドルを握っていた。非常用の開閉ハンドルだ。電力を使わずに鞘翅や後羽を動かすことができる。
「お願いね」
ルビーローズが許可すると、マハラはせっせと水の中でハンドルを回し始めた。チェーンかなにかが回転する音と、空回りする音の両方が響いてくる。
「たぶん、右の羽は墜落時に壊れたです」
チャパティは状況を説明した。
「そのときに折れたプロペラが船体に突き刺さって、右のバラストタンクに穴があいたです。なので、そっちは排水不能です。浮上するときは横倒しになって、

左舷が上になるです」
「ほんとに浮くんだろうな？」
マハラは手といっしょに口も動かした。
潜水艇はバラストタンクに水を入れたり空気を入れたりして、浮力をコントロールしている。タンクを排水して、それでも浮上しなければ、もう二度と日光は拝めない。
浮上できない潜水艇は、ただの鉄の固まりだ。棺桶（かんおけ）に等しい。
「左のバラストタンクが無事なら、浮くです。でも、浮上はゆっくりになるです」
「それじゃ、話にならねえっつーの。のんびり浮上してる暇なんざ、ねえぜ」
「だいじょうぶですわ。ハンマー・アクセルで加速できますもの」
断言してから、ルビーローズはチャパティの顔を見た。
チャパティはうなずいた。ウォータージェット推進器は壊れたのではない。バッテリーがあがって止まっただけ。予備電源で再使用することは可能だった。

「問題はムカデ野郎でえ。脚の間にタンクみてえなのがあったぜ？」
マハラは潜望鏡でドラギラの装備を見ている。
「ありゃ、ボンベじゃねえのか？　モンスターのくせに、スキューバダイビングしてやがるんだよな？」
「そうね。それに、泳ぐのも上手でしたわ」
「生意気な野郎でい」
マハラは泳ぐのが下手だった。
「圧縮空気タンクは異常なしです。エアは充分にあるです」
チェックを終えて、チャパティが報告した。
「なら、このまま我慢比べってのはどうでえ？」
「だめです。エアがあっても、バッテリーはバックアップ分しかないです。時間がたてばたつほど、おいらたちが不利になるです。あと、湖水の硫酸濃度が気になるです」
「おいおい。俺様特製のキルリアン鋼をなめるんじゃねえ。ちっとやそっとじゃ、溶けやしねえっての」
「マッハの言うとおりです。船体は持つです。でも、ほかが持たないです」

「ああん？　ほかになにがあるんでえ？」
「いろいろあるです。圧縮空気タンクにパイプ。ベント弁にベント管も。どれも水に浸かっているです。全部がキルリアン鋼でできているわけじゃないです」
「そりゃまあ、そうだけどよ」
　マハラの手が止まった。開いた羽は手動でたたまれた。
「墜落の衝撃で損壊（そんかい）していたら、硫酸のせいで被害が拡大するです。最悪の場合、魚雷が暴発するです。おいらたちは自爆しておしまいになるです」
「げえ……」
「とりあえずは逃げ込んだけれど、態勢を立て直してすぐにも出撃ですわね」
「はいです。ここは危険すぎるです」
　チャパティは窓の外を見たついでに、窓ガラスに触れた。硬くて透明なサファイアガラスには、ドラギラの毒牙で付けられた傷がある。もしも割れたら、操縦室も制御室も水没する。
「使えるのは魚雷が二本だよな？」
　マハラは自分の席に戻った。

「そうですわね。機関銃も重機関銃も、もう使えませんわ。爆雷もハイドロハンマーも。エアカーテンやデコイ・シロップは、いまさら役に立たないでしょう。ですから、残っているのは魚雷が二本、ということになりますわね」

ティアドロップ・マシンガンは配管が破裂した。修繕したところで、ハッチを開けないと使えないし、使っても威力は知れている。マッハガンは銃身が曲がったし、爆雷の直撃を受けた。無傷だったとしても後部銃座へは行けない。

爆雷は使用済み。

ハイドロ・コンプレッサーを外した水中大砲は、ハンマー・アクセルとしての利用に限定される。

エアカーテンで身を隠さなくても、もっと強力な硫酸湖に隠れている。

船底に吊るしておいた新しいデコイ・シロップは、墜落時に脱落した。ルビーローズたちが知らないだけで、一度も使うことなく失っている。

残っているのは魚雷が二本だけ。増設した右の魚雷ランチャーに一本。テントウムシの口の中に一本。

「たった二本の魚雷で、ムカデ野郎と最後の大勝負かよ。こいつぁ、勝つしかねえぜ！」
マハラは固めた拳をもう片方の手のひらに打ちつけて、気合いを入れた。
「あら？　勝ち目ならありませんわよ？」
ルビーローズはあっさりと答えた。
紅月丸は満身創痍（まんしんそうい）だ。湖底に沈座（ちんざ）して、沈没状態にある。なんとか浮いたとしても、スキューバダイビングで自由自在に泳ぎ回るモンスターを相手に、水中戦をする力などない。戦って勝つことは不可能だった。
「姐さんの言うとおりです。勝てっこないです」
チャパティも素直に認めた。
「げえ……」
「バカね」
「おバカさんです」
「んだとぉ」
「勝つための戦いではなくってよ。浮上するための戦いですの」
「言い方を変えると、浮上すれば、おいらたちの勝ちです」

「でもよ。浮上したって、もうどこにも行けやしねえじゃねえか」
「ええ、そうね。……だからね、マッハ」
ルビーローズは言葉を切った。
そして、マハラの目を見つめて、続けた。
「紅月丸を放棄します」
「マジかよ……」
「……」
チャパティは口をつぐんだ。
「雷撃してドラギラの動きを止め、緊急浮上。船を捨て、空に逃れます」
ルビーローズには専用攻撃技の竜巻防壁がある。身を守りつつ、空中を移動できる。マハラとチャパティは呪文で小さくなれば、楽々運べる。いくら武装モンスターでも、ドラギラは空まで追って来れない。もしも飛べるのなら、わざわざメタルホースに絡(から)みついて、空中の紅月丸を引きずり下ろしたりはしない。
「くそっ……！」
紅月丸を捨てると聞かされたマハラは、制御室の壁を叩こうとした。

だが、すんでのところで思いとどまった。
「……すまねえな、おめえ」
叩くのではなく、なでてさすった。壁を、いや紅月丸を。
「頼むぜ。もうひとふんばりだ。俺様たちを日の当たるところまで運んでくれな」
マハラは物言わぬ紅月丸に語り続けた。
「そこでおめえとは、お別れだ。……あとはゆっくり眠んな」
苦労して建造した紅月丸だった。
発案したのはルビーローズで、設計したのはチャパティだ。資材の調達はマハラが受け持った。三人で力を合わせて、作り上げた。
船体の塗装が乾いたら、マハラはせっせと磨(みが)いた。初めのうちは傍観(ぼうかん)していたルビーローズとチャパティも、マハラの情熱が伝わっていっしょに磨くようになった。
紅月丸はいつもピカピカだった。
でも、いまはちがう。壊れて、ぼろぼろになっている。外も。中も。ぼろぼろ。

終わりのときがきたのだった。
天から授(さず)かった寿命を、天寿という。長く生きる者もいれば、短く死ぬ者もいる。
機械だって生きている。寿命という名の命がある。長く使える物もあれば、すぐに壊れる物もある。
潜水艇〈紅月丸〉は短く生きた。強く、激しく、機械の命を燃やした。ルビーローズと出会った。チャパティと知り合った。マハラにきれいにしてもらった。ゲンゴロウと争い、アメンボから逃げ、暗い洞窟に飛び込んだ。星の墓場を見た。燃える蝶も見た。湖底で輝く真珠も眺めた。潜水艇なのに、水上を走って、空まで飛んだ。
ひと夏の冒険だった。
ひと夏の命だった。
波のない湖底湖で、紅月丸がぶるんとふるえた。
最後に仲間を救って、散る。思い残すことはなにもないぞと、鋼鉄のモンスターが語った。
「作戦を説明するわ」
ルビーローズが切り出した。
「浮上作戦その一。ジェット魚雷でドラギラを攻撃し

ます」
　魚雷ランチャーには試作品の新型魚雷が残っていた。スクリューの代わりにノズルがついている。取水口から吸い込んだ水をインペラで増速して噴射する、ウォータージェット式を採用している。雷速は高速だ。
「自走式で発射しますから、初速は遅く、泳ぎの達者なドラギラにかわされる可能性が高いでしょう」
　ジェット魚雷を納めた魚雷発射管は、ただの鋼管(こうかん)だった。後部は閉鎖されていない。魚雷を射出する機構がないから、圧縮空気式でも水圧式でも撃ち出せない。魚雷は自分自身の力で走り出す。
「かわされてもかまいませんわ。だって、戻ってくる魚雷ですもの」
　ジェット魚雷にはジャイロブーメランが搭載されていた。当たらなければ、律儀(りちぎ)に帰ってくる魚雷だ。後ろからドラギラを攻撃できる。ただし、それもかわされたなら、紅月丸に命中することになる。発射したときは遅くても、帰ってくるときは高速なのだから、かなり危険だ。
「幸い、敵は長い体を持っています。帰ってきたジェ

ット魚雷が、わたくしたちには当たらないように、でもドラギラには当たるように、発射後に少しだけ移動します。帰りもかわされたなら、ジェット魚雷は湖底に命中するでしょう。それはそれで好都合ですわ。爆発でヘドロが舞い上がって、紅月丸を隠してくれますもの」

「ってぇことは、斜め上に向かって魚雷発射ってことだな。ムカデ野郎が真上にいたんじゃ浮上できねえし、真横にいたんじゃ魚雷は湖底に当たらねえ」

「そうね」

「当たってもよし。外れてもよし。さすが姐御だ。よく考えてあらぁ」

マハラは無邪気に感心した。

「ジェット魚雷が命中したら、どうするです？　命中しなくて湖底で爆発して、舞い上がったヘドロに隠れたとして、そのあとどうするです？　外れた魚雷がヘドロに埋もれて爆発しなかったら、どうなるです？」

チャパティは立て続けに質問した。

「命中してもしなくても、爆発してもしなくても、作戦その二に移行します。最後の魚雷でドラギラを攻撃

します」
「魚雷は使い切っちまおうってんだな？」
マハラの問いに、ルビーローズはうなずいた。
「まあ、大事に取っといてもしょうがねえか。それに使っちまったほうが、船体も軽くなるってもんでえ」
「これで、攻撃手段はなくなりました。結果にかかわらず、あとは浮上するだけ。作戦その三。緊急浮上します。ハンマー・アクセルも使って、持てるすべての力をふりしぼって、水上に出ます。デコイ・シロップも使いますわ」
船底に吊るしたデコイ・シロップならもうないのだが、ルビーローズは知らない。
「浮上後、マッハはハッチを開けて周囲を警戒。続いてチャッパが脱出します。しんがりはわたくしが務めますわ」
「あっ、いっけねえ！　すっかり忘れてたぜ！」
マハラは自分の額を軽く叩いた。
「制帽なら、あきらめなさい」
先手を打って諭すと、ルビーローズはターバンをチャパティに返した。ずっとかぶったまま、すっかり忘

れていたのだった。
「そうじゃねえって。ハイドロハンマーにこびりついてた水中島の膜をよ、切り落としてビンに入れたじゃねえか。そのビンだけどよ……」
握った拳で親指を立て、マハラは後ろを指した。
水圧を無力化する不思議な膜をせっかく採取したのに、肝心のビンは船体後部に収納したまま置き忘れてきたのだった。
「あきらめるです」
チャパティはようやく返してもらったターバンをかぶった。
「でもよ……」
「後(あと)で悔(く)やむと書いて、後悔(こうかい)と読むです。前もって後悔することはないです。おいらたちはまだ、助かったわけじゃないです。悔やむのは、無事に帰投してからにするです」
「そうね。ビンは墜落したときに割れたと思いましょう。いまはとにかく、浮上と脱出。そしてその前の攻撃に、専念することですわ」
「しゃあねえ。そうすっか」

マハラは納得した。浮上した後に船体後部を排水する余裕があるわけもなく、あきらめざるを得なかった。
「念のため、酸素マスクを着用するです」
「ああん？　なに言ってんだ、おめえ。なんでマスクがいるんでえ？」
「窓ガラスが粉砕（ふんさい）される恐れがあるです」
「おいおい。サファイアガラスだぜ？」
「ダメージがかなり蓄積（ちくせき）しているです。墜落時の衝撃があるです。ドラギラの毒牙で傷をつけられたです。その傷に硫酸が染み込んだです。湖底の水圧もかかっているです。このあと、魚雷が爆発して衝撃波を浴びるです。爆発による水の圧力も受けるです。それから緊急浮上するので、今度は水圧が一気に下がるです。なので、硬いサファイアガラスも割れて砕（くだ）ける恐れがあるです」
「げえ……」
「水中で窓が割れたら、おしまいね。でも。だからといって、備えを怠（おこた）るのは愚（おろ）かですわ。チャッパのアドバイスに従って、酸素マスクをつけましょう」
ルビーローズは天井に手を伸ばすと、パネルの留め

具を外した。パネルが下に開いて、中から酸素マスクが落ちてきた。
顔面をすっぽり覆うフルフェイスタイプのマスクだった。水中でも視界を確保できるし、付けたまま会話もできる。肝心の酸素は、パネルから伸びたチューブで届けられる。
マスクを顔に当てると、ルビーローズはバンドを後頭部に回した。アカゲパキケには立派な角があるので、上からすっぽりかぶるというわけにはいかなかった。
マハラはなんの苦労もせずに、片手で気軽にかぶった。
長い鼻がある割に、チャパティも苦労しなかった。鼻は上手に丸めている。
「では、浮上作戦を開始します」
仲間たちが酸素マスクを付けたのを見届けてから、ルビーローズは正面を向いた。
「メインタンク・ブロー」
左右のバラストタンクにエアが送り込まれた。
ヘドロに埋もれる形で湖底に沈座(ちんざ)していた潜水艇が、ゆっくりと浮き上がった。船体は大きく傾いている。

浮いたのは左舷だけで、右舷は沈んだまま。右のバラストタンクには穴があいているから、エアが抜けて排水はできない。

重い右舷を、軽くなった左舷が引っ張り上げた。

紅月丸は横転した状態で湖底を離れた。

船内の水が右舷に集まっている。横向きに座るマハラは真下を向いた状態となった。目の前の水面とにらめっこをしている。チャパティは頭を斜めに起こして、ターバンがずり落ちないように工夫している。

「魚雷発射口、開け」

「合点承知！」

黒いテントウムシが口を開けた。

「前部トリムタンク排水。紅月丸の頭を上げよ」

「はいです！」

右に傾いていた船体が後ろにも傾いた。操縦室にあった水が制御室に流れた。

「魚雷発射口を敵正面へ」

船首を上げただけではドラギラを狙えなかった。スクリューのひしゃげたポッド推進器は役に立たないから、船体の向きを変えるにもハンマー・アクセルに頼

るしかない。
チャパティは水中大砲のアクセルを吹かしながら、砲塔を動かし、射角を調整した。水を吸って重い船体が少しずつ向きを変え、紅月丸はターゲットを捉(とら)えた。
ドラギラは淡水湖に沈んだまま、ほとんど動かない。時折、脚が蠢(うごめ)く程度だ。
「覚悟はよろしくて？」
ルビーローズは仲間たちを見た。
「いつでもどうぞです」
「聞くまでもねえぜ」
ルビーローズの隣に座るチャパティが答え、その後ろに座るマハラが答えた。チャパティはこんなときでも眠そうな顔をしている。笑顔が地顔のマハラはにやけている。
「撃ちますわよ！」
ルビーローズはジェット魚雷の発射スイッチをひねった。
メンテで後付けした発射装置は、ポッド推進器のバックアップコードに接続されている。スイッチをひねれば、魚雷に信号が届く。

だが、なにも起こらなかった。スイッチをひねっても、魚雷は発射されなかった。モーター音も響いてこない。

ルビーローズはスイッチを戻して、もう一度ひねった。操作を繰り返して乱暴に動かしてもみたが、結果は同じだった。

ジェット魚雷は撃てなかった。

「……だめですわね」

「なんでえ？　試作品だから、ぶっ壊れちまったのか？」

「それは関係ないと思うです。墜落の衝撃で、魚雷ランチャーが脱落したか、魚雷が発射管から抜け落ちたか、コードが切れたかしたです」

チャパティの推測は当たっていた。

ドラギラが紅月丸を水面に叩きつけたときに、コードがちぎれたのだった。コードの大部分はメタルテープで船体に貼り付けてあったが、貼られていないところにかかった水圧でコードは引っ張られた。メタルテープごと船体から引き剥がされ、ポッド推進器に穴をあけて取り付けた防水端子のところで切断されたのだ

った。
「浮上作戦その二に移行します」
ルビーローズは冷静だった。
使えない魚雷を嘆(なげ)いていてもしかたがない。それに魚雷はまだ残っている。雷撃して敵の足を止めるという手段が絶たれたわけではない。
「これが最後の魚雷ですわ。わたくしたちが浮上するためには、絶対に当てなくてはなりません。しっかりと引きつけてから、撃ちます」
「最後のは遅延発動型バーストが同時爆発するです。全部で九発あるので、かなりの衝撃になるです」
チャパティが念を押した。
「魚雷、発射用意」
「おうよ」
マハラは魚雷発射管制盤を操作した。
「雷速最大。あとは調整しねえぜ」
確実に命中させるため、充分に引きつけてから撃つことになっている。射角などの細かい調整は不要だった。
マハラは管制盤のT字型レバーをひねった。魚雷発

射管の安全装置が解除された。
「いつでも撃てるぜえ、姐御」
「チャッパ。魚雷発射口を向けたまま、ゆっくりと浮上して」
最後の魚雷は帰ってこない。ジャイロブーメランは搭載されていない。かわされたらそれっきりなのだから、斜め上を狙う必要はなかった。逆に、ドラギラが上にいたほうが不利だ。横か下にいてくれたほうが、その分早く浮上できる。
「了解したです」
「マッハはそのまま待機」
「合点でい」
黒いテントウムシがのそりと動いた。湖底湖からの浮上を開始した。船体は右に傾き、船尾は下がっている。右舷の羽は開閉機構が壊れているから、折れて曲がった鞘翅が勝手に開いている。
みすぼらしい姿だった。船体には穴があいているし、水密ゲートを開けたので船体後部は水没している。後部銃座は形が変わっていびつになっている。
だが、無残な外見とは裏腹に、鋼鉄のモンスターは

戦闘態勢にあった。傷ついた目で大ムカデをにらみ、最後の魚雷で戦いを挑もうとしていた。
一擲乾坤を賭すという言葉がある。乾は天。坤は地。すべてを擲って、天を掴むか、地に塗れるかの大勝負だ。
「だいじょうぶですわ。わたくしがついていますもの」
ルビーローズは、生きるか死ぬかの勝負に臨む男たちの緊張をほぐそうとした。
船尾が持ち上がって、後ろに集まっていた水が前に流れてゆく。船内に小さな波が立っている。
「姐御、それじゃ盛り上がらねえって」
水に足を洗われながら、マハラがごねた。
「姐さんらしく、ズバッといくです」
チャパティまでリクエストしてきた。
「あらあら。困りましたわね」
「姐御ぉ」
「姐さぁん」
男たちが鼻を鳴らしている。
「……野郎どもっ！」

ルビーローズはあきらめた。やさしい言葉をかけて緊張をほぐそうなんて、よけいなお世話だった。
「ぬかるんじゃないよ！」
「おおうっ」
「はいですっ」
ルビーローズは伝説の女博徒だ。
その名はいまも、裏社会で語り継がれている。博打とケンカが得意で、命を張った大勝負は御手の物。
紅い薔薇の女がいる限り、男たちが敗北を恐れることはなかった。
「湖底湖を出るです」
紅月丸は死の湖から浮上した。赤い水を割って、透明な淡水湖に顔を出した。
ドラギラが動いた。
平たい体を上下にうねらせて、水中をすべるように泳ぎ、襲いかかってきた。
ルビーローズは待った。
襲いかかってきた敵を、じっくりと待ち受けた。
大ムカデが泳いでいる。長い体を波打たせて上手にスイミングをしている。ルビーローズは気づいていた。

ドラギラの頭が上下していることに。頭部を固定して胴部を振るのではなく、体全体を波打たせている。頭は無駄に動いている。

泳ぎが得意に見えても、そこはやっぱり陸上モンスターだった。

「撃ちな！」

ドラギラの頭が下がる瞬間を、ルビーローズは狙った。

「喰らいやがれっ！」

マハラが魚雷を発射した。

魚雷発射管に充満したエアが勢いよく魚雷を押し出した。

ドラギラは下がった頭を上げた。そのまま、のけぞるようにして大事な頭部を持ち上げ、守ろうとした。その動きで、前に進んでいた体がぴたりと止まった。のけぞったせいで胸が反り、反った胸が壁となって水を押した。ブレーキがかかったのだった。

魚雷が命中した。

九発の遅延発動型バーストが全部まとめて爆発した。激しい衝撃波が紅月丸を襲った。操縦室の窓ガラス

にひびが入った。爆圧が紅月丸を突き飛ばした。
サファイアガラスは割れなかったが、窓の外の泡でなにも見えなくなった。
「浮上ーっ！」
ルビーローズが叫んだ。
魚雷を当てる勝負ではない。本当の戦いはここから始まる。
重い船体が浮かび上がってゆく。明るい水面をめざして昇ってゆく。
潜水艇〈紅月丸〉の、これが最後の浮上だった。

2

船体は横倒しだった。
左舷が完全に上を向いている。
大穴があいているから、右のバラストタンクに放出したエアはどうしても抜けてしまう。水が詰まったままの重い右舷を、軽くなった左舷が引っ張り上げていた。
操縦室と制御室にもエアがあるので、船首は上向き

になっていた。水没した船尾が垂れ下がる形だ。
それだけは浮力が足りなかった。浮き上がりはするものの、上昇スピードに欠ける。ドラギラに追いつかれてしまう。
ハイドロハンマーが力を添えた。砲口から水を噴射して、重い船体を押し上げてくれた。
バッテリーの残量を気にする者はいなかった。圧縮空気タンクの残りも心配しなかった。ただひたすら、水面をめざした。
浮上さえできれば、勝負はルビーローズ一味の勝ちだ。あとはハッチから脱出するだけ。
魚雷に詰め込んだ遅延発動型バーストで、弾け花火九発分の攻撃をドラギラにお見舞いした。受けたダメージからの回復が少しでも長引くことを祈って、一味は見えない空を見上げた。
ひび割れた窓の向こうに空はある。積み重なった黒い水の彼方では、いまこの瞬間も、夏の日差しが湖面を焼いている。
横倒しになった船内では、左舷に座るルビーローズが一番上になっていた。窓の外は暗いが、息をひとつ

吐くたびに、軽くなった紅月丸が浮き上がる。
「だいじょうぶ、おいらたちは潜水艇です。一気に浮上しても問題ないです。でもドラギラは、潜水器具を使って生身でスキューバダイビングをしているです。なので、急浮上すると減圧症になるです」
チャパティは頭を斜めに起こしていた。紅月丸は横転しているから、頭をまっすぐにするとターバンがずり落ちる。
「潜水病ってやつだな」
マハラは水面とにらめっこだ。下になった右舷には水が溜まっている。船首が上向きなので、マハラのいる制御室に集まっている。顔が水に浸かっても、溺れる心配はなかった。フルフェイスの酸素マスクを着用している。
「はいです。すぐに追いつかれることはないです」
「浮上したら俺様の出番でえ。出口の安全はばっちり確保してやるぜ。アメンボがいようが、ヤンマがいようが、もう関係ねえ。片っ端からぶっ飛ばしてやらぁ。マッハ・ハンマーでな」
マハラは沈んでいた右腕を水の上に突き出して見せ

たが、前に座るふたりの視野には入らなかった。
「……」
ルビーローズは無言だった。
窓の外の暗さを確かめてから、深度計を指でつついた。そしてまた、ひび割れた窓に視線を向けた。
「姐さん、どうかしたです？」
「深度計が壊れていますわ。マッハ、そちらはどうかしら？」
「ちょい待ち」
マハラは目の前の水面に顔を突っ込んだ。
計器類は制御室の壁に取り付けてあるから、水の下だ。
「だめだ、姐御。こっちも壊れてやがらぁ。メーターの針が正しけりゃ、そろそろ水面でい。こんなに暗(くれ)えってのによ」
「あら？　こちらもそうよ？」
ふたつの深度計がそろって同じ壊れ方をするとは考えにくい。むしろ逆に、計器がふたつとも同じ表示なら、それは正確なのだと判断できる。
「……深度計は壊れてないと思うです」

チャパティは顔を上げて、ルビーローズを見た。
艇長席は操縦席の左横にある。傾いた船体は左舷が上になっているから、ルビーローズはチャパティの真上にいる。その後ろにはひびの入った窓ガラスがあって、窓の外の黒い水は青い空に続いている。
だが、青い色は目に入らなかった。代わりに、黒い色が飛び込んできた。黒い水の中に、黒い固まりがあった。
「危ないです！」
チャパティの注意がルビーローズに届く前に、黒い固まりがサファイアガラスに激突した。
浮上する紅月丸が、浮遊する物体にぶつかったのだ。すでにひびの入っていた窓ガラスは、ひびが全面に広がって真っ白になった。
ルビーローズは驚いて振り返ったが、窓は白く、なにがぶつかったのかはわからなかった。
それでも、ただごとでないと悟った。激突は一度で終わらなかった。船体のそこかしこから、ぶつかる音が響いてくる。
「なにごとでえ！」

マハラの問いに答えられる者はいなかった。
衝突音はすぐにやんだ。同時に、浮上も止まった。上昇している感じはもうしない。それどころか、水面で揺れている感じすらしない。船体が固定されている。
ルビーローズ一味は、全員が深度計に目を走らせた。メーターの針はゼロを指している。つまり、紅月丸は浮上したのだ。艇長席の白い窓ガラスも太陽に照らされて明るくなっている。
チャパティは操縦席の窓を見た。下を向いた窓の外は黒一色。なにも見えなかった。
「とにかく！」
ルビーローズが叫んだ。
「脱出しましょう！」
「よくわかんねえが、やるこたぁやるぜ！」
マハラは酸素マスクを脱ぎ捨てると、ハーネスを外した。
ハッチを開けて安全を確保するのが役目だ。床は垂直に近かったが、天井の配管をつたって登った。ハッチへと続くはしごに手が届くと、あとは簡単だった。縦穴通路はいまや横穴になっている。すんなりとハッ

チにたどり着いた。
マハラはハッチを開けた。
外の世界が見えた。黒い地面がどこまでも広がっている。ごつごつとした岩だらけの地面だ。
いや。岩ではなかった。
地面は動いた。そこら中で蠢(うごめ)いていた。岩だと思ったものが顔を上げてマハラを見た。アリだった。
紅月丸は、艦隊アリが群れて作ったいかだを突き抜けて浮上したのだった。
少し離れたところに小山があった。アリがたかっている。黄色と黒の縞模様(しまもよう)をした棒が突き出している。トンボの腹部だった。おそらくは、羽をもがれて飛べなくなったヤンマ・ファイターだろう。墜落した空の王者は、いかだの上に引きあげられて、艦隊アリの餌食となっていた。
リヴリーの姿を見つけたアリたちが、いきりたって押し寄せてきた。
「げえ……」
マハラはあわててハッチを閉じた。
頑丈なハッチの向こうから、船体をかじる音が聞こ

えてくる。モンスターが大顎(おおあご)で攻撃を仕掛けている。
浮上さえできれば、勝負はルビーローズ一味が勝つはずだった。ハッチから脱出して、それでおしまいとなるはずだった。
ところが、そううまくはいかなかった。よりにもよって、艦隊アリがいるところに浮上してしまった。紅月丸はアリの群れに乗り上げた状態になっている。だから波に揺られることもなく、船体が固定されている。
マハラは安全の確保に失敗した。マッハ・ハンマーで攻撃するには数が多すぎた。あたり一面全部モンスターなのだから、どうにもならない。
魔神の追撃を振り切って湖底から浮上してきたというのに、一味は脱出できなかった。
「ちくしょう！　艦隊アリがいやがる！　外に出られねえ！」
「姐さん！　艦隊アリです！」
チャパティははしごに手をかけたところだった。マハラの叫びを、下で待つルビーローズに伝えた。
「そう。ラッキーですわ」
脱出不能だというのに、ルビーローズはさらりと受

け流した。
「マジかよ！　姐御！」
マハラが横穴から顔を出した。
「もちろんですわ。紅月丸は艦隊アリに捕まったのでしょう？　だったら、もう沈没の心配はいりませんわね」
ルビーローズは機関制御席に手をかけて、仲間たちを見上げた。チャパティがマハラに引っ張り上げてもらっている。
「……いや、まぁ、そりゃそうだけどよ。でも、出られねえんだぜ？」
「すぐにドラギラが浮上してきますわ」
「だったら、よけいにやべえじゃねえか」
「いいえ。ドラギラに気づいたら、艦隊アリは逃げ出しますわよ？」
「そうか！　そこで脱出すりゃいいんでえ！」
「そういうことですわ。どう？　なにも問題はないでしょう」
「全然問題ねえぜ。なあ、お茶っ葉」
マハラはチャパティの肩に腕を回した。男ふたりで

横穴に並ぶと、かなり窮屈(きゅうくつ)だった。
「まあ、なんだな。苦労してムカデ野郎から逃げてきたってぇのによ。今度は来てもらわねえと困るってんだから、皮肉なもんだぜ」
「では、マッハはハッチのそばで待機。チャッパはそこで、マッハとわたくしのバックアップをお願いね」
「姐さんはどうするです？」
「わたくしは、不測の事態に備えてここにいますわ。なにか起きたら、すぐに操縦できないと困るでしょう？」
「了解したです」
「じゃ、俺様は行くぜ」
マハラは顔を引っ込めた。
役割の分担に変更はなかった。マハラは最初に脱出し、出口の安全を確保する。次に脱出するのはチャパティで、それまでは仲間ふたりの中間にいて、どちらにも加勢できるようにする。艇長のルビーローズは最後まで船内に残り、必要とあれば操縦する。
ルビーローズは操縦席に向かった。船体は傾いたままだ。上にある艇長席にわざわざ登る必要はない。

船内に溜まった水をかきわけていると、急に暗くなった。見上げれば、ひびで真っ白になった操縦席の窓ガラスに黒い影が落ちている。リヴリーを目撃したアリたちの興奮が仲間にも伝染して、一斉にたかり始めたのだった。

艦隊アリの大顎(おおあご)も鋼鉄のモンスターには通用しなかった。群れて咬みついたところで結果は同じ。船体のキルリアン鋼には傷ひとつ入らない。ただし、群がってそこら中に咬みついたため、容易に弱点を探り当てることができた。

紅月丸の弱点。それは、ひび割れて強度が失われたサファイアガラスだった。特に、浮上するときに上を向いていた左舷の窓ガラスは、アリとの激突で全面にひびが入っている。

その窓が破られた。硬くて透明だったサファイアガラスも、いまは真っ白で紙のようだ。黒い大顎(おおあご)で簡単に切り裂かれてしまった。

操縦室に穴があいた。巨大な昆虫がのぞき込んできた。中には、赤いリヴリーがいる。

アリの興奮がさらに高まった。傾いていた船体を引

き倒そうとした。しかし、反対側のアリが逆らって、引き戻した。横倒しの紅月丸は左右に揺さぶられた。

ルビーローズは機関制御席まで後退した。窓ガラスが割られても、恐れる必要はなかった。艦隊アリはモンスターだ。窓から入ってくるにはでかすぎる。ルビーローズはハーネスをつかんで座席から引っ張り出すと、腕に絡(から)めた。

窓を破ったアリは船底側にいた。リヴリーを目撃したのは一匹だけ。それに対し、ハッチ側のアリたちは複数がリヴリーを目撃している。綱引きはハッチ側が勝利した。

横倒しだった紅月丸はハッチ側に倒されて、天地がひっくり返った。船内の水が縦穴通路に流れ込んだ。

両手ではしごを握りしめていたチャパティは頭から水をかぶった。ターバンが流された。

通路が水没してハッチは水の底となったから、マハラがあわてて浮かび上がってきた。

ルビーローズは座席につかまって上にいる。いまは床が天井だ。

「姐さん！」

「だいじょうぶですわ！」
「くそっ！　これじゃ外に出られねえ！」
予定では、ハッチから脱出することになっていた。艦隊アリに捕まっていても、ドラギラが浮上してくればアリは逃げる。捨てられた紅月丸は水面を漂(ただよ)うことになるから、ハッチを開けて空に逃げる手はずだった。
ところが、紅月丸は転覆(てんぷく)させられた。ハッチが真下になった。これでは水面を漂っていても脱出できない。ハッチを開けるとそこは水中だし、窓を破られたので水が一気に入ってくる。
水密ドアから船体後部に逃げようとしても、状況は変わらない。ドアにしろハッチにしろ、開けてしまえば水が吸い込まれてくる。船内の空気は破れた窓から抜けてゆく。そうなれば、入ってくる水の勢いに負けて外には出られない。満水を待ったのでは手遅れだ。操縦室に制御室まで水没した紅月丸は、浮力をなくして沈没するだろう。
「窓から出るしかねえか？　いや、待てよ？　窓からだって水は入ってくるぜ？」

マハラが自問自答している。
「ちくしょうめ！　どうやったって沈没するじゃねえか！」
「沈没しないです」
「ああん？　なに言ってんだ、おめえ。ムカデ野郎が来たら、俺様たちは湖に落っこちるんだぜ？　そうなりゃ、いやでも窓から水が入ってくるじゃねえか」
「水は入ってくるです。でも、沈没しないです。ちゃんとハッチから出られるです」
「逆さまになったってぇのにか？」
「設計したおいらを信じるです」
チャパティは縦穴通路のふちに腰掛けた。どうやら自信があるようだ。その場しのぎの気休めには見えなかった。
「よおし。そんなら、おめえに任せた。相変わらず、肝の据わった野郎でい」
マハラは水没した縦穴でふんぞり返った。肩まで水に浸かり、ふちに足を乗せている。まるで風呂にでも入っているかのようだ。
座席につかまっていたルビーローズが、いまは床と

なっている天井に飛び降りた。
一味はあきらめなかった。脱出には失敗したが、少なくとも身の安全は確保されている。鋼鉄の船体がバラされる恐れはない。あとは大ムカデの浮上を待つばかり。
ドラギラの追撃を疑う者はいなかった。水中島から脱出したときに、一度は撤(ま)いた。ドラギラは真上に浮上し、紅月丸は移動しながら斜めに浮上した。互いの姿はまったく見えないほど、遠く離れた。それなのに、ドラギラは追いかけてきた。実に執念深い魔神だった。
そして、いまは真下にいる。弾け花火で攻撃されてもいる。怒りに燃えて、追ってくるに決まっていた。
割れた窓から触角を突っ込んでいたアリの動きが止まった。船体をかじる音も、ぱたりとやんだ。騒音が消えると、あまりの静けさに時の流れが止まったように感じられた。
だが、遠くからざわめきが流れてきて、紅月丸にたかるアリたちに取り憑いた。
艦隊アリは総撤退(そうてったい)に移った。自分たち自身の体で作ったいかだが分裂した。右に逃げ、左に逃げて、艦隊

はばらばらになった。
紅月丸は水面に投げ出された。
「おいでなすった！」
ふんぞり返っていたマハラが体を起こした。
破られた窓から水が入ってきた。しかし、すぐに船体後部が沈み込んで、船首は持ち上がった。操縦室は水面より高くなって、水は入ってこなくなった。
「なるほどな。おめえの言ってたのは、こういうことかよ」
「はいです。水密ゲートが開いたままなので、船尾が先に沈むです。船首は上になるです」
「でもよ。ハッチは使えねえぜ？　窓から脱出するのかよ？」
紅月丸は依然（いぜん）として転覆した状態だった。船尾が沈んで船首が持ち上がっているものの、裏返しのままだ。縦穴通路には水が溜まっている。ハッチを開けると、まるで水洗トイレのように流されてしまう。
「次は右舷が沈むです。穴のあいたバラストタンクに水が入るです。紅月丸は左肩が上がった状態になって、ハッチに溜まった水は出ていくです」

「そりゃいいんだけどよ。早いとこ逃げねえと、ムカデ野郎がやってくるっつーの！」
「こないです」
「おい……！」
「水面にはアリの艦隊がいるです。たくさんの群れです。それがいっせいに逃げ出して、大騒ぎです。ドラギラが一発でおいらたちを見つけられるわけがないです。注意は動くものに向けられるです。動かないおいらたちは目立たないので、すぐには見つかりっこないです」
右舷が沈み始めた。黒いテントウムシの左肩が上がってゆく。縦穴通路が斜めになって、溜まっていた水が抜けてゆく。
「おお……」
マハラは感嘆（かんたん）の声を上げた。知恵袋の言ったとおりだ。
「さすがですわね、チャッパ」
ルビーローズがほめた。
「水がなくなったら、ハッチを開けりゃいいんだな？」

「だめです。ハッチの外は水面ぎりぎりか、下手をすると水中になるです。なので、開けたら沈没するです」
「おいおい。それじゃ、なんにも変わらねえじゃねえか。やっぱり窓から脱出するのかよ？」
「急ぐなら窓から出てもいいです。でも、ちょっと待てばひっくり返って元どおりになるです。ハッチは上を向くです」
「ははーん。俺様にもわかったぜ。きのう、おめえが転覆させたときと同じようになるってんだな。船底のほうが重いから、そっちに倒れるっつーことよ」
「はいです」
左肩が上を向いた船体は、そのまま動き続けた。重いほうへと傾いて、船底が下になった。
転覆状態で水面に投げ出された紅月丸は、自然に復元したのだった。
船体後部と右舷バラストタンクに浸水したから、重心は右後方に偏（かたよ）っている。破られた窓は左前方にあるから、水面より高く持ち上げられている。水は入ってこない。

縦穴通路はやや傾斜しているが、ハッチは上にある。開ければ、空へと続いている。
「姐さん」
チャパティは艇長の指示を仰いだ。
「脱出せよ」
ルビーローズは静かな声で命令した。
「おっしゃあ！」
景気づけにひと声叫ぶと、マハラははしごを駆け上がった。
ハッチを開け、臨戦態勢で外に出た。敵はいなかった。艦隊アリは四方八方に逃げ散っている。遠ざかってゆく黒いモンスターの姿はあっても、向かってくる者は見当たらない。居残っている者もいない。夏の空は真っ青で、敵機も飛んでいない。
ドラギラはいなかった。どこを泳いでいるのか知らないが、いまが好機だった。
「問題ねえ！　上がってこい、お茶っ葉！」
マハラは船内に声をかけた。
紅月丸は沈みかけだから、水面はハッチのすぐそばにあった。寄せてきた波が船内にこぼれ落ちた。

「はいです！」
顔を上げたチャパティの顔に水がかかった。両手ではしごをつかんでいたハナマキは、長い鼻を使って額（ひたい）の水を切った。
ルビーローズは機関制御席から離れた。紅月丸を操る必要はもうない。あとは、一刻も早く外に出るだけ。じゃぶじゃぶと水音を立てて、ルビーローズははしごに急いだ。
怪物密林のど真ん中にある危険な湖を、泳いで渡るわけにはいかない。水中にはゲンゴロウがいる。水面にはアメンボがいる。空にはオニヤンマがいる。それらのモンスターが近くにはいないのだとしても、艦隊アリがいる。その艦隊アリが逃げ出した以上、水中島の魔神は必ずそばにいる。
泳いで逃げるのは論外だった。空へと、飛んで逃げねばならない。しかし、マハラもチャパティも飛行呪文は持っていない。空を飛べるのはルビーローズだけ。
はしごをつかんだルビーローズは顔を上げた。
マハラに引っ張られて、チャパティがはしごを登り切った。

「姐御！」
「姐さん！」
ふたりで見下ろすと、声をかけてきた。
「いま行きますわ！」
ルビーローズは最初の一段に足を乗せた。
「……！」
ぞくりと、悪寒（おかん）が走った。
考える前に目が動いた。顔が動いた。
ルビーローズは見た。操縦席の窓の向こうに、ひび割れたガラスの向こうに、血色の頭があった。窓は水に浸かっている。船首が持ち上がっていても、操縦席は右舷にあるから、傾いた船体の窓の外は水面下だ。浅い水中で明るい日差しを浴びて、黒い目がルビーローズを見つめている。
ドラギラは浮かび上がってきたらしい。胴体が窓の下に消えている。
あと、頭ひとつ浮けば、ハッチにいるリヴリーに気づくだろう。そうなれば、目の前にいる獲物に喰らいつくだろう。……毒牙で。
「なにやってるんでえ！」

「急ぐです！」
事情を知らない仲間たちが、もどかしそうに声をかけてくる。
ルビーローズはハッチを見上げた。短いはしごが、とても長かった。
ここが生死の分かれ目だと直感した。
登るか、登らないかで、生き死にが異なる。
登れば、二人の死。登らなければ、一人の死。
ドラギラはすでにルビーローズを見つけている。獲物が動けば、逃がすまいとして潜水艇に絡みつくだろう。
紅月丸は沈没寸前。沈めるのもひっくり返すのも簡単で、そうなればハッチにいるふたりは湖に投げ出される。魔神のいる湖に落ちて、無事ですむわけがない。水中戦を想定した技はリヴリーにはない。マハラも、チャパティも、毒牙にかかって命を落とすだろう。
船内のルビーローズは安全だ。鋼鉄製の船体に守られている。たとえそれが、沈みゆく潜水艇であっても。
ルビーローズは紅い薔薇の女だ。
仲間を犠牲にして、おめおめと自分ひとりが生き延

びるような女ではなかった。
ルビーローズははしごから手を放した。
右腕をV字に曲げて、胸の前で構えた。構えた腕には魔法の風が巻き付いている。
「姐御……！」
「姐さん……？」
マハラとチャパティが息を呑んだ。
「ローズ・ストーム！」
ルビーローズは薔薇の竜巻を放った。
真上に向けて。
腕から解き放たれた竜巻は、大きくなりながら縦穴通路を上昇し、ハッチを出たところで巨大化した。
マハラとチャパティは薔薇の竜巻を食らった。逆回転する二重の竜巻に呑み込まれて、大空高く舞い上がっていった。
「バカ野郎ーっ！」
「ですーっ！」
仲間たちの絶叫が小さな声となって届いた。
竜巻で吹き飛ばされて、空から事情を知ったことだろう。紅月丸のすぐそばに潜む魔神の姿を見たことだ

ろう。きっと、理解したにちがいない。一味の首領であるルビーローズが、我が身を犠牲にして逃がしてくれたのだということを。

薔薇の竜巻が飛んでゆく。ふたりは遠くまで運ばれる。紅月丸は傾いていたから、斜めに飛んで、うまくいけば湖岸までたどり着くはず。どこに降りても怪物密林だから危険にはちがいないが、ふたりとも腕は立つ。

マハラには、マッハ・ハンマーがある。

チャパティには、深い眠りの吹き矢がある。

ふたりで力を合わせて、無事に生還するだろう。

「……てめえら、最高のマブダチだったぜ」

大きな瞳で空を見上げて、紅い薔薇の女がつぶやいた。

「あばよ」

そして、大切な仲間たちに別れを告げた。

ドラギラが襲いかかってきた。黒いテントウムシの両目を毒牙で貫いた。割れずに残っていた操縦席の窓ガラスも、ついに粉々になった。

長い体を獲物に巻き付けると、大ムカデのモンスタ

ーは身をよじって回転した。
ルビーローズははしごにしがみついた。天地がめまぐるしく入れ替わって、水が体を叩く。
打つ手はなかった。ハッチの閉鎖は可能だが、閉じても意味がない。窓は破られているのだから、どのみち浸水する。船体に絡みついた大ムカデが沈めにかかっている。
ルビーローズは息を止めた。沈没を覚悟したのだった。空気はルビーローズを見捨てて逃げてゆく。見る見る水位が上がってゆく。
ドラギラによって水中に押し込められた紅月丸は、あっという間に重量を増した。窓からもハッチからも水が入って、操縦室と制御室は水没した。
船体のほとんどが水で埋められて、もはや紅月丸は浮くことができなくなった。重い鉄の固まりとして沈んでいった。
ルビーローズは床を蹴った。蹴伸(けの)びで水中を進んだ。船内が水で満たされると、逆に動きやすくなった。水が体を支えてくれるから、壁や床に叩きつけられる心配はない。ただし、息はできなかった。

水中を矢のように飛んだルビーローズは、機関制御席につかまった。左手でハーネスを握り、右手で酸素マスクをつかんだ。

マスクは顔面を覆うフルフェイスタイプだった。顔に押し当てると空気が水を追い出してくれて、視界がクリアになった。

船体の回転が止まった。

獲物の状態を確認しようと、ドラギラが窓の外からのぞいた。

そこをルビーローズは攻撃した。ためらうことなく、船内から仕掛けた。姿は見られている。隠れてもしかたがない。それに、こそこそ身を隠したのでは、沈む紅月丸と運命をともにすることになる。

薔薇の竜巻が渦を巻いてドラギラを襲った。

逆回転する二重の渦に大ムカデが呑み込まれた。技は命中した。しかし、ドラギラはのけぞるようにして、突き進む渦から逃れた。長い体を重い潜水艇に巻き付けていたので、薔薇の渦巻に体ごと持っていかれることはなかった。

とはいえ、ダメージはあった。さすがの魔神も、大

技を食らって意識が飛んだようだ。胴体の前半分はだらしなく水中を漂い、後ろ半分は紅月丸にしがみつく力がゆるんだ。

ルビーローズはひと息吸い込むと、マスクを手放した。座席を蹴って操縦席まで移動した。

窓から脱出はしなかった。いまはまだ、紅月丸を離れるわけにはいかない。ドラギラにフルダメージを与えるか、追い払うまでは、船といっしょに沈むしかない。呼吸をするには酸素マスクが必要だ。

破れた窓越しに、ルビーローズは魔神を仕留めにかかった。攻撃技はハンマーを使った。打ち据(す)えることで、船体に巻き付いたムカデの長い体を引き剥(は)がしにかかった。

ハンマーといっても、紅い薔薇の女が本気で放つハンマーだ。息を止め、沈む潜水艇の中から技を繰り出している。沈めば沈むほど、脱出は困難になる。気迫がちがった。並の攻撃ですむわけがない。

ハンマーは上下左右と打ち分けられて、おまけに間(ま)を置かなかった。乱打されて槌音(つちおと)を響かせるさまは、まるで夏祭りで披露される暴れ太鼓のようだった。

水が荒れた。水流が押し寄せてきた。見えない波がルビーローズをさらっていこうとする。窓から入った水は、反対側の窓やハッチから抜けてゆく。船内にいても流される。ルビーローズは足を使った。つっかい棒のように足を伸ばして壁や操縦席に押し当て、流されるのを防いだ。

意識の飛んだドラギラはされるがままだった。

魔神は舞子になった。打たれるたびにひらひらと舞い踊った。連続攻撃を食らっているので、ダメージから回復する余裕はなかった。紅月丸に巻き付いていた胴体も離れ、いまや格好の餌食として、その身をさらしている。

ルビーローズは薔薇の渦巻を見舞った。攻め急いだのは、時間をかけられないからだ。紅月丸は沈み続けている。あたりは冬の夕暮れよりも早く、闇に包まれてゆく。ヘッドライトの明るい光が、かえって焦燥感をもたらす。

ドラギラは渦に呑まれた。今度はまるごと呑み込まれて、水中を錐揉みしながら遠ざかっていった。

水中島の魔神は、ついに撃退されたのだった。

とはいえ、これでフルダメージとはいかなかった。大ムカデのモンスターは執念深い。技の効果が切れると、改めて襲ってくるにちがいない。だが、浮上する時間は稼げた。

ルビーローズは操縦席の酸素マスクを顔に当てた。マスク内の水が追い出されるのを待つのももどかしく、顔を下に向けると大きく息を吸い込んだ。

沈む紅月丸が傾いてゆく。バラストタンクにエアが残っているから、左舷は軽い。船体はゆっくりと右に傾いて、横倒しになった。

ルビーローズは操縦席に足でつかまった。荒れた呼吸を整えながら、腕を回して酸素マスクをかぶった。マスク内が空気で満たされるのを待って、チューブを引きちぎった。チューブの中にあるわずかな空気も逃がさないように、先端をつまんで指に巻いた。

すっかり遠くなった水面までの呼吸を、ちぎったチューブとマスクとで確保したのだった。

ルビーローズは顔を上げた。紅月丸は横転している。左舷が上で、右舷は下になっている。ルビーローズは操縦席を蹴ると、チューブをつまんでいない手で艇長

席をつかみ、体を引っ張り上げた。それから艇長席も蹴って、割れた窓から船外へと泳ぎ出た。
あとは浮上するだけと、紅月丸から脱出したルビーローズの目の前を、巨大な物体が高速で通過していった。
六本の脚が目に入った。太い前脚には金属製の手っ甲があった。水を蹴る後ろ脚にはフィンが装着されていた。
武者タガメだった。
タガメが押しのけた水が壁となって、ルビーローズの勢いを殺した。それでいて、通過したあとに流れ込む水がルビーローズを吸い寄せた。
ルビーローズは紅月丸から引き離された。
新手の出現には驚いたものの、すかさず反転して紅月丸に戻った。
武者タガメの参戦で、脱出作戦は御破算となった。一からやり直しだ。船内に残って酸素を確保しつつ、武者タガメを撃退しなければならない。手間取れば、ドラギラが復活するだろう。武装モンスター同士で争うとは思えないから、恐ろしい敵を二匹まとめて相手

にする羽目になる。
いや、敵はまだいた。
沈む紅月丸を湖底で待ち構えていた。
第三の敵。それは、湖底湖だった。
水中大砲がヘドロに突き刺さった。浮上するときに、ハイドロハンマーは右舷に向けられた。軽い左舷が上になって浮上するのだから、ハンマー・アクセルは下に向けて使うことになる。その状態で沈んできたから、大砲の筒先が湖底湖の赤い水面を割って、どす黒いヘドロに突き刺さった。
沈降は止まった。湖底湖の端のほうで、水深はかなり浅かった。深みに落ち込まなくて助かった反面、沈没した勢いで水が動いた。赤くて薄い煙と、黒くて濃い煙が舞い上がった。
赤いのは湖底湖の水だ。黒いのは天然のヘドロ。どちらも硫酸を含んでいる。生身の体で浴びるわけにはいかない。
ルビーローズは船外に逃れた。下の窓から入ってきた湖水と汚泥(おでい)を、非常灯が照らしている。
外には武者タガメがいるが、中は硫酸で危険。戦っ

て倒すことが可能な分、モンスターのほうがまだやりやすかった。硫酸は倒せない。

ルビーローズは武者タガメを捜(さが)した。湖底は暗くても、ヘッドライトの光がある。予備電源が切れるまで、照明は使える。

浮上は控(ひか)えた。暗い水中でヘッドライトの光もなしに、高速で泳ぐ武者タガメを発見できるとは思えない。見つける前に攻撃されてしまうだろう。

幸い、湖底湖が浅かったので紅月丸を拠点にできた。水中大砲はヘドロに刺さり、右舷は赤い水に浸(ひた)っているが、左舷は安全な淡水湖に残っている。つまり、艇長席の酸素マスクから空気を補充できる。

ルビーローズは息苦しさを覚えた。マスク内の酸素濃度が下がっているようだ。無理をすれば酸素欠乏症になる。意識が混濁(こんだく)して判断能力がにぶると命取り。透明な水中が空気中に思えて、マスクを外して呼吸しようとするかもしれない。

ルビーローズは船内に手を伸ばした。艇長席の酸素マスクは、泡を吐きながら浮き沈みを繰り返している。浮かぶマスクをたぐり寄せたルビーローズは、指先で

つまんでいたチューブをマスク内に差し込んだ。装着済みのマスクは、浮上するつもりでチューブを引きちぎってある。

ルビーローズは息を継いだ。

圧縮空気タンクには充分なエアが残っている。問題は、予備電源の電力と、ルビーローズの霊力だ。特に、霊力を使い果たしてしまうと戦うすべはなくなる。呪文を念じても、技が出なくなる。

紅月丸に使える武器はない。

ルビーローズの顔がぴくりと上がった。ひょっとしたら、武器はあるかもしれない。ジェット魚雷は発射できなかった。墜落時に魚雷ランチャーが脱落したか、魚雷本体が発射管から抜け落ちたのなら、武器はもうない。だが、コードが切れただけなら、つなぎなおせばいい。

周囲を見回して安全を確認すると、ルビーローズはたったいま差し込んだチューブを抜いた。それから船底に移動した。

増設した魚雷ランチャーは二基とも無事だった。脱落はしていない。ただ、魚雷が残っているはずの右の

ランチャーは湖底湖にあった。
ルビーローズは湖底湖の水面ぎりぎりまで潜った。片手を左の魚雷ランチャーに添えて、体が浮かないようにした。
赤いリヴリーが赤い水をのぞき込んだ。
鋼管の中に弾頭が見えた。ジェット魚雷は魚雷発射管にしっかりと収まっていた。ルビーローズは横に移動して、発射管の後部を確認した。コードはつながっていたが、ポッド推進器には延びていなかった。切れてだらしなく垂れ下がり、ヘドロに埋もれている。
切断されたコードをつなぎなおすには、硫酸を含んだ湖水に手を入れなければならなかった。濃度は不明。希硫酸(きりゅうさん)ならともかく、濃硫酸(のうりゅうさん)ならすばやく動いてもひどい化学熱傷(ねっしょう)を負うことになる。
ルビーローズはまた周囲を見回した。
武者タガメの姿はどこにもなかった。襲ってこないのが不思議だった。もしかすると、水中島に帰還したのかもしれない。ドラギラには帰還予定時刻があった。スナイロユンクがマイクで放送している。担当官に給餌室(きゅうじしつ)での待機を指示している。

スケジュールがあって遅れそうだから、武者タガメは急いでいた。それなら、高速で通過したまま、襲ってこない理由の説明はつく。しかし、タイミングよくそばを通っていくだろうか。そんな偶然が起こりうるだろうか。

武者タガメは戦闘に気づいて駆けつけてきた。それ以外の理由を持ち出して、自分をごまかすのは危険だ。

ルビーローズは警戒を解かなかった。

おかげで、湖底湖の水面がわずかに波打ったのを見逃さなかった。左右に異状はない。後ろも問題ない。だが、眼下の赤い水は揺れている。

ルビーローズは視線を上げた。目の前には、横転した潜水艇がある。船底が壁となって立ちはだかっている。その向こうは死角。

武者タガメがどこにいるのか、ようやくわかった。わかったときには手遅れだった。紅月丸が倒れてきた。

左舷は軽く、重い右舷は水中大砲がヘドロに刺さっているのに、武者タガメに押されて船体は倒れた。

鋼鉄のモンスターがルビーローズに覆い被さってきた。そのまま下敷きになると、毒水に押し込まれて、

汚泥(おでい)に埋め込まれる。
船底を這(は)うように手足を動かして、ルビーローズは脱出した。余裕はなかったが、引きちぎったチューブをつまむ手は放さなかった。マスクとチューブの中にある空気は大事な生命線だ。失うわけにはいかない。
左舷から飛び出すと、そこに武者タガメがいた。紅月丸を押し倒した武者タガメは、船体にのしかかる形になっている。
手を伸ばせば、さわれる距離だった。もちろん、凶暴なモンスターと握手などできない。ルビーローズがさわる前に、モンスターがさわってくるだろう。タガメの太い前脚に捕まってしまう。
ルビーローズは攻撃した。脳が一瞬で状況を判断した。武者タガメにハンマーを落とすと同時に、斜め上へとバタ足で逃げた。
薔薇の竜巻は使えなかった。使うと、湖水が上下に掻き混ぜられてしまう。紅月丸を巻き込むことにもなる。
横転していた船体が押し倒されたので、湖底湖の有毒な水とヘドロが舞い上がった。

タガメを打ち据えたハンマーが水流を生み出し、湖底湖から舞い上がってきた汚染物質を洗い流した。バタ足で上昇したこともあって、ルビーローズは難を逃れた。赤い水にも、黒い泥にも、巻かれなかった。

しかしハンマーを使ったことで、紅月丸をより深く沈める結果となった。横転していたときは高さがあったのに、復元して低くなった船体は、完全に湖底湖に没(ぼっ)した。ルビーローズは酸素の補充ができなくなった。

さらに、闇が深まった。ヘッドライトがヘドロに埋もれている。強い光が黒い汚泥を透過(とうか)してあたりを照らしても、それでは暗すぎる。船内の非常灯はまったく頼りにならない。

汚染物質が漂う暗い湖底で、酸素の補充もなしに、ルビーローズは戦い続けねばならなかった。

ハンマーで打たれて、紅月丸といっしょに湖底湖に沈んだ武者タガメがあわてて浮上してきた。ひと目でわかるような怪我はない。どうやら、湖水の硫酸濃度はそれほど高くないようだ。即座に化学熱傷を負うほどではないらしい。

とはいえ、モンスターのあわてぶりを見ると、死の

水であることは疑いようもなかった。
ルビーローズは技を変えた。これ以上、紅月丸を沈めるわけにはいかない。船体さえ起こせば、空気はまた吸えるようになる。ハンマーをやめ、思い切ってサンダーを使ってみた。武者タガメは前脚に金属製の手っ甲をつけている。そこを狙った。
狙いは当たった。水中に放たれた雷は武者タガメの手っ甲に吸い込まれた。モンスターは激しく感電したが、ルビーローズはなんともなかった。
ところが、雷を落としたことで予想外の事態が発生した。電気は武者タガメの体を伝(つた)って、真下にある紅月丸へと流れた。
切断されたコードに通電した。残っていた最後の魚雷が誤作動した。
つまり、ジェット魚雷が発射されたのだった。
ヘドロの中を魚雷が走った。
ジェット魚雷にスクリューはない。ウォータージェット式の高速魚雷だ。先端の取水口から吸い込んだ水をインペラで増速して、末端のノズルから噴射する。
それがヘドロの中を走っていった。ヘドロを吸い込

み、ヘドロを噴き出し、地中魚雷とも言うべき状態で姿も見せずに走り去っていった。ヘドロの上層は水分を多く含んでいる。見た目よりはさらさらで、濁った水程度だ。

問題は、ジャイロブーメランを搭載したジェット魚雷が帰ってくることにあった。走り去っていった魚雷は高速で戻ってくる。そして、紅月丸に命中する。

自爆しないように、ジェット魚雷を発射したら紅月丸は移動することになっていた。沈没した潜水艇の外から魚雷を発射する、などという事態はまったく想定していない。

魚雷の回避は困難だった。船体は硫酸の湖に沈んでいる。濃度は高くなくても、潜って操縦するわけにはいかない。かといって、見捨てることもできない。大事な酸素は紅月丸に積んである。

魚雷を回避する唯一の手段として、ルビーローズはハンマーを使った。武者タガメを打って反撃を封じつつ、紅月丸を動かそうとした。

だが、うまくはいかなかった。

水没した潜水艇は重く、ハンマーは作業用ではなか

った。それに、武者タガメが邪魔をしてくれた。
ハンマーで湖底湖に押し込まれたモンスターは必死になって抵抗した。藁(わら)にもすがる感じで、沈没した潜水艇にしがみついた。踏み台さえあれば、浮上もしやすくなる。
武者タガメにしがみつかれて、黒いテントウムシが直立した。下がった船尾はヘドロに埋もれているが、上がった船首は淡水湖に出ている。操縦室のある頭部が湖底湖から出て、うまく事が運んだように見えるが、そうではなかった。
ジェット魚雷が帰ってきた。ヘドロの中を駆け戻ってきた。
紅月丸は船底をさらしている。武者タガメが黒いテントウムシを盾にしている。
高速魚雷が命中した。紅月丸は自爆したのだった。
魚雷に仕込んであった六発の遅延発動型バーストが、同時に爆発した。
衝撃波が船底のフラッド・ホールからバラストタンク内に入り込んだ。内殻と外殻の間を何度も反射して、バラストタンク内に設置された圧縮空気タンクを痛め

つけた。
爆圧は反射しなかった。爆発で圧縮された水はフラッド・ホールからバラストタンク内に入り込んだ後、行き場をなくしてそこにあったタンクを押しつぶした。
圧縮空気タンクが圧壊(あっかい)した。
紅月丸は直立している。船首が真上を向いて、ヘッドライトの光が天を突いている。壊れたタンクから漏れた大量のエアが、音を立てて浮上した。立ちのぼる気泡が青白い光を包み込み、光は拡散した。
水中に光る柱が生まれた。暗い湖底が明るくなった。美しくも、無情の光景だった。
ルビーローズは思わず、光る柱に向けて手を伸ばした。紅月丸自爆の衝撃波で叩かれ、爆圧に突き飛ばされても、歯を食いしばって耐えた。だが、光り輝く泡の柱には、絶望するしかなかった。
貴重な空気が失われてゆく。湖底で生き延びるために、なにより大切な酸素が逃げてゆく。
水面は遠く、太陽は見えない。
武者タガメはそっと体をひねった。爆発の衝撃で動いているかのように装って、黒いテントウムシの盾を

赤いリヴリーに向けた。
漏れ出したエアにルビーローズが気を取られた、わずかな隙を突いたのだった。
ルビーローズの視界からモンスターが消えた。
光る柱をへし折って、武者タガメが襲いかかってきた。瞬時に距離が詰まった。
武者タガメは水を蹴る脚にフィンを装着している。フィンスイミングで高速潜水をする。
迎撃しようにも、ハンマーでは間に合わなかった。サンダーだとルビーローズも感電するだろう。距離が近すぎる。薔薇の竜巻は相変わらず使えなかった。使うと湖水を上下に掻き混ぜてしまうし、武者タガメの後ろにある紅月丸を巻き込む。
ルビーローズは三叉投石で迎え撃った。トライデント・スリングを念じた。片手はチューブをつまんでいるから、残った手で三つの大きなつぶてを飛ばした。
武者タガメはつぶてを弾いた。前脚には金属製の手っ甲をつけている。その手っ甲で、水中を飛んできたつぶてを弾き返した。雷には弱くても、つぶてには強かった。ダメージは一切なかったらしく、つぶてを弾

いた前脚で、今度はルビーローズを殴りつけた。
タガメの前脚を、ルビーローズは角で受けた。アカゲパキケには立派な角が生えている。武者タガメの手っ甲を角で受け流し、身を守った。
傷こそ負わなかったが、衝撃は受けた。巨大昆虫に殴られたのだから、ただではすまない。ルビーローズは脳震盪を起こした。考えることができなくなって、無防備になった。
モンスターに慈悲の心などない。武者タガメは動きの止まった獲物を易々と捕らえた。突き出した前脚を折りたたんで、やわらかい肉をはさんだ。
武者タガメは武装モンスターだ。前脚の関節から先には手っ甲がある。筒状の金属で全体を覆い、長い鉤爪と化している。関節から付け根にかけての前脚はとても太く、手っ甲を装着するためのベルトが巻かれている。
金属製の鉤爪と、太い脚の間に、ルビーローズははさまれた。
つぶされそうなほどに体を圧迫されて、ルビーローズは正気に返った。苦しくて息を漏らした。強い力で

はさまれているから、息を吸うことはできない。吐いた息でマスク内の空気が増え、ちぎれたチューブから抜けていった。チューブをつまんでいた手はタガメの脚にかけている。なんとかして押し戻そうと、本能で無駄な努力をしている。

獲物を仕留めるべく、武者タガメは口吻（こうふん）で突き刺そうとした。

ルビーローズはバリア・ストームを念じた。湖水が多少動いてもしかたがない。捕らえられて息ができないのだから、余裕などない。

竜巻防壁は渦巻防壁となって、ルビーローズを守ると同時に敵モンスターを攻撃した。リヴリーの技を顔面に食らった武者タガメはダメージを受けた。前脚がゆるんで、開いた。

ルビーローズはタガメの顔を蹴りつけて、下に逃れた。

だが、そこで動きが止まった。

前脚から解放された瞬間に、こらえきれずに息を大きく吸ってしまった。ちぎれたチューブが湖底の水を吸い込んだ。頭はチューブをつまもうと考えたのだが、

放した手を戻す前に、体が先に呼吸したのだった。
フルフェイスの酸素マスクが浸水した。マスクの中に入り込んだ水が、息をしようとするルビーローズの口と鼻をふさいだ。
顔を上げれば空気は吸えたが、息苦しさは変わらなかった。酸素濃度が落ちている。
ルビーローズは酸素の補充を最優先とした。直立状態でエアを漏らし続ける紅月丸に向かった。泳ぎは得意だったが、泳がずに技で進んだ。竜巻防壁を使えば空を飛べる。水中でも、飛べる。体を動かさないことで、ルビーローズは少しでも酸素の消費を抑えようとした。
武者タガメの反撃は技で封じた。竜巻防壁は防御的な攻撃呪文だ。なにもしなくても、武者タガメに接するだけで自動的に攻撃できる。
巨大昆虫の真下をルビーローズは移動した。竜巻防壁の射程内に武者タガメを捉(とら)えたまま、頭部から胸部へ、胸部から腹部へと進み、巨体の下をくぐり抜けた。
下から、とどめを刺すことはしなかった。後ろから、仕留めることもしなかった。ただ、くぐり抜けただけ。

武者タガメを撃退する絶好の位置で、それをしなかったのだから、紅い薔薇の女らしくない。明らかに判断力がにぶっている。酸素欠乏症だ。

それとも、竜巻防壁を過信したのだろうか。武者タガメと同じ武装モンスターで、空の王者だったヤンマ・ファイターは、ルビーローズとの空中戦で竜巻防壁に手を出せなかった。だから、武者タガメとの水中戦でも竜巻防壁は通用する、と？

ルビーローズはひたすら紅月丸を目指した。浮上しようにも水面は遠い。湖底湖に沈む潜水艇でしか、息は継げない。ＬＩＰＳ（リップス）の管理区域外でテレポートはできなかった。それが可能なら、双子の猟兵団は全滅していない。恋する猛者（もさ）がルビーローズに会いに来なくなってから、もうずいぶんになる。

渦を巻くリヴリーの背後で、水の王者が反転した。脚にはフィンをつけている。フィンスイミングで、水上最速のモンスターと互角のスピードを叩き出す。突き出された前脚は太く強く、金属製の手っ甲もつけている。

背中を見せる獲物を、狩人の長い鉤爪が捕らえた。

雷には弱くても、つぶてには強い手っ甲だった。トライデント・スリングでダメージを与えることはできなかった。それと同じように、手っ甲で保護された前脚には、竜巻防壁は通用しなかった。

ルビーローズは捕らえられた。今度は両方の前脚ではさまれた。竜巻が渦を巻いて防壁を築いていても、役には立たなかった。技なら通じない。力は強い。手っ甲で武装したタガメは、渦巻をものともしなかった。

武者タガメは捕らえた獲物を左右に揺さぶった。揺すれば渦巻が外れると考えたのだろう。口吻(こうふん)で刺そうとはしなかった。顔を寄せると渦でぶん殴られる。

ルビーローズは溺れかけていた。左右に振られるせいで、マスク内に入り込んだ水が暴れ狂っている。鼻をふさがれ、口をふさがれ、薄い空気でさえ思うように吸えない。

揺すっても渦が取れないので、武者タガメは前後に振ってみた。

渦はどうやっても外せなかった。しかし、獲物の抵抗もなくなった。武者タガメは前脚を動かすのをやめて、様子をうかがった。

すると、渦巻を呑み込んで、別の渦巻が飛んできた。内と外で逆向きに回転する二重の渦巻だった。

武者タガメは薔薇の竜巻をアッパーカットで食らった。そしてそのまま大渦に呑み込まれ、運び去られていった。

酸素欠乏症で意識が朦朧(もうろう)とする中、ルビーローズはようやく武者タガメを撃退したのだった。

戦闘は終わった。

湖底には赤いリヴリーが残された。仰向けになって、右手を上に伸ばしている。竜巻防壁は、薔薇の竜巻に破られて消し飛んだ。

静かな湖底が戻ってきた。圧縮空気タンクは空になった。エアを漏らす音はもうしない。紅月丸のヘッドライトが天を突いている。水中に光の柱がそそり立っている。

明るい湖底で、ルビーローズは動かなかった。

モンスターを撃退したのに、息継ぎをしようとはしなかった。タンクが空になっても、船内のどこかには空気が溜まっているはず。けれども、それを探しに、紅月丸に戻ろうとはしなかった。

死んだのではない。息はしていた。酸素マスクの薄い空気を吸っては、吐き出している。小さく吸って。小さく吐いて。息だけはしている。

頬(ほほ)を水が洗っていた。酸素マスクは浸水している。仰向けだから、水は重力に引かれて下にある。

ルビーローズの体も重力に引っ張られた。ゆっくりと沈み始めた。

湖底には、もうひとつの湖があった。淡水に海水が混ざって、比重の異なる湖水は二層に分離した。上の淡水湖と、下の塩水湖に分かれた。

湖底の湖は無酸素だった。酸素を嫌う細菌が繁殖している。硫化水素を使って、紅色硫黄細菌が硫酸呼吸をしている。

赤く染まった湖水は硫酸を含んでいた。

死の水だった。

死の湖だった。

水中島の魔神は湖底湖に近づこうとしなかった。

水の王者は湖底湖から出ようと必死になった。

ルビーローズは沈んでいった。薔薇の竜巻を放ち、天に向けて伸ばした手が、いまは力なく漂っている。

息はしている。生きている。ただ、空気が薄かった。酸素に乏(とぼ)しかった。

酸素濃度が下がると酸素欠乏症になる。意識が混濁(こんだく)して判断能力がにぶる。動くこともできなくなる。

ルビーローズは湖底湖に着水した。赤い水面に波紋が広がった。

小さな波は消えなかった。沈む体が次の波紋を生み出した。

赤い水に紅い薔薇の女が沈んでゆく。

やがて、波紋は消えた。

3

出会ったのは試験会場だった。

公募された新管理リヴの書類選考に通った者たちが、講堂に集められた。

受付で名前を告げると、箱の中から受験票を取り出した係員は不思議そうな顔をして、ルビーローズに手渡した。受験番号は八十一番だった。

会場には机と椅子が並べられていた。おかしな並べ

方だった。ひとつだけ、はみ出した席がある。気になるのか、席を数える者がいた。

ルビーローズも目で数えた。十席が八列になっていた。そして、右端の列にだけ、一席付け足してある。全部で八十一席なら、九席九列できれいに配置できるのに、そうはしていない。

席を数えた者は首を傾げたが、八十一番として余分の席をあてがわれたルビーローズには、事情がわかった。

ルビーローズは紐付きだった。書類選考だけは通してもらえることになっていた。世話になった親分が、新管理リヴへの応募を勧めてくれた恩人が、なにやら大物らしき人物の推薦を取り付けてくれた。

ほかの八十名は書類選考を自分の力で突破したが、ルビーローズは無審査で通過したのだった。

審査されたのなら、絶対に書類選考ではねられたはず。ルビーローズは経歴を偽らなかった。履歴書の職歴欄には博徒と書いた。趣味にはケンカと書いた。まともなのは、得意なスポーツが水泳であることくらいだ。

博徒とヤクザのちがいを理解してもらえるとは思えなかった。世の中の役には立たなくても、博徒はまじめに働いている。もちろん仕事は賭博(とばく)だが、賭けに勝って金品(きんぴん)をいただくことはあっても、脅して奪い取ることはしない。

とはいえ、理解されたところで御法度稼業(ごはっとかぎょう)の博打(ばくち)うち。選考を通過するわけがない。

無審査なのだから、内容は問われなかった。名前を書いた履歴書さえ提出すれば、あとは白紙でもよかったにちがいない。

おそらく、書類選考の合格者は八十名と決まっていたのだろう。その予定で準備は完了していたが、あとから一名押し込まれた。席を作る係は考えなしに一席追加したか、事情を知って憤慨(ふんがい)し、意地悪をしたのかもしれない。

八十一番が予定外である証拠に、ルビーローズだけ受験番号が手書きになっていた。他人が手に持つ受験票をのぞき見れば、番号まできれいに印刷されている。ひとりだけ、予備の受験票に手書きの受験番号だったから、受付で不思議そうな顔をされたわけだ。

はみ出した席に、はみ出し者のルビーローズは堂々と座った。番号が手書きの受験票も、こそこそ隠すことなく、机の上に置いた。

そばを通る者は、席の配置や手書きの受験票に気づいて、ルビーローズの顔を盗み見た。だが、アカゲパキケの大きな瞳で見つめ返されると、あわててそっぽを向いた。

集合時間にはまだ余裕があったが、早々と席は埋まった。管理リヴになるための真剣勝負だから、だれも遅刻はしなかった。

会場の空気は張り詰めていた。全員がライバルなのだから当然だ。そんな中でも、無駄口を叩く者はいる。口が軽いと沈黙には耐えられない。

声が聞こえてきた。十席八列のほぼ中央からだった。

知ってるかい？　書類選考の成績順に座らされてるんだぞ。左の最前列がトップさ。男は事情通のようで、自慢げに語った。

静かな会場では小さな声もよく通る。それに男は自慢したくて、全員に聞こえるように話している。会場にいた多くの者が、いっせいに左の最前列を見た。

男はおしゃべりを続けた。見てなよ、あのトップは絶対合格するぞ。なんせ、あいつは防衛局の次席防衛武官だからな。エリートさ。で、成績が最下位なのが、右の一番後ろに座らされてる奴だよ。

おしゃべりな男は含み笑いをしながら、最も低く評価されている席を探した。話を聞いている者たちも、同じことをした。

無神経な視線がルビーローズに集中した。右の一番後ろはルビーローズの席だ。それも、ひとつだけわざとはみ出した席だ。

書類選考で最下位と聞かされても、ルビーローズは驚かなかった。無審査では点数のつけようがあるまい。見ればわかるように、ルビーローズの席はおまけで付け足されている。最下位なのはむしろ、ひとつ前の席だろう。

しかし、不愉快ではあった。好奇の目で見られて、うつむく性格でもない。ルビーローズは、自分に視線を向ける者たちをひとりひとり見つめ返した。

騒動が持ち上がったのはそのときだった。

うるせえっつーの。

ルビーローズの前の席に座る、実質最下位の男が声を荒げた。巨漢のシマオーガだった。

何様のつもりか知らねえが、そんなに笑いもんにしてえんなら、この俺様を見て笑いやがれ。

男はルビーローズをかばった。管理リヴの試験を受けに来ておいて、会場で事を荒立てるのだから、すでに試験は捨てたとしか思えなかった。

張り詰めていた空気がさらに緊張した。平気で揉(も)め事(ごと)を起こすような輩(やから)に絡まれて、試験も受けずにつまみ出されたくないと、全員が前を向いた。おしゃべりな男も口をつぐんだ。

ところが、ルビーローズをかばったシマオーガは矛(ほこ)を収めなかった。

おう、そこの口先野郎。詫(わ)びはどうしたんでえ。他人様を笑いもんにしといて、知らん顔するんじゃねえ。後ろの席の野郎に、頭ぁ下げろや。

おしゃべり男は返事をしなかった。追及されて動揺しているのが見て取れた。

おい。おめえだよ、口先野郎。こっち見やがれってんだ。

おしゃべり男は救いを求めて、エリート武官に顔を向けた。質(たち)の悪い巨漢に絡まれているからと、防衛局ナンバー3の武官が助けてくれることを期待したようだ。

エリート武官は動かなかった。見もしなかった。我関せずで、保身に専念している。

ルビーローズは仲裁に入ろうとした。かばってくれるのはありがたいが、試験会場で男はやりすぎだ。最下位と言われて傷つくほど、やわではない。

男は思うところあって、管理リヴを志したはず。実質最下位でも、自分の力で書類選考を突破している。推薦という紐(ひも)付きで、書類選考を無審査で通過したルビーローズとはちがう。侠気(おとこぎ)のあるシマオーガを、つまらないことで不合格にさせるわけにはいかなかった。

ルビーローズが前の席に声をかけようとしたら、椅子を鳴らして立ち上がった者がいた。席は左の最前列から二番目。エリート武官の次に優秀とされる席だ。

立ち上がったのはハナマキだった。緊張感のない足取りで、シマオーガのところにやってきた。大胆な行動の割に、おとなしそうで、眠そうな目をしていた。

なんでえ、文句あんのか？
シマオーガは席を立たなかったが、一触即発の雰囲気に、近くに座る者が逃げ出した。
ルビーローズは様子をうかがった。ハナマキの出方に興味があった。それに、弱い者をかばおうとしたシマオーガが、ひとり立ち上がったハナマキに食ってかかるとも思えなかった。
ハナマキが口を開いた。
おいら、のどが渇(かわ)いたです。
ああん？　なに言ってんだ、おめえ？
フサムシとニガアリの乾燥粉末を、七対二の割合で混ぜてお湯で溶くと、酸味と苦味のあるおいしいお茶ができるです。
それじゃ、足しても九にしかならねえっての。
あとの一はお好みで調整するです。ミツアリの乾燥粉末を入れると甘味が出るです。
全部ミツアリの甘茶はねえのかよ。
あるです。ちょうど持ってきたので、おいらが一杯おごるです。
おごるって、俺様にか？

シマオーガから力みが消えた。ハナマキはただ、お茶に誘ったのだった。

おいおい、俺様はいま取り込み中なんだぜ？

試験はもう始まっているかもです。さっきしゃべっていたのは、実は試験官で、わざと問題を起こしたかもです。おいらたちの反応を見ているです。笑いものにされた人をかばって、よくやったです。でも、これ以上はよくないです。

マジかよ？　試験は始まってやがんのかよ？

ありうるです。

げえ……。

会場がざわめいた。

試験はもう開始されているのだとしたら？　仕組まれたら騒動だったとしたら？　自分の反応は？　点数は？

騒動には見向きもしなかったエリート武官が、目を丸くしてハナマキを見つめていた。武官でありながら、仲裁しようとはしなかった。いまにもケンカを始めそうなシマオーガは巨漢なのに、知らん顔を決め込んでいた。本当にこれが試験なら、試験官の心証は最悪だ

ろう。
言われてみりゃあ、そうだな。ありうるよな。しかしすげえな、おめえは。さすがに、二番目に座ってるだけのことはあらぁ。おつむの出来がちがうじゃねえか。ましてやこの俺様に、正面切って注意するとはよ。見かけによらず、肝(きも)の据(す)わった野郎でい。
おいら、別にたいしたことないです。それに試験と決まったわけでもないです。あくまでも可能性の話です。なので、お茶でも飲んでゆっくりするです。
気に入ったぜ。
シマオーガが立ち上がった。身長はハナマキの倍近くあった。でかくてごつい大男だった。
おめえ、名はなんてぇんだ？　俺様はマハラだ。ひと呼んで、マッハのマハラっつーのよ。よっく覚えときな。
おいら、チャパティです。
お茶っ葉か。変わった名前だな。
え？　おいら、チャパティ……。
で、お茶はおめえのおごりなんだな。
はいです。おいらのおごりです。

おう、後ろの席の野郎も……って、おい！　別嬪（べっぴん）さんじゃねえか！

振り返ったシマオーガは、そこで初めて、自分がかばった相手を知ったのだった。

別嬪さんもいっしょに、お茶でもどうでえ？　俺様のおごりで、こいつがおごるぜ？

自分のおごりで、他人がおごるというのはよくわからないが、気持ちのいい男たちだった。片や雄々しく、片や賢く。いいコンビだ。

そうね。ごいっしょさせていただきますわ。

ルビーローズも席を立った。管理リヴを志す者たちの中で、目の前のふたりだけが輝いている。楽しいお茶になりそうだ。

俺様はマッハのマハラってんだ。よろしく頼まあ。

んで、こいつはダチのお茶っ葉でい。

話の内容で、ふたりが初対面なのはわかっている。にもかかわらず、シマオーガはハナマキを長年の親友同然に扱っていた。

おいらはひと呼んで、お茶っ葉チャパティです。よろしく頼まあです。

ハナマキはハナマキで、シマオーガに合わせて名乗りを上げた。
わたくしはルビーローズ。なかよくしてくださいね。こう見えても、博打とケンカが得意ですのよ。
うはは！　冗談きついぜ、別嬪さんよお！
おいら、本気にするところだったです。
まあ。
しかたがないので、ルビーローズは笑ってごまかした。ケンカ無敵の女博徒だなんて、信じてもらえなくて当然だ。事実なら、そもそも会場にいるわけがない。
どうでえ？　三人で組まねえか。ここにいる奴らぁ、どいつもこいつもツンケンしてていけねえや。足の引っ張り合いなんざしたってよ、ダメな奴はダメに決まってらぁな。なら、いっそ。仲間に力を貸して、上に押しあげてやろうじゃねえか。それが男ってもんの心意気よ。なあ、お茶っ葉。
おいらもそう思うです。ひとりでは無理なことも、仲間が力を合わせたら乗り越えられるです。おいらも男です。力（りき）、貸すです。
ちがっ！　力（りき）を貸すのは、俺様だっつーの！　おめ

えはおつむを貸しやがれ。
おいらも男です。おむつ、貸すです。
そうそう。さらさらコットンで快適だぜ。って、おむつじゃねえ！　おつむだっての！
突然始まった漫才に、ルビーローズはくすりと笑ったが、周囲の目は冷ややかだった。試験は個人プレーだ。チームプレーの出る幕はない。組むだけ無駄。そう考えていたのだろう。
だが、新しい管理リヴの登用試験は、意外な展開となった。
講堂に集められたのは、説明を受けるためだった。学科試験は二週間後と通告され、総務局監修の教科書が配られた。システム特論（とくろん）だとか、呪文概論（がいろん）だとか、霊能原論（げんろん）だとか書かれた、いかにも難しそうな本だった。めくっただけで頭が痛くなった。
エリート武官は教科書の受け取りを辞退した。すでに持っている、というのが理由だった。ほかにも数名、管理機関の職員が辞退した。
試験官が説明した。二週間後に実施される学科試験は、管理機関の昇格試験と同じものであると。つまり、

エリート武官たち職員は慣れているわけで、明らかに不公平な試験だった。気にくわないなら辞退してよいと締めくくって、試験官は反論を封殺。その日は解散となった。

翌日、ルビーローズたちは三人で集まった。そこでルビーローズは驚くと同時に、恐縮した。

チャパティはひと晩で教科書を読破していた。それば かりか、要点を整理してランク分けし、インデックスまで作成していた。教科書別の重要度順で、項目名があり、何ページの何行から何行までと記された一覧表だった。それが人数分用意されていた。

マハラはもっとすごかった。どこでどうやって調達してきたのか、過去の昇格試験の問題用紙を、模範解答付きで持参した。第一回の試験から直近の第百八回まで、全部そろっている。

ルビーローズは仲間のためになにもしなかった。教科書は読み始めたが、そのまま居眠りをして、朝を迎えたのだった。

チャパティが問題用紙を預かることになって、その日はお開きとなった。別れ際にルビーローズは、明日

はわたくしもいいものを持ってきますわと、仲間たちに約束するのが精一杯だった。

次の日の集まりに、ルビーローズはハンバーガーを持って行った。カブトムシの幼虫を粉にして焼いたパンに、フウセンコガネとアオムシの合挽(あいびき)ミンチをパテにして、シマミミズのデミグラスソースをたっぷりかけた、自慢の一品だった。

みんなで腹ごしらえをしてから、勉強会が始まった。

マハラは手ぶらだった。過去の問題用紙を調達したあとは、チャパティに丸投げだ。

チャパティはひと晩で問題用紙の精査をすませていた。それどころか、出題傾向をつかんでインデックスを作り直していた。実際に出された問題には重複するものもあった。大切な事柄ほど、何度も出題されている。そこでインデックスの重要度の脇に、出題頻度(ひんど)を百分率で表した数値が追加された。出題頻度が二十パーセントなら、五回に一回は出てくる問題というわけだ。

三人並んでガリガリ勉強するものと思っていたら、チャパティによる講義が始まった。ルビーローズとマ

ハラは、まず初めに科学的な学習法を教わった。記憶心理学と学習心理学を応用した方法だった。

そんな学問がこの世に存在するとは夢にも思わなかった。手ほどきを受ければ効率よく学習できるのだから、なぜ教師が学校で教えないのか、不思議だった。教えてくれたなら、生徒は勉強がはかどるものを。

尋ねると、チャパティはかなり批判的な私見（しけん）を披露（ひろう）した。学校を卒業して学校に就職したのでは、世の中のことは学校しか知らないことになる。すなわちそれは、プロの学生であって、プロの教師ではない。ゆえに、教えるテクニックは持ち合わせていないのだ、と。

講義の最後にチャパティは、独自に考案した試験勉強法まで伝授してくれた。それはコロンブスの卵とも言うべき内容だった。知ってしまえばとても簡単なのだが、自ら気づくことはなかった。

チャパティは言った。自分で問題を作るです。試験は当て物。ただのクイズです、と。

全知全能の神が試験問題を作成するわけではない。相手が神なら、どんな試練を与えられるか予想もつかないだろう。しかし、神ではない凡人が試験問題を作

るのだから、それは容易に模倣(もほう)できる。
いまは生徒でも、将来は教師となって問題を作っていたりする。
いまは教師でも、昔はただの生徒で試験を受けている。
教師と生徒にたいしたちがいはない。中学三年生が十五歳なら、二十五歳の教師は中学十三年生で、三十五歳の教師は中学二十三年生だ。中学生ともなれば、小学生に勉強を教えるくらいのことはできる。何年も何十年も学校に居続ける教師は、プロの学生としてそれをやっているだけ。
ならば、教師をまねればいい。試験問題を自分で作ればいい。ただの凡人がすることをまねできないわけがない。試験範囲が限定されているのなら、本物の試験とそっくり同じ問題を作ることだって可能だ。
教師になったつもりで問題用紙を作成する。レイアウトにもこだわり、きちんと配点もする。完璧にまねるわけだ。遊び感覚のこの作業が、実はすでに試験勉強となっている。試験範囲でどこが重要か、自分なりに考えて問題を文章にし、そのとき自然に答えも覚え

てしまう。
問題用紙が完成すると、自分で自分に模擬試験をしてみる。おもしろいことに、自分が作った問題なのにまちがうことがある。百点満点とはいかないのがくやしくて、正解に目を通せば、そこでまた学習が進む。
まちがったところを再出題し、問題用紙の作成を重ね、一人遊びを繰り返すうちに、本物の試験とそっくり同じ問題を作ってしまう。
試験は当て物。ただのクイズ。出された問題の答えを当てるのではなくて、出てくる問題そのものを当てる遊びだ。
友人と勉強するときは出題合戦も楽しい。自分が作った試験で自分は満点なのに、友人は点数が低かったりすると大笑いできる。もちろん、すぐさまやり返されて、立場は逆転するけれど。
チャパティのおかげで、ルビーローズは試験に対する抵抗感がなくなった。マハラは早く勉強させろとせがんだ。
三人の勉強会はゲームになった。勝っても負けても楽しいものだから、もうひと勝負と欲張って、学習は

進んだ。
遊びは成果となって現れた。
チャパティは全科目満点で、学科試験のトップに立った。ガリ勉の得意なエリート武官は二位となり、端(はた)から見てもくやしそうにしていた。
ルビーローズは九位だった。トップテンにすべり込んだわけで、自分でも驚くほどの好成績だった。
マハラは全科目零(れい)点で、ダントツの最下位となった。信じられないことに、全科目とも、問題用紙に名前を書き忘れたのだった。うっかりにもほどがある。さすがに試験官も不憫(ふびん)に思ったのか、張り出された成績表には、本当の点数が括弧付きで添えられていた。計算してみると、名前さえ書いていたならマハラは十二位だったとわかった。
残るは実技試験のみとなった。合格者はしぼられたと噂された。
書類選考一位で学科試験二位のエリート武官は、エリートだけに実技もそつなくこなすだろうから、合格まちがいなしと見られていた。
書類選考二位で学科試験一位のチャパティも高評価

だったが、見た目から実技は不安視された。
マハラの試験は終わったと、陰で嗤われた。書類選考は下から二位。学科試験は下から一位。チャパティとは正反対の結果であり、挽回の余地はないと思われていた。
けれども、そんなことでへこたれる男ではなかった。マハラは落ち込むことなく、意気揚々としていた。実技試験にすべてを懸けるぜと、終わったことはけろりと忘れている。そんな性格だから、問題用紙に名前を書くのも、ころりと忘れたのだろう。
ルビーローズは別の意味で話題にのぼった。書類選考の最下位は学科試験の九位で帳消しとなったのか、見た目の美しさだけで評価された。マハラとチャパティからも、料理上手の淑女として、丁重に扱われた。ケンカの強い博打うちだと、ルビーローズは正直に自己紹介しているのだが、信じる者はいなかった。
ちがう面を評価されても、悪い気はしなかった。料理上手の淑女もまた、ルビーローズの一面だった。
ペルソナという言葉がある。必要に応じて使い分けられる人格を、仮面に例えている。ひとりの女であっ

ても、子に対するとき、夫に対するとき、親に対するときで、見せる顔は異なるもの。社会に出れば、部下に上司、下請けに客先と、接する相手に応じて仮面は取り替えられる。

もちろん、多重人格などではない。人格はあくまでもひとつで、ただ多面的なだけ。一枚のコインですら、表面と裏面では模様がちがう。円形の側面に至っては、ここからここまでと区切ることすらできない。

ケンカ無敵の女博徒も、料理上手の淑女も、どちらも本物のルビーローズだ。いままでとはちがう世界に身を置いて、ケンカも博打もする必要がないのだから、紅い薔薇の女に出番はなかった。

しかし、それも実技試験まで。出番は不意に訪れた。

実技試験は、受験者全員による模擬戦闘だった。ライバルを直接打倒してその数を得点とする、少々あくどいもので、しかも徒党(ととう)を組むことが許された。つまり、個人プレーと思われていた試験に、チームプレーの出る幕が用意されたわけだ。

試験官は説明した。正面から挑(いど)むのが得意な者もいれば、側面支援で活(い)きる者もいるだろう。あるいは、

後方で指揮を執るのに向く者がいるかもしれない。好きに仲間を募れ。仲間の得点は全員に加算される。むろん、単独行動でもかまわない。と。

会場はどよめいた。ルビーローズたちが有利と見られて、視線が集まった。三人組はかなり目立つ存在になっていた。初日の騒動がある。学科試験は一位に九位、実質十二位と優秀。知恵のチャパティ、力のマハラ、美のルビーローズと、バラエティに富んだメンツだ。

同盟工作に一日の猶予が与えられた。試験実施は明日と通告し、試験官は退室した。

ルビーローズたちはすぐさま集合した。仲間に入れてもらいたそうに視線を送る者はたくさんいたが、三人組の結束はすでに強固で、割り込む余地はなかった。

三人で顔を合わせると、真っ先にルビーローズが少数精鋭を唱えた。管理リヴの座を懸けた真剣勝負なのだから、みんなでなかよくがんばりましょうとはいかない。非情に徹する必要がある。ましてや、マハラには高得点が必要だ。学科試験で全科目零点を取っている。仲間は増やせない。

マハラもチャパティも同意した。そこで、三人そろって早々に退室した。

次の日、会場では異様な光景が待っていた。

エリート武官が指揮官となって、七十七名を統率していた。本人も入れて、総数七十八。受験者は全部で八十一名だから、残るは三名。つまり、エリート軍と三人組との対決構造が作り出されていた。

仕組んだのは当然ながら、エリート武官だった。知力で勝るチャパティを葬り、腕力で勝るマハラにとどめを刺し、おのれが頂点に立つべく策を弄したのだった。

ルビーローズのことは眼中になかったようだ。美しさを競っても意味はない。エリート武官はルビーローズに寝返りをうながして、分断工作を仕掛けてきた。有頂天になって、衆寡敵せず、などと演説までかましたた。少ない人数で、多い人数に勝てるわけがないと。

ルビーローズは受けて立った。料理上手の淑女というペルソナがいまにも外れそうになって、その下にある別のペルソナが、ちらりとのぞいた。ケンカ無敵の女博徒は、笑顔でこのケンカを買い、自分たちの勝利

という大穴に張ったのだった。
絶望的な立場に追い込まれても、揺るぎもしなかったルビーローズの態度に、マハラが拳を突き上げて大喜びした。俺様がエリート野郎と刺し違えてやらぁと、さもしい策士をにらみすえた。
チャパティは冷静に分析した。
仮にエリート軍が勝利したとしても、それで戦いは終わらない。軍を構成するひとりひとりは自分の合格のみを目指しているのだから、必ず同士討ちが始まる。エリート軍は分隊ないし小隊規模に編制されて、組織化されているだろうから、グループ分けはすんでいる。よって、部隊同士の内戦が勃発(ぼっぱつ)する。中にはエリート武官を倒そうと、反乱を起こす部隊があるかもしれない。それを恐れて、エリート武官は先手を打つだろう。おそらく、部隊には初めから優劣が付けられているはず。エリート武官は数を頼んで、味方の手強(てごわ)い部隊から倒してゆくだろう。指揮官が率先(そっせん)して裏切るのだから、次は自分の番だと誰もが恐れ、結果的にエリート武官が狙われて倒される。
そんなこともわからないとは、だめなエリートさん

です――と。
のちに、山岳猟兵団と密林猟兵団を全滅に追い込む指揮官の無能ぶりを、チャパティは看破(かんぱ)したのだった。
七十八対三の模擬戦闘が始まった。
エリート軍の兵力は圧倒的だった。指揮官であるエリート武官を除く七十七名が、十一個分隊に編制されていた。一個分隊に七名いるから、三人組に倍する数で当たれる。
十一個分隊は三方に分かれて試験区域に布陣し、三人組を半包囲した。左翼に三個分隊、右翼に三個分隊、エリート武官のいる中央の主力には五個分隊が置かれた。主力の五個はさらに前後二陣に分けられた。第二陣として二個を後詰めに回し、陣形に厚みを持たせてあった。
たった三人を相手に、恥も外聞もない武者揃(むしゃぞろ)えだ。
ところが、先手を取ったのは三人組だった。開始の合図と同時に、敵主力に殴り込みをかけた。中央からの一点突破を計ったのだった。
三人組には、知恵のチャパティ、力のマハラ、美のルビーローズがいる。三人の真ん中で、先頭に立って

突っ込んでいったのは、エリート軍がノーマークの別嬪さんだった。
か弱い美人と見て、ルビーローズの前に立ちはだかった者は、ケンカ無敵の女博徒に叩きのめされた。
三人組が一点突破を計って突撃したものだから、エリート軍の左翼と右翼、合わせて六個の分隊が遊ぶことになった。戦場は一点であり、三人組の真正面にいた一個分隊だけが戦う羽目になった。
それでも、一個分隊には七名いるから二倍以上の兵力なのだが、誰かが戦ってくれればいい七十八名と、自分が戦うしかない三名とでは、覚悟がちがう。
全体的には劣勢の三人組が、局所的には優勢となった。一個分隊に七名いたところで、三人組がひとりで三人倒せばお釣りがくる。殴り込まれた分隊はあっさりと撃破された。数は多くても、烏合の衆だった。軍勢に見えても、受験者の群れだった。
敵主力の第一陣中央を破ると、視界が開けた。第二陣の二個分隊は左右に分かれていたから、直線上に敵指揮官の姿を捉えることができた。
エリート武官は直属の二個分隊に後退を命じた。逃

げるのではなく、戦術的な後退だった。第二陣の二個分隊を引き連れて下がり、中央を突破された第一陣の二個分隊を反転させれば、四個分隊で三人組を挟(はさ)み撃ちにできる。

だが、エリート軍は素人の寄せ集めだ。お受験で模擬戦闘をしている。狙いは理解してもらえなかった。

いや。別の意味で、正しく理解されていた。

三人組の優勢と、エリート武官の後退を見て、左右両翼の六個分隊が寝返った。両翼に配置された者たちにも、考える力はある。エリート武官の口車に乗って仲間にはなったものの、三人組を倒したくらいでは合格できないとわかっている。

次に倒されるのは、左右両翼のどちらかだ。主力の五個分隊と片翼の三個分隊が束(たば)になって、強いほうの片翼を先に倒す。八対三の戦いだ。その次は主力が単独で、弱いほうの片翼を倒す。これは五対三の戦い。左右両翼は、味方に各個撃破(かっこげきは)される運命にあるわけだ。その予定だからこそ、主力の五個に対して片翼はどちらも三個と、少ない兵力にされている。

しかし、両翼が同時に寝返ればどうなる？　主力の

五個分隊に対して、左右両翼は六個分隊もある。数で勝る。実際には、主力の一個は三人組に倒されているから、四個しかない。おまけに、その四個は前後二陣に分かれている。第一陣の二個分隊にまず当たり、それから第二陣の二個分隊に当たれば、二対六の連戦に持ち込める。各個撃破されるはずだった両翼が、逆に各個撃破して勝利を手中にできる。

利用されたあとは捨てられると、わかっていた両翼が寝返るのは、当然だった。

三人組に中央を突破された主力第一陣の二個分隊は反転したが、その後ろから反乱軍が襲いかかった。二対六の戦いは、右と左に分かれて一対三の戦いとなり、反乱軍が勝った。

十一個分隊もあったエリート軍は、六個に背(そむ)かれ、三個を失った。開戦から間もないというのに、わずか二個分隊にまで減らされた。敗北必至の情勢だった。

残った二個も、いつ反旗(はんき)を翻(ひるがえ)すかわからない。エリート武官はゆっくりと後ろに下がり、直属部隊から離れていった。

援軍が到着したのはそのときだった。敵という名の、

援軍だった。
試験区域にモンスターが出現した。エリート武官の背後にあった森から、オオカマキリが姿を現した。
エリート武官はあわてて駆け出すと、直属部隊に紛(まぎ)れ込んだ。
そして、今度もまた後退を命じた。逃げるのではなく、戦術的な後退だった。直属の二個分隊を引き連れて下がり、反乱した六個分隊を前進させて左右に展開すれば、八個分隊でモンスターを半包囲できる。左右に展開できなくても、片翼さえ伸ばせたなら、モンスターに十字砲火を浴びせることが可能だ。
だが、しょせんは素人の寄せ集め。防衛局ナンバー3の次席防衛武官がモンスターから逃げてきたというのに、その場に踏みとどまる者はいなかった。
パニックが起きた。エリート軍は総崩(そうくず)れとなった。直属も、反乱も、関係なかった。分隊なんかどうでもよかった。倒されて試験が終了していた者はもちろん、そうでない者も、試験を放棄して逃げ出した。エリート武官も自分が最後尾になる前に逃亡した。
お受験よりも、命が大事。……自分の命が。

逃げ惑う受験者の中に、逆向きに突っ走る者がいた。モンスターに向かっていく者どもだ。

ルビーローズだった。マハラもいた。チャパティもだ。

モンスターと一戦して足を止め、リヴリーたちを逃がすのだ。

ぬかるんじゃないよ！　野郎どもっ！　裏社会では、すでに伝説となっている女博徒が吼えた。

崖の上で、からかうような口笛が小さく鳴った。試験区域の外で監督していた試験官が吹いた口笛だった。

そばの茂みから、スコープがのぞいていた。スナイパーライフルのスコープだった。標的に向けられた部分にレンズはなかった。レンズの代わりに、黒い瞳に血色の目玉がついていて、ぎょろりとにらんだ。

一つ目狙撃団だった。

モンスターの出現は仕組まれていた。実技試験の一部だ。ただし、本物のオオカマキリを投入したので、不測の事態に備えてスナイパーを伏せてあった。

その事実にエリート武官が気づいた。立場上、モンスター防衛網がどのように張り巡らされているか、熟

知している。試験区域への侵入を許す前に、危険な怪物は撃退されるはず。

モンスターに立ち向かう三人組の後ろまで逃げ、安全を確保してから、エリート武官は立ち止まった。逃亡する受験者たちに呼びかけた。逃げるなと。これも試験の一部なのだと。

続けて、エリート武官は命令した。三人組を討て、と。

モンスターの襲撃は試験の一部なのだから、恐れる必要はない。安全には配慮されている。その証拠に試験は中止されていない。続行中だ。ゆえに、ライバルの三人組を倒して点数を稼ぐのだ、と。

なんとも、あざとい考えだった。同調する者はいなかった。声をかけられて立ち止まった受験者たちは、互いに顔を見合わせるばかりで、行動は起こさなかった。

ルビーローズたちは背後の騒ぎを無視した。なるほど、モンスターの襲撃はタイミングがよすぎた。試験の一部かもしれない。だが、ちがうかもしれない。確認したわけでもないのに、安全だと決めつけることは

できない。それに、安全策が用意されていたとしても、機能するとは限らない。

いずれにせよ、目の前にモンスターがいる以上、戦うしかなかった。自分で倒してしまえば、これ以上の安全策はないからだ。

とはいえ、モンスターに立ち向かっているのに、後ろから攻撃されても困る。チャパティが仲間たちの背中を守った。オオカマキリを相手にするのをやめ、エリート武官と対峙した。モンスターとリヴリーに挟み撃ちにされるとは、さすがのチャパティも予想できなかった。

エリート武官は本当に攻撃した。モンスターには手を出さなかったくせに、リヴリーには平気で手を出した。

チャパティが倒された。

仮にも相手は武官だ。防衛隊専用の攻撃技も持っている。登用試験は、持てるすべての力を使ってよいとされた。いかなる能力も制約されなかった。知恵も力も平等にはできないのだからと、職権による不平等も放置された。有利な立場がほしければ、管理機関の職

員になればいい。出世すればいい。ただし、だからといって合格するとは限らない。そういう趣旨の試験だった。

チャパティが倒されると、マハラがルビーローズの背中を守った。ただかばうだけでは守りきれないと判断したのか、マハラはエリート武官目がけて突っ込んでいった。

でかい体に物を言わせて、巨漢のシマオーガは撃たれても走った。

エリート武官は足がすくんだ。相手は、うはははぁーっと豪快に笑いながら、身を捨てて挑んでくる。試験はそっちのけだ。猫をかぶっていた女ヤクザなんかのために、倒されることを前提で刃向かってくる。

足がすくんで動けなくなった男は、撃たれても走った男によって、倒された。

大声でマッハ・アタックと叫ぶと、マハラは盛り上がった肩を武器にショルダー・アタックをぶちかました。エリート武官は派手にぶっ飛んで、気絶した。俺様がエリート野郎と刺し違えてやらぁとの発言を、マハラは実行したのだった。

勝負は相討ちに終わった。マハラも倒れた。
モンスターと戦うのはルビーローズひとりになった。だが、ルビーローズは紅い薔薇の女だ。ひとりでも困りはしなかった。オオカマキリを竜巻に乗せた。動きを封じておいて、ハンマーで乱打した。ただのハンマーなのに、別のなにかに思えるほど、激しく打ち据えた。そしてそのまま、仕留めてしまった。
崖の上で見物していた試験官が冷めた拍手を送った。寒い音が聞こえたのか、ルビーローズがにらんだ。
こっち見たよ。怖いね。あれが紅い薔薇の女さ。噂どおりで、僕は気に入ったよ。
試験官は隣の茂みに話しかけた。
ところで、君。出番なかったね。
茂みで待機したまま、することのなかった一つ目狙撃団のスナイパーを、試験官はからかった。
モンスターを倒したルビーローズのところに、マハラとチャパティが駆けつけた。怪我を心配したふたりは、振り向いたルビーローズの瞳に射貫(いぬ)かれた。
瞳の中に棘(とげ)が生えていた。
野郎どもは言葉をなくした。ただ呆然と、アカゲパ

キケの深い緑色の瞳を見つめた。
心配ならいらないよ。奴は手負いだったさ。すぐにフルダメージになっちまった。向こうを見な。崖の上で、いけ好かない野郎が見物してるぜ。必死になって戦ったあたいたちを眺めて、楽しんでいやがったのさ。
マハラは崖の上を見たが、すぐに視線を戻した。試験官など、どうでもよかった。
姐御！
巨漢のシマオーガは、もうルビーローズのことを別嬪さんとは呼ばなかった。相手は一枚も二枚も上手の、姉貴分だった。
姐さん！
いつもは眠そうなハナマキの目がぱっちり開いていた。格のちがいに目も覚めた。
なんだい、あんたたち。
ルビーローズは照れくさそうに笑った。野郎どもの真剣なまなざしが、まぶしかった。
姐御！
姐さん！
およしよ。

姐御！
姐さん！
わかったからさ。
姐御！
姐さん！
うるせえっ！
それが、ルビーローズ一味誕生の瞬間だった。

実技試験が終わって三日後。
ルビーローズは面談に呼び出された。
出向くと、その場で管理リヴ内定を告げられた。
そして、もうひとりの合格者は選考が難航していると聞かされた。そのとき初めて、新しい管理リヴの募集定員が二名だと知ったのだった。
どちらを推薦するかと質問された。マハラとチャパティ。ひとりを選ぶなら、どちらかと。
ルビーローズは逆に質問した。わたくしが辞退しましたら、選考はどうなりますかと。
相手は答えた。その場合、マハラとチャパティが自動的に内定して、選考は打ち切られると。

では、わたくしは辞退いたしますわ。ごきげんよう。
ルビーローズは席を立った。内定を蹴ったのだった。
書類選考を無審査で通過したルビーローズだ。
学科試験はおんぶにだっこ。マハラが過去の問題用紙を調達してくれて、チャパティが勉強のしかたを教えてくれた。ルビーローズはおやつを差し入れただけ。
実技試験もそうだ。ふたりが背中を守ってくれなかったら、ルビーローズは卑劣（ひれつ）なエリートに倒されていた。
マハラとチャパティがいたからこそ、もらえた内定だった。そのふたりを差し置いて、管理リヴになる気はなかった。ましてや、選ぶだなどとおこがましい。
管理リヴにふさわしいのは、あの男たち。
ルビーローズに迷いはなかった。
その日の午後。顔を合わせたルビーローズ一味は、三人で爆笑した。マハラとチャパティも、ルビーローズと同時刻に面談に呼び出され、内定を告げられたあとに推薦を求められていた。
マハラには、ルビーローズとチャパティのどちらを選ぶかと。

チャパティには、ルビーローズとマハラのどちらを選ぶかと。
そして三人ともまったく同じ選択をしていた。
つまり、管理リヴに内定したはずの三人は、そろって辞退したのだった。
仲間に力を貸して、上に押しあげてやろうじゃねえか。それが男ってもんの心意気よ。マハラのその言葉を、三人なかよく実行したわけだ。
事情を知って、マハラがくやしがった。
やい、お茶っ葉。どうなるんでえ？
どうにもならないです。辞退は辞退です。管理リヴにはなれっこないです。おいらたち、みんなおバカさんです。
げえ……。
おかしくてたまらず、ルビーローズは笑い続けた。
新しい管理リヴの審査は紛糾（ふんきゅう）した。
最終選考に残った三名は、面談と称して行われた面接試験もパスした。ならば合格となってよさそうなものだが、審査会議室には重い空気が漂っていた。

チャパティにはまったく問題がなかった。書類選考、学科試験に実技試験、面接試験と、すべて好成績を収めた。にもかかわらず、審査員は誰ひとりとして、合格とは言わなかった。

マハラは学科試験で全科目零点だったのがネックとなった。全部の問題用紙に名前を書き忘れたのだから、そそっかしいにもほどがある。管理リヴにはふさわしくない。

ルビーローズは書類選考で無審査だったのが問題視された。審査員は履歴書を見ていない。通していない。それなのに、いきなり試験を受けている。

改めて履歴書が審査されたが、審査員は一様に眉をひそめた。博徒でケンカ好きと書いてある。正直に書くのも信じられないが、書いてある内容はもっと信じられない。管理リヴどころか、地下牢獄送りがふさわしい。

しかし、審査員は引導(いんどう)を渡そうとはしなかった。あまりの難問に、全員が結論を出せないでいた。

いったい誰が、こんな女の後ろ盾となって、書類選考を無審査としたのか。

審査員は全員が幹部職員だったが、いきなり試験を受けさせるような権限はなかった。暗躍しようと思っても、できない。できるのはミューミュー一派の四人だけ。

追及すれば、首が飛ぶ。意向に逆らえば、首が飛ぶ。かといって、お伺(うかが)いも立てられない。ミューミュー一派の誰が動いたのか、事情を知る試験官が口を割らない。

試験さえ受けさせればそれでいいのか、合格させろという意味なのか。答えは出なかった。

合否保留で上にあげよう。いや待て、それでは我々が無能と見られるぞ。だったら、全員合格だ。学科試験で零点の奴もか。そいつだけ落とせばよかろう。面接結果を忘れたか、三人そろってないとこの女は辞退するぞ。なら、全員不合格だ。いいのか、落としても。だから、合否保留で上にあげるしかなかろうが。

堂々巡りだった。

進まない審査に痺(しび)れを切らしたのか、会議室の脇に控えていた試験官が口をはさんだ。

いいよ。全員合格で。

ぞんざいな物言いだった。一瞬静まりかえったあと、幹部職員である審査員たちが激怒した。試験官の分際でなにをほざくか、だまれと怒鳴りつけた。

試験官の態度は改まらなかった。上からの目線で話を続けた。

君たちも試験を受けてごらんよ。彼女たちと同じくらい、みごとな結果を残せたなら、僕が管理リヴにしてあげるよ。

この言葉に、すべての審査員が沈黙した。聞き覚えのある話し方だった。なによりも、僕が管理リヴにしてあげるなどと言えるのは、この世にひとりだけ。

試験官は変身を解くと、立ち上がった。トランスフォームの呪文で別種のリヴリーに化け、試験を監督していたのはミューミューだった。

管理リヴ委員会の委員長にして、ミューミュー一派の領袖（りょうしゅう）。リヴリーアイランドの実質的な支配者の登場に、審査員は全員が起立した。体の正面をミューミューに向けると、背筋を伸ばして威儀（いぎ）を正した。

全員合格。他言無用。いいね、君たち。

はっ！

じゃあ、解散。もう行っていいよ。
はっ！
審査員は一列になって、会議室を出て行った。
ミューミューは居残った。机の上に置かれたままの履歴書を手に取った。
ほかのリヴリーがいなくなると、会議室に巨大な蝶が出現した。モンスターの蝶だった。
テレポートしてきたのではなかった。なにもない空間に突然現れたが、存在するようで存在しない蝶だった。ミューミューの背後に、寄り添うようにして浮かんだまま。羽ばたいてはいなかった。会議室に収まりきらない大きな羽は、天井も床も壊すことなく素通りしていた。
物理的な存在ではなかった。
蝶のモンスターは霊だった。
ごらんよ、ファルファッラ。いい駒が手に入ったよ。
ミューミューはルビーローズの履歴書を広げた。
ファルファッラと呼ばれたモンスターの霊は、履歴書に触角を伸ばした。
でもね。まだまだ駒が足りないんだ。情報ももっと

ほしいな。戻ってきたのは、ダークヤグラ君と、君だけだからね。

ミューミューは振り返ってモンスターの霊を見たが、返事らしきリアクションはなかった。

この世に舞い戻ってきたダークヤグラ君は、体は得たけど記憶はなくしてしまった。モンスターの君は、体は得られなかったけど記憶はなくさなかった。逆なら、もっとくわしく話を聞けたのに。残念だよ。

モンスターの霊は小刻みに触角をふるわせた。なにか言いたいことがあるようだ。

だいじょうぶ。ちゃんと前に進んでいるだろう。もう少しの辛抱だよ。今日は、紅い薔薇の女と仲間たちを手に入れた。明日も、きっといい駒が手に入るさ。

ミューミューは持っていた履歴書をたたむと、机の上に放った。

だからね。いい子にしてなよ、君。

話の内容は理解しているのか、モンスターの霊が羽を開いた。一枚の羽が表と裏に開いて、二枚になった。左右で二枚ずつ、羽は合わせて四枚だ。

複葉の蝶だった。羽は二重になっていた。

表羽と裏羽の間から、黒い霞(かすみ)が吹き出した。黒いなにかは会議室に充満することなく、消えていった。蝶のモンスターは霊だ。そもそも、この世には存在していない。二重になった羽の間から吹き出した霞もまた、この世のものではなかったのだろう。

羽を開いて。霞を吹いて。それで満足したのか、モンスターの霊は音もなく消えた。

ひとりになった会議室で、ミューミューがつぶやいた。

そうさ。いい子にしてなよ、死の蝶ファルファッラ。

4

ルビーローズはまだ息をしていた。

酸素の少ない空気を吸って、生き延びていた。

全身が赤い水に浸かっている。湖底湖の水面の、すぐ下だった。沈降は止まった。沈まなくなったのは比重の関係だろうか。

目を開けたまま、夢を見ていた。

あの日の夢だった。

管理リヴに内定した三人は、仲間のために辞退した。みんなが辞退したものだから、誰も合格できなくなった。笑うしかなかった。お茶とお菓子で残念会をしていたら、合格の知らせが届いた。

三人そろって、晴れて管理リヴとなったのだった。

その仲間は、もういない。我が身を犠牲にして、ルビーローズが遠くに逃がした。

危ない橋なら何度も渡った紅い薔薇の女だが、今日のは本当に危なかった。沈没寸前の潜水艇がかろうじて浮かんでいるところへ、猛毒モンスターが忍び寄ってきた。スキューバダイビングで自由自在に泳ぎ回る大ムカデだった。

ドラギラに見つかったとき、ルビーローズ一味の運命が分かれた。短いはしごが、三人を遠く引き離した。

ルビーローズは船内にいた。ドラギラに見つかったのはルビーローズだった。はしごを登れば、逃げたと見なされて事態が悪化する。

紅月丸は沈没寸前。浸水して傾いた船体は、波をかぶっただけでもひっくり返る。獲物を逃がすまいとドラギラが暴れたら、船外にいるマハラとチャパティが

湖に投げ出されてしまう。思うように動けない水中で、大ムカデのそばに落ちて、助かるわけがない。毒牙にかかり、ふたりとも命を落とすだろう。

それは、とても耐えられないことだった。承知の上で危険を冒(おか)しているのはルビーローズだ。ふたりの仲間はついてきただけ。協力しているだけ。

自分のせいで、仲間を死なせるわけにはいかない。

だからルビーローズは薔薇の竜巻を使った。マハラとチャパティを竜巻に乗せて、遠くへと逃がした。

離ればなれになったから、安否はわからない。けれども、心配はしていない。強い男たちだった。片や雄々しく、片や賢く。いいコンビだ。ふたりで力を合わせて、リヴリーアイランドに帰還するだろう。

心残りがあるとしたら、ルビーローズの思いを、最後の言葉を、伝えられなかったことだ。

「……てめえら、最高のマブダチだったぜ」

紅い薔薇の女はもう一度、大切な仲間たちに別れを告げた。

「あばよ」

か弱く、細い声だった。

ルビーローズは目を閉じた。あとは眠ってしまえば、すべて終わる。
――姐御！
――姐さん！
――なんだい、あんたたち。
声が聞こえた。
――姐御！
――姐さん！
――およしよ。
あの日の夢だった。
――姐御！
――姐さん！
――わかったからさ。
気持ちよくまどろんでも、声に起こされてしまう。
――姐御！
――姐さん！
――うるせえっ！
ルビーローズは目を開けた。
静かな湖底なのに、うるさくて眠るどころではなかった。

目を開けると、上のほうに黒い影が見えた。湖底に向かって落ちてくる。

それがなにかは、考えなかった。考える力はもうなかった。ただぼんやりと眺めていた。

影は見る見る大きくなった。モンスターだった。落ちてくるのではなくて、泳いでいるのだとわかった。

泳ぎ方が気になった。モンスターはストロークで泳いでいた。腕で、いや前脚で、水を掻(か)いて進んでいる。ストロークで泳ぐ水棲(すいせい)モンスターに心当たりがなかった。ゲンゴロウもタガメも、キックで泳いでいる。後脚を使っている。

ストロークで泳ぐ理由はすぐにわかった。

ブルドーザーのバケットのような、どでかい前脚を持ったモンスターだった。土を押しのけて土中(どちゅう)を進む要領で、水の中をスイスイと泳いでいる。

水棲モンスターではなかった。陸上モンスターだった。オケラだ。別名をモグラコオロギという。

ルビーローズがつけた名前は、左平次(さへいじ)。

「……あ……」

ルビーローズは見た。

左平次は中脚と後脚でなにかを抱えていた。抱えたところに空気の固まりがあった。ミズグモがそうするように、左平次も気泡をまとって潜っている。

そして、その気泡の中に、野郎どもがいた。

マハラが。チャパティが。

せっかく逃がしてやったのに、男たちは危険な湖に引き返してきた。ふたりとも、口を大きく開けて叫んでいる。湖底に届けとばかりに、ルビーローズを呼んでいる。姐御と、姐さんと。いま行くから待ってなと、負けちゃだめですと。

音は聞こえなくとも、耳には届く。仲間たちのうれしい声援だ。

「……ああっ……」

アカゲパキケの大きな瞳から、涙がこぼれた。

最高のマブダチだ。本当に。

ルビーローズの手が上がった。わたくし、ここにいますわ。生きていますわ。無事ですわと、手を上げ、腕を伸ばして、仲間たちに知らせた。

赤い水面を割って、腕が出た。透明な水の中に、ルビーローズのほっそりとした腕が差し出された。

それを見たマハラとチャパティが、気泡の中で肩を叩き合った。
左平次は湖底湖の水面直前で上手にスピードを殺した。赤い水は死の水だと、触角で知ったのだろうか。突入はしなかった。それでいて、前脚はためらうことなく、赤い水に入れた。いつもおいしいご飯をくれる大好きなお姉さんを、そっとすくいあげた。
赤い水に浸かっていたルビーローズの体は、きれいな水で洗われた。
ごつい前脚を慎重に操って、左平次はルビーローズを腹部に送った。
マハラとチャパティの手が水中に伸びた。男たちは先を争うようにルビーローズをつかまえると、気泡の中に引きずり込んだ。
「マスクだ！」
「外すです！」
マハラはルビーローズの体を支えた。チャパティはルビーローズがかぶっていた酸素マスクを剥(は)ぎ取った。
マスク内に浸水しているから、外さないと息ができない。ルビーローズは自分で外そうと手を動かしてい

たが、力のない動きだった。
ようやく呼吸ができるようになると、ルビーローズは音を立てて息を吸い込んだ。
「吐くです、姐さん。息を吐くのを忘れちゃだめです」
心配したチャパティが注意した。
マハラはルビーローズを横たわらせた。
左平次が中脚と後脚で抱えていたのはエキスパンドメタルだった。金網状の鉄板だ。
空気を保持するためか、鉄板と腹部の間はせまくなっていた。マハラは呪文で体を小さくし、片膝を立てて腰を下ろしている。チャパティは両手と両膝をついてかがんでいた。
「豪快に吸ってやがらぁ。これでひと安心でえ。ま、ちぃとばっかり残念だったけどよ」
「なにがです？」
チャパティは首をひねった。助かったのに残念だとはおかしな話だ。
「もしものときは、俺様が人工呼吸するつもりだったのよ。マウス・トゥ・マウスでな」

マハラはわざとらしく唇を突き出した。
そのしぐさを見て、横たわったままのルビーローズがマハラの脚をはたいた。
「いてっ。それだけ元気がありゃ、だいじょうぶでえ」
人工呼吸うんぬんは、マハラ流の励(はげ)ましだった。
「おう、左平次！　浮上するぜ！」
モグラコオロギの腹部に拳を押し当てると、マハラが叫んだ。
「ブンカーに帰投したら、腹いっぱい食わせてやらあ！」
左平次はゆっくりと浮上を始めた。ルビーローズを気遣(きづか)っているのか、先を急ぐことはしなかった。
エキスパンドメタルの床が斜めになった。金網状の鉄板には菱形の穴がたくさんある。そこに指を引っかけたり爪先を押し込んだりして、三人は体を支えた。
去ってゆく仲間たちを、湖底に残された紅月丸が見上げていた。船体は直立したまま。船尾は湖底湖のヘドロに埋まり、船首は赤い水面から顔をのぞかせている。空になった圧縮空気タンクから漏れるエアはない。

静かな水中で、真上に向けられたヘッドライトの光がまぶしかった。
「あの光がなかったら、姐さんを見つけられなかったです。おいらたち、間に合わなかったです」
チャパティの声が沈んでいた。自ら設計した、我が子同然の潜水艇を見つめている。
「姐御を助けるために、俺様たちを呼んでくれたのよ。あいつは……あいつはな、そういう奴なんだぜ」
マハラにとっても、紅月丸はかわいい我が子だった。
「……」
ルビーローズは、エキスパンドメタルの編み目を握りしめた。
穴の向こうに黒いテントウムシがいる。なにもない湖底に、ひとりぽつんと置き去りにされている。沈没した潜水艇はこれが見納めだ。最後の最後まで、けなげに働いてくれた紅月丸の勇姿を、しっかり目に焼き付けておきたかった。
浮上するにつれて、紅月丸は小さくなっていった。
放棄された潜水艇を湖底の暗闇が包んだ。紅月丸の姿は見えなくなった。それでも、ヘッドライトの光が

闇を貫(つらぬ)いているから、紅月丸がどこにいるかはわかった。
やがて、光は弱くなった。水中にそそり立つ光の柱が、細く、短くなって、消えた。
予備電源が切れたのだった。
潜水艇〈紅月丸〉は、たったいま、その命を終えた。
水の中が暗くなった。
「……うっ……」
「……ぐっ……」
嗚咽(おえつ)が漏れた。雄々しく賢い男たちが声を殺して泣いている。
「……」
ルビーローズはだまって目を閉じた。
涙をこぼす男たちのためにしてやれることは、見ないこと。
ただそれだけだった。

モグラコオロギの左平次は浮上を続けた。
日光が届くようになって、湖底の夜は明けた。
明るくなると周囲を監視しやすくなる。だが、それ

は敵にとっても同じこと。
浮上してくるオケラを見つけた怪物が、長い体を折り曲げた。体に比べて大きすぎる頭を下に向け、一気に沈降した。
異形(いぎょう)のモンスターだった。
胴体はムカデで、頭はタガメだ。二種類のモンスターが合体している。水中島の魔神が無数の脚で水の王者を抱きかかえ、いっしょに泳いでいるのだった。
先に撃退されたドラギラは、すでに回復していた。元気に泳いでいる。
後から撃退された武者タガメは、まだダメージが残っているようだ。自力では泳げないと見える。
タガメを抱えたムカデが急速潜航した。
狙(ねら)われたオケラは当然逃げた。タガメに捕まったら刺し殺される。ムカデに捕まったら咬み殺される。
オケラは前脚で水を掻いてストロークで泳いだ。
ムカデは長い体を上下にうねらせてドルフィンキックで泳いだ。
泳ぎの達者な陸上モンスター同士の、水中戦が始まった。

「なにごとでえ！」
オケラの腹の下でマハラが怒鳴った。
ルビーローズ一味には事情がわからなかった。左平次がぶら下げた鉄板に乗っているから、真上にはモンスターの巨体がある。視界は大きくさえぎられている。
もっとも、なにが起きたか察しはついた。斜めになって浮上してきたのに、いまは水平になっている。浮き上がるのをやめて、横に移動している。つまり、上には行けないわけだ。左平次は必死になって水を掻いているから、緊急事態なのは見ればわかる。
「なんでえ？　また艦隊アリかよ？」
「ちがうです。艦隊アリなら日が陰って暗くなるです」
「じゃあ、なんなんでえ？　……うおっ！」
マハラは穴あきの鉄板にしがみついた。
横に逃げていた左平次が、再び上昇に転じた。上にあった障害を回避したらしく、ほとんど垂直に浮上している。緊急浮上だ。
オケラめがけて沈降してきた異形のモンスターは、ぎりぎりのところで獲物にかわされた。長い体を反ら

せて向きを変えると、今度は浮上しながらの追撃に移った。
「後ろです！」
「なにぃ！」
「武者タガメです！」
「ムカデ野郎とセットかよ！」
左平次を追う敵の姿が、ルビーローズ一味の視界に入った。
双頭のモンスターが真下にいた。タガメがムカデに抱えられている。ふたつの頭が縦に並んで、逃げる獲物をにらんでいる。エキスパンドメタルにつかまる手足をすべらせたら、一巻の終わりだ。そのまま落下して、モンスターの餌食となる。
「姐御を頼まあ！」
マハラは自分から手を放した。
「無茶はだめです！」
「マッハ！」
ルビーローズがあわてて体を起こした。
「心配いらねえ！」
垂直になった鉄板を上手にすべり降りて、マハラは

一番下まで移動した。
「後ろの守りは俺様の担当よ！」
金網のような穴あき鉄板にしっかりつかまると、マハラは迎撃態勢に入った。
だが、攻撃は見合わせた。
泳ぐ速さがちがった。左平次のほうがずっと速い。武者タガメを抱えている分、ドラギラはうまく泳げないようだ。双頭のモンスターが引き離されてゆく。左平次の跡を追って浮上しているようには見えなかった。むしろ逆に、沈んでゆくように見えた。
あせる必要はないと、マハラは静観した。
しかし、その行動が裏目に出た。薔薇の竜巻で受けたダメージからようやく回復したのか、武者タガメの脚が動いた。
わざわざ仲間を抱えて泳いでいたドラギラは、初めからそれが狙いだったのか、意外な行動を取った。大ムカデの長い体がたわめられた。弓のように大きくしなった。湾曲した体が水の抵抗を受けてさらにスピードが落ちたが、次の瞬間には、たわんだ体は元に戻った。

曲げた体を伸ばす勢いに乗せて、武者タガメが押し出された。黒いテントウムシが魚雷を発射したように、水中島の魔神は武者タガメを発射した。

モンスター魚雷だった。

それも高速魚雷だ。

押し出された勢いと、自身の脚力とで、武者タガメは一気に獲物に迫(せま)った。水を蹴る脚にはフィンを装着している。フィンスイミングでアメンボ並みの高速を叩き出す。アメンボが水上最速なら、武者タガメは水中最速だ。

「マッハ・ハンマー!」

マハラは専用攻撃技で迎え撃った。

ロケット噴射の巨大なハンマーが打ち下ろされた。

水の王者は、ひらりとロケットハンマーをかわした。

かわしたまではよかったが、ハンマーが押しのけた水に煽(あお)られて体勢を崩(くず)した。モンスター魚雷の勢いが失われた。

ところが、そうなることを見越していたかのように、武者タガメの背中を大ムカデが駆け抜けた。水中で足場を得て、急加速した。

「くそったれ！」
マハラは腕章に手を伸ばした。マッハ・ハンマーは連発できない。リヴリーの攻撃技は水中戦を想定していない。猛然と追い上げてくるドラギラを撃退しようにも、打つ手は限られていた。
「うおっ！」
突然、景色が変わった。マハラの目の前に水の壁が出現した。
水面だった。
垂直に浮上してきた左平次が、水上に飛び出した。土を掻き、水を掻く自慢の前脚も、空中では役に立たない。しかし、左平次が落下することはなかった。背中の羽を大きく広げると、今度は空を飛んだ。
モグラコオロギは決して強くはない。だが、あらゆる環境で行動できる万能型のモンスターだった。地中に地上、水中に水上、おまけに空中まで、自由自在に動き回れる。
追っ手のドラギラも水中から飛び出した。浮上してきた勢いに乗って、水面高く躍(おど)り上がった。獲物に咬みついて引きずり下ろそうと、毒牙を左右に開いた。

「おーっ！」
後ろの守りを担当しているマハラが、思わず声を上げた。
大ムカデが飛びかかってくる。空まで攻めてくる。
でも、そこまで。
すごいのは勢いだけだった。長い体をうねらせてドルフィンキックを打っても、空中では泳げない。俗に百本あると言われる脚を動かしても、空中では走れない。
ドラギラは水中島の守護神だ。湖底に沈む島を守るために、空を飛ぶ必要はない。武装モンスターとして与えられたのは、スキューバダイビングの装備のみ。飛翔能力はなかった。
「おととい来やがれっつーの」
マハラは攻撃呪文のスリングを念じた。
目前で失速したムカデの、憎たらしいツラに小石を当てた。ちっぽけな石ころで打たれてダメージを受けた怪物が、だらしない姿勢で落ちていった。
空に逃れたルビーローズ一味は、執念深いモンスターからようやく解放されたのだった。

「ふ……ぅうっ！」
吐きかけた息を、マハラはあわてて呑み込んだ。ひと息つく余裕はなかった。戦いはまだ終わっていない。
水面を割って飛び出してきた追っ手がいた。武者タガメだ。
前脚に手っ甲をつけた武装モンスターは、羽を広げて空を飛び、逃げる獲物を空中まで追いかけてきた。
「げえ……」
オケラとタガメ。
陸上モンスターと水棲モンスターの空中戦が始まった。
飛ぶのはタガメのほうがうまかった。水中生活に適応した流線型の体は、空気抵抗も少なくて、空を飛ぶのに都合がよかった。
遅れて飛び立った武者タガメは、あっという間に距離を詰めてきた。
左平次は追っ手を振り切ろうと上昇や下降を繰り返し、急旋回した。そのため、一番後ろに陣取ったマハラも、思うように迎撃できなかった。
「まずいですー！」

チャパティの叫び声は悲鳴に近かった。
ルビーローズ一味は穴あき鉄板のエキスパンドメタルにつかまっている。ハーネスもなければ、安全帯もない。左平次が中脚と後脚で抱えた平らな鉄板に乗っかっているだけ。これでは、振り落とされるのも時間の問題だ。仮に体を固定できたとしても、左平次が鉄板を落としてしまえばそれまで。
飛行呪文ならルビーローズが持っているが、水死寸前にまで追い込まれて弱っている。その証拠に、鉄板にしがみつくのが精一杯と見えて、戦闘はマハラに任せっぱなしだ。技を使うのに欠かせない霊力も、どれだけ残っているか。ルビーローズはドラギラと武者タガメを相手に、水中戦を連戦している。その前にはヤンマ・ファイターと死闘を繰り広げている。
「やい、マッハ！　さっさと仕留めるでぇす！　あれを使うでぇす！」
「おおうっ！」
威勢よく応えたマハラは、腕章の内側に指を突っ込むと、とっておきの奥の手を取り出した。
出てきたのはミニチュアのブーメランだった。よく

あるV字型をしている。腕章に取り付けていたからには、リヴリーの技ではない。
「やい、お茶っ葉！　俺様の新しい技を見せてやらぁ！」
そう叫ぶと、マハラは鉄板を蹴って空中に飛び出した。外に出ないと左平次の動きに翻弄（ほんろう）され、満足に戦えない。
「マッハ・ミサイル！」
巨漢のシマオーガが本来の大きさに戻った。肉弾ミサイルとなって、武者タガメに向かって飛んでいった。
「マッハ・ブーメラン！」
ミニチュアのブーメランを投げた。
シマオーガが巨大化したように、ミニチュアのブーメランも巨大化した。
ところが、せっかくの武器は命中しなかった。
武者タガメは空中で華麗（かれい）なターンを決めて、獲物の攻撃を巧みに回避した。落下しながら宙返りするという、高等テクニックだった。
空を飛ぶタガメは、羽をたたんで飛ぶのをやめた。頭を起こし、尻を下げ、空中で直立したかと思うと、

そのまま後ろに倒れた。
さっきまで頭を前に背中を上にして飛んでいたのに、いまは尻を前に腹を上にして飛んでいる。いや、飛んではいない。失速して落ちてゆく。
仰向けになった武者タガメの腹の上を、ブーメランは素通りした。横に回転しながら飛んできたブーメランに対し、縦に回転して落下することでかわしたのだった。
武者タガメは落下しながら回転を続けた。仰向けの状態から頭を下げて、後ろ向きの逆立ち状態となった。そこからさらに回って顔を上げると、仰向けだった体はうつぶせに戻った。頭の向きも入れ替わり、元に戻っている。
うつぶせから仰向けに、仰向けからうつぶせに、ふたつの縦回転はどちらも水泳のターンだった。
個人メドレーで、バタフライから背泳にスイッチするときは、タッチターンで頭を起こして後ろに倒れ、仰向けになる。背泳から平泳ぎにスイッチするときは、サマーソルトターンで頭を沈めて水中で回り、うつぶせになる。

水棲モンスターである武者タガメは、ルビーローズも顔負けのターンを空中で決めて見せたのだった。
落ちながら宙返りをして、武者タガメの姿勢は元に戻った。高度は下がったが、力強く羽ばたいて追い上げてきた。ブーメランが遠くで弧を描いて帰ってくる前に、勝負はつく。マハラの負けだ。
武装モンスターは前脚を大きく開いた。金属製の手っ甲が日光を反射して、きらりと光った。
「甘いっての！」
マハラは舞うように手を動かした。ひねりながら下ろして、巻き込むように戻し、そのまま突き上げた。
飛んでいったブーメランがそのとおりに動いた。リヴリーの技ではないブーメランだった。軌道も、自由に操ることができた。
武者タガメの後方で、横に回転するブーメランが傾き、縦回転に変わった。急降下して下向きに宙返りをし、戻ってきた。背泳のロールターンにも見えたが、泳ぎの苦手なマハラがターンのしかたなど知るはずもない。
マッハ・ブーメランは武者タガメの真下から襲いか

かった。
武者タガメは直撃を食らった。ダメージを受け、動きが止まった。羽ばたくことができなくなって、墜落してゆく。
飛べなくて落ちてゆくのはマハラも同じだが、秘密のブーメランの使い手には、考案したばかりの新技があった。
「マッハ・ライダー！」
マハラはブーメランを呼び戻した。水平にして自分の足下に寄せ、回転を止めた。ブーメランはV字の飛翔体に変わった。その上に、マハラはそっと足を下ろした。
巨漢のシマオーガを乗せられるだけの、巨大なブーメランだった。もっとも、ぶっつけ本番の新技だから、バランスを取るのに苦労した。風に煽(あお)られてへたに手を動かすと、そのとおりにブーメランも動いてしまう。
新技マッハ・ライダーで、マハラは空を飛ぶ翼を手に入れた。よろけながらも、なんとか乗りこなしている。墜落の心配なら、もういらない。飛べなくて落ちてゆくのは、武者タガメだけ。

マハラはタイミングを見計らった。落ちるモンスターを見逃すつもりはなかった。きのうはしつこく追跡されている。受けたダメージから回復すれば、武者タガメは改めて襲ってくるにちがいない。

墜落する武装モンスターが湖に近づいた。

「マッハ・ハンマー！」

マハラは専用攻撃技をお見舞いした。

ロケット噴射で飛んでいったハンマーは、武者タガメを打ち、ついでに湖に叩きつけ、水中深く押し込んだ。

「ざまあみやがれってんだ」

恐ろしいモンスターの姿が水中に消えると、空飛ぶモグラコオロギが旋回して戻ってきた。ブーメランに乗ったマハラは、下から仲間たちに接近した。

「どうでえ！　これが俺様の新技、マッハ・ライダーよ！」

鼻高々にマハラは自慢したが、左平次が起こす羽風（はかぜ）のせいでバランスが取りにくく、へっぴり腰だった。おまけに、膝がぶるぶるとふるえている。

「すごいです！　マッハ・ブーメランに乗るなんて、

いつ考えついたです？」
穴あき鉄板の向こうで、チャパティは素直に感心した。
「ああん？」
「いつ考えついたですっ！」
チャパティは大声で言い直した。
空を飛んでいるから、風が耳を打つ。声は聞き取りにくかった。
「そりゃ、おめえ！　あれだ！　ヤンマ・ファイターの！　ミサイルひっつかんで！　逆立ち乗りしたときに！　ぴんと来たのよ！」
マハラは途切れ途切れに叫んで答えた。
「じゃあ、もう！　わたくしが！　運んであげる必要は！　ありませんわね！」
ルビーローズも大声で話しかけた。
まだ横になったままだが、かなり回復したようだ。
「おうよっ！」
調子に乗ったマハラは、うっかりガッツポーズをした。手が動いたとおりにブーメランも動いて、マハラはすべり落ちた。

「いっけねー！」
あわてて翼を呼び戻すと、マハラは両手でＶ字の飛翔体につかまった。とりあえず、慣れていない立ち乗りはあきらめたようだ。体を水平にしてブーメランと一体化すると、飛行姿勢は安定した。
安定して飛ばなければならない理由があった。
眼下の湖にドラギラがいた。スリングのダメージから回復して、追跡を再開している。水上を高速で泳いで追ってくる。
空は飛べなくとも、追いかけてさえいれば、いずれ捕まえられると信じているらしい。事実、そうなる。飛翔モンスターでも羽を休めるときがくる。ましてや、獲物は陸上モンスターのモグラコオロギなのだから、いつまでも飛んではいられない。水上を追い、地上を追えば、必ず追いつく。
つまり、このままブンカーに帰投することはできなかった。地面に降りると、たちまち追いつかれてしまう。
「マッハ！」
ルビーローズはひと言呼びかけた。

「おうっ！　もう一発ぶちかましてくらぁ！」
ブーメランの翼を翻(ひるがえ)すと、空飛ぶマハラは急降下していった。

物音がした。
ルビーローズはベンチで目覚めた。
ブンカーに帰投して、少し休憩するつもりで横になったら、そのまま眠り込んでしまったのだった。
マハラもチャパティも、ルビーローズを起こさなかった。疲れもたまっているだろうと、そっとしておいた。ふたりだけで後片付けをした。沈没した潜水艇は放棄している。紅月丸は帰ってこなかったのだから、片付けといってもすることはあまりなかった。
「すまねえ、起こしちまったか」
マハラが声をかけた。
「いま、何時ですの？」
ルビーローズはあたりを見回した。
主(あるじ)のいない船台が目に入った。ドックに紅月丸がないときは出動しているときだから、空っぽの船台は目にすることがない。少なくとも、紅月丸を建造して

からは見ていない。
黒いテントウムシのいないドックは、さみしかった。
「五時過ぎです」
チャパティが答えた。
「夕方の？」
「はいです」
「では、少し眠っただけね」
「遠慮しねえで、もっと休んどきなって」
「そうもいきませんわ。今夜は会議がありますもの」
今日は保安官選挙の投票日だ。前職と新人の一騎打ちは、夜になれば結果が出る。そのあと、管理リヴ委員会の臨時会議が開催される。
「会議には、わたくしたちが出なくては。店番の子たちには荷が重すぎますわ」
光る湖を探査するために、ショップには身代わりを置いてきた。変装させ、バイオレコードの偽造までして、店を預けてきた。管理リヴの三人がいなくても騒ぎにならないよう、手は打ってある。
ショップの切り盛りはお店屋さんごっこの感覚でも務(つと)まるが、管理リヴが勢揃(せいぞろ)いする会議ともなると、そ

うはいかない。
会議に間に合うよう、帰還しなければならなかった。武装モンスターの脅威は去っても、ブンカーは怪物密林のど真ん中にある。モグラコオロギに掘らせた地底の専用道が、絶対に安全だとは言い切れない。
それに、ひと寝入りして疲れもとれた。
「左平次はどうしたのかしら？」
ルビーローズはベンチから立ち上がった。
「もう帰ったです」
「心配しなくても、シマミミズをたらふく食わせてやったぜ。腹がいっぱいになったら、さっさとどっかに行っちまいやがった。ったく、現金な野郎でえ」
「そう。……じゃ、そろそろ、わたくしたちも帰りましょうか」
「だな」
「支度はすんでるです」
チャパティはルビーローズに懐中電灯を渡した。
暗闇で光るオーロラダイヤを取り付けた、オーロラライトだ。トンネルの中は暗いから照明がいる。
「電気は俺様が消すぜ」

ドックには電灯があった。風力や水力を利用して発電している。

その気になればトンネルも電灯で照らせるのだが、工事は見送られた。ブンカーからリヴリーアイランドまで、延々と電線を張り巡らせるのは大仕事だ。送電ロスもあるから、発電用の水力タービンを増設しなければならない。

モグラコオロギたちの感電事故も心配だ。ミミズも食べるが、木の根も食べる連中だから、電線を根っこと間違えてかじりつく恐れがある。

それに、明かりを灯したところで毎日通うわけではない。トンネル内を照らすには、懐中電灯があればそれでよかった。

三人はトンネルの入り口に向かった。

ドックの壁がくりぬかれている。土を押し固めただけの地面が見える。出入りの際に運ばれた泥で、手前のコンクリートが汚れていた。

地底トンネルに足を踏み入れる直前で、ルビーローズは振り返った。当分訪れることはないであろうブンカーに、別れを告げた。

湖底探査作戦は成功している。光る湖の秘密なら、もうわかった。湖の底に、巨大な二枚貝が沈んでいた。開いた貝殻の下側には土が盛られており、島になっていた。水中島だ。

水中島では、真珠のような玉が宙に浮いて輝いていた。玉から垂れた光るしずくを、大がかりな装置で回収していた。

装置は霊子炉だ。リヴリーアイランドにいるリヴリーたちに、ＬＩＰＳ（リップス）の管理下に置かれた者たちに、無限の霊力を供給している。

ルビーローズ一味は、トップシークレットである霊子炉の所在地を突き止めたわけで、作戦は大成功だった。

さらに次の段階へと進み、霊子炉内偵作戦を決行しようにも、足がなかった。ドックの船台は空っぽだ。潜水艇〈紅月丸〉は大破した。沈没した。再び湖に乗り出すには、二号艇を建造しなければならない。

すぐに取りかかる気力は、ルビーローズにはなかった。危うく命を落としかけている。仲間たちの身も危険にさらしている。いずれ動くにしても、いまは、今

日の成果に満足するべきだった。
「消すぜ」
頃合いを見計らって、マハラはブレーカーを落とした。
真っ暗にはならなかった。チャパティがカンテラ型のオーロラライトを点けていた。青白い光が足元を照らしている。
ルビーローズとマハラも、懐中電灯型のオーロラライトを点けた。
ブンカーを後にし、三人並んで地底のトンネルを歩き始めた。
そろって無帽だった。ルビーローズは洞窟水路で制帽をなくしている。マハラとチャパティは紅月丸に残してきた。マハラは水密ドアの向こうに置き忘れた。チャパティは制御室が浸水したときに、頭から水をかぶって流された。
「……それにしてもよ」
手を伸ばしてソフトモヒカンをなでていたマハラが、口を開いた。
「俺様の新技はすげえよな」

自画自賛した。
「作ったのはおいらです」
負けじと、チャパティも自慢し返した。
「なに言ってやがる。おめえが作ったのはマッハ・ブーメランじゃねえか。俺様の新技はマッハ・ライダーだっつーの」
大きさの変わる不思議なブーメランを作ったことよりも、それに乗ることを発見したほうがえらいらしい。実際にはうまく乗れなくて、つかまっていたのだが。
「どうでえ？　いっそ、人数分作らねえか？」
「それは、おいらも考えたです。中に乗れるようなものを作って空を飛べば、オニヤンマもへっちゃらです」
「マッハ・ファイターか！　おもしれえ！」
マハラは勝手に名前をつけた。
「問題は霊化鉱石ですわね」
ルビーローズも会話に加わった。
「はいです。なかなかお目にかかれないです。アルキュミア・メタルを作るには、霊化鉱石を超臨界水で溶融製錬して、さらにキルリアン精錬しなければなら

ないです。いままで採掘したものを全部使って、ようやくマッハのちっこいブーメランができたです」
「ちっこいって言うんじゃねえ」
「でも、ちっこいです」
「そりゃまあ、そうだけどよ」
「もっといっぱい、霊化鉱石がほしいです。アルキュミア・メタルでいろいろ作ってみたいです。なので、がんばって鉱床を探してみるです」
「そうね。いまのところ、わたくしたちがミューミューたちよりも勝っているのは、マッハ・ブーメランだけですものね」
「てぇことは、俺様最強ってことだな」
マハラはわざわざ懐中電灯を持ち替えると、誇らしげに腕章を叩いて見せた。
「調子に乗って、そのちっこいブーメランをなくさないようにね」
「だから、ちっこいって言うんじゃねえ」
「でも、ちっこいですわ」
「そりゃまあ、そうだけどよ。……ん？」
少し先で、トンネルの壁が剥がれていた。

モグラコオロギは土を押し固めて、地底にトンネルを通している。固められた土の一部が浮き上がり、倒れかかっていた。皮でもむけたような感じだが、モンスターが掘った大きなトンネルだから、皮も分厚い。

「こりゃ、でけえや」

近づいてみると、剥がれた部分はかなり大きかった。縦にも横にも長い。上は天井付近に届いている。自然に剥がれたらしく、やや楕円形のいびつな形をしていた。

「乾燥して浮いたのか？」

地面に比べると、色が薄くなっていた。乾いているようだ。

「とりあえず、戻しとくか」

マハラは懐中電灯を脇にはさんだ。崩れないように、両手でそっと、剥がれた壁を押し戻した。

元どおりになったように見えても、マハラが手を放すと剥離部分は浮き上がった。

「ほっとくです。そのくらい、崩れても気にする必要はないです」

土壁の剥離は大きかったが、トンネルの規模を思え

ば、わずかなもの。土を押し固めただけの壁なのだから、表面が乾燥したなら、剥がれ落ちることもあるだろう。

「俺様は気になるっての」

豪快なようで、繊細（せんさい）な男だった。ショップの在庫管理のために、商品有高帳（ありだかちょう）を採用したくらいだ。仕入れと売上げを正確に記帳して、常に残高を把握（はあく）している。そこまで細かい会計処理をしているのは、マハラだけ。

「マッハ・プレスで直してやらぁ」

懐中電灯を脇にはさんだまま、マハラはトンネルの壁に肩を押し当てた。

「先に行きますわよ」

ルビーローズは足早に通り過ぎた。

剥がれた壁を強く押して、中ほどで折れでもしたら、頭から土をかぶることになる。それはごめんだった。

「お先するです」

チャパティも先に進んだ。

お調子者がマッハ・プレスと言いたいだけだと決めつけて、地底の壁がなぜ乾燥しているかは考えなかっ

た。
「マッハ・プレス！」
お調子者はなにも考えなかった。マッハ・プレスと言いたいだけだった。
体を斜めに傾けて、マハラは踏ん張った。
押された壁がへこんだ。
地の底だから壁の向こうには土がある。地平線の彼方まで土で埋まっている。言うなれば、大地という名の分厚い壁がある。
なのに、へこんだ。
へこんで、抜けた。
壁の向こうに土はなかった。
「げえ……」
マハラはそのまま倒れた。地底の壁が抜けるとは思いもしなかったから、全力で押している。体を斜めにして踏ん張っていたので、崩(くず)れたバランスは戻せなかった。
倒れても、起き上がってしまえば笑い話ですむ。だが、起き上がることは不可能だった。
壁の向こうに地面はなかった。

大きな縦穴が広がっていた。
「マッハ……？」
異変を感じて、ルビーローズは振り返った。
後ろにマハラの姿はなかった。懐中電灯が地面を転がってゆく。壁の一部がぽっかりと消えている。
「マッハ！」
ルビーローズはあわてて駆け戻った。
チャパティも走った。
ふたりで壁にできた穴の前に立ち、明かりで照らした。
「……！」
絶句した。
目の前に大きな縦穴があった。向こう側の壁まで、けっこうな距離がある。
おまけに、ただの穴ではなかった。穴の内側には、白いモンスターがびっしりとへばりついていた。その数、無数。
穴ではなくて、巣だった。シロアリの巣だ。
「マッハー！」
ルビーローズが叫んでも、こだましか返ってこなか

った。どれだけ深いのか、縦穴状の巣は底が知れない。
チャパティはカンテラ型のオーロラライトを穴の中に放(ほう)った。
まわりを照らしながら、カンテラは落ちていった。
どこまでも。どこまでも。闇の中を落ちていった。
底は見えなかった。白いモンスターは途切れなかった。
「まずいです！」
シロアリは未知のモンスターだった。これが初めての遭遇(そうぐう)だ。どれほど凶暴か、わからない。たいして恐ろしくないのだとしても、群れの数を思えば背筋が凍る。そしてマハラは、底なしの巣に転落して声も聞こえてこない。
「ちっ！」
ルビーローズは舌打ちした。
茶色い頭の兵隊アリたちが駆け上がってくる。見上げると、駆け下りてくるのもいる。黒くて太い大顎(おおあご)を振り回して、早くも威嚇(いかく)している。好戦的なのか、それとも、巣を襲撃されたと誤解したか。
「チャッパ！」

「はいです！」
ルビーローズが差し出した手に、チャパティは自分の手を重ねた。呪文のリトルで小さくなった。
マハラには新技のマッハ・ライダーがある。アルキュミア・メタルで作ったマッハ・ブーメランに乗って、空を飛ぶ技を編み出している。
だからといって、未知のモンスターが群れている底なしの巣穴から、ひとりで上がってこられるとは限らない。いつもはうるさい男なのに、落ちてしまって声すら聞こえてこないのだから、ただごとではない。
ルビーローズは、ゴマ粒並みに小さくなったチャパティを、アカゲパキケのカールした角に乗せた。
「行くぜっ！」
紅い薔薇の女がダイブした。
仲間を救うために、モンスターの巣に飛び込んだ。
手にしたオーロラライトの光が、底の見えない縦穴に落ちていった。
地底トンネルは無人になった。地面に転がった懐中電灯が、その必要もないのにトンネル内を照らしている。

巣を壊されたところに、続々と兵隊アリが到着した。興奮した様子で触角を動かしていたが、敵はいないと知ると働きアリと交代した。

働きアリは巣を補修するために群がった。材料を確保するためか、巣の外側に咬みつくと、寄ってたかって土を削(けず)った。

地底トンネルの地面がごっそりと削り取られていった。

そこへ、モグラコオロギの左平次がやってきた。シマミミズをたらふく食べて帰ったはずだが、歩くうちにまた腹が減ったのか、舞い戻ってきた。

モンスターの出現を察知して、働きアリの触角が激しく動いた。近づく左平次の触角も動き回ったが、両者ともに、警戒するそぶりは見せなかった。

働きアリは、土を削る作業を続行した。兵隊アリを呼ぶことはしなかった。相手は無害なオケラだとわかって、安心したのだろうか。

左平次はトンネルにあいた大穴の前で脚を止めた。目の前にいるシロアリたちが触角でさわってきたが、気にならないのか放置した。そして、自分も触角を差

し出して、シロアリの巣を探った。
ひょっとすると、中に飛び込んだルビーローズ一味のにおいを嗅(か)いでいたのかもしれない。
トンネルの奥で明かりがついた。
ブンカーの電灯が漏れて、地底トンネルに差し込んでくる。
左平次は削られた地面をまたぐと、ブンカーに向かった。そこに行けば、おいしいご飯をくれるいつものみんなに会えると信じて……。
「どうだい、ファルファッラ。よくできた秘密基地だろう？」
ブンカーにいたのはミューミューだった。
モンスターの霊に話しかけている。
「潜水艇は失ったみたいだね。もったいないけど、ちょうどよかったよ。もう少し改良したら、外洋航海能力を備えたかもしれない。それはちょっと都合が悪いよね。そうさ、まだ早すぎる」
話すのはミューミューだけ。モンスターの霊は、ミューミューの後ろでだまって聞いている。羽ばたきもしないで、巨大な蝶が宙に浮いている。

「それにしても、あの三人組がここまで育ってくれて、僕も鼻が高いよ。登用試験のとき、わざわざ試験官に化けた苦労も報われたさ。だって、そうだろう。ルビーローズ一味は、いま一番の手駒だからね。自分たちだけで霊子炉に潜入し、探索し、帰還した。ちょうどいい訓練になったさ」

蝶の霊がゆっくりと羽を動かして、なにかを伝えようとした。

「まだだよ、ファルファッラ。もう少しの辛抱(しんぼう)さ。今日は新しい駒が手に入る予定なんだ。僕がなにもしなくても、元防衛隊の凄腕スナイパーユニットが、次の保安官になってくれるはずさ。知ってるかい？　あの子たちは、モンスターを守るために動いてるんだよ」

羽を開いていた蝶のモンスターが、さらに羽を開いた。一枚の羽が表と裏に分かれて、二枚になった。左右合わせて四枚ある。複葉(ふくよう)の蝶だった。

「防衛隊総司令官のプーケ君も希望していることだし、あの子たちには激甚雷撃砲(げきじんらいげきほう)を授けようと思うんだ。リヴリー最強呪文のひとつ、ジゴリヴをね」

複葉の蝶が羽ばたいた。表羽と裏羽の間から、黒い

霞(かすみ)が吹き出した。
「そうだね。新しい駒は、とても強い駒になるさ。でも、僕は満足しない。あんまりゆっくりもできないけれど、まだまだ手駒は足りない。そこで、管理リヴを集めた今日の会議で、最後の駒探しをスタートさせるよ」
待たされるのが不満なのか、蝶の霊は複葉の羽を閉じた。単葉(たんよう)の、ふつうの蝶に戻った。もっとも、この世にさまよい出てきた死霊なのだから、とてもふつうとは呼べなかった。
「議題はフリーランドの一般開放さ。いい駒を探すために、あんな広大なパークを作ったんだ。過保護なことはしない。LIPS(リップス)で管理はしない。テレポートもできないし、無限の霊力も供給されない。なにが起きても、自分自身の力で対処するしかないんだ。すぐに、無法地帯になるだろうね。それが狙いさ。悪党どもに揉(も)まれて、どんな駒が頭角を現すのか。楽しみだよ、僕は。そして、最後の駒が見つかったら――」
ミューミューはいったん言葉を切って首をひねると、真後ろにいるモンスターの霊に、はっきりと告げた。

「魔島進攻作戦の始まりさ」
話の内容に満足したのか、蝶のモンスターはまた羽を開いて複葉となった。
「モンスターアイランドは海の向こうにあるからね。駒を送り込むには外洋艦隊が必要なんだ。軍艦の建造は始まっているよ。一番艦はもう進水して、艤装工事に入ったところさ。艦隊の名前も決めてある。雷撃水軍って言うんだ。どうだい、勇ましいだろう」
ミューミューはベンチに向かって歩き始めた。
「上陸したら、大急ぎで拠点を構築しないとね。そのための部隊は、もう用意してあるんだ。要塞旅団さ。むかし、モンスターチューリップ連隊というのがあってね。仮設砲塁に籠もってよく戦ったんだけど、その戦術をさらに推し進めて、要塞旅団は仮設要塞を築くのさ。わかったかい？　計画は順調に進んでいるんだよ」
ベンチに腰掛けたミューミューは、モンスターの霊と向き合った。
「それにしてもさ。なぜ君は、そんなに魔島にこだわるんだい？　あの世から戻ってきた、死霊の君がそん

なじゃ、まるであの世の入り口が魔島にあるみたいだよ」
複葉の蝶がまた霞を吹いた。
表羽と裏羽の間から、まがまがしい感じの黒い煙が吹き出してきた。先ほどとは比べものにならないくらい、猛烈な勢いだったが、黒い霞があたりに充満する気配はなかった。ミューミューは避けるそぶりも見せない。この世に存在しない霊が吹くのだから、黒い霞もまた、この世には存在しないのだろう。
「言葉がわかれば苦労しないのにね。……君も、そう思うだろう？　左平次君」
ミューミューは横目でトンネルの入り口を見た。
左平次と名前をつけられたモグラコオロギが、こっそりのぞいているのは知っていたのだった。
モンスターの霊が消えた。消えた次の瞬間には、左平次の眼前に現れた。
驚いた左平次は逃げ出した。地底のトンネルを後ろ向きに突っ走った。
「どうせ、僕の言葉は理解できないんだ。見逃してやりなよ、死の蝶ファルファッラ」

話を聞かれても、意味がわからなければ問題ない。
ミューミューは逃げた左平次を追わなかった。
死霊の蝶も、ただのオケラを取り殺したりしなかった。
それでも左平次は、必死になって逃げた。言葉がわからないから、逃げた。いや、わかったとしても、死霊を恐れて逃亡しただろう。
地底トンネルを後ろ向きに走って逃げた左平次は、シロアリの巣のことも、削られた地面のことも、すっかり忘れていた。
働きアリは泥を積み重ねて、壊れた巣をせっせと修繕している。
そこへモグラコオロギが駆けてきて、直したばかりの壁を尻で押し破り、巣の中へと転げ落ちた。
働きアリは怒らなかった。迷惑を被(こうむ)っても、我慢した。削り取った土を噛んで、唾液と混ぜ合わせて泥の漆喰(しっくい)を作ると、補修作業を一からやり直した。
それが仕事だから、黙々と働いた。土を噛み、泥をこね、塗り重ねた。
やがて、壊れた壁は修復された。シロアリの巣は見

えなくなった。
ブンカーの電灯が消え、漏れてくる光もなくなった。
静まりかえった地底トンネルに、懐中電灯が転がっている。
オーロラダイヤの青白い光が闇を照らしていた。

おしまい

２０１１年２月28日

あとがき

終わった。

長かった。

二年もかかってしまった。

中断期間をのぞいて、九八週を費やした。サボった日を差っ引いても、三七六日。

四〇〇字詰め原稿用紙に換算して、九一九枚もある。三〇〇枚の予定だったのに、どうしてこうなった？

枚数も予定外なら、ストーリーも予定外。実は「水中島の真珠」というストーリーは、手持ちになかった。前作「リヴリーたちの陰謀」を書き始める前に、いくつものストーリーをひねり出したが、その中には水中島や真珠のアイデアさえ存在しない。

前作ＰＤＦの裏表紙に、「ゆうはな」が描いてくれたイラストがある。気に入って何度も見ているうちに、ルビーローズ一味が活躍する話を書きたくなった。

りぶたん以外を主人公にした「外伝」という構想は

あったので、第二弾はルビーローズを主人公に迎えることにした。

ルビーローズがメインとなるストーリーは二本あった。ひとつは「紅い薔薇は地下に咲く」というもので、モグラコオロギと出会うお話。前作の舞台はほとんど地中なのに、またかよという思いもあって、これはボツにした。もうひとつは、ルビーローズの身に起きた悲しいお話なので、やめにした。イラストの三人組は楽しそうだ。

事前に考えておいたものからは拾えなかったので、新しくひねり出すことにした。そうして生まれたのが「水中島の真珠」だった。

モグラコオロギには出会っているが、シロアリには出会っていない話だから、前作より時間を遡（さかのぼ）ることになる。あとから前の話を作ると、どうしてもおかしくなるので困った。

ブンカーは立派な秘密基地なのに、前作に登場する城が粗末だったのはなぜ？　ブンカーには電灯があるのに、前作の城に電灯がなかったのはなぜ？　マッハ・ブーメランという奥の手があるのに、前作で使わな

かったのはどうして？
もちろん答えは明快で、新しく考えたから前作には登場していないのだが、そこはやっぱり辻褄（つじつま）を合わせておきたい。
で。
ブンカーは立派な秘密基地なのに、前作に登場する城が粗末だったのは、まだ完成していなかったから。その証拠に、城は空っぽで最上階にテーブルと椅子が置いてあっただけ。
ブンカーには電灯があるのに、前作の城に電灯がなかったのは、地底トンネルに電線を引くと、モグラコオロギたちが木の根と間違えてかじる恐れがあるから。その証拠に、作中でも感電事故を心配している。
マッハ・ブーメランという奥の手があるのに、前作で使わなかったのは、マハラはもう持っていなかったから。
え？　いくらなんでも、それは無理があるって？
いえいえ、そうなんですって。じゃあ、証拠を見せろって？　お見せしますとも。「カルミナ異聞録（いぶんろく）　グリセリンの涙」でね。

去年の夏。ＬＩＳＤシリーズの第３軸として「異聞録」が構想に加わった。

前作ＰＤＦに豪華な表紙をプレゼントしてくれた「ｂｕｆｆｙ」のブログを見て、カルミナとティラワの虜（とりこ）になってしまった。ブログに掲載されたイラストを眺めているうちに、ティラワにマシンガンを乱射させたくなった。

そう、マシンガン・スリングの誕生である。

さらにもうひとつ、なにか武器を持たせたいと思ったら、ティラワは巨大なブーメランを肩に担いだ。

小柄な少女が大きな武器を使いこなすという設定はよくある。ちっこい体にでっかい武器というアンバランスは、かなり魅力的。一番初めに考えたのはどこのどなたか知らないが、遠慮なく使わせていただく。

さて。ちょうどそのころ、マハラはヤンマ・ファイターを迎え撃っていた。そして、なぜか勝手にマシンガン・スリングを使ってしまった。そんな予定はなかったのに。

ティラワのために用意した技は、マハラに横取りされたのだった。

さらにマハラは、腕章に手を当てた。内側には、でっかくなるちっこいブーメランが隠れている。その名も、マッハ・ブーメラン。

ティラワ専用の武器として生み出されたのに、マハラが持って行ってしまった。勝手に名前までつけて。

でも、ティラワはすねたりしなかった。でっかいブーメランを肩に担いで、「マッハのおいちゃんがくれた」と得意気に話してくれた。

それを聞いたマハラは「おいちゃんじゃねえ！　お兄ちゃんだっつーの！」と、すかさず訂正した。

ティラワとマハラにつながりができた。それまで独立していた「異聞録」が、「LISD」とクロスオーバーした瞬間だった。

ってなわけで、次回予告。

「カルミナ異聞録　グリセリンの涙」

「第一話　フリーランド」

前作からずっと出番を待っていたフローテンも、ついに登場する。

お楽しみに。

２０１１年２月28日

備考

このファイルは「一太郎2010」と「JUST PDF」で作成しました。
フォントは「モトヤ教科書3」を使用しました。

『Livly Island』『リヴリーアイランド』は、ソネットエンタテインメント株式会社の商標です。リヴリーアイランドに関わる著作権その他一切の知的財産権は、ソネットエンタテインメント株式会社に属します。この作品は『リヴリーアイランド』およびソネットエンタテインメント株式会社とは一切関係がありません。

風力ダムは「Chetwood Associates」のデザインを参考にしました。
山岳猟兵団の遭難エピソードは「八甲田雪中行軍遭難事件」をモチーフとし、映画「八甲田山」を参考にしました。
「ハイパーテンション・チャージャー」を使用して加速するのは、映画「マッドマックス」を参考にしました。

西村寿行先生のご冥福をお祈りします。
あなたの小説は私にとって麻薬でした。
「ルビーローズ一味」は「仙石文蔵一味」をイメージし、呼称も倣いました。マハラが物資調達に長けるのは「十樹吾一」の設定を拝借しました。チャパティが科学技術に秀でるのは「関根十郎」の設定を拝借しました。

この作品の著作権は、ソネットエンタテインメント株式会社が保有するものを除き、「siamneko」に帰属します。

修正項目一　第五章まで公開

「姑息」を誤用していたため修正。
「吠える」を「吼える」に修正。

11/01/15

「盲打ち」を「盲撃ち」に修正。

11/02/21

「姑息」の誤用を「小心」に改めたが「狡猾」に再修正。

11/03/04

「撫でる」を「なでる」に修正。
「縁」を「ふち」に修正。
~~「ふるえる」を「震える」に修正。~~
手を「離す」を「放す」に修正。
「なりゆき」を「成り行き」に修正。
「震える・震わせる」を「ふるえる・ふるわせる」に統一。

11/03/21-11/04/02

修正項目2　全編公開

「試験用紙」を「問題用紙」に統一。
前項に伴い、「まちがった問題を再出題し、試験用紙の作成を重ね」を「まちがったところを再出題し、問題用紙の作成を重ね」に修正。

11/04/02